

熊本県文化財調査報告 第110集

じょう ぼ ぼ
城・馬 場 遺 跡
たか じょう あと
高 城 跡 VII 郭

県農政部耕地第二課の農地防災事業に伴う埋蔵文化財調査

1990年 1月

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第110集

じょう
城
たか
高
・ 馬
じょう
城
ば
跡
跡
ば
遺
あと
跡
跡
跡
郭
Ⅶ
郭

熊本県球磨郡山江村大字山田字城・字本城所在の縄文早期遺跡及び中世城跡



(城・馬場遺跡出土の壺形土器)

1990年 1月

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、熊本県農政部耕地第二課の農地防災事業に伴い2ヶ年に渡り、球磨郡山江村山田の合戦峯（かしのみね）地区の発掘調査を行いました。

ここに報告する『城・馬場遺跡、高城跡Ⅳ郭』は昭和62年度と63年度に発掘調査、平成元年度に整理・報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、『城・馬場遺跡』からは縄文時代早期の手向山式土器が多量に出土しました。これらの中には、これまで未発見の壺形土器も含まれており、縄文研究の上で、貴重な資料を得る事が出来ました。

また、『高城跡Ⅳ郭』からは、中世城跡の外郭の様子を知る上での参考資料が得られました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、県農政部耕地第二課と球磨事務所耕地課の協力がありました。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

平成2年 1月31日

熊本県教育長 松 村 敏 人

例　　言

1. 本書は、熊本県農政部耕地第二課の農地防災事業に伴い、同課から調査費の令達を受けて、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字城、字本城に所在する、「城・馬場遺跡」と「高城跡墳郭」の2ヶ所で、調査は熊本県教育庁文化課が行った。
3. 昭和62年度に「城・馬場遺跡」を、昭和63年度に「高城跡墳郭」の発掘調査を実施し、その整理・報告書作成は平成元年度に行った。出土遺物と調査資料は熊本県教育庁文化課で保管している。
4. 発掘調査は、大田幸博・葛瀬和弘・松舟博満がその任にあたった。
5. 発掘調査過程の写真撮影は大田が行い、整理後の出土遺物写真撮影は横山高明氏（熊本光圀会員）に依頼した。
6. 出土遺物の実測は主として大田が行ったが、縄文時代の石器は松舟が担当した。なお、縄文時代の土器については、松尾葉子氏・岩崎充宏氏・飼田龍生氏・山下志保氏の協力を得た。さらに、縄文時代石器は吉永 明氏の協力を得た。
7. また、遺構及び遺物の製図は、石工みゆきと溝口真由美が行った。
8. 本書の執筆は、大田がこれにあたったが、総括は原 昭志（文化課教育審議員）、石器は松舟が担当した。なお、大田の執筆分については、島津義昭（文化課参事）・西住欣一郎（文化課文化財保護主事）・本山千絵（文化課嘱託）・松舟の協力があった。
- 付論は前川清一（文化課文化財保護主事）の執筆による。
9. 本書に使用した地形図・字図は球磨事務所耕地課と、山江村役場経済課からの提供によるものである。
10. 本書の編集は大田が担当し、溝口・石工と宮崎敬子の協力を得た。

本文目次

調査の概要

第1節 調査の組織	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 遺跡の位置と地理的環境	5
第4節 歴史的環境	7

【城・馬場遺跡】

第1節 遺構の概要	13
第2節 墓位	13
第3節 検出遺構	14
第4節 出土遺物	22
(1) 縄文土器	25
(2) 縄文石器	65
(3) 中世遺物	79
第5節 まとめ	81

【高城跡Ⅶ郭】

第1節 遺構の概要	98
第2節 検出遺構	103
(1) 第1調査区	103
(2) 第2調査区	104
(3) 第3調査区	107
(4) 第4調査区	113
(5) 第5調査区	114
(6) 第6調査区	116
(7) 第7調査区	119
第3節 出土遺物	122
第4節 まとめ	136

総括	138
付論 「合戦峠墓碑群」について	140

挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図と農地防災事業による道路工事区域	4
第2図 遺跡位置図	5
第3図 人吉盆地地形図	6
第4図 周辺遺跡分布図	8
第5図 遺跡周辺の字図と地形図	10
第6図 城・馬場遺跡の調査グリッドと道路建設予定地一帯の地形図	12
第7図 標準土層図	13
第8図 集石1 実測図	14

第9図	集石2 実測図	15	第44図	出土遺物実測図	縄文土器⑩	64
第10図	集石3 実測図	16	第45図	出土遺物実測図	縄文土器⑪	64
第11図	S K 1 実測図	17	第46図	出土遺物実測図	縄文石器①	66
第12図	円筒土器の出土状況実測図	17	第47図	出土遺物実測図	縄文石器②	67
第13図	壺形土器の出土状況実測図	18	第48図	出土遺物実測図	縄文石器③	68
第14図	中世墓塚の実測図	18	第49図	出土遺物実測図	縄文石器④	69
第15図	出土遺物実測図 縄文土器①	25	第50図	出土遺物実測図	縄文石器⑤	69
第16図	出土遺物実測図 縄文土器②	26	第51図	出土遺物実測図	縄文石器⑥	70
第17図	出土遺物実測図 縄文土器③	27	第52図	出土遺物実測図	縄文石器⑦	71
第18図	出土遺物実測図 縄文土器④	28	第53図	出土遺物実測図	縄文石器⑧	72
第19図	出土遺物実測図 縄文土器⑤	30	第54図	出土遺物実測図	縄文石器⑨	73
第20図	出土遺物実測図 縄文土器⑥	31	第55図	出土遺物実測図	縄文石器⑩	73
第21図	出土遺物実測図 縄文土器⑦	33	第56図	出土遺物実測図	縄文石器⑪	74
第22図	出土遺物実測図 縄文土器⑧	35	第57図	出土遺物実測図	縄文石器⑫	75
第23図	出土遺物実測図 縄文土器⑨	38	第58図	出土遺物実測図	縄文石器⑬	76
第24図	出土遺物実測図 縄文土器⑩	39	第59図	出土遺物実測図	縄文石器⑭	76
第25図	出土遺物実測図 縄文土器⑪	41	第60図	出土遺物実測図	縄文石器⑮	77
第26図	出土遺物実測図 縄文土器⑯	43	第61図	出土遺物実測図	縄文石器⑯	78
第27図	出土遺物実測図 縄文土器⑰	44	第62図	出土遺物実測図	縄文石器⑰	78
第28図	出土遺物実測図 縄文土器⑱	45	第63図	出土遺物実測図	中世遺物①	79
第29図	出土遺物実測図 縄文土器⑲	48	第64図	出土遺物実測図	中世遺物②	80
第30図	出土遺物実測図 縄文土器⑳	49	第65図	文様別 遺物分布図	①	83
第31図	出土遺物実測図 縄文土器㉑	50	第66図	文様別 遺物分布図	②	83
第32図	出土遺物実測図 縄文土器㉒	52	第67図	文様別 遺物分布図	③	85
第33図	出土遺物実測図 縄文土器㉓	53	第68図	文様別 遺物分布図	④	85
第34図	出土遺物実測図 縄文土器㉔	54	第69図	文様別 遺物分布図	⑤	87
第35図	出土遺物実測図 縄文土器㉕	55	第70図	文様別 遺物分布図	⑥	87
第36図	出土遺物実測図 縄文土器㉖	56	第71図	文様別 遺物分布図	⑦	89
第37図	出土遺物実測図 縄文土器㉗	58	第72図	文様別 遺物分布図	⑧	89
第38図	出土遺物実測図 縄文土器㉘	58	第73図	文様別 遺物分布図	⑨	91
第39図	出土遺物実測図 縄文土器㉙	59	第74図	遺物分布図	⑩	91
第40図	出土遺物実測図 縄文土器㉚	60	第75図	石器分布図	⑪	93
第41図	出土遺物実測図 縄文土器㉛	61	第76図	柱穴列実測図		93
第42図	出土遺物実測図 縄文土器㉜	62	第77図	出土遺物分布図（全体）		95
第43図	出土遺物実測図 縄文土器㉝	63	第78図	高城跡縄張り図		98

第79図	道路建設予定地と高城跡地形図	99
第80図	調査区と高城跡地形図	101
第81図	VII郭西縁の大土壘実測図	103
第82図	第2調査区と遺物出土状況図	104
第83図	第2-1調査区南西縁土層図	105
第84図	第2-1調査区北壁土層図	105
第85図	第2-2調査区東壁土層図	105
第86図	第3調査区実測図	107
第87図	道路遺構1 東壁土層図	109
第88図	S K 1 の土層図	109
第89図	第3-1調査区北壁土層図	111
第90図	第3-2調査区堀切1 東壁土層図	111
第91図	第3-2調査区堀切1 西壁土層図	111
第92図	第4調査区実測図	113
第93図	第4調査区堀切2 東壁土層図	114
第94図	第5・6調査区実測図	115
第95図	S E 1 ~ 6 の実測図	117
第96図	第5調査区西北壁土層図	117
第97図	第6調査区堀切3 北壁土層図	117
第98図	堀切3 検出の集石実測図	119
第99図	第7調査区実測図	120
第100図	道路遺構2 南壁土層図	121
第101図	第7調査区堀切4 北壁土層図	121
第102図	出土遺物実測図 ①	125
第103図	出土遺物実測図 ②	128
第104図	出土遺物実測図 ③	130
第105図	出土遺物実測図 ④	132
第106図	出土遺物実測図 ⑤	134

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	柱穴計測表 ①	19
第3表	柱穴計測表 ②	20
第4表	柱穴計測表 ③	21
第5表	柱穴計測表 ④	22
第6表	城・馬場遺跡出土の手向山式土器の文様による分類表	22
第7表	調査区による類別土器出土量(1)	23
第8表	調査区による類別土器出土量(2)	24
第9表	出土遺物観察表 繩文土器①	27
第10表	出土遺物観察表 繩文土器②	28
第11表	出土遺物観察表 繩文土器③	29
第12表	出土遺物観察表 繩文土器④	32
第13表	出土遺物観察表 繩文土器⑤	34
第14表	出土遺物観察表 繩文土器⑥	36
第15表	出土遺物観察表 繩文土器⑦	37
第16表	出土遺物観察表 繩文土器⑧	40
第17表	出土遺物観察表 繩文土器⑨	41
第18表	出土遺物観察表 繩文土器⑩	42
第19表	出土遺物観察表 繩文土器⑪	46
第20表	出土遺物観察表 繩文土器⑫	47
第21表	出土遺物観察表 繩文土器⑬	49
第22表	出土遺物観察表 繩文土器⑭	51
第23表	出土遺物観察表 繩文土器⑮	52
第24表	出土遺物観察表 繩文土器⑯	54
第25表	出土遺物観察表 繩文土器⑰	54
第26表	出土遺物観察表 繩文土器⑲	55
第27表	出土遺物観察表 繩文土器⑳	57
第28表	出土遺物観察表 繩文土器㉑	58
第29表	出土遺物観察表 繩文土器㉒	58
第30表	出土遺物観察表 繩文土器㉓	59
第31表	出土遺物観察表 繩文土器㉔	60
第32表	出土遺物観察表 繩文土器㉕	62
第33表	出土遺物観察表 繩文土器㉖	62
第34表	出土遺物観察表 繩文土器㉗	63
第35表	出土遺物観察表 繩文土器㉘	64
第36表	出土遺物観察表 繩文土器㉙	65
第37表	叩き石・磨石計測表	65

第38表	蝶器・垂飾品計測表	70	第54表	第3-1調査区北壁土層観察表	111
第39表	石匙(横・縦・不定型)計測表	73	第55表	第3-2区堀切1東壁土層観察表	111
第40表	スクレーパー計測表	74	第56表	第3-2区堀切1西壁土層観察表	111
第41表	不明石器計測表	77	第57表	第4調査区堀切2東壁土層観察表	114
第42表	剥片計測表	78	第58表	第5調査区土塙(墓塚)計測表	116
第43表	出土遺物観察表 中世遺物	80	第59表	S E 1-6 土層観察表	117
第44表	手向山式土器文様一覧表 ①	82	第60表	第6調査区堀切3北壁土層観察表	117
第45表	手向山式土器文様一覧表 ②	82	第61表	道路遺構2土層観察表	121
第46表	第2-1調査区南西縁土層観察表	105	第62表	第7調査区堀切4北壁土層観察表	121
第47表	第2-1調査区北壁土層観察表	105	第63表	出土遺物観察表 ①	126
第48表	第2-2調査区東壁土層観察表	105	第64表	出土遺物観察表 ②	127
第49表	第3-1調査区柱穴計測表	108	第65表	出土遺物観察表 ③	129
第50表	道路遺構1東壁土層観察表	109	第66表	出土遺物観察表 ④	131
第51表	S K 1 土層観察表	109	第67表	出土遺物観察表 ⑤	133
第52表	第3-1調査区土塙計測表	109	第68表	出土遺物観察表 ⑥	135
第53表	第3-2調査区堀切1柱穴計測表	110			

写真図版目次

図版 1 (城・馬場遺跡)	(1)調査風景 (2)中世の柱穴群検出状況 (3)縄文遺物包含層の調査状況
図版 2 (城・馬場遺跡)	(1)縄文土器の検出状況 (2)集石2の検出状況 (3)中世墓塚の検出状況
図版 3 (高城跡Ⅲ郭)	(1)第1調査区 (2)第2-2調査区 (3)第3-1・2調査区
図版 4 (高城跡Ⅲ郭)	(1)第3-1調査区 (2)柱穴出土の根固め石 (3)柱穴出土の擂鉢片
図版 5 (高城跡Ⅲ郭)	(1)第3-1調査区 (2)第3-1調査区 (3)第3-2調査区
図版 6 (高城跡Ⅲ郭)	(1)第3-2調査区 (2)第3-2調査区 (3)第3-2調査区
図版 7 (高城跡Ⅲ郭)	(1)第5調査区 (2)第5調査区 (3)第6調査区
図版 8 (高城跡Ⅲ郭)	(1)第6調査区 (2)第7調査区 (3)第7調査区
図版 9 城・馬場遺跡出土遺物	図版 10 城・馬場遺跡出土遺物
図版 11 城・馬場遺跡出土遺物	図版 12 城・馬場遺跡出土遺物
図版 13 城・馬場遺跡出土遺物	図版 14 城・馬場遺跡出土遺物
図版 15 城・馬場遺跡出土遺物	図版 16 城・馬場遺跡出土遺物
図版 17 城・馬場遺跡出土遺物	図版 18 高城跡Ⅲ郭出土遺物

調査の概要

第1節 調査の組織

昭和62・63年度、平成元年度の調査組織は、次のとおりである。

昭和62年度〔「城・馬場遺跡」発掘調査〕

調査責任者 丸木保賢（文化課長） 林田敏嗣（文化課課長補佐） 隈 昭志（文化課文化財調査係長・課長補佐）
調査担当者 大田幸博（文化課文化財保護主事） 菖蒲和弘（文化課嘱託）
松舟博満（文化課臨時）
調査事務局 松崎厚生（文化課主幹経理係長） 谷 貴美子（文化課主任主事）
上村祐司（文化課主事）
県農政部 農地第二課 慎原克弘（課長） 三好益生（防災係長） 横谷 修（参事）
球磨事務所 農地課 井上 勇（主幹・耕地課長） 烏越建雄（防災係長）
永椎浩二（主任技師）

昭和63年度〔「高城跡Ⅵ郭」発掘調査〕

調査責任者 江崎 正（文化課長） 林田敏嗣（文化課課長補佐） 隈 昭志（文化課課長補佐） 桑原憲彰（文化課文化財調査第2係長）
調査担当者 大田幸博（文化課文化財保護主事） 菖蒲和弘・松舟博満（文化課嘱託）
調査事務局 松崎厚生（文化課主幹経理係長） 上村祐司・泉野順子（文化課主事）
県農政部 農地第二課 慎原克弘（課長） 三好益生（防災係長） 横谷 修（参事）
球磨事務所 農地課 森田周司（主幹・課長事務取扱） 堀 正行（防災係長）
中川 学（参事）

平成元年度〔報告書作成〕

責任者 江崎 正（文化課長） 隈 昭志（教育審議員・文化課課長補佐）
中川義孝（文化課課長補佐） 桑原憲彰（文化課文化財調査第2係長）
報告書担当者 大田幸博（文化課文化財保護主事） 菖蒲和弘・松舟博満（文化課嘱託）
石工みゆき 清口真由美 宮崎敬子（文化課臨時）
報告書作成協力者 吉永 明（八代市教育委員会） 松尾葉子（文化課元嘱託）
岩崎光宏（熊本大学文学部考古学研究室・助手）

山下志保（熊本大学文学部考古学研究室・大学院生）

島津義昭（文化課参事） 前川清一・西住欣一郎（文化課文化財保護
主事） 本山千絵（文化課嘱託） 綱田龍生（熊本市文化課）

調査事務局 上村忠道（文化課經理係長） 上村祐司・泉野順子（文化課主事）

県農政部 耕地第二課 水端健二（課長） 國川重幸（防災係長） 山本一登（参事）

球磨事務所 耕地課 大津佳三（主幹・課長） 堤正行（防災係長）

石原康幸（参事）

文化課人吉調査事務所（遺物整理作業）

尾方信子 追田洋子 林枝三 追田照代 田中里美 林郁子

発掘作業員

（城・馬場遺跡）尾方信子 追田洋子 石工タット 加賀ミヤ 勝山タツ 追田チフ

中村正好 中村五人 中村サダ子 森田洋介

（高城跡置郭）尾方信子 追田洋子 石工タット 加賀ミヤ 勝山タツ 森田洋介

中村正好 坂本勝喜 福川シマエ

第2節 調査に至る経緯

県農政部耕地第二課の農地防災事業により、球磨郡山江村山田の合戦峠（かしのみね）集落より、隣北の長ヶ峠（ちょうがみね）集落へ通じる小規模農道（道幅1m未満の踏み分け道のようなもの）が大幅に拡張・整備されることになった。昭和62年の秋のことである。

折りしも、当時は当該地で九州縦貫自動車道（八代～人吉間）の建設がまっ盛りで、この農道も縦貫道により、一部、切断の浮き目を見たのである。日本道路公団では、代替え処置として、切断箇所に陸橋を架ける事になったが、県農政部では同時期に、周辺域で圃場整備事業が行われる事もあり、さらには地元からの強い要望もあって、この機会を利用して農道の拡張・整備事業に着手する事になった。

この事業計画に際し、県文化課では農道が「馬場道（ばばみち）」と称されるもので、縦貫道工事前の農道は、高城跡（中世城跡）内を通過している点に注目した。

北から南へ舌状形に長く延びる丘陵地の東側寄りにおいて、農道は高台の雜木山と平地の畠地とに分ける高さ1.5m前後の丘陵段差面沿いに走行しており、前述の様に従来は高城跡のⅡ郭とⅢ郭間の堀切を抜けて、長ヶ峠へと通じるものであった。

地形的には、高城跡・農道・合戦峠集落は同一丘陵域で、何よりも増して、県文化課では、昭和59年中旬～60年中旬にかけて、日本道路公団の受託事業として、高城跡を大規模発掘調査

したいきさつから、工事計画内容の説明を球磨事務所耕地課へ求めた。

その結果、計画によれば合戦峯地区寄りの改良道路は農道面とほぼ同一の高さであるものの、道幅拡張のため東側の高台線を平均して5~6m幅に削り取り、一樣の高さにするというものであった。さらに、高城跡内の道路部分については、高城跡Ⅳ郭の東縁から北縁にかけて新規の道路を建設するというもので、工事区間は昭和62年度が合戦峯から高城跡の継貫道建設地・陸橋までとし、これより先の城内箇所は昭和63年度に実施する計画である事が判明した。

これを受けて、県文化課では耕地第二課と協議後、昭和62年9月に同年度工事予定区間の長さ200mの範囲について、削除される高台線を中心に試掘調査を実施した。結果として、合戦峯集落の北縁から北へ長さ90mの範囲に、アカホヤ層を切り込む中世の柱穴群を検出し、表土層からは縄文土器片の出土を見た。そこで、アカホヤ層の一部を深掘りした所、下層の褐色土層（IV層）と黒褐色土層（V層）が縄文時代早期の包蔵層である事を確認した。この試掘結果にもとづき、耕地第二課へ本調査の必要な事を伝えた。

以上の経過により、同年10月に同課より予算の令達があり、県文化課では10月から11月にかけて発掘調査を実施した。遺跡名については、字「城（じょう）」地内の馬場道である所から、「城・馬場遺跡」と命名した。本調査では、縄文時代早期の遺物包蔵層から手向山式土器片が多量に出土し、その中には、これまで未発見の壺形土器が含まれるなどの大きな成果を得た。

さらに、高城跡の新設道路建設予定地については、昭和63年9月に高城跡Ⅳ郭縁とⅤ郭間の堀切を中心に発掘調査を行った。遺跡名は調査地が高城跡のⅣ郭にあたる所から「高城跡Ⅳ郭」とした。

調査の結果、Ⅳ郭の南縁平坦地は、ほとんどが後世の造成によるもので、旧地形の斜面部に盛土され、押し馴らされている事が判明した。出土した中世遺物は、その大半がこの盛土中からのものである。

さらに、地表面の観察からは、まったく存在の伺えなかったⅣ-①郭とⅣ-②郭間の堀切の存在が明らかになった。

この他、城跡間連の掘立柱建築址や中世墓塚と思われる土塚などが検出され、中世城跡の外郭の様子を知る上での参考資料が得られた。

遺物の水洗と註記及び接合等の整理作業は、発掘調査と並行して文化課人吉調査事務所で行った。



第1図 遺跡周辺地形図と農地防災事業による道路工事区域

第3節 遺跡の位置と地理的環境

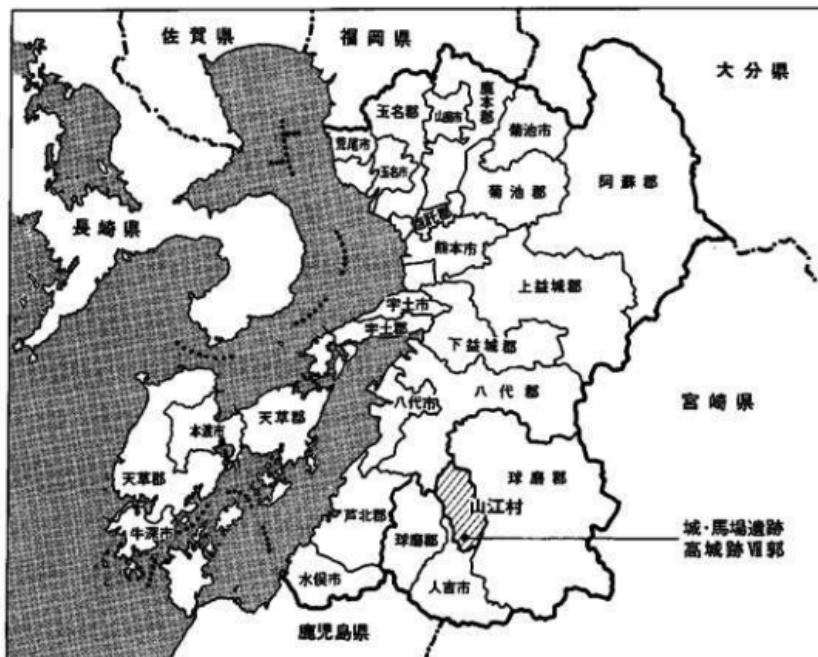
(1) 位 置

城・馬場遺跡と高城跡^ノ郭の所在地は、熊本県球磨郡山江村大字山田字城・字本城地内で、人吉盆地の北壁を形成する八代方面からの大山塊が、盆地縁に支脈の末端を延ばす所にある。国土地理院発行の5万分の1地形図『人吉』に位置を求むれば、城・馬場遺跡が、図幅南13.7cm、西から3.6cmの所で、高城跡^ノ郭が、図幅南15.0cm、西から4.0cmの所にある。

村内の山田地区には、山付きの北方向から盆地縁の南方向へ、鋭角に開口する大きな開析谷が開けており、北方の谷頭から流れ出た東浦川と西川内川は中途で合流し、谷底平野を流れる山田川となる。

流域は開田されて水田地帯となり、下流域は人吉盆地の平野部に接している。集落は、この開析谷を形成する東西両側の山麓と丘陵の裾部に展開する。

城・馬場遺跡は集落の北縁近くにあり、高城跡^ノ郭は約300m先に位置する中世城跡（丘城）である。



第2図 遺跡位置図

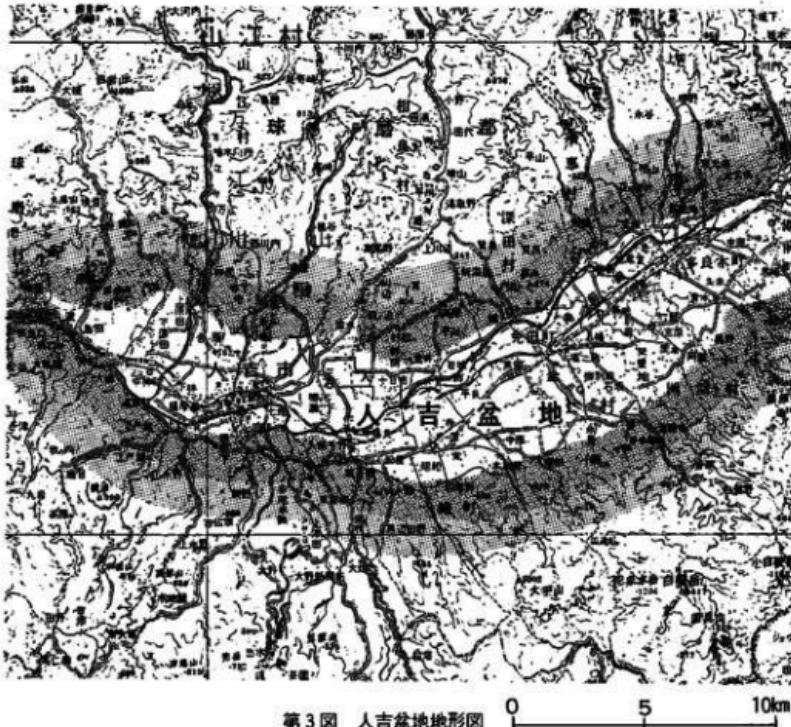
[人吉盆地]

熊本県の南東部に位置しており、祖母山・国見山・市房山などが連なる九州山地内に大きく開口した標高100~200mの断層盆地である。盆地の中央部を球磨川（日本三急流の一つ）が東方向から西方向へ流れている。球磨川の北岸には北方山地に源を発し、球磨川に流ぐ川辺（かわべ）川によって形成された広大な扇状地と、阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地域の広がりがある。

[球磨郡山江村]

人吉盆地の西寄りにあり、南を人吉市に接する。地形的には、村内を東西に大きく二分する二つの開析谷が北から南下しており、谷底平野には東側に山田地区、西側に万江地区が開けている。現在の山江村は、明治22年4月に山田村と万江村が合併したもので、面積121.08km²、人口4,429人（平成元年12月31日現在）の山村である。

昭和57年11月から開始された県文化課による九州縦貫自動車道（八代~人吉間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で、村内からは旧石器~中世にかけての大規模な遺跡が発見されている。



第3図 人吉盆地地形図

第4節 歴史的環境

(1) 先土器時代

球磨・人吉地方では、今日、山江村や人吉市を中心とした河川に近い丘陵地域から32箇所の遺跡が確認されている。昭和57年11月から昭和62年3月にかけて県文化課が実施した、九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査では、狸谷遺跡、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡から先土器時代の石器が出土した。

(2) 繩文時代

早期の遺跡に、狸谷遺跡、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、村山遺跡、岩清水遺跡、射場ノ本遺跡などがある。各遺跡からは、押型文系の楕円文・山形文土器・塞ノ神土器・手向山式土器・曾畠式土器などが出土している。その中でも、岩清水遺跡は岩清水式土器の出土地として広く知られている。今回、この時代の遺跡として新たに「城・馬場遺跡」が加わった。

前期の遺跡は、鼓ヶ峰遺跡が代表例としてあげられる。九州縦貫自動車道建設による発掘調査で数多くの曾畠式土器・船元式土器・並木式土器が出土した。

後期の遺跡は、矢黒神社前遺跡で、国道219号の矢黒バイパス工事の際に、後期後半の土器片や石刀の柄部が採集されている。

晩期の遺跡は、球磨川沿岸の七地水田遺跡があげられる。九州縦貫自動車道建設による発掘調査の際に、晩期の粗製土器とともに大量の打製石斧が出土している。対して丘陵地域では、村山間谷遺跡やアンモン山遺跡があげられる。

(3) 弥生時代

球磨・人吉地方の弥生時代は後期に特徴があり、免田式土器が数多く出土している。遺跡は30ヶ所に及び、主たるものは免田町を中心とした人吉盆地の中央部に集中する。

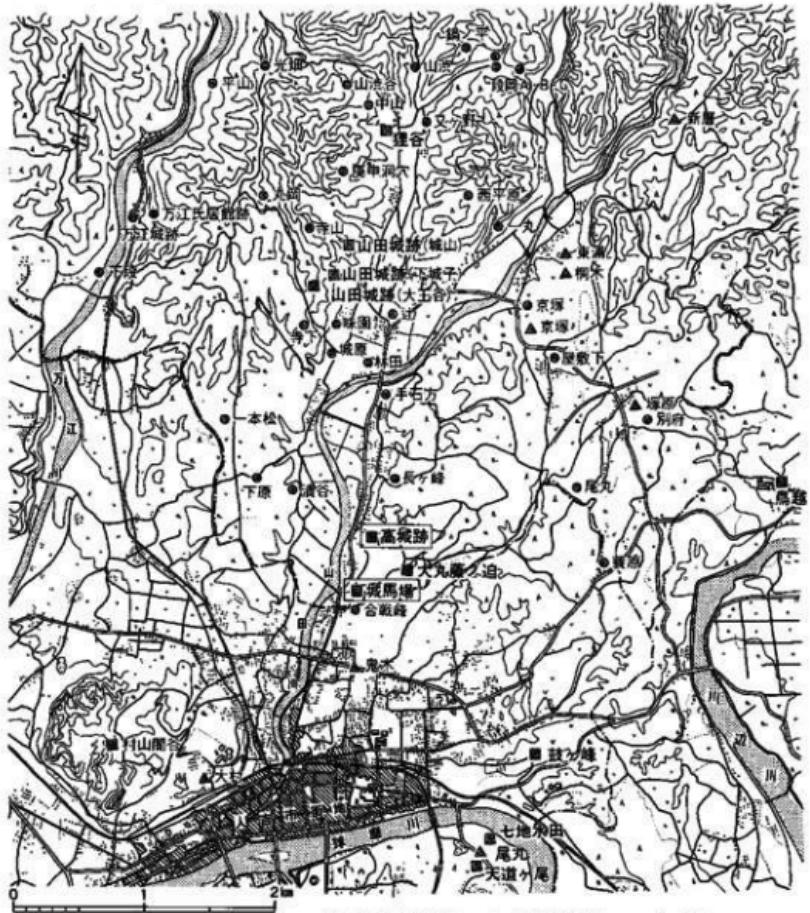
(4) 古墳時代

大村（人吉市）、京ヶ峰（錦町）、陣内遺跡（相良村）などの装飾横穴古墳群が広く知られている。前方後円墳では、分布域の南限とされる錦町の亀塚古墳群があり、大型円墳は四塚・才園四塚古墳群（免田町）、鬼ノ釜古墳（須恵村）、夫婦塚古墳（多良木町）等があげられる。

天道ヶ尾遺跡（人吉市）からは、九州縦貫自動車道建設による発掘調査の際に地下式横穴が検出され、鉄鏃が9本出土した。新深田・荒毛・尾園遺跡（深田村）からは、地下式板石積石室墓が検出されている。小園遺跡（相良村）からは、昭和63年の県営圃場整備事業に伴う発掘調査で、成川式土器を伴う古墳時代の住居址が16基検出されている。

(5) 歴史時代

古代の球磨郡は『古事記』『日本書記』の中で、熊襲征伐の「熊縣」に比定されているが、この時代の遺跡に、下り山の須恵窯跡や拂木瓦窯跡などがある。



■ 調査された道路

道 路 名	時 代	遺 著 名	時 代	遺 著 名	時 代
狸谷道路	先土器—縄文時代	守下道路	縄文時代	七地水道跡	縄文—歴史時代
大丸・尾ノ迫道路	先土器—縄文時代	城原道路	縄文時代	天道ケ尾跡	先土器—歴史時代
高城跡	先土器—歴史時代	林田道路	縄文時代	村山閣谷道路	縄文—歴史時代
中山道路	先土器—縄文時代	手石方道路	縄文時代	新帶古墳群跡	縄文—古墳時代
山洪谷道路	先土器—歴史時代	本松道路	縄文時代	東塚古墳群跡	縄文—古墳時代
平山道路	縄文時代	下原道路	縄文時代	木本古墳群跡	縄文—古墳時代
炎堀道路	縄文時代	黄谷道路	縄文時代	塚原古墳群跡	縄文—古墳時代
下段道路	縄文時代	城馬場道路	縄文—歴史時代	城下古墳	縄文—古墳時代
庚申・洞穴道路	縄文時代 (湖穴)	長ヶ峰道路	縄文—歴史時代	京塚古墳	縄文—古墳時代
山浜道路	縄文時代	我原道路	縄文時代	鬼木古墳	古墳時代
鍋ノ平道路	縄文時代	尾丸道路	縄文時代	大村橋穴群	古墳時代
段岡 A B C 道路	縄文時代	別府道路	縄文時代	尾丸挖穴群	古墳時代
又ヶ野道路	縄文時代	屋敷下道路	縄文時代	山田城跡 (大王谷)	縄文—歴史時代
久岡道路	縄文時代	一九道路	縄文時代	山田城跡 (下城子)	歴史時代
寺山道路	縄文—歴史時代	西原草道跡	縄文時代	山田城跡 (城山)	歴史時代
内角道路	縄文時代	合倉道路	縄文—歴史時代	万江城跡	歴史時代
辻道跡	縄文—歴史時代	鳥越道路	縄文時代	万江氏居館跡	歴史時代
味園道路	縄文—歴史時代	駒ヶケ道路	先土器—歴史時代		

第1表 周辺遺跡一覧表

また、黒田平城跡の周辺からは、銅板墓誌が出土している。

一方、『和名類聚抄』は古代の球磨郡に「人吉・西村・東村・久米・球玖・千説」の6郷があった事を伝えている。しかし、郷と都衛の比定地は以前から諸説があり、今日に至るまで確定に至っていない。

鎌倉時代に入ると、球磨郡の田数と領主を書き上げた建久八年(1197)の『肥後國球磨郡田帳写』がある。これによれば球磨郡は人吉・須恵・永吉庄に分かれ、公田として豊富・豊永郷があり、領主は在地勢力の久米・須恵・人吉・平川氏などであった事がわかる。

西遷御家の相良氏の球磨郡下向は、元久二年(1205)の相良永頼「人吉庄地頭職」補任後と思われる。しかし、寛元二年(1244)に永頼は「下知違背之咎」として人吉庄地頭職が中分され、北方は北条得宗家に奪われている。

南北朝時代の球磨郡は多良木の上相良氏(經頼)と人吉の下相良氏(定頼・前頼)が敵対し、これに国人の平川・須恵・岡本・永里・原宮・橘氏などが加わって、激しい内亂となつた。この様な状況の中で、下相良氏の前頼・氏頼兄弟が「ながとみとの」宛へ契状を出すなど、庶子の勢力も大きなものがあった。

室町時代に入ると、人吉城主の相良前統が死去し、幼主の克頼が家督を継いだ。しかし、上相良氏はすぐさま人吉へ押し寄せ、幼主克頼を追放した。続いて山田城主と伝えられる永留長統が、上相良氏を人吉から追い払い、自ら人吉城に入城した。さらに、文安五年(1448)八月には多良木の上相良頼仙・頼觀を滅亡させ、これに加担した久米・平川・須恵・岡本・永里氏などの有力国人を滅ぼし、郡内を一挙に統一した。その後、永留氏が「相良」姓を名乗り、長統は薩摩と肥後の芦北・八代へ勢力を延ばし、その子為統の時代には、球磨・芦北・八代を支配下に置くなど版図を広げた。

為統から長毎・長紙へと家督が譲られ、長毎の代で初めて庶民の上村氏から晴広を迎えたが、晴広の代で本家の上村三兄弟が氾濫を起こした。さらに、人吉でも動揺が起き、相良氏による球磨郡支配の弱さを露呈した。結果として、相良氏は本拠を八代の籠から人吉へと移すことになる。義陽の代には、日向の伊東氏と薩摩の島津氏の勢力が徐々に球磨郡へ延びており、義陽は真幸・大口へ軍勢を差し向けるなど、領内の警戒を強めた。しかし、天正九年(1581)肥後の水俣城の落城を機に、義陽は戦わずして島津義久の軍門に降り、八代・芦北郡を放棄し、球磨郡のみが安堵された。そして、同年十二月に義陽は島津氏の先陣として、阿蘇氏の家臣・甲斐宗運と響野原(ひびきがはら)にて戦い、打ち死にしている。

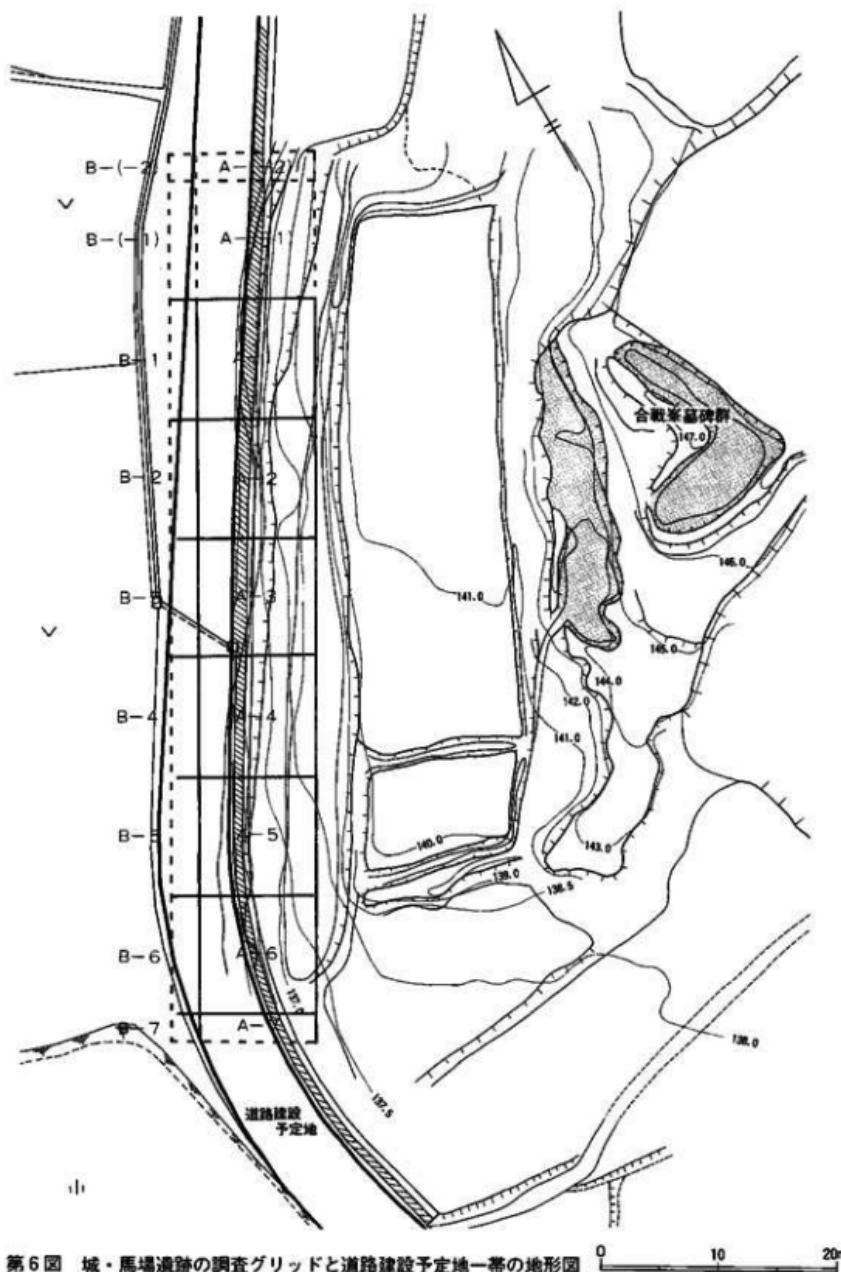
その後、島津政権下で忠房が家督を継ぎ、やがて豊臣秀吉の九州征伐で、島津・相良氏とも秀吉の支配下に入ることになる。天正十五年(1587)には、秀吉から相良長毎に「旧領球磨郡安堵」がなされ、以後、二万二千石の外様大名として相良氏は明治時代の廃藩置県まで、水きに渡って球磨郡を支配した。



第5図 遺跡周辺の字図と地形図

- | | |
|-------------------------------------|-----------------|
| 【参考文献】熊本県文化財調査報告第30集『熊本県の中世城跡』1978年 | 熊本県教育委員会刊 |
| 熊本県文化財調査報告第80集『大丸・藤ノ迫遺跡』1986年 | 熊本県教育委員会刊 |
| 熊本県文化財調査報告第90集『狸谷遺跡』 | 1987年 熊本県教育委員会刊 |
| 熊本県文化財調査報告第95集『高城跡』 | 1988年 熊本県教育委員会刊 |
| 熊本県文化財調査報告第101集『七地水田遺跡』 | 1989年 熊本県教育委員会刊 |
| 人吉市文化財調査報告書「村山遺跡」 | 1981年 人吉市教育委員会刊 |
| 上村重次著『九州相良の寺院資料』 | 1987年 |

城・馬場遺跡



第6図 城・馬場遺跡の調査グリッドと道路建設予定地一帯の地形図

0 10 20m

第1節 遺構の概要

試掘の結果にもとづいて、合戦峯集落の北縁より北へ長さ75m・幅12.5mの範囲を発掘調査した。馬場道の東側高台部分が該当区域である。地目は竹林と雜木山であったが、調査前に工事関係者によって伐採が終了していた。

I・II層は重機で剥ぎ取り、III層・IV層・V層は順次、発掘調査を行った。グリッドは10m×10mの大きさとし、工事用図面のセンター杭を利用して、北から南へ1～7（中世遺構検出時は北へー1・-2区を設けた）とし、東から西へA-Bとした。

II層はアカホヤ層で、層厚は僅かであったが、この層を切り込む中世の柱穴が数多く検出された。さらに、墓塚が1基検出された。この時代の出土遺物は、極く少量であった。

次いで、IV層～V層を掘り込んで縄文時代早期の調査をした。遺物包含層で検出した遺物は、1点ずつ出土地点を記録して取り上げる事に努めたが、細片については出土層のみの記録に留めたものもある。

第2節 層位

遺跡では、5枚の土層が確認出来た。そこで、標準土層柱状図によって各層の状態を示す。

〔I 層〕 灰褐色土層。層厚30～40cmを測り、12片の近世陶磁器片が出土した。

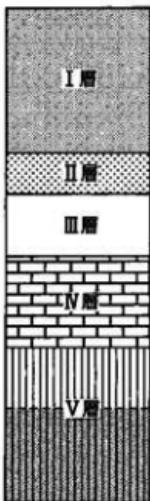
〔II 層〕 暗褐色土層。層厚5～15cmを測り、この層からは、数は少ないが流れ込みによる中世遺物や、手向山式土器片が出土した。

〔III 層〕 黄褐色土層。アカホヤ火山灰の固く締まった土層で、元来は無遺物の純粋層である。調査区域では平均して5～10cmの層厚があり、今回の調査に限って、最下部近くで23点に及ぶ手向山式土器片の混入があった。しかし、これは自然作用によるものであろう。さらに、この層の上面からは中世の柱穴が検出された。

〔IV 層〕 褐色土層。縄文時代早期の遺物包含層で、層厚15～25cmを測る。調査区域からは、手向山式土器が多量に出土した。土壤粒子は細かく、やや粘質を帯びて締まりのある土層である。

〔V 層〕 黒褐色土層。上位は縄文時代早期の遺物包含層で、強い粘質を帯びて締まりのある土層である。調査区域では、上位部分の層厚10

第7図 標準土層図 ~15cmまでの範囲で手向山式土器片が出土した。



第3節 検出遺構

〔集石1〕

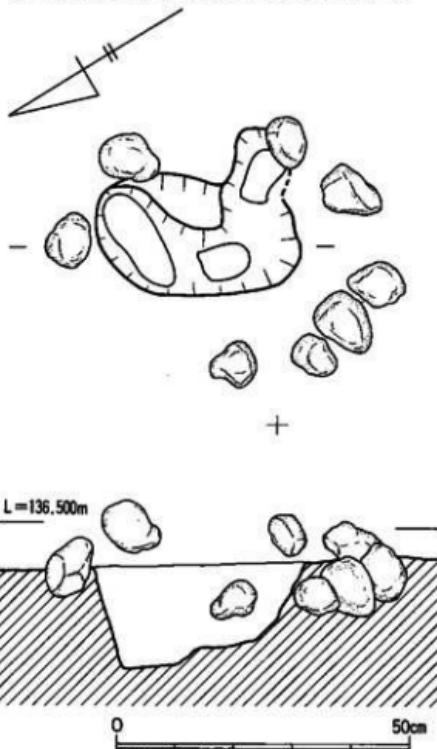
A-3区の南西隅から検出されたもので、V層を掘り込んだ土壌の周りから、集石が検出された。

土壌の平面プランは長円形状で、長径35cm・短径15~20cm・深さ12cmを測り、南側寄りで北側部分よりも、やや大きな掘り込みとなる。長軸の方位はN 42° Eである。

掘り方は、北壁が急な立ち上がりであるのに対し、南壁は床面を含めて段付きの緩やかなものとなる。

集石は、この土壌を取り囲む様に長径65cm・短径45cmの範囲にあるが、北西隅に欠落部分があり、全体を一巡する事はない。しかし、検出状況から集石が何らかの意図により、この土壌の周囲を取り囲む様にあり、当初はその数も多かったであろうという事は想像に難しくない。石質は砂岩である。

土壌の埋土はアカホヤ混じりの暗黄褐色土で、フワフワした締まりのないものである。



第8図 集石1 実測図

〔集石2〕

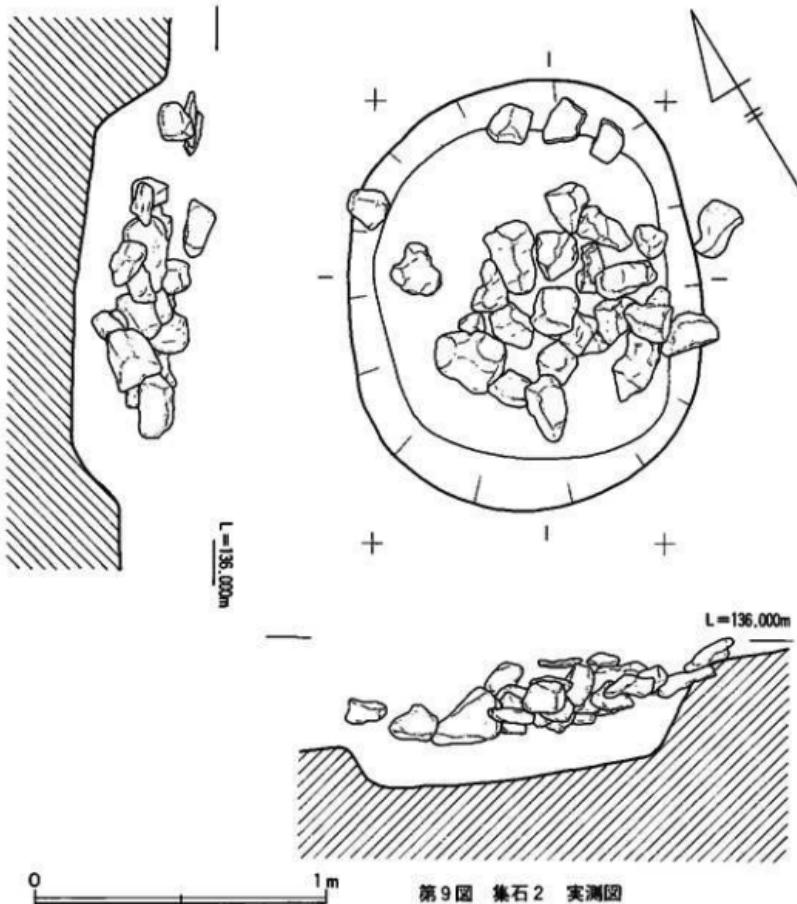
A-4区から検出されたもので、V層を掘り込んだ土壌である。土壌の平面プランは、やや梢円形で、長径145cm・短径120cmを測り、長軸の方位はN 25° Eである。

V層は東から西へ僅かに傾斜している所から、掘り込み面の深さは東側で33cm、西側で14cmとなる。土壌の下場は長径110cm・短径100cmの大きさである。

集石は、土壌の底部より6~10cm上位に検出され、床面に密着するものはなかったが、土壌の東南寄りに70cm×80cmの範囲でまとまりを示し、30cmの層厚を測った。さらに6個の小石

が、土壌の側部に散らばっていた。石質はいずれも砂岩である。

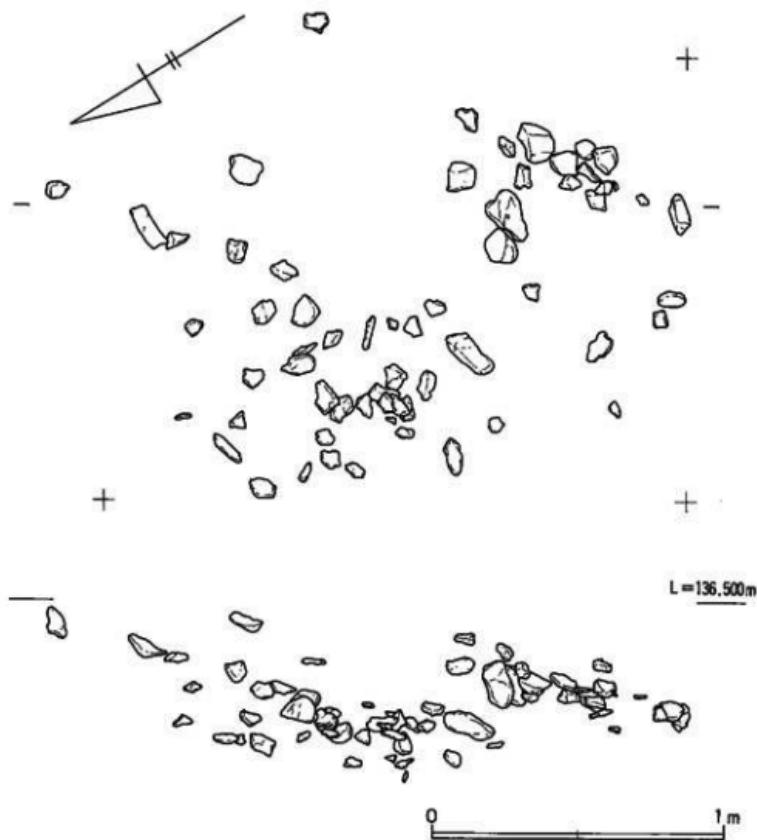
埋土は、やや純まりのある暗褐色土で、少量の炭化物が混入していた。



第9図 集石2 実測図

[集石3]

A-5区の中央部から検出されたもので、IV層中から集石3が検出された。礫石は南北190cm・東西182cmの範囲に分布しており、層厚57cmを測った。礫石の分布は密な状態ではないが、見た目に1つのまとまりをもつ事は確かである。礫石の中では、長径19cm・短径7~9cm・厚さ7cmを測るのが最大で、石質はすべて砂岩であった。目立った遺物の出土ではなく、集石自体もIV層中に掘り込みを有しなかった。



第10図 集石3 実測図

[SK1]

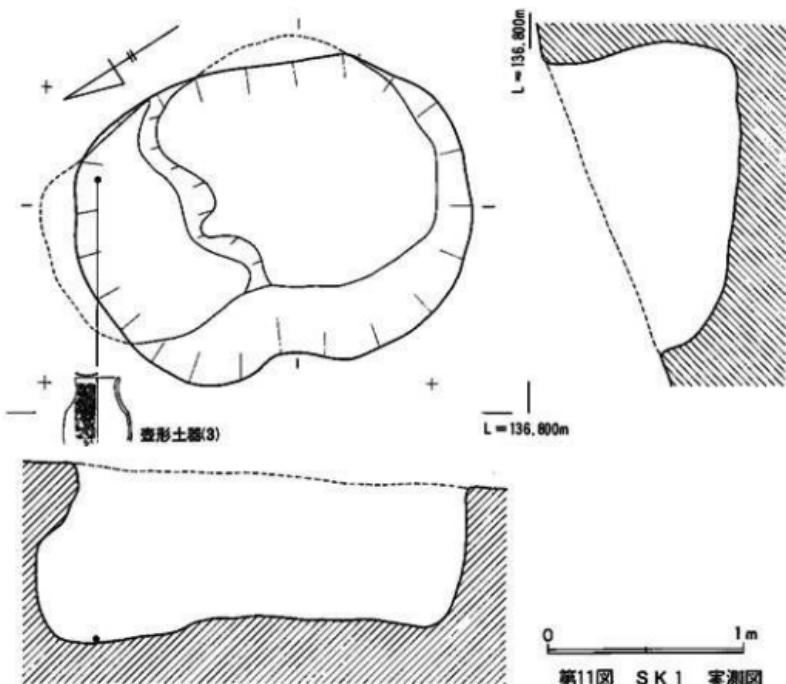
A-6区の北西隅から検出されたもので、平面プランは椭円形に近く、長径205cm・短径145~155cmの大きさである。

深さは、検出地点が後世に削平をうけて東側から西側への傾斜地になっているため、東側で100cm、西側寄りで45cmを測る。南北方向における深さは70~90cmで、ほぼ一定している。

掘り方は、東壁と北壁にオーバーハングが目立つ。

埋土は単一の黒褐色で、土坡内の北壁寄りから、肩部がやや角張る壺形土器(3)が床面密着の状態で出土した(→第17図 出土遺物実測図 繩文土器③)。

埋土には手向山式土器の細片が数多く混入していた。

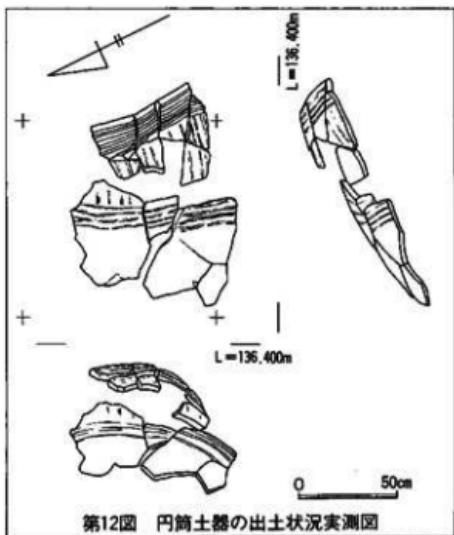


第11図 SK 1 実測図

〔円筒土器（1）の出土状況〕

出土地点はA-5区の北西隅で、V層の黒褐色土層から出土した。

土器片は南北93cm・東西118cmの範囲にまとまって堆積しており、横たえられた一個体分の円筒土器が、上位からの圧力で、押し潰された状況にあつた事を伝えている。（→第15図 出土遺物実測図 繩文土器①）

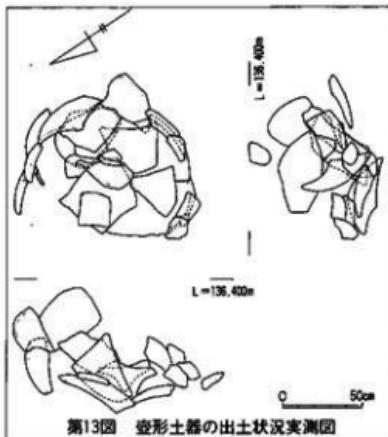


第12図 円筒土器の出土状況実測図

〔壺形土器（2）の出土状況〕

出土地点はA-6区の北西隅で、V層の黒褐色土層から出土した。

土器片は南北114cm・東西117cmの範囲にまとまって、水平状態に堆積しており、直立状態の壺が上位からの圧力で押し潰された状況にあった事を伝えている。（→第16図 出土遺物実測図 繩文土器②）



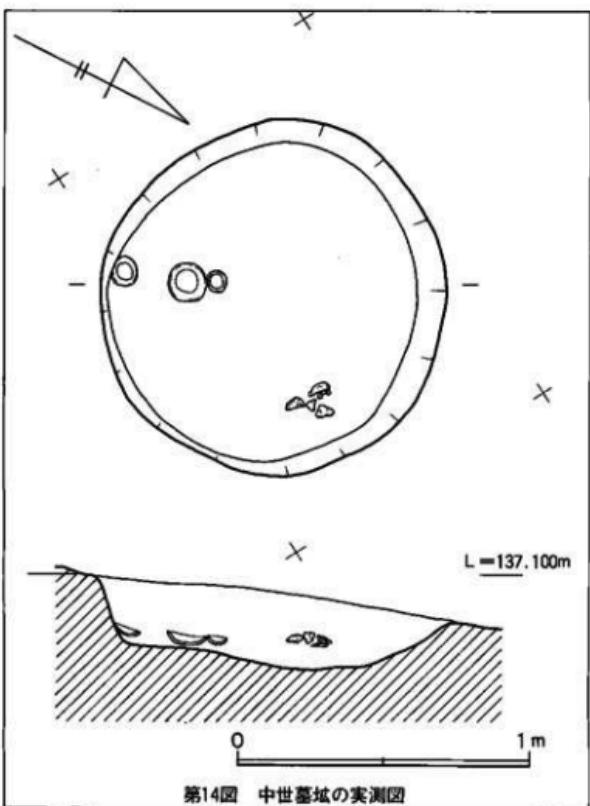
第13図 壺形土器の出土状況実測図

〔中世墓塚〕

A-6区からⅢ層のアカホヤを切り込む形で墓塚が検出された。

平面プランはほぼ円形で、直径1.2mを測り、深さは上位部分が後世に削平されているため、25cmに留まった。

埋土は茶褐色で、人骨（下顎の一部と前歯が3本残存していた）や、埋納品と見られる3枚の土師皿と、ボロボロに腐食した六文銭が出土した。（→第13図 出土遺物実測図 中世遺物①）



第14図 中世墓塚の実測図

[柱穴列]

調査区の全域からⅢ層のアカホヤを切り込んで、Ⅳ層土に達する219個の柱穴が検出された。

柱穴の埋土は褐色土が主で、中にアカホヤを混入するものもあった。埋土に遺物の混入は無かったが、埋土色からして中世の遺構と判明した。（昭和59年度～60年度に実施した高城跡のⅡ～Ⅳ郭調査で、検出した柱穴の埋土色と同一）。

柱穴は、上位部分が削平されて下位部分のみの残存であったが、検出状況からして、いずれも掘り廻したものではなく、打ち込まれた状況にあった。配列からしても建築址に復元出来る様なものはなかった。（→第76図 柱穴列実測図）

これらの柱穴については、高台の西縁からの検出である所から、裾部を通る「馬場道」に関連した橋や杭跡の類ではないかと考えられる。

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
			最浅	最深				最浅	最深
1	21	17	52.5	58.4	22	21	18	51.9	58.9
2	20	20	19.0	24.3	23	17	14	28.7	35.6
3	20	18	28.8	36.5	24	23	23	40.7	50.3
4	21	20	25.7	30.9	25	18	16	44.7	53.3
5	24	16	26.9	34.8	26	35	32	61.7	76.0
6	19	18	12.2	20.5	27	21	17	22.6	25.1
7	14	13	21.9	27.4	28	25	21	50.9	58.2
8	12	11	20.6	28.1	29	20	80	18.0	23.1
9	25	15	40.2	44.1	30	18	15	28.9	76.8
10	19	13	33.6	42.5	31	13	12	50.3	58.1
11	23	15	37.7	41.7	32	22	20	46.3	50.4
12	23	18	60.1	65.0	33	20	16	57.6	62.8
13	22	18	31.5	41.5	34	24	20	53.9	64.0
14	18	18	33.6	44.7	35	22	19	30.4	38.9
15	16	15	38.4	43.6	36	20	16	28.7	60.7
16-1	35	33	59.9	69.5	37	22	22	64.9	70.3
16-2	55	31	8.1	10.1	38	22	21	74.0	74.6
16-3	32	24	26.5	30.3	39	24	19	26.2	80.1
17	24	20	14.3	37.5	40	20	19	34.1	39.6
18	25	23	33.9	39.0	41	24	18	37.8	42.2
19	22	19	32.7	39.5	42	21	20	58.2	67.1
20	19	18	19.4	24.9	43	23	20	53.3	54.9
21	25	25	65.7	72.9	44	21	18	29.4	42.1

第2表 柱穴計測表 ①

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
			最浅	浅	最深
45	25	18	68.8	73.6	
46	22	20	54.6	58.8	
47	33	23	55.5	63.5	
48	27	22	39.7	42.0	
49	22	21	25.2	39.1	
50	15	15	49.6	57.4	
51	22	22	64.2	67.2	
52	20	20	16.5	22.6	
53	25	25	38.7	42.6	
54	20	19	25.8	35.0	
55	22	21	21.6	29.7	
56	20	19	32.8	39.1	
57	20	19	50.5	55.3	
58	23	21	34.1	38.9	
59	22	18	19.1	24.3	
60	25	22	35.8	44.6	
61	33	22	28.2	28.9	
62	24	20	22.6	23.8	
63	24	20	27.5	31.5	
64	23	17	20.3	32.5	
65	20	17	16.3	22.0	
66	25	17	30.5	36.8	
67	23	18	31.5	35.7	
68	25	20	20.9	22.6	
69	20	18	39.1	43.3	
70	29	20	45.5	56.5	
71	19	18	32.3	41.8	
72	25	22	24.0	25.5	
73	19	17	32.4	37.4	
74	23	15	26.1	38.1	
75	27	22	22.8	30.8	
76	21	21	43.7	56.0	
77	25	16	30.0	34.2	
78	30	24	19.1	29.6	
79	32	28	13.5	24.3	
80	24	19	16.0	27.5	

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
			最浅	最深
81	26	20	25.3	32.0
82	25	20	40.8	45.8
83	25	18	43.8	54.5
84	22	20	31.0	35.3
85	20	19	38.7	44.5
86	26	19	21.6	26.9
87	25	21	23.5	38.3
88	30	24	21.1	27.5
89	20	19	13.4	25.4
90	25	22	24.9	37.8
91	23	20	12.2	16.0
92	25	24	56.5	71.3
93	18	14	13.5	18.0
94	27	22	29.8	37.7
95	27	24	31.5	36.0
96	35	27	11.7	24.4
97	26	18	21.2	33.7
98	25	20	14.1	23.8
99	36	25	23.2	38.2
100	28	20	17.3	24.3
101	26	24	40.1	45.3
102	29	17	74.3	81.2
103	30	23	98.0	19.8
104	28	22	30.4	42.5
105	18	15	22.5	24.3
106	25	25	21.2	28.7
107	21	17	19.0	21.4
108	20	17	18.2	20.0
109	24	22	42.8	46.8
110	22	18	27.7	31.0
111	32	25	29.7	42.0
112	30	25	73.0	16.3
113	25	21	24.1	28.4
114	34	30	28.9	32.6
115	25	22	17.3	26.3
116	24	20	33.5	40.1

第3表 柱穴計測表 ②

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
			最深	浅				最深	浅
117	20	16	41.7	51.6	152	24	22	43.3	49.1
118	26	18	46.5	74.0	153	24	22	42.2	46.5
119	21	21	18.3	27.5	154	23	20	23.1	31.3
120	35	32	15.0	42.5	155	15	15	19.5	21.2
121	33	29	49.3	56.5	156	29	26	45.8	52.3
122	16	14	39.3	45.6	157	27	25	22.7	30.0
123	29	24	40.8	51.4	158	23	19	29.0	32.7
124	34	30	40.3	47.5	159	30	24	20.7	26.7
125	20	19	27.6	37.1	160	25	21	22.3	34.9
126	21	18	30.2	37.1	161	34	30	37.1	33.8
127	27	23	56.5	63.0	162	25	23	40.0	43.0
128	22	20	45.8	49.1	163	35	26	15.6	31.8
129	31	29	26.1	31.7	164	24	21	33.8	38.4
130	28	25	39.1	66.0	165	27	25	31.3	38.9
131	32	24	44.3	47.5	166	32	28	55.3	64.8
132	26	22	51.4	65.3	167	29	24	57.2	63.7
133	16	14	27.3	29.2	168	23	19	62.8	67.5
134	24	23	52.5	55.8	169	23	20	36.0	37.0
135	21	20	19.1	24.0	170	24	22	38.5	40.0
136	30	25	24.1	26.5	171	36	31	16.0	19.3
137	25	21	25.3	31.0	172	20	18	22.3	24.7
138	36	36	52.8	62.8	173	32	28	29.0	35.3
139-1	25	23	29.9	29.2	174	20	18	15.8	19.4
139-2	26	25	23.7	29.8	175	26	22	25.9	35.4
140	25	23	16.2	23.0	176	34	32	28.5	36.2
141	24	23	65.1	69.2	177	29	25	27.3	35.8
142	25	20	38.5	41.6	178	29	26	48.5	54.0
143	25	23	41.5	50.0	179	20	18	13.0	16.7
144	27	26	42.5	47.6	180	25	21	25.0	28.5
145	30	26	34.0	40.0	181	23	21	34.9	38.2
146	33	31	65.6	69.6	182	25	23	37.0	42.0
147	26	24	22.2	27.7	183	23	20	10.6	14.4
148	25	22	23.3	29.8	184	29	26	33.4	41.2
149	25	22	44.9	55.0	185	30	25	42.5	49.0
150	23	20	23.0	30.6	186	26	23	38.6	49.0
151	20	17	40.1	43.5	187	31	24	44.2	47.7

第4表 柱穴計測表 ③

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
			最浅	最深
188	26	15	30.9	34.0
189	23	20	37.2	40.0
190	25	22	51.8	58.6
191	27	25	32.5	41.5
192	27	24	43.0	47.8
193	23	20	39.0	47.7
194	21	18	25.2	36.5
195	33	30	30.5	33.3
196	27	24	59.1	61.9
197	28	20	16.7	19.1
198	25	20	29.0	36.2
199	24	21	23.7	31.7
200	20	11	54.8	62.3
201	28	23	40.7	43.4
202	28	22	40.5	52.7
203	25	23	36.9	47.2

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
			最浅	最深
204	26	20	37.4	43.0
205	20	16	30.0	31.4
206	30	28	47.8	55.8
207	26	20	33.7	37.4
208	31	27	39.3	49.5
209	25	24	34.3	36.0
210	26	22	32.6	47.4
211	30	24	53.2	63.9
212	25	16	27.5	37.3
213	25	22	56.2	60.5
214	35	31	53.6	60.0
215	28	25	21.3	24.0
216	29	19	57.3	67.8
217	28	24	50.9	56.4
218	34	29	49.3	54.5
219	29	21	40.3	42.0

第5表 柱穴計測表 ④

第4節 出土遺物

東西A・Bと南北1~7のグリッドから総数1289点の縄文土器片が出土したので、器形や文様ごとに分類した。

第6表は文様の一覧表で、第7表・第8表は各グリッドにおける文様別の出土数である。

なお、出土総数1289点の内、文様を有するものは547点で、無文は357点であった。

さらに、385点は細片である事から、整理段階で除去した。

a類	山形押型文	i類	燃糸文を地文とする沈線文	p類	縄文
b類	菱形押型文	j類	縄文を地文とする沈線文	q類	同心梢円文
c類	格子押型文	k類	燃糸文	r類	同心円文
d類	微隆起突帯文	l類	変形燃糸文	s類	梢円状文+同心円文
e類	沈線文	m類	網目の燃糸文	t類	山形押型文+刺突文
f類	突帯沈線文	n類	櫛描き文	u類	微隆起突帯文+刺突文
g類	特殊沈線文	o類	網目文	v類	刺突連続文
h類	山形押型文を地文とする沈線文				

第6表 城・馬場遺跡出土の手向山式土器の文様による分類表

a類 山形押型文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	2	5	30	44	36	38	3
B	0	0	0	2	1	0	0

(計 161点)

c類 格子押型文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	1	0	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 1点)

e類 沈線文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	2	0	21	17	20	18	2
B	0	0	0	1	0	0	0

(計 81点)

g類 特殊沈線文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	1	1	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 2点)

i類 摂糸文を地文とする沈線文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	—	—	—	—	—	—	—
B	—	—	—	—	—	—	—

(遺物取り上げ地点不明・IV層出土 1点)

k類 摂糸文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	1	1	4	3	6	2	0
B	0	0	0	1	0	0	0

(計 18点)

b類 菱形押型文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	2	1	17	32	29	17	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 98点)

d類 微隆起突帯文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	2	3	14	25	24	20	0
B	0	0	0	1	0	0	0

(計 89点)

f類 突帯沈線文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	1	1	1	5	2	8	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 18点)

h類 山形押型文を地文とする沈線文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	4	5	2	2	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 13点)

j類 線文を地文とする沈線文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	0	1	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 1点)

l類 变形摂糸文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	0	1	1	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 2点)

第7表 調査区による類別土器出土量(1)

■類 網目の撲糸文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	0	1	1	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 2点)

■類 楠描き文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	1	2	2	3	5	2	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 15点)

○類 網目文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	2	2	4	5	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 13点)

♀類 同心格円文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	1	0	1	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 2点)

△類 指凹状文+同心円文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	1	0	0	0	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 1点)

■類 微隆起突文+刺突文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	1	0	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 1点)

底 部

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	4	2	5	2	0
B	0	0	0	1	0	0	0

(計 14点)

■類 楠描き文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	1	2	2	3	5	2	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 15点)

○類 網 文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	1	0	4	3	1	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 9点)

♀類 同心円文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	1	0	0	1	0	1	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 3点)

△類 山形押型文+刺突文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	0	0	0	0	1	0	0
B	—	—	—	—	—	—	—

(計 1点)

▼類 刺突連續文

区	1	2	3	4	5	6	7
A	—	—	—	—	—	—	—
B	—	—	—	—	—	—	—

(遺物取り上げ地点不明・Ⅳ層出土 1点)

無文土器

区	1	2	3	4	5	6	7
A	13	39	73	107	64	46	5
B	0	0	4	6	0	0	0

(計 357点)

第8表 調査区による類別土器出土量(2)

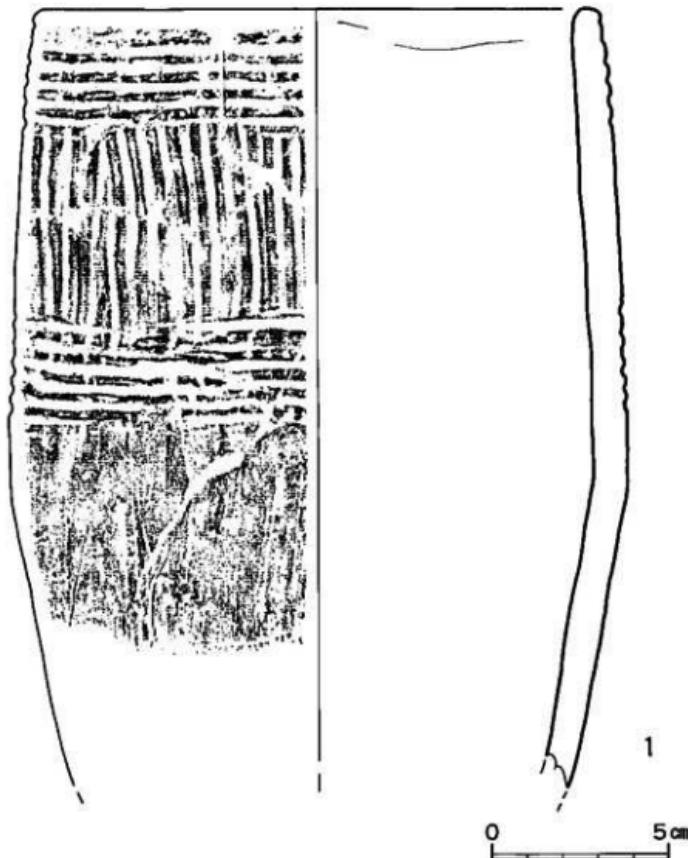
[1] 繩文土器

(1) 器形による分類

1は円筒土器で、復元口径16.2cm、復元最大胴部径17.6cmを測るが、3と同様に胴部の下部から底部にかけて欠損しており、器高は22.2cmに留まる。体部は中途に屈曲面があり、やや内湾する。

文様は、外器面の上位から中位にかけて縦位の沈線を施した後に、上位と下位に横位の沈線を重ねている。一方、同器面の中位から下位に、ヘラ状工具で縦位に削った痕が残る。

A-5区、北西隅から出土した。



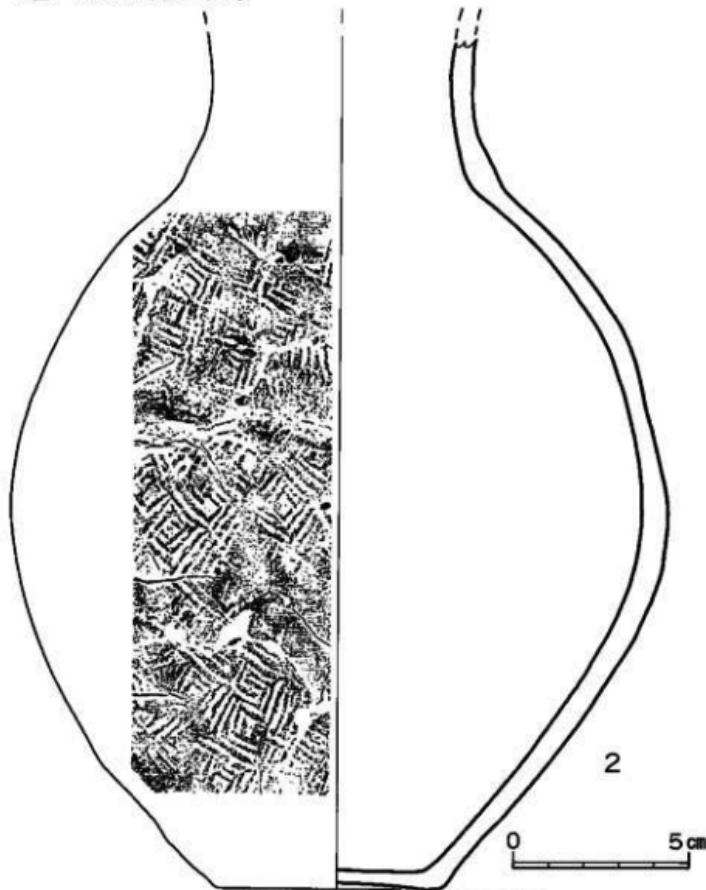
第15図 出土遺物実測図 繩文土器①

2は壺形土器で、肩部は撫形である。器厚は5～8mmで最大胴部径21.8cmを測り、底部は上げ底で直径6.5cmを測る。頸部を欠いており、器高は24.0cmに留まる。外器面に菱形押型文の文様があるが、最下位部はナデ消しされている。A-6区北西隅から出土した。

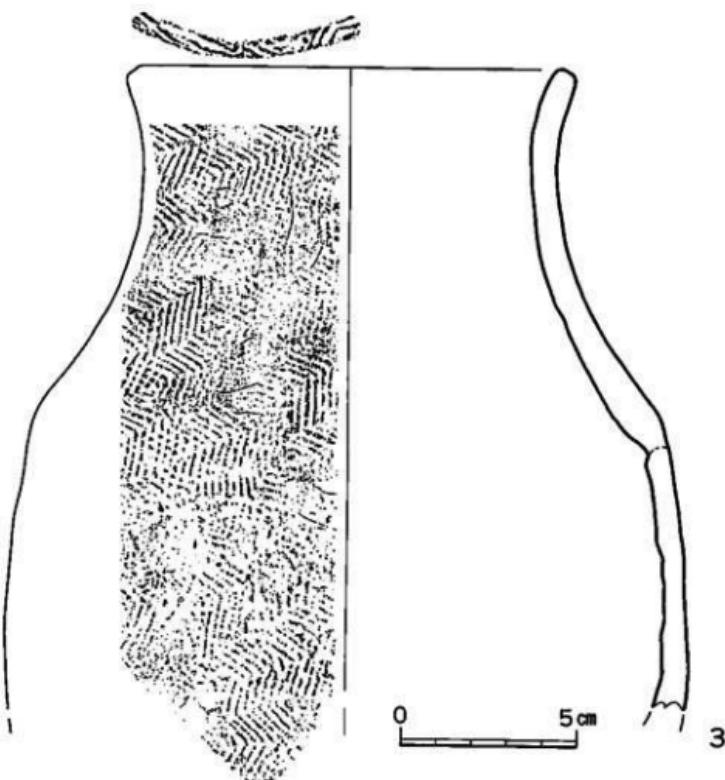
3は2と同様に壺形土器であるが、肩部はやや角張っており、器形を異にする。器厚は7～11mmで、復元口径11.8cm、最大胴部径19.4cmを測るが、胴部の下部から底部にかけて欠損しており、器高は18.1cmに留まる。

外器面と内器面の上位及び口唇部に山形押型文の文様があるが、外器面の下位部分には2と同じくナデ消しが加えられている。内器面については、指ナデと指頭圧痕が残る。

A-6区・SK1から出土した。



第16図 出土遺物実測図 繩文土器②



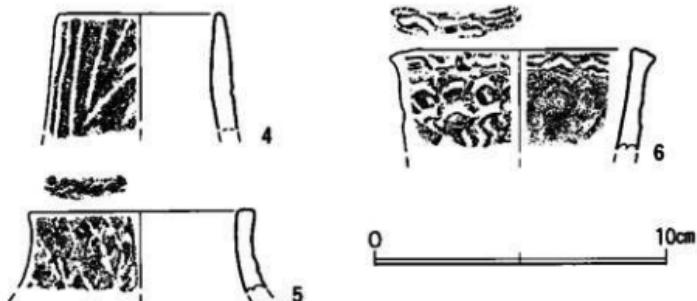
第17図 出土遺物実測図 繩文土器③

(注) 外:外器面・内:内器面

NO	層	区	レベル	部	種	厚	m	胎	土	施	成	色	質	文様及び調査	形态の特徴	備考
1	B	3	135.959 (縄文基部。 底部を欠く。)		長石・雲母			良好				灰褐色	内:ナゲ。 外:上位から下位は、2~3mm の隙間に施し、横に上位 と下位に横線の1本ずつの 沈線を施している。	器基は半丸より、やや内凹 する。 残存器高 22.2cm. 復元1枚 復元最大胴部分径 17.6cm.		
2	B	A	—	縄文を欠く。	長石・雲母			良好				内:灰褐色 外:灰褐色 一部:灰黑色	外:菱形押型文。底下部部分 はナゲ施されている。	菱形土器。肩部は強化。 底部は上打底で、直径 6.5 cmを測る。 残存器高 24.0cm. 最大胴部分径 21.8cm.		
3	A	6	—	縄文~網目。	長石・雲母			良好				内:淡灰褐色 外:白い灰褐色 ~白い褐色	内・外の上位・口唇:山形押 型文 内の中段:底径の1ナゲ。 底部:強化器。 内の下段:底径の1ナゲ。 底部:強化器。 外の下段:ナゲ施しが知えら れている。	壺形土器で肩部は、やや角 張る。 復元1枚 11.8cm. 残存器高 18.1cm. 最大胴部分径 19.4cm.	(SK 1)	

第9表 出土遺物観察表 繩文土器①

4～6は、壺形土器の頸部である。4は復元口径5.5cmで、頸部は直線的に伸びて、やや内傾する。外器面に縦位と斜行の沈線がある。5は復元口径7.8cmで、頸部は内傾しながら、やや外弯する。口唇部は平坦である。外器面に網目撚糸文が施されている。6は復元口径9.1cmで、頸部は直線的に伸びて、やや外傾する。外器面に山形押型文と変形同心円文があり、内器面の上位と口唇部に山形押型文が見られる。



第18図 出土遺物実測図 繩文土器④

(注) 外: 外器面 内: 内器面

NO	層	区	レベル	部	厚	基	地	土	成	色	調	文様及び特徴	形態の特徴	備考
4	N		——	縫 部	上段 3.0 中段 7.0 下段 6.5	長石・雲母	普通			内: 黄褐色 外: 淡白色	内: ナギ。 外: 縦位・斜行の沈線 (深幅 1.5mm)。	頸部は直線的に伸びて、や や内傾する。 復元口径 5.5cm。		
5	N	A 3	137.151	縫 部	中段 5.0 下段 6.0	長石・雲母	普通			内: 黄褐色 外: 淡白色	内: ナギ。 外: 網目撚糸文 (ローリング 織)	口唇部は平坦 (6mm幅)。 頸部は内傾しながら、やや 外弯する。 復元口径 7.8cm		
6	B	A 6	136.360	縫 部	上段 7.5 中段 4.5 下段 6.5	長石・雲母	良好			灰白色	内: ナギ。 口唇: 山形押型文。 外: 上段は山形押型文と変形 同心円文。	頸部は直線的に伸びて、や や外傾する。 復元口径 9.1cm。		

第10表 出土遺物観察表 繩文土器②

(2) 文様による分類

[a 類] 山形押型文

最も出土数が多くAの全区画とB-4・5区から161片が出土した。この内、A-3～6区からの出土は148片を数え、4区画で全体の92%弱を占める。

27と45・48が接合資料である。27は3片の接合で27-1と2.3m、27-2と2.6mの距離を有している。45と48は2片の接合で45は45-1と25cm、48は48-1と8.3mの距離を有している。

7～26は口縁部で、27～59は胴部、60・61は底部の残存である。

口縁部は、外器面と内器面の上位に山形押型文を有するもの (7～16・18・19・21～26)

と、外器面に山形押型文と内器面の上位に菱形押型文を有するもの(17)や、外器面のみに山形押型文を有するもの(20・25)とがある。

外器面と内器面の上位に山形押型文を有するものは、23~26を除いて大方のものが、口唇部にも文様が施されており、その種類は山形押型文(7・9~16)、押捺文(8・19~21)、刺突文(18)、菱形押型文(17)に細分される。

器形については、14・25が直線的に伸びており、他のものは外弯する。21は特にその度合が著しく、口縁部は弓状を呈する。13は口縁部の内器面が上位部分に限り、やや内弯する。口唇部は10・24が、やや肉太の口縁直口である外は、ほぼ平坦面に近い。26はその顕著なもので、平坦面は幅5mmを測る。10・19は口縁部の内器面が中途で腰折れ状態を呈する。25は最大器厚が5.5mmで、口縁部の中で最も薄壁である。

27~59の胴部は、いずれも外器面に山形押型文を有しているが、内器面にも同一文様を施すもの(27・30・50)がある。この場合、文様の方位は外器面が縱位であるのに対し、内器面は横位となる。47・51には、残存胴部の上位に突帯が付いており、51は突帯面に刺突文がある。

器形については、大方のものが壺や深鉢の類と思われるが、唯一、31は底部を有する胴部である。

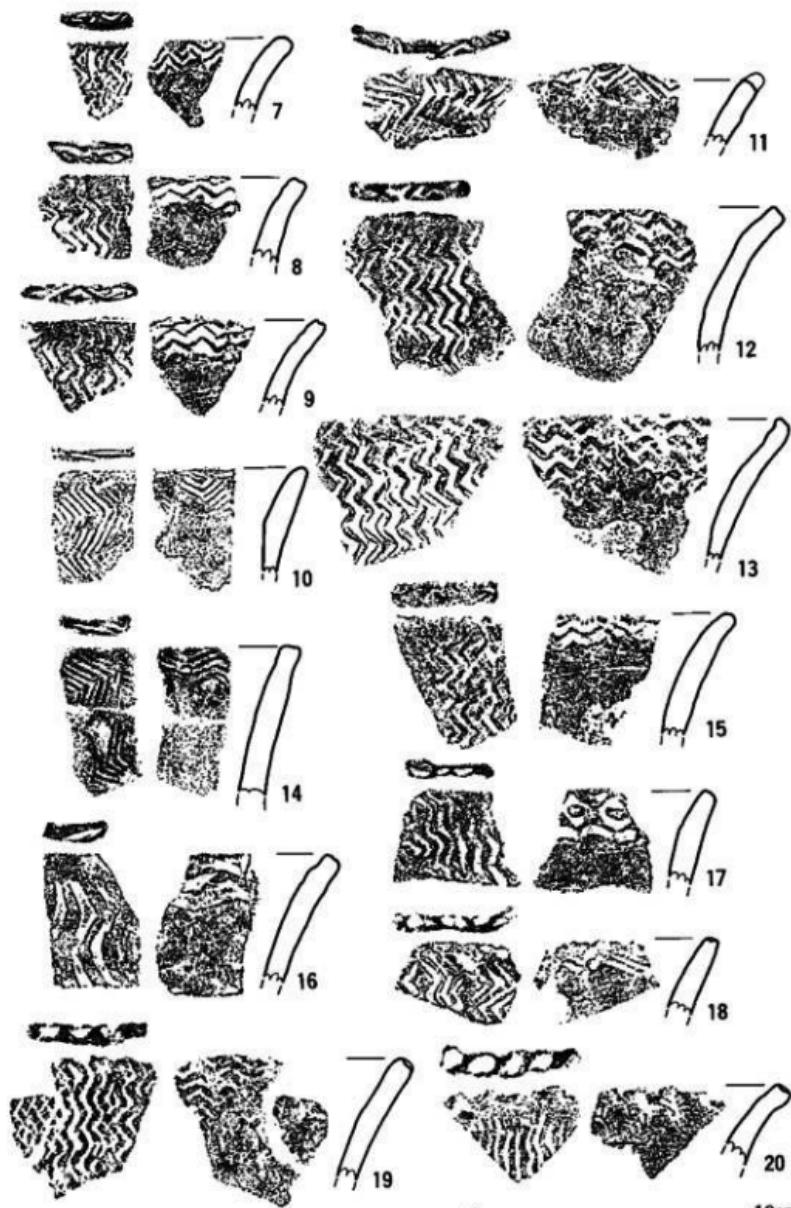
33・41・44・48は器壁が肉太で、11mm前後の厚さを測る。

60・61は底部で、外器面に山形押型文を有する。形状からしていずれも壺形土器(2)の底部と同様で、上げ底となる。61は復元底径7.0cmを測る。

(注) 外:外器面、内:内器面

NO	層	区	レベル	形	様	基	厚	地	土	成	色	調	文様及び質	特	徴	備考
7	N	A 3	137.253	口縁部			7.0	灰石・黄母	虫奸	無い褐色			内:上位は南花の山形押型文。 ナダ。 口唇:山形押型文。 外:底位の山形押型文。	口唇に毛るまで削厚は均一。		
8	N		—	口縁部	口唇 6.0 下位 5.5	灰石・黄母	普通			黄褐色			内:上位は山形押型文、下位 は横位。 口唇:山形押型文。 外:山形押型文。上位はナダ が加わる。	—		
9	N		—	口縁部	口唇 5.0 中位 5.5 下位 7.0	灰石・黄母	普通			黄褐色			内:上位:山形押型文。 内の下位:無底張。ナダ。 口唇:山形押型文。 外:上位:山形押型文後。ナ ダ。 外の下位:山形押型文。	やや、外等。		
10	N		—	D縁部	上位 4.5 中位 8.5 下位 4.5	灰石・黄母	虫奸	内:灰褐色 外:黒褐色					内:底位の山形押型文。 口唇:山形押型文。 外:底位の山形押型文。	内器面の上位は、中道より 腰折れ状態となる。		
11	N	A 4	136.119	口縁部		7.0	灰石	普通		無い褐色			内:上位は山形押型文、下位 は横位。 口唇:山形押型文。 外:上位は山形押型文、以下 ナダ。	—		
12	N	A 4	137.112	口縁部	下位 7.5	灰石・黄母	やや不良			無い褐色			内:上位は山形押型文後。ナ ダ。下位はナダ。 口唇:山形押型文。 外:山形押型文。	外等。		

第11表 出土遺物観察表 繩文土器③



第19図 出土遺物実測図 機文土器⑤

0

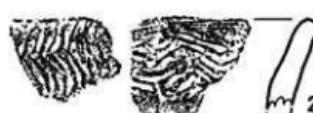
10cm



21



22



23



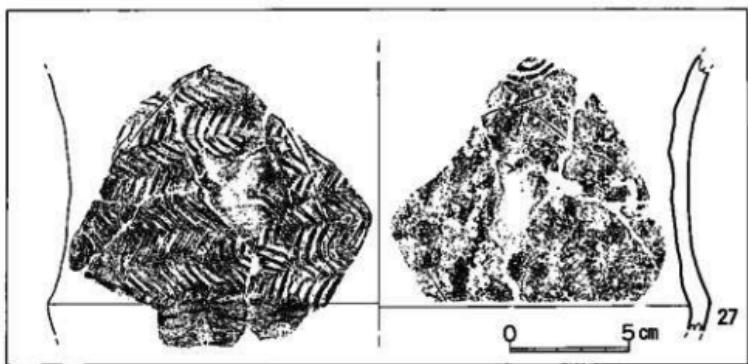
24



25



26

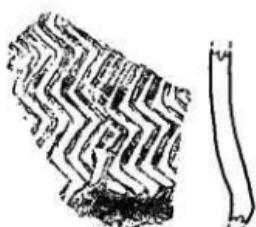


0 5 cm

27



28



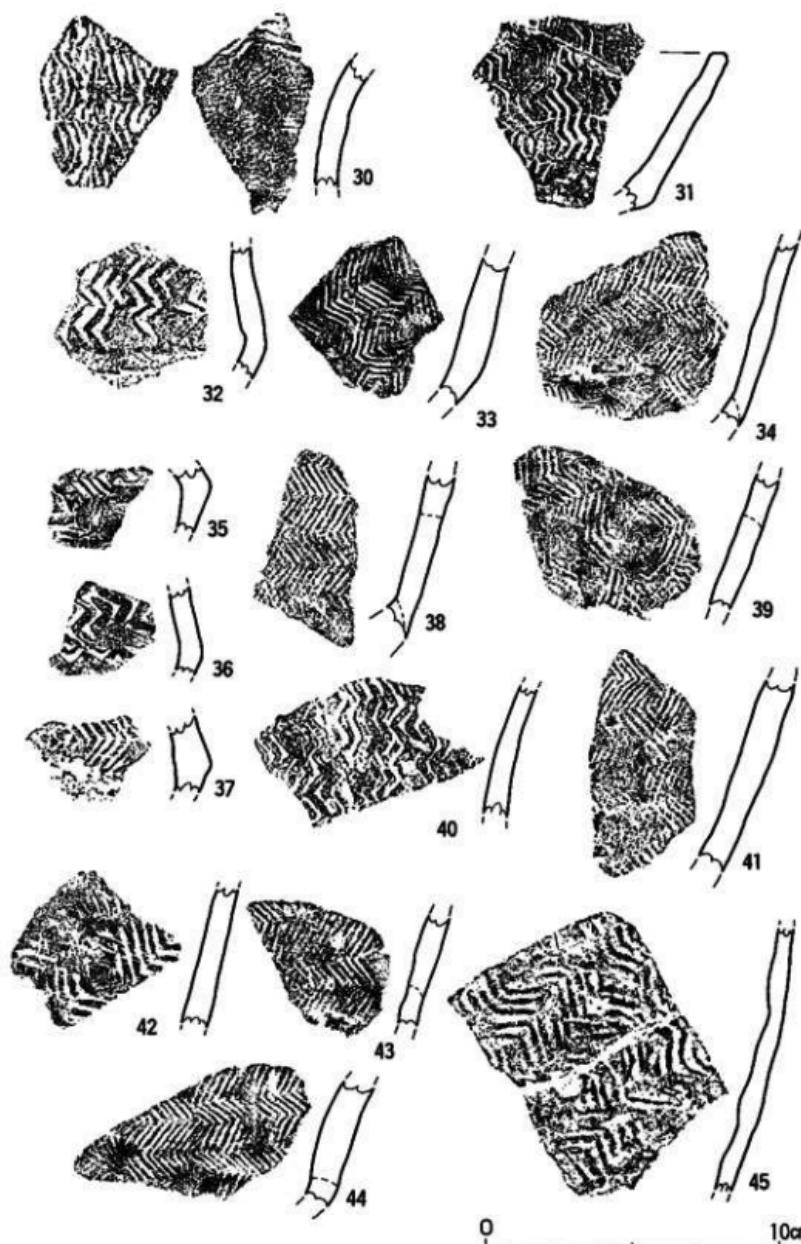
29



第20圖 出土遺物實測圖 繩文土器⑥

NO	層	区	レベル	基 標	基 高mm	地 土	地 成	色 調	文 法 及 び 図 織	形 態 の 特 徴	備 考
13	IV	A 2	127.002	口縁部	口盤 4.5 下段 5.0	長石・雲母	やや不良	黄褐色。 (部分的に白褐 色。)	内:上位は横位の山形押壓文。 下位はナデ。 口唇:山形押壓文。 外:継続の山形押壓文。 外:山形押壓文。	内部面は、中走から上位に かけて、やや内凹。 外器面は外凸。	
14	IV	A 6	—	口縁部	上位 4.0 中位 9.0 下位 10.0	長石・雲母	不良	灰褐色	内:上位は横位の山形押壓文。 下位はナデ。 口唇:山形押壓文。 外:継続の山形押壓文。	口唇部は、やや丸味を帯び る。	(S.K.1)
15	IV	—	—	口縁部	口盤 5.5 中位 8.5 下位 7.0	長石・雲母	不良	黄褐色	内:上位は横位の山形押壓文。 下位はナデ。 口唇:山形押壓文。 外:継続の山形押壓文。	やや、外等。 内部面は凸面状態。	
16	IV	—	—	口縁部	口盤 4.5 中位 8.5 下位 4.5	長石・雲母	普通	暗い褐色	内:下位:ナデ。 口唇:内:上位:山形押壓文。 外:上位はナデ、下位は山形 押壓文。	やや、外等。 器耳は中走で肥厚。	
17	IV	—	—	口縁部	口盤 5.5 下位 8.0	長石・雲母	普通	暗い黄褐色	内:下位:ナデ。 口唇:内:上位:山形押壓文。 外:山形押壓文。ナデ。	内部面は凸面状態(器耳の 最大幅 8.5mm)。	
18	IV	A 3	126.006	口縁部	口盤 5.0 中位 7.5 下位 8.0	長石・雲母	やや不良	内:明褐色 外:灰褐色	内:上位は横位の山形押壓文。 下位はナデ。 口唇:山形押壓文。 外:山形押壓文。	—	
19	IV	A 4	126.308	口縁部	中位 8.0 下位 6.0	長石・雲母	不良	灰褐色	内:ナデ。 口唇:山形押壓文。 外:継続の山形押壓文ナデ	やや、外等。 内部面は中走でやや膨張れ 口唇部は平緩(8.5mm)。	
20	IV	A 2	127.310	口縁部	口盤 6.5 下位 8.5	長石・雲母	やや不良	黄褐色	内:ナデ。 口唇:非常に強い押壓文。 外:継続の山形押壓文。上位 はナデが詰わる。	大きく外等。	
21	IV	A 4	126.050	口縁部	口盤 4.5 中位 7.0 下位 6.5	長石	不良	暗褐色	内:上位は山形押壓文。下位 はナデ。 口唇:圓錐な押壓文。 外:継続の山形押壓文。	弓状に大きく外等。	
22	IV	A 6	—	口縁部	口盤 4.0 下位 6.5	長石	普通	内:暗白色 外:灰褐色	内:上位は横位の山形押壓文。 下位はナデ。 外:継続の山形押壓文。	—	(S.K.1)
23	IV	—	—	口縁部	口盤 5.5 中位 8.5 下位 8.0	長石	普通	暗い暗褐色	内:横位の山形押壓文。 口唇:ナデ。 外:継続の山形押壓文ナデ	内部面は凸面状態。	
24	IV	A 4	126.320	口縁部	中位 8.5 下位 10.0	長石	不良	明褐色	内:上位に横位の山形押壓文。 下位はナデ。 外:継続の山形押壓文。	やや外等。 口縁部は若干、直立気味。	
25	IV	A 4	127.052	口縁部	5.5	長石	不良	灰褐色	内:ナデ。 外:山形押壓文。	器耳は、ほぼ同一。 口唇部は、やや丸味を帯び 下位で一部崩れる(8.5mm)。	
26	IV	A 6	—	口縁部	口盤 7.5 中位 8.0 下位 7.0	長石・雲母	普通	淡褐色	内:継続の山形押壓文。 外:継続の山形押壓文。 外:外:ナデはナデが詰わ れている。	やや、外等。 口縁部は平緩(5mm)。	(S.K.1)
27	IV	—	—	口縁部	上位 7.0 中位 5.0 下位 5.5	長石・雲母	普通	内:灰褐色 外:暗褐色	内:上位は横位の山形押壓文。 下位はナデ、鋸歯状底面。 外:継続の山形押壓文。	—	
28	IV	A 5	—	口縁部	上位 9.0 中位 7.5 下位 8.0	長石・雲母	良	暗褐色	内:ナデ。 外:暗褐色	—	(S.K.1)
29	IV	A 5	125.935	口縁部	上位 6.0 中位 7.5 下位 7.5	長石	やや良	灰褐色	内:暗いナデ。 外:上位は非常に細密な繊維 の山形押壓文。下位はナデ。	—	

第12表 出土遺物観察表 織文土器④

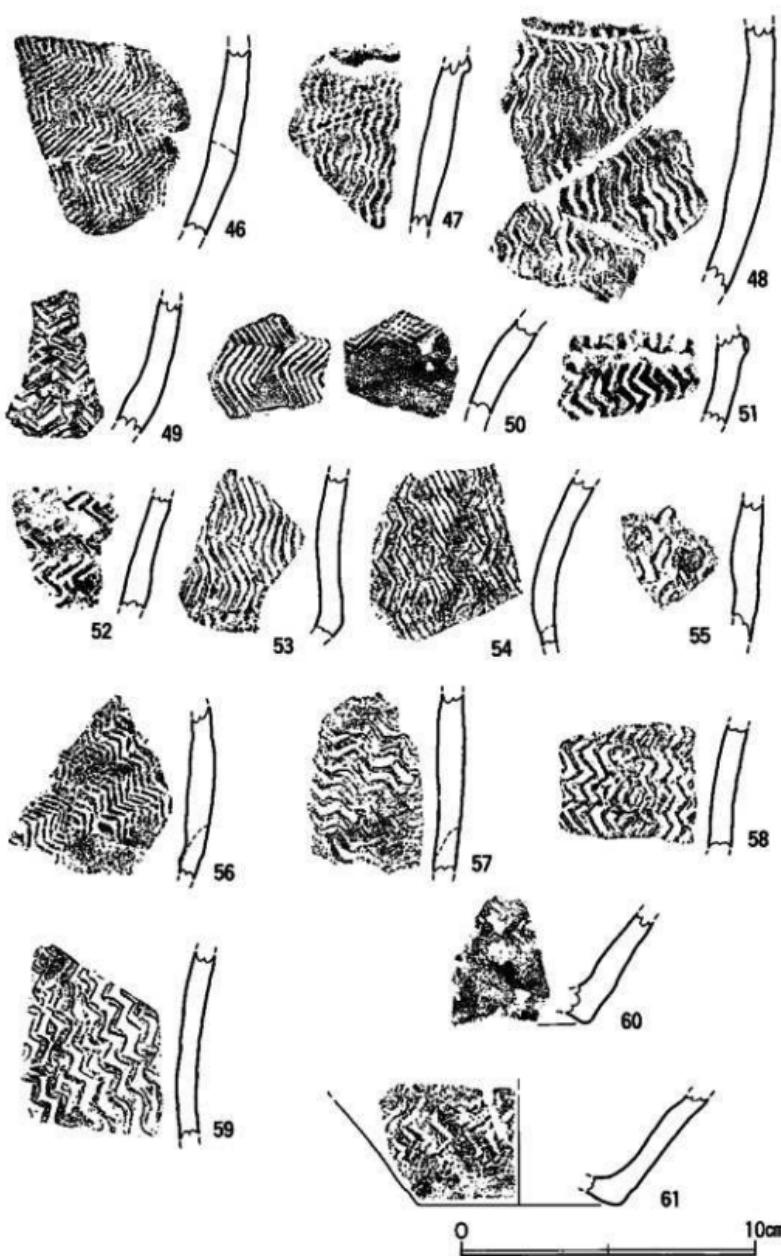


第21図 出土遺物実測図 繩文土器⑦

(注) 外:外器面・内:内器面

N.O.	層	区	レベル	延 縦	延 横	厚 mm	地 土	地 表	色 調	文 織 及び 調 動	形 總 の 特 徴	備 考
30	Ⅳ	A 4	134.849	圓 部		8.0	長 石	普通	内:灰褐色 外:褐色	内:幾枚の山形押模文、下段 はナダ。 外:幾枚の山形押模文後、ナ ダ。	——	
31	Ⅳ	A 6	136.345	圓 部 (底部近く)		上段 6.5 中段 7.5 下段 8.0	長 石	やや不規	灰褐色 外:一端、黒褐色	内:ナダ。 外:幾枚の山形押模文後、ナ ダ。	底面気泡に浮びる。 外底端は 1.1cm 延。	
32	V	A 5	136.386	圓 部	上段 6.0 中段 8.0 下段 7.0	長石・雲母	普通	内:灰褐色 外:暗青褐色	内:ナダ。 外:上段は山形押模文、下段 はナダが泐む。	——		
33	A 6	——	圓 部	上段 9.0 中段 11.0 下段 8.0	長石・雲母	真	内:純い茶褐色 外:灰褐色	内:ナダ、指側圧痕が點所に 見れる。 外:山形押模文。跡々にナダ が泐む。	——	(SK 1)		
34	A 6	——	圓 部	上段 6.0 中段 7.0 下段 6.0	長 石	真	内:洪茶褐色 外:洪茶褐色	内:ナダ、結合部は特に微細 な壓痕。 外:山形押模文。	——	(SK 1)		
35	Ⅳ	A 3	136.111	圓 部	底面 9.5 下段 6.0	長 石	普通	灰褐色	内:ナダ。 外:山形押模文。	——		
36	V	——	圓 部	上段 7.0 底面 8.0	長石・雲母	普通	内:明褐色 外:黑褐色	内:ナダ。 外:山形押模文。	——			
37	Ⅳ	A 1	137.143	圓 部	上段 10.0 底面 12.5	長 石	やや不規	内:黄茶褐色 外:褐色	内:ナダ。 外:山形押模文。	——		
38	A 6	——	圓 部	上段 9.5 中段 8.0 下段 7.0	長 石	普通	純い茶褐色	内:丁寧なナダ。 外:山形押模文。	内器面は、やや凸凹状を呈 する。	(SK 1)		
39	A 6	——	圓 部	7.0 ~8.0	長石・雲母	真	灰褐色	内:ナダ。 外:山形押模文。	——	(SK 1)		
40	V	A 6	136.115	圓 部	上段 6.0 中段 7.0 下段 8.5	長石・雲母	やや不規	内:黄褐色 外:茶褐色	内:ナダ。 外:幾枚の山形押模文。	——		
41	A 6	——	圓 部	上段 10.5 中段 10.0 下段 10.0	長 石	真	内:茶褐色 外:洪茶褐色	内:上段は丁寧なナダ、下段 は指側圧痕がある。 外:幾枚の山形押模文。	——	(SK 1)		
42	Ⅳ	A 6	136.274	圓 部	上段 7.0 中段 8.0 下段 9.0	長石・雲母	普通	内:明褐色 外:黑褐色	内:ナダ。 外:幾枚の山形押模文。	——		
43	A 6	——	圓 部	上段 8.5 下段 6.5	長石・雲母	真	内:洪茶褐色 外:茶褐色	内:ナダ。 外:幾枚の山形押模文。跡々 にナダ。	——	(SK 1)		
44	A 6	——	圓 部	上段 10.0 中段 11.5 下段 9.5	長 石	真	内:やや緑いナダ。 外:茶褐色が混じる	内:やや緑いナダ。 外:幾枚の山形押模文。跡々 にナダ。	——	(SK 1)		
45	Ⅳ	A 4	135.384	圓 部	4.5 ~7.5	長石・雲母	普通	黑褐色	内:丁寧なナダ。指側圧痕 等。 外:幾枚の山形押模文。	——		
46	A 6	——	圓 部	上段 7.5 中段 9.5 下段 7.5	長 石	真	内:純い褐色 外:黄褐色	内:ナダ。一端にヘラ状工具 による調査痕。 外:幾枚の山形押模文。	やや内側。	(SK 1)		
47	V	A 6	135.851	圓 部	上段 8.0 中段 10.0 下段 6.5	長 石	普通	暗茶褐色	内:ナダ。 外:幾枚の山形押模文。	外器面に突起が付く。 ローリング痕。		
48	Ⅳ	A 4	136.630	圓 部	上段 9.0 中段 11.0 下段 9.0	長石・雲母	普通	内:洪茶褐色 外:灰褐色	内:ナダ。 外:幾枚の山形押模文。	——		
	Ⅳ	A 2	136.952	圓 部	——	——	——	——	——	——	■ 複合	

第13表 出土遺物観察表 織文土器⑤



第22図 出土遺物実測図 繩文土器⑧

NO	層 級	レベル	部 位	厚 さmm	胎 土	施 工	色 調	文 様 及 び 製 法	形 態 の 特 徴	備 考
45	V 7	136.267	口 緑 部	上位 7.0 中位 8.0 下位 10.0	長石・雲母	良	暗褐色 外:黒褐色	内:ナデ。施壓延底面。 外:施壓の山形押型文。	やや外弯。	
50	A 6	—	口 緑 部	上位 9.5 下位 7.5	長 石	(極) 良	暗褐色	内:施壓の山形押型文。 外:施壓の山形押型文。	やや内弯。	(5 K 1)
51	H 4	127.056	口 緑 部	上位 16.0 下位 7.5	長 石	不良	暗褐色	内:ナデ。 外:施壓の山形押型文。尚 而斜利尖端。	外器面に突起が付く。 ローリングなし。	
52	V 4	136.341	口 緑 部	上位 6.5 下位 8.0	長 石	やや不良	暗褐色	内:ナデ。 外:施壓の山形押型文。	—	
53	V 4	135.639	口 緑 部	8.0	長石・雲母	やや良	暗褐色 外:灰褐色	内:ナデ。施壓延底面。 外:山形押型文。	—	
54	V	—	口 緑 部	上位 7.0 下位 5.0	長 石	やや良	暗褐色 外:灰褐色	内:ナデ。 外:山形押型文。	—	
55	H	—	口 緑 部	8.0 ~9.0	長石・雲母	やや不良	灰白色	内:ナデ。 外:山形押型文。	—	
56	H 2	127.011	口 緑 部	上位 7.0 中位 8.5 下位 6.5	長石・雲母	普通	灰褐色	内:強いナデ。 外:山形押型文。	—	
57	V 4	135.639	口 緑 部	上位 8.5 下位 7.0	長石・雲母	普通	暗褐色 外:灰褐色	内:ナデ。 外:山形押型文。	—	
58	H 2	127.300	口 緑 部	7.0	長石・雲母	普通	暗褐色 外:灰褐色	内:ナデ。 外:山形押型文。	—	
59	H 1	126.206	口 緑 部	上位 7.0 下位 6.0	長石・雲母	良	灰白色	内:ナデ。 外:山形押型文。	—	
60	V 6	136.364	口 緑 部	上位 6.5 下位 8.5	長 石	やや不良	灰褐色	外:施壓の山形押型文。 内:ナデ。	外底は上行底。	
61	H 6	136.315	口 緑 部	8.0 ~7.0	長石・雲母	普通	暗褐色 外:灰褐色	内:上位はナデ、下位は施壓 底。 外:上位は山形押型文、下位 はナデ。	外底は上行底。 復元底径 7.9cm。	

第14表 出土遺物観察表 織文土器⑥

〔b 類〕 菱形押型文

A-1~6区から98片が出土した。この内、A-3~6区からの出土は95片を数え、4区画で全体の97%弱を占める。

62~77は口緑部で、78~94は脇部の残存である。

口緑部については、外器面に菱形押型文と内器面上位に山形押型文を有するもの(63·65·67·69·72)と、内外器面(内器面は上位)に菱形押型文を有するもの(64·68·75·76·77)や、外器面のみに菱形押型文を有するもの(62·70·71·73·74)とがある。

口唇部に文様を有するものは(62~66·68~71·73·75·76)で、種類ごとに菱形押型文(62·65)、山形押型文(63·75·76)、刺突文(66)、押捺文(64·68·69·70·71·73)に細分される。

器形については、大方のものが外弯するのに対し、71は直線的に伸びており、62はやや内弯する。外弯するものは口緑部が内傾するもの(64)と、外弯の度合が著しく大きいもの(73·74·77)とがある。

口唇部は74が、やや肉太の口緑直口で、他は平坦面に近い。その中で、71·73は顕著な平坦

面を有し、4.5mm幅(71)と3mm幅(73)を測る。65・69・72・74・77は内器面が凸面状を呈する。器厚が均一なものは71で、厚さ8mmで下位から上位に至る。

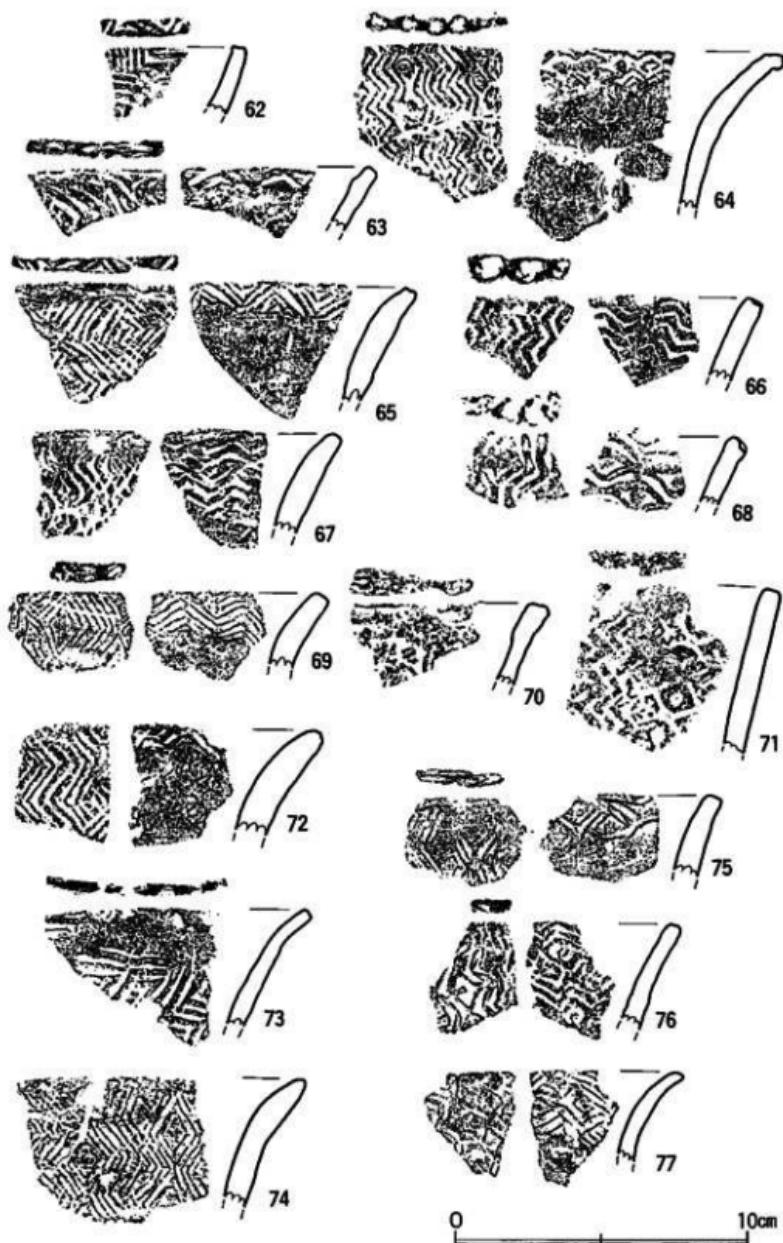
器壁が肉太なものは72で、最大器厚11mmを測る。これに対し、薄壁なものは73と77で、器厚は6.5mm(73)と6mm(77)にすぎない。

78~94の胴部は、いずれも外器面に菱形押型文を有しているが、同時に内器面の上位に山形押型文を施文するもの(93)がある。83の菱形押型文は非常に鮮明で、端的な形状の菱形文様がくつきりと器面に施されている。方形に近い菱形を有するのは84・85で、87の菱形はやや肉太である。器形は、壺や深鉢の類と思われるが、胴部径を復元出来る様なものはない。内器面が凸面状を呈するものは90で、92は器壁が肉太で、最大器厚は12.5mmを測る。

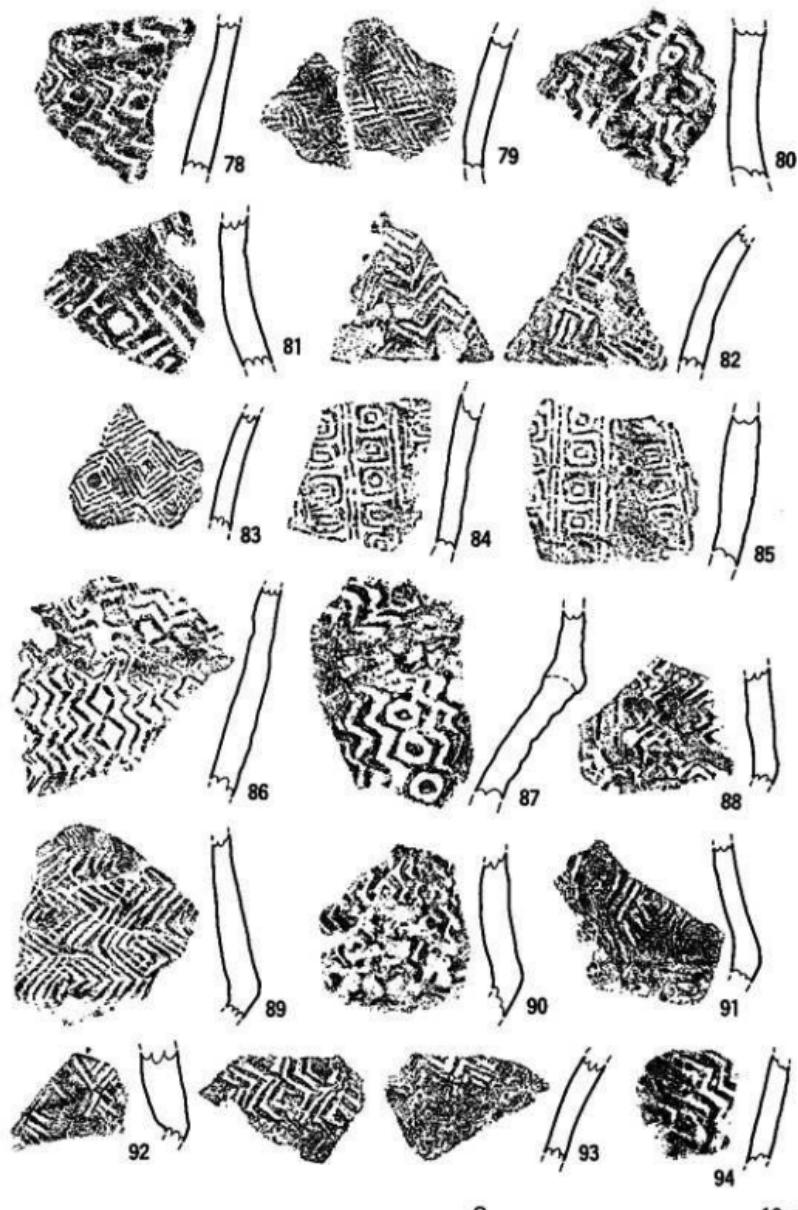
(注) 外: 外器面、内: 内器面

NO	層	区	レベル	部	種	器厚mm	施土	施文	色	文様及び質	形態の特徴	備考
62	V		—	口縁部	口唇5.5 底5.0	灰石・雲母 下位6.0	やや虫	暗茶褐色	内: ナテ。 外: 口唇: 菱形押型文。	やや内凹。		
63	N		—	口縁部	5.0	長石	普通	内: 暗茶褐色 外: 灰白色	内: 上位は山形押型文、下位 はナテ。 口唇: 山形押型文。 外: 菱形押型文。	—		
64	N	A 4	136.191	口縁部	上位5.0 中位7.0 下位5.0	長石	やや不真	内: 暗茶褐色 外: 墓褐色	内: 上位は菱形押型文、下位 はナテ。 口唇: 菱形文。 外: 頂部の菱形押型文後、ナ テ。	内縮しながら外凸する。		
65	N		—	口縁部	上位5.0 中位9.0 下位7.0	長石・雲母	普通	灰茶褐色	内: 下位: ナテ。 内: 上位: 山形押型文。 口唇: 菱形文。	内縮面は凸面状を呈する。		
66	N	A 4	136.996	口縁部	7.0	長石・雲母	普通	内: 暗茶褐色 外: 灰白色	内: 山形押型文後、ナテ。 口唇: 菱形文。 外: 菱形押型文。	器壁は丸一。		
67	N		—	口縁部	口唇4.5 中位8.0 下位7.5	長石	普通	内: 暗茶褐色 外: 暗茶褐色	内: 山形押型文。 外: 菱形押型文。上位にはナ テが付わる。	内縮面は凸面状を呈する。		
68	N	A 1	136.802	口縁部	口唇8.0 下位6.0	長石・雲母	普通	内: 暗茶褐色 外: 黄褐色	内: 菱形押型文。 口唇: 底部にはなる押型文。 外: 菱形押型文後、ナテ。	—		
69	N	A 6	135.896	口縁部	口唇6.5 中位8.5 下位2.0	長石	普通	黄褐色	内: 上位: 山形押型文。 口唇: 菱形文。 外: 菱形押型文。	やや外凸。 内縮面は凸面状を呈する。		
70	N		—	口縁部	7.0 ~8.0	長石	不真	内: 暗茶褐色 外: 黄茶色	内: ローリング歯し。 口唇: 押型文(ローリング歯 し)。 外: 菱形押型文。	やや外凸。		
71	N	A 5	136.292	口縁部	8.0	長石・雲母	不真	灰茶褐色	内: ナテ。 口唇: 菱形文。 外: 菱形押型文。	外: 背面が丸く。 器壁は丸一。口縁部は平坦 (4.5mmで平坦)。		
72	N	A 5	135.967	口縁部	口唇5.0 下位11.0	長石	普通	褐色	内: 上位は山形押型文後、ナ テ。下位はナテ。 外: 菱形押型文。	やや外凸。 内縮面は凸面状を呈する。		
73	V	A 4	135.436	口縁部	上位4.0 中位5.0 下位6.5	長石	普通	内: 暗茶褐色 外: 墓褐色	内: ナテ。 口唇: 菱形文。 外: 菱形押型文。	比較的、大きめ外凸。 口縁部は平坦(3.0mm)。		
74	V	A 5	136.220	口縁部	口唇2.0 中位9.0 下位8.5	長石・雲母	普通	黃褐色	内: ナテ。 外: 菱形押型文。	中位でmm幅に削れる。 内縮面は凸面状を呈する。		
75	N		—	口縁部	口唇 下位8.5	長石・雲母	普通	灰茶褐色	内: 上位: 菱形押型文。 口唇: 山形押型文。 外: 菱形押型文。	やや外凸。		

第15表 出土遺物観察表 繩文土器⑦



第23図 出土遺物実測図 繩文土器⑨



0 10cm

第24図 出土遺物実測図 繩文土器①

(注) 外:外表面・内:内部面

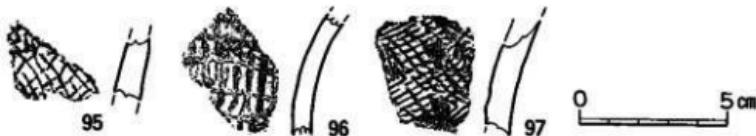
NO	層	区	レベル	部	幅	厚	粘	土	成	色	調	文	様	及	び	調	部	基	備
76	W	A	135.797	口縁部	上段 5.5 中段 6.0 下段 7.0		灰石・雲母	普通	内:灰黑色 外:灰褐色	内:灰黑色 外:灰褐色	内:灰黑色 外:灰褐色	内:变形押模文。 外:山形押模文。 外の上段はナゲが加わる。	やや外場。						
77	W	A	136.636	口縁部	口段 4.0 中段 5.0 下段 5.5		灰石・雲母	普通	内:灰黑色 外:灰褐色	内:灰黑色 外:灰褐色	内:灰黑色 外:灰褐色	内:上段は變形押模文、下段 はナゲ。 外:變形押模文後、ナゲ。	大きく外場。 内部面は凸凹状を呈する。						
78	W	A	136.626	瓶 部	上段 7.0 中段 8.5 下段 9.0		灰石・雲母	不良	内:灰黑色 外:暗褐色	内:灰黑色 外:暗褐色	内:ローリング施し。 外:變形押模文。		——						
79	A	S	——	瓶 部	上段 7.5 中段 7.0 下段 6.0		灰石・雲母	良	内:灰黑色 外:黒褐色	内:ナゲ。 外:變形押模文後、一部でナ ゲ。	内:ナゲ。 外:變形押模文。	——	(SK1)						
80	W	A	135.576	瓶 部	上段 9.5 中段 10.5 下段 10.5		灰石・雲母	やや不良	内:茶褐色 外:黄褐色	内:茶褐色 外:黄褐色	内:ナゲ。 外:變形押模文。	——							
81	W	A	137.312	瓶 部	上段 9.0 中段 10.0 下段 9.5		灰石・雲母	普通	灰褐色	内:ナゲ。 外:變形押模文。	内:ナゲ。	——							
82	W	A	136.554	瓶 部	上段 6.0 中段 7.0 下段 8.5		灰石・雲母	普通	灰褐色	内:外:變形押模文。	内:ローリング施し。	やや外場。							
83			——	瓶 部	上段 6.0 下段 7.0		灰 石	やや不良	黑褐色	内:丁寧なナゲ。 外:漆喰に鮮明な変形押模文。	内:ナゲ。	——							
84	W	A	136.656	瓶 部	上段 8.0 下段 6.5		灰石・雲母	良好	灰褐色	内:ナゲ。	外:變形押模文。	——							
85	W	A	137.434	瓶 部	上段 10.0 中段 11.5 下段 9.5		灰石・雲母	普通	灰褐色	内:ナゲ。 外:變形押模文。	内:ナゲ。	——							
86	W	A	136.627	瓶 部	上段 7.5 中段 10.0 下段 9.0		灰 石	不良	黑褐色	内:ローリング施し。 外:継続の變形押模文。	内:ナゲ。	——							
87	W	A	136.410	瓶 部	上段 7.0 組合 13.0 下段 9.0		灰石・雲母	普通	灰褐色 外:黄褐色	内:灰褐色 外:黄褐色	内:ナゲ。上段は強ナゲ。 漆喰痕跡。 外:變形押模文。	——							
88	W	A	136.495	瓶 部	上段 8.5 下段 8.0		灰石・雲母	不良	黑褐色	内:ローリング施し。 外:變形押模文。	内:ナゲ。	——							
89	W	A	136.579	瓶 部	上段 6.0 中段 9.0 下段 10.0		灰石・雲母	普通	黄褐色	内:ナゲ。 外:變形押模文。	内:ナゲ。	——							
90	W	A	136.283	瓶 部	口段 4.5 中段 5.0 下段 9.0		灰石・雲母	不良	黄褐色	内:ナゲ。 外:上段は變形押模文後、ナ ゲが加わる。下段はナゲ。	内:ナゲ。 外:上段は變形押模文後、ナ ゲ。下段はナゲ。	やや外場。 内部面は凸凹状を呈する。							
91	V	A	136.222	瓶 部	上段 6.5 中段 7.0 下段 9.0		灰石・雲母	普通	明褐色	内:ナゲ。 外:上段は變形押模文後、ナ ゲ。下段はナゲ。	内:ナゲ。	——							
92	W		——	瓶 部	上段 12.5 下段 8.0		灰石・雲母	良	内:黄褐色 外:黑褐色	内:ナゲ。 外:變形押模文。	内:ナゲ。	——							
93	W	A	136.345	瓶 部	上段 8.0 下段 7.0		灰石・雲母	普通	灰褐色 外:灰褐色	内:灰褐色 外:灰褐色	内:上段は變形押模文、下段 はナゲ。 外:上段は變形押模文、下段 はナゲが加わる。	内:ナゲ。 外:上段は變形押模文、下段 はナゲ。	——						
94	V		——	瓶 部	上段 6.5 下段 7.0		灰石・雲母	やや良	灰褐色	内:ナゲ。	内:ナゲ。	——							

第16表 出土遺物観察表 條文土器⑧

[c 類] 格子押型文

A - 4 区から 1 片の出土である。(他 2 点は表土。)

95~97 はいずれも胴部で、外器面に格子押型文を有している。いずれも細片で器形等の推察は出来ないが、特筆すべき点として、96・97 は胴部がいずれも外弯する。96 は薄壁で、最大器厚は 7 mm に留まっている。



第25図 出土遺物実測図 繩文土器①

(外: 外器面・内: 内器面)

NO	層	区	レベル	器 種	器 高	器 幅mm	施 土	施 成	色 調	文 様	文 様	形 態	特 徴	備 考
95	N	A 4	136.770	胴 部	8.0	表石・露導	普通	褐灰色	内: ナゲ。 外: 格子押型文。					
96			—	胴 部	上段 6.0 下段 7.0	莫石	やや平底	内: 深褐色 外: 深褐色	内: ナゲ。 外: 格子押型文。					
97			—	胴 部	8.0	表石・露導	やや平底	褐褐色	内: ナゲ。 外: 格子押型文。					

第17表 出土遺物観察表 繩文土器②

[d 類] 微隆起突帯文

A の全区画と B - 4 区から 89 片が出土した。この内、A - 3 ~ 6 区からの出土は 83 片を数え、4 区画で全体の 93% を占める。

103 と 104 は 2 片の接合で、103 は 103-1 と 40cm、104 は 104-1 と 55cm の距離がある。

98~112 は口縁部で、113~128 は胴部の残存である。

口縁部は、100 を除くすべての内外器面に文様が施されている。両器面に微隆起突帯文を有するものは 98・101・107~111 であるが、文様の形態や方位の組み合わせは多種多様で、内外器面においてさえ相異がある。大方の微隆起突帯文は、横位及び斜行の直線状を示すが、108・112 の外器面と 109 の内外器面は小葉状文様で、111 の外器面及び 110 の内外器面は曲線文様を描いている。他方、内器面において外器面と異種の文様を有するのは、99・102・103・104・105・106・112 である。上位に横位の山形押型文を施すものは、102・103・104・106・112 である。99 の内器面には唯一、斜行の繩文が施されている。

口唇部には 99・101・102・103・104・105・106・108・111 に文様があり、99・103 には押捺文、102・106・108・111 には山形押型文、105 には菱形押型文の施文が見える。

器形については大方のものが外弯傾向にある。この場合、口縁部の傾きは 101 のみが内傾し、他のものは外傾するものと思われる。口径が復元出来るのは 110 (15.5 cm)・109 (23.4 cm) である。口唇部が平坦なものは 100・101・103・104・106・108・112 で、平坦面の幅は

3 mm (100)・5 mm (101・104・112)、5.5 mm (103)、6 mm (108)、9 mm (106)を測る。102・107・108・110・111は内器面が凸面状を呈する。

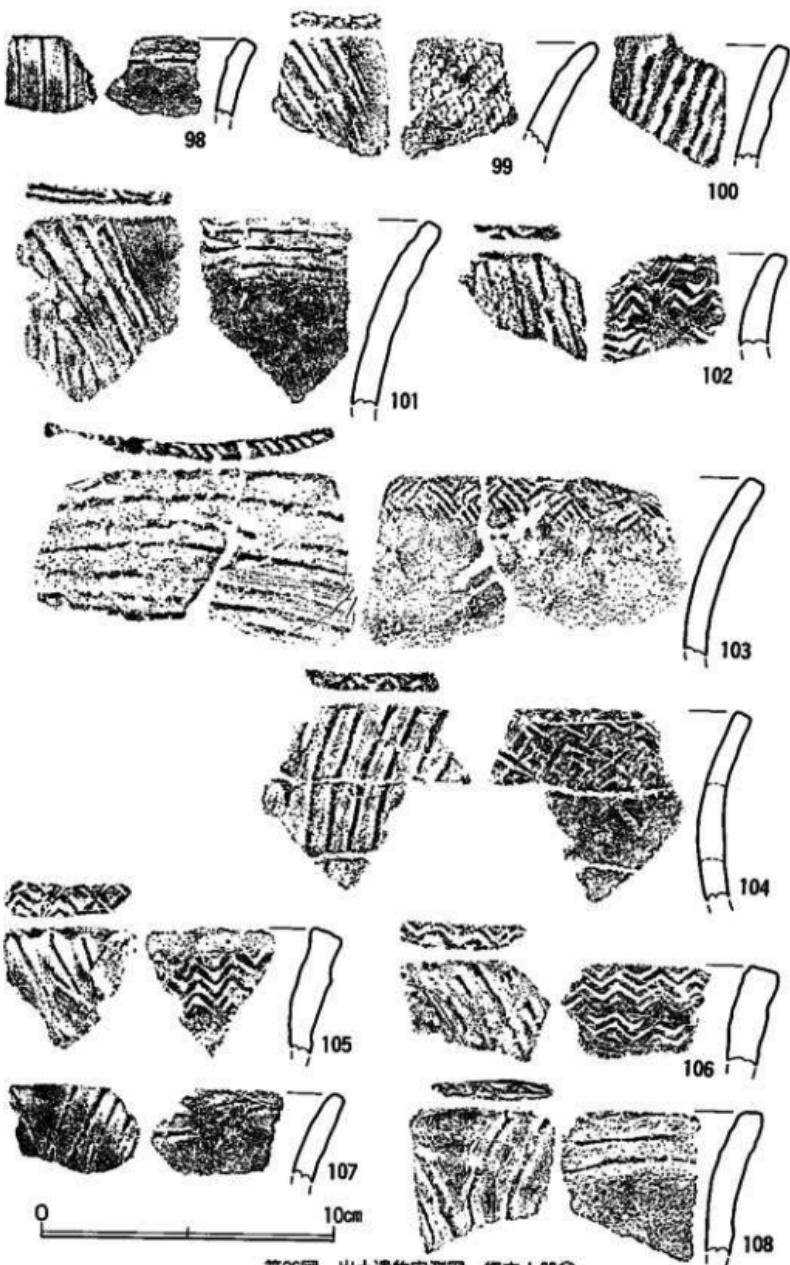
器壁が肉太なものは105・106で、11~12 mmの器厚を測る。対して109は薄壁で、最大器厚は7 mmである。

113~128の胴部は外器面に微隆起突帯文を有しているが、109は内器面に繩文の施文がある。微隆起突帯文の形状については、通常の横位・斜行の直線状以外に鋭角の三角形状のもの (113・115・116)、曲線文様のもの (117) とがある。118~128は残存胴部の下位が屈曲しており、この中で119・122・125・127には外器面の屈曲部に限り、山形押型文 (119・122・125) と菱形押型文 (127) の施文がある。なお119の場合は、屈曲面の下位部分にも菱形押型文の施文が見える。器形については、122の胴部径が復元可能で、最大胴部径31.2 cmを測る。器壁が肉太なものは113で、最大器厚は12 mmに及ぶ。

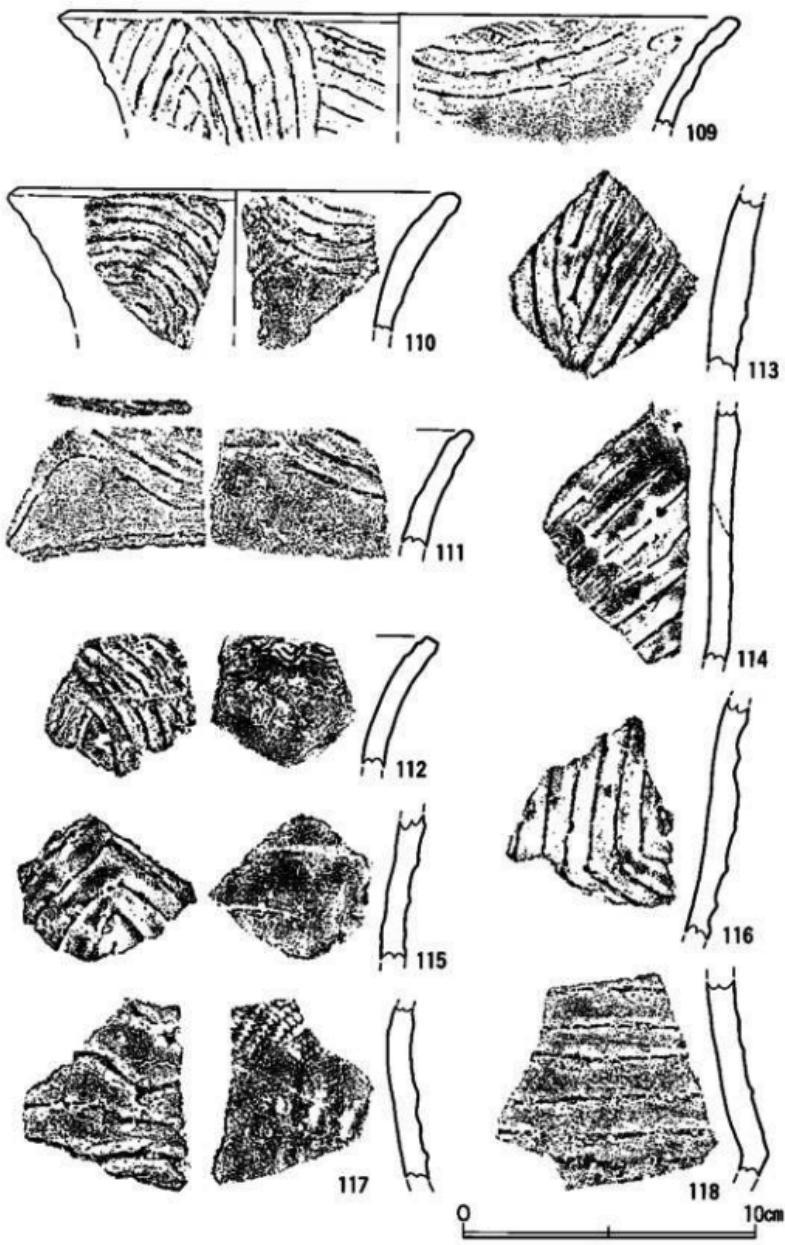
(注) 外: 外器面・内: 内器面

NO	場	区	レベル	器種	基 本 寸 寸 度 mm	地 土	施 文	色 調	文 種 及び 圖 案	形 態 の 特 徴	備 考
98	N	—	—	口縁部	口径 6.0 中径 7.0 下径 5.0	長石・黒母	やや甘い	淡褐色	内・外: 微隆起突帯文。	—	
99	—	—	—	口縁部	口径 4.0 下径 9.0	長石・黒母	丸	内: 青色 外: 淡褐色	内: 斜行の綱文。 外: 神妙文。 外: 斜行の微隆起突帯文。	やや外厚。	
100	—	—	—	口縁部	口径 4.5 下径 7.0	長石・黒母	普通	暗褐色	内: 青ナメ。 外: 斜行の微隆起突帯文。	口唇部は平底 (3 mm厚)。	
101	B	A 5	136.521	口縁部	8.5	長石	やや甘い	灰・淡褐色	内: 横位の微隆起突帯文、下 部はナメ。	内模しながら僅かに外厚。 口唇部は平底 (5 mm厚)。	
102	V	A 4	136.160	口縁部	口径 5.5 下径 9.0	長石	普通	淡褐色	内: 綱紋。 内: 口唇: 山形押型文。 外: 斜行の微隆起突帯文。	やや外厚。 内器面は凸面状を呈する。	
103	W	A 2	137.414	口縁部	上径 6.0 中径 7.0 下径 7.5	長石・黒母	やや甘い	内: 淡褐色 外: 淡褐色	内: 上部に山形押型文。 外: 神妙文。 外: 横位の微隆起突帯文。	やや外厚しながら外縁へ 聞く。 口唇部は平底 (5.5 mm厚)。	結合
			137.398	口縁部	—	—	—	—	—	—	
104	V	A 4	134.802	口縁部	中径 9.0 下径 7.5	長石	やや甘い	内: 暗褐色 外: 黄褐色	内: 横位の山形押型文後、ナ メ。 外: 斜行の微隆起突帯文。	外厚。 口唇部は平底 (5 mm厚)。	結合
			134.944	口縁部	—	—	—	—	—	—	
105	N	A 5	136.932	口縁部	口径 11.0 下径 7.5	長石	普通	内: 淡褐色 外: 黑褐色	内: ナメ。 外: 神妙文。 外: 斜行の微隆起突帯文。	上部で 9 mm幅に傾れる。	
106	V	A 6	136.508	口縁部	中径 12.0 下径 10.5	長石・黒母	やや甘い	内: 淡褐色 外: 黑褐色	内: ナメ。 外: 山形押型文。 外: 斜行の微隆起突帯文。	口唇部は平底 (9 mm厚)。	
107	W	A 4	137.094	口縁部	口径 5.0 下径 7.5	長石	普通	淡褐色	内・外: 微隆起突帯文。	内器面は、やや凸面状を呈 する。	
108	W	A 4	136.811	口縁部	上径 8.5 中径 9.5 下径 8.0	長石・黒母	普通	内: 淡褐色 外: 黑褐色	内: 上部は側位の微隆起突 帶文。 外: 山形押型文。 外: 小窓状文様の微隆起突 帶文。	やや外厚。 内器面は、やや凸面状を呈 する。 口唇部は平底 (6 mm厚)。	
109	A 6	—	—	口縁部	上径 5.5 中径 4.0 下径 7.0	長石・黒母	良好	内: 淡褐色 外: 黑褐色	内: 上部に施文の曲線の微隆 起突帯文。 外: 山形押型文後、ナメ。 外: 小窓状文様の微隆起突 帶文。	やや外厚。	(5 K 1)

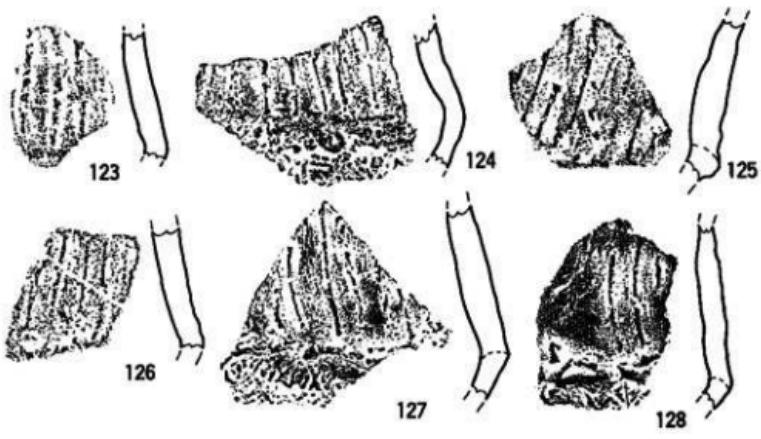
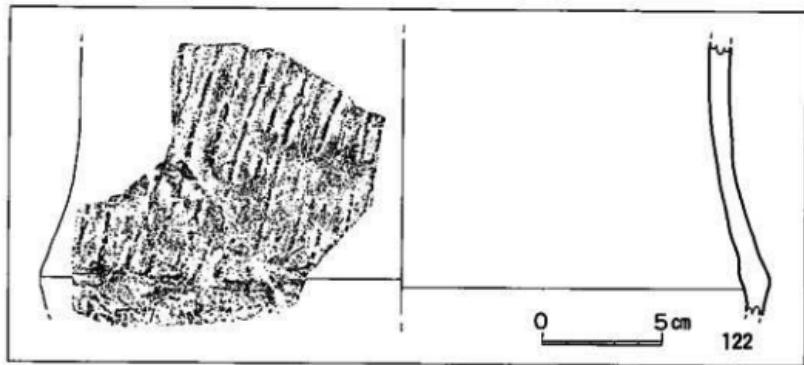
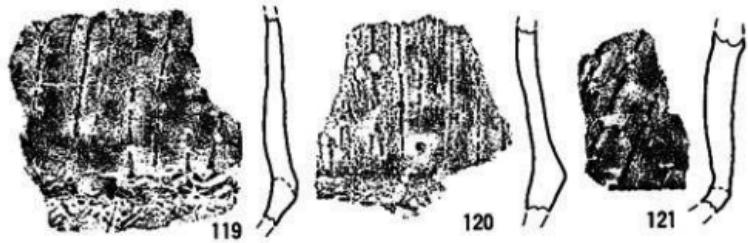
第18表 出土遺物観察表 繩文土器①



第26図 出土遺物実測図 織文土器②



第27図 出土遺物実測図 横文土器①



0 10cm

第28図 出土遺物実測図 縄文土器④

(注) 外:外器面・内:内器面

NO	種	器	レベル	部	器	器	厚mm	質	土	焼	色	文様及び調査	器底の特徴	備考
110	N	6	135.525	口縁部	上径 5.0 中径 9.0 下径 6.0	灰 石	やや青い	淡褐色	内:外:無縫の微隆起安字文。 外:山形押印文。	やや外厚。 内器面は凸頭状を呈する。				
111	N	—	—	口縁部	口径 4.5 中径 7.0 下径 9.0	灰 石	普通	内:灰黄褐色 外:灰褐色	内:模倣の微隆起安字文、ナ デ。 外:山形押印文。 外:模倣の山形文。	やや外厚。 内器面は凸頭状を呈する。				
112	N	A	137.366	口縁部	中径 4.5 下径 7.5	灰石・雲母	やや青い	淡褐色	内:灰黄褐色 外:陶灰白色	内:上径に山形押印文、下径 はナデ。 外:小波状文様の微隆起安字文。	やや外厚。 口縁部は平滑(5mm)。			
113	N	A	136.544	胴 部	上径 8.5 中径 12.6 下径 10.6	灰石・雲母	普通	内:灰黄褐色 外:灰褐色	内:微角三角形の微隆起安字文。 安字間隔7mm。	—				
114	V	—	—	胴 部	上径 6.5 中径 7.5 下径 7.5	灰石・雲母	普通	内:灰黄褐色 外:灰白褐色	内:ナデ、安字間隔1cm。 外:模倣の微隆起安字文。	—				
115	N	A	136.773	胴 部	上径 9.0 中径 8.5 下径 8.5	灰石・雲母	普通	灰黄褐色	外:微角三角形の微隆起安字文。 安字間隔 1.1cm。	—				
116	V	A	136.645	胴 部	上径 8.0 中径 10.0 下径 8.0	灰 石	普通	灰褐色	外:微角三角形の微隆起安字文。 安字間隔 8mm。	—				
117	N	A	137.456	胴 部	上径 7.0 中径 7.5 下径 7.5	灰石・雲母	やや青い	淡褐色	内:上径は綻文、下径はヘラ 刷り後ナデ。(?) 外:模倣の微隆起安字文。	—				
118	V	A	136.275	胴 部	上径 6.0 屈曲11.0 下径 7.5	灰 石	普通	淡褐色	内:ナデ。 外:模倣の微隆起安字文。	—				
119	N	A	136.476	胴 部	上径 4.5 中径 8.0 屈曲 8.5	灰石・雲母	不直	淡褐色 一概青い斑色	内:ローリング痕し。 外:模倣の微隆起安字文。 屈曲部は山形押印文、下 径は安字押印文。	—				
120	N	A	137.375	胴 部	上径 6.0 屈曲10.5 下径 7.0	灰石・雲母	やや青い	淡褐色 黑褐色	内:ナデ。 外:模倣の微隆起安字文。	—				
121	V	A	136.711	胴 部	上径10.0 屈曲 7.0 下径 8.0	灰石・雲母	普通	淡褐色 黑褐色	内:丁寧なナデ。 外:微隆起安字文。	—				
122	A	6	—	胴 部	上径 8.5 中径 7.5 屈曲 6.0	灰石・雲母	良好	陶灰白色 外:黑褐色	内:ナデ。 外:模倣の微隆起安字文、下 径に山形押印文。	最大側径約 31.2cm。 (S K 1)				
123	A	6	—	胴 部	上径 7.0 屈曲 7.5	灰石・雲母	不直	淡褐色	内:墨ナデ。 外:模倣の微隆起安字文。	—	(S K 1)			
124	A	6	—	胴 部	上径 8.0 中径 7.0 下径 4.5	灰 石	良	黑褐色 外:暗褐色	内:ナデ。 外:上径は模倣の微隆起安字文。 下径は山形押印文!。	—	(S K 1)			
125	V	A	137.004	胴 部	上径 7.0 中径11.0 屈曲10.5	灰石・雲母	普通	陶灰白色 外:灰褐色	内:ナデ。 外:模倣の微隆起安字文。 屈曲部は山形押印文。	内器面は凸頭状を呈する。				
126	N	A	137.359	胴 部	上径 9.0 下径 7.5	灰石・雲母	良	淡褐色 外:灰褐色	内:ナデ。 外:前掲の微隆起安字文。	外器面に貼り付けの安字が 付く。				
127	N	A	136.684	胴 部	下径 8.0 中径10.0 屈曲 6.0	灰 石	普通	内:黄褐色 外:淡褐色	内:ナデ。 外:上径は模倣の微隆起安字文。 下径は山形押印文。	—				
128	N	A	136.123	胴 部	上径 5.5 中径 7.5 屈曲 8.0	灰 石	普通	陶灰白色 外:灰褐色	内:ナデ。 外:模倣の微隆起安字文。 屈曲部は山形押印文。	—				

第19表 出土遺物観察表 橋文土器⑪

(e) 類 沈線文

A-1・3~7区とB-4区から81片が出土した。この内、A-3~6区からの出土は76片を数え、4区画で全体の94%弱を占める。

129~138は口縁部で、139~145は胴部の残存である。口縁部は、外器面のみに沈線文を有するもの（129~131・136~137・138）と、内器面にも文様を施すもの（132~133・134~135）とがある。沈線文は大方のものが横位及び斜行の直線状を示すが、129~138の外器面には小葉状文様がある。その他、外器面で横位の沈線と小葉状文様が組み合わさるもの（130）や、横位・斜行の沈線と曲線文様の組み合せのもの（131）がある。内器面の文様は横位の沈線文（132~134）、山形押型文（133）、菱形押型文（135）とに分かれる。

口唇部には129~133~138が文様を有し、129~133~136~138に山形押型文、134に押捺文、135に菱形押型文の施文がある。

器形については、すべて外弯傾向にあり、外弯の度合は比較的大きい。

口唇部は概して平坦であり、平坦面の幅は132が4mm、135が6.5mmを測る。137は唯一の例外で、口縁部の断面形は指先を横から見た様な形状に近い。132は内器面が凸面状を呈する。

器壁が肉太なものは136で、10mmの器厚を測る。

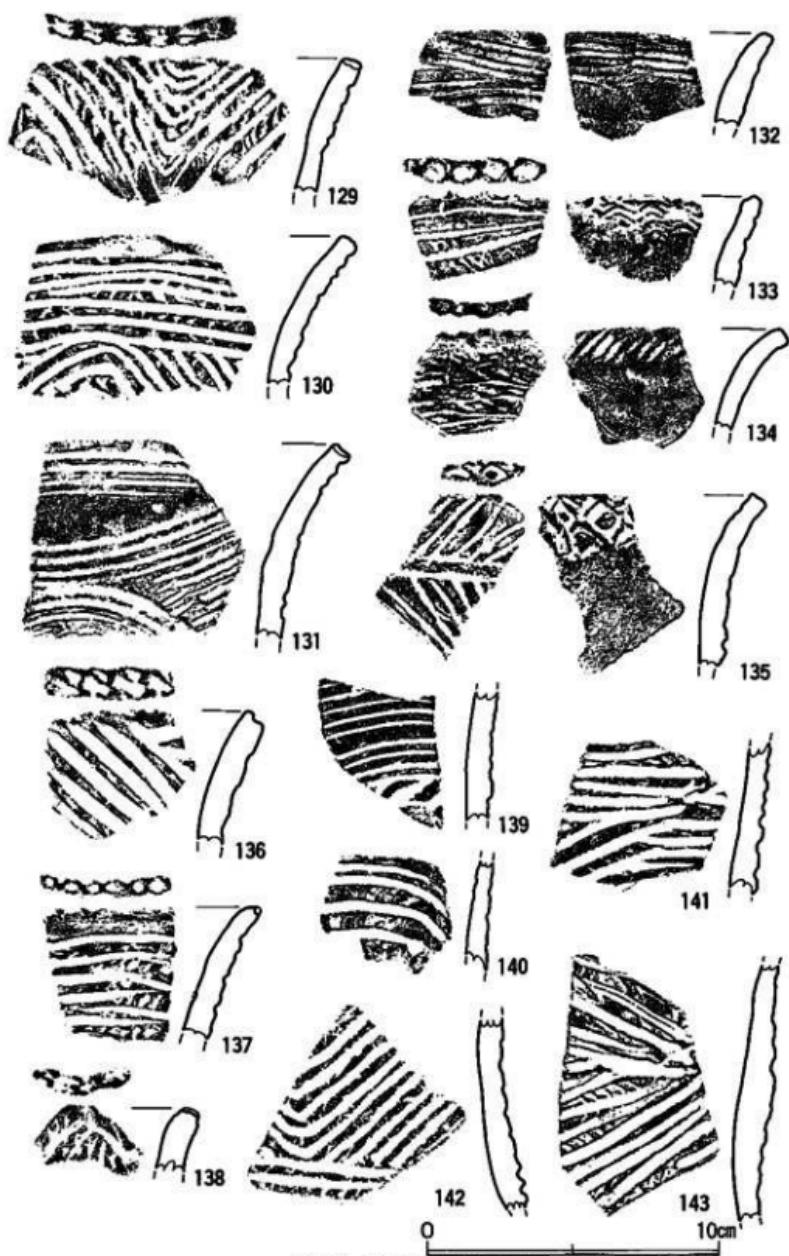
139~145の胴部は、外器面に沈線文を有している。文様の形状は142が唯一、鋭角の三角形で、他は、横位と斜行の沈線である。

器形については、143の内器面が凸面状を呈し、140は器厚が5~7.5mmと薄壁である。

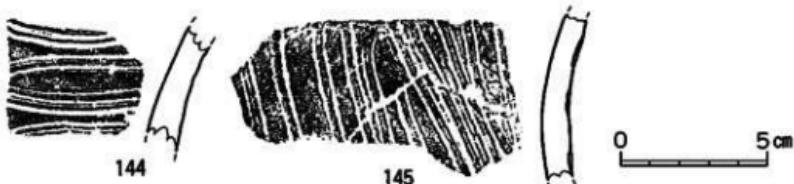
(注) 外：外器面・内：内器面

NO	層	区	レベル	基	底	厚	地	土	表	底	色	表	底	文	種	類	形	器	形	器
129	N	A	5	136.533	口縁部	口唇 7.0 中位 8.5 下位 7.0	長石・雲母	普通	内：灰青褐色 外：灰褐色	内：上位に横位の沈線（1.5~2mm幅）。 内：下位：ナ。 口唇：山形押型文。 外：小葉状文。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
130	N	A	5	136.471	口縁部	口唇 8.0 中位 7.0 下位 7.0	長石・雲母	普通	内：灰青褐色 外：灰褐色	内：ナ。 外：上位の沈線。下位は小葉状文の沈線（2mm幅）。	中や外弯。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
131	N	A	3	137.405	口縁部	口唇 7.0 中位 9.0 下位 8.0	長 石	普通	灰青褐色	内：ナ。 外：横位・斜行・曲線の沈線文（1~2mm幅）。	外弯。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
132	N	A	1	137.353	口縁部	中位 8.5 下位 8.0	長石・雲母	普通	灰青褐色	内：中位よりナ。 外：内・外の上位：横位の軽く浅い沈線文。	内器面は凸面状を呈する。 口縁部は平坦（4mm幅）。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
133	V	A	6	135.888	口縁部	口唇 6.0 下位 8.0	長 石	やや青白	内：灰青褐色 外：灰褐色	内：上位は横位の山形押型文。 下位はナ。 口唇：山形押型文。 外：横位の沈線（1.5~2mm幅）。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
134	N	A	4	136.317	口縁部	上位 6.0 中位 6.5 下位 6.0	長 石	普通	灰青色	内：上位は横位の沈線（1~2mm幅）。 内：下位：ナ。 口唇：押捺文。 外：斜行の沈線。	大きく外弯。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
135	N	A	4	137.167	口縁部	中位 9.0 下位 8.5	長 石	普通	内：一體灰黑色 外：灰青褐色	内：上位・口唇：菱形押型文。 外：下位にやや横位の沈線。 他は斜行の沈線（1.5~2mm幅）。 一部に浅い沈線あり。	外弯。 口縁部は平坦（6.5mm幅）。	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第20表 出土遺物観察表 織文土器②



第29図 出土遺物実測図 縄文土器⑤



第30図 出土遺物実測図 繩文土器⑩

(注) 外: 外器面・内: 内部面

NO	層	区	レベル	器種	器厚mm	施土	施文	色調	文様及び測定	形態の特徴	備考
136	N	A	137.533	口縁部	上位 5.0 中位 10.0 下位 5.0	長石・雲母 青い	灰青褐色	口唇: 山形押型文。 口縁: 斜行の波線文 (5mm幅)。	やや外寄。		
137	N	A	136.437	口縁部	口部 4.0 中位 8.0 下位 9.0	長石	普通	灰白青色	内: ナデ。 口唇: 山形押型文。 外: 横位の波線文 (5mm幅)。	口縁部は、端先を破から見た様な形状となる。	
138	N	A	136.436	口縁部	口部 5.0 下位 9.5	長石・雲母	普通	灰青色	内: ナデ。 口唇: 山形押型文。 外: 横位の波線文 (0.5~1mm幅)。	——	
139	N	A	136.432	腹 部	上位 7.5 下位 8.5	長石	普通	内: 淡褐色 外: 淡褐色	内: ナデ。 外: 横位の波線 (1.5mm幅)。	——	
140	N	A	136.491	腹 部	上位 5.0 下位 7.5	長石	普通	内: 淡褐色 外: 淡褐色	内: ナデ。 外: 横位の波線 (3.5mm幅)。	——	
141	N	A	135.915	腹 部	上位 7.0 中位 8.0 下位 9.0	長石	普通	内: 淡青褐色 外: 淡青褐色	内: ナデ。 外: 横位の波線 (3mm幅)。	——	
142	N	—	—	腹 部	上位 7.5 中位 8.0 下位 8.0	長石・雲母	やや不良	灰白青色	外: 腹内三角形 (2mm幅)。	——	
143	N	A	136.191	腹 部	上位 5.5 中位 11.5 下位 7.0	長石	普通	内: 淡褐色 外: 淡褐色	内: ナデ。 外: 斜行の波線 (3.5mm幅)。	内部面は凸面状を呈する。	
144	V	A	136.519	腹 部	上位 9.0 下位 9.0	長石・雲母	普通	内: 淡褐色 外: 淡褐色	内: ナデ。 外: 横位の波線文 (1~1.5mm幅)。	——	
145	N	A	136.580	腹 部	上位 7.0 中位 8.5 下位 9.0	長石・雲母	普通	内: 淡青褐色 外: 淡青褐色	内: ナデ。 外: 横位の波線 (1.5mm幅)。	——	

第21表 出土遺物観察表 繩文土器⑪

〔 類〕 突帯沈線文

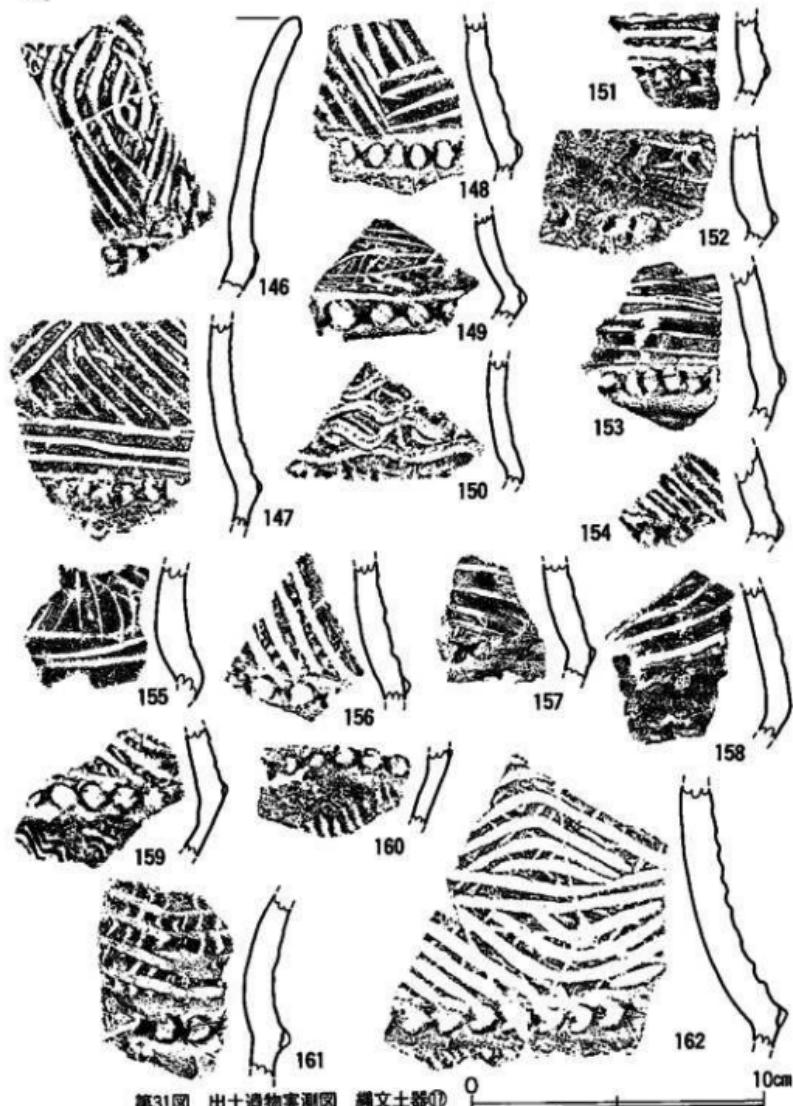
A-1~6区から18片が出土した。この内、A-4~6区からの出土は15片を数え、3区画で83%を占める。特に、A-4区から5片、A-6区から8片が出土した。

146は胴部から口縁部に至る残存である。外器面に小葉状の沈線が施され、突帯面に刺突文がある。器厚は肩部を除いて、ほぼ均一である。

147~162は胴部の残存である。外器面における沈線文の形態は、大方が横位と斜行の直線状のもので、147~155は両方が組み合ったものである。

その他、148は小葉状、150は横位の波状文様、162は斜行の直線文様と曲線文様の組み合わせである。同じく158は突帯を挟んで横位の沈線と山形押型文が組み合ってある。161は唯一、特殊な文様で、横位の平行沈線文の間に三日月形文の施文がある。

突帯面には155・158を除いて文様が施されており、種類ごとに刺突文（146・149・153・156・159・160・161）と、押捺文（147・148・150～152・154・157・162）に二分される。器形については、150が薄壁（器厚5.5～6.0mm）で、162の器壁は肉太（最大器厚12.5mm）である。



第31図 出土遺物実測図 縄文土器①

(註) 外: 外器面・内: 内器面

N.O.	層	区	レベル	器種	器 高mm	施 土	成 形	色 調	文 織 及び 斑 帯	形 異 の 特 徴	備考
146	B	A 4	136.351	調 瓶	上位 4.5 中位 4.5 下位 3.0	長 石	良好	内: 深褐色 外: 近褐色	内: ナデ。 外: 上位に斜行の波線文、下位は横行の波線文(2.5mm幅)、安帶面に押捺文。	外器面上に安帶が付く。	
147	V	A 5	136.482	調 瓶	上位 7.0 中位 8.0 下位 8.5	長 石 - 霧母	普通	灰黃褐色 外: 一部は墨色	内: ナデ。 外: 上位に斜行の波線文、下位は横行の波線文(2.5mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
148	V	A 6	136.476	調 瓶	上位 7.0 下位 10.0	長 石 - 霧母	普通	灰黃褐色 外: 近褐色	内: ナデ。 外: 小横状波紋文(2~3mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
149	V	A 5	136.371	調 瓶	上位 6.0 中位 4.0 下位 5.0	長 石	良	内: 深褐色 外: 深褐色	外: 横位の波線文(1mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
150	V	A 1	137.438	調 瓶	上位 6.0 下位 5.5	長 石	やや不良	内: 深褐色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 横行の波状波紋文(1.5mm幅)、安帶面に押捺文。	外器面上に安帶が付く。	
151	B	A 4	136.964	調 瓶	上位 7.0 下位 10.0	長 石	普通	明褐色~ 深茶色	内: ナデ。 外: 上位は横行の波線文(3~4mm幅)、安帶面に押捺文、下位はナデ。	—	
152	B	A 4	136.465	調 瓶	上位 8.0 下位 10.0	長 石 - 霧母	不良	青~暗褐色	内: ナデ。施錫斑痕有。 外: 上位は横行の波線文(2mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
153	B	—	—	調 瓶	上位 8.0 下位 11.0	長 石 - 霧母	普通	内: 黄褐色 外: 灰黃褐色	内: ナデ。 外: 斜行の波線文(1.5~3mm幅)、安帶面に押捺文、下位はナデ。	外器面上に安帶が付く。	
154	V	A 6	136.051	調 瓶	上位 9.0 下位 11.0	長 石	やや不良	内: 深褐色 外: 無い(裏面)	内: ナデ。 外: 上位は横行の波線文(1~1.5mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
155	B	A 4	136.187	調 瓶	上位 8.0 中位 10.5 下位 9.0	長 石 - 霧母	普通	灰褐色	内: ナデ。 外: 上位は横行の波線文、中位は横位の波線文(1~2mm幅)、下位はナデ。	—	
156	B	A 4	136.298	調 瓶	上位 7.5 下位 9.5	長 石	普通	内: 深褐色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 斜行の波線文(3mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
157	B	—	—	調 瓶	上位 8.0 下位 9.0	長 石 - 霧母	やや不良	内: 深褐色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 斜行の波線文(2mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
158	B	A 3	136.046	調 瓶	上位 6.5 中位 8.0 下位 6.0	長 石	普通	灰褐色	内: ナデ。 外: 上位は横行の波線文(2~3mm幅)、下位は山形押捺文。	—	
159	B	A 4	136.231	調 瓶	上位 7.5 中位 9.5 下位 5.0	長 石	不良	内: 黄褐色 外: 灰褐色	内: ナデ。 外: 上位に斜行の波線文(3mm幅)、安帶面に鋸歯状の押捺文、下位は山形押捺文。	外器面上に安帶が付く。	
160	B	A 5	136.639	調 瓶	上位 8.0 下位 5.0	長 石	やや不良	灰褐色	内: ナデ。施錫斑痕有。 外: 横行の波状波紋文(1.5mm幅)、安帶面に押捺文。	—	
161	B	A 6	136.122	調 瓶	上位 7.0 中位 10.0 下位 13.5	長 石 - 霧母	やや不良	灰褐色	内: 外の下位: ナデ。 外: 斜行文(3mm幅)、波線間に三日月押文、安帶面に鋸歯状の押捺文。	外器面上に安帶が付く。	
162	B	A 2	137.346	調 瓶	上位 9.0 中位 12.0 下位 12.5	長 石 - 霧母	普通	内: 深褐色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 斜行及び曲線の波線文(4mm幅)、安帶面に押捺文。	—	

第22表 出土遺物観察表 繩文土器④

[9類] 特殊沈線文

A-4区とA-5区から1片ずつ出土した。

163・164は口縁部で、外器面に特殊沈線文を有している。163は二重の曲線文様で、164は長円形及び菱形を崩した様な幾何学文様を呈する。いずれも文様体は「類のものと明らかに異なる」とある。

内器面にも文様があり、163に山形押型文、164には横位の沈線が施されている。163の場合は、口唇部にも同じ山形押型文の施文がある。器形はいずれも外弯しており、163の内器面は凸面状を呈する。164の口唇部は平坦で6mm幅を測る。



第32図 出土遺物実測図 裝文土器⑮

(左) 外: 外器面・内: 内器面

NO	層	区	レベル	器種	器 周 mm	地 土	施 文	色 調	文様及び質感	形態の特徴	備考
163	V	A 4	135.520	口縁部	口径 8.0 中位 8.5 下位 7.5	長 石	直好	灰褐色	内: 口縁: 山形押型文、下位 はナガ。 外: 二重の曲線文様の沈線 (2mm幅)。	外弯。 内部面は凸面状を呈する。	
164	N	A 5	135.900	口縁部	中位 7.5 下位 8.5	長 石	直好	純い褐色	内: 上位に横位の沈線、下位 はナガ。 外: 内器面及び菱形を崩した 様な幾何学文様の沈線 (1 mm幅)。	やや外弯。 口縫部は平坦 (6mm幅)。	

第23表 出土遺物観察表 裝文土器⑮

[h類] 山形押型文を地文とする沈線文

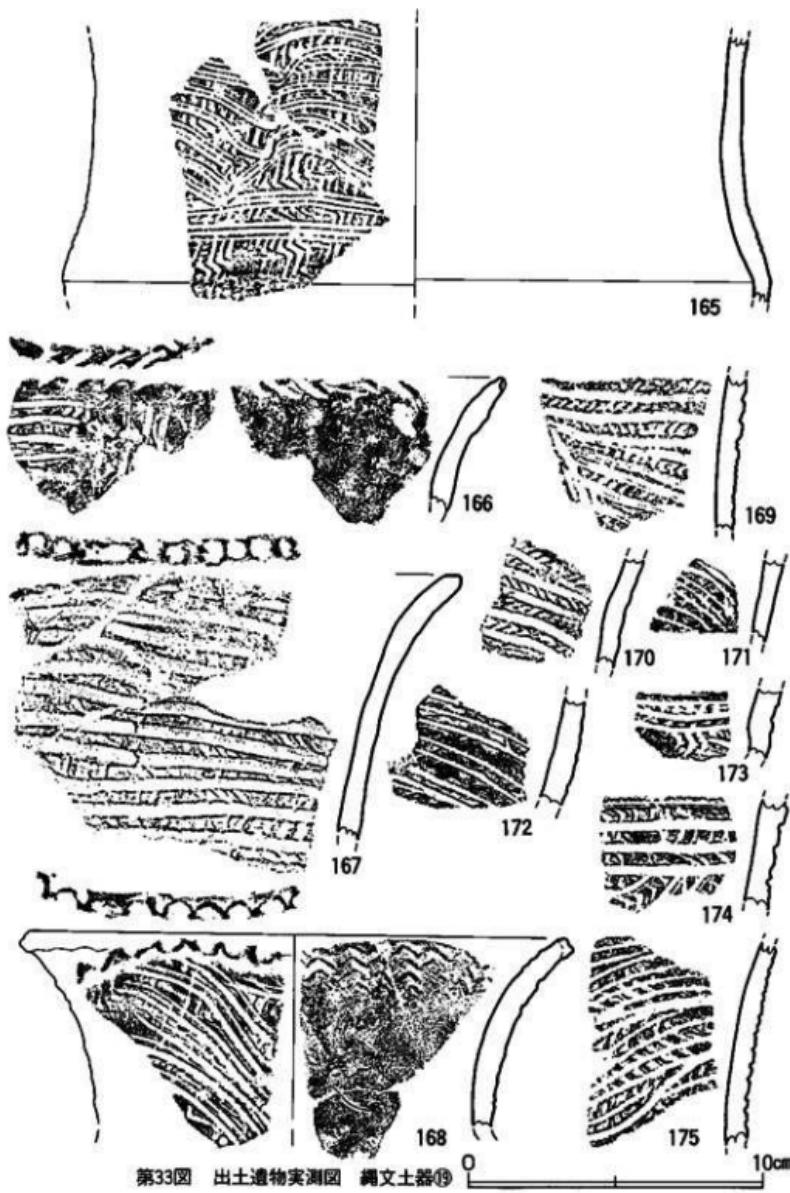
A-3~6区から13片が出土した。この内、A-3~4区からの出土は9片を数え、2区画で69%を占める。

165は3片の接合で、165-1とは8m、165-2とは実際に17.45mの遠距離にある。

168は2片の接合で、168-1と5mの距離がある。

166~168は口縁部で、165~169~175は胴部である。168は外器面に斜行の沈線文と、内器面の上位に山形押型文があり、口唇部に大型で梢円形状の押捺文が見える。器形は大きく外弯しており、復元口径18.6cmを測る。口唇部には粘土紐が貼り付けられている。167は外器面に横位の沈線文と、口唇部に押捺文が施されている。器形は、やや外弯気味に大きく外側へ開き、口縁部の断面形は指先を横から見た様な形状に近い。166は外器面に縱位と横位の沈線文があり、口唇部に、やや細長の押捺文が施されている。器形は、やや外弯気味に外側へ開き、肉太の口縁直口となる。口縁部は中途で厚さ6mmに括れている。

165・169-175は、いずれも胴部に横位の沈線を有しているが、器形は器厚が薄壁なもの(169・170・171・175)と、やや肉太なもの(172・173・174)に分かれる。



第33図 出土遺物実測図 繩文土器⑬

(注) 外: 外器面・内: 内器面

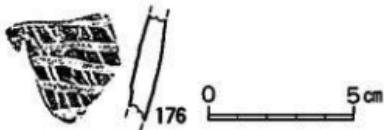
NO	層	区	レベル	部	高さcm	地 土	成 分	色 調	文様及び質量	形態の特徴	備考	
165	V	A	3	136.664	腰 部	上位 5.0 中位 6.5 下位 5.5	長石・雲母	普通	黄褐色。 一部は褐色。	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 模様と並行の沈線文。漆幅 2mm程。	復元断面 24.0cm。	複合
	N	A	4	136.445	腰 部		—	—	—	—	—	
	B	A	5	136.259	腰 部		—	—	—	—	—	
166	N	A	4	136.534	口縁部	上位 4.0 中位 7.0 下位 8.0	長石・雲母	不規	内: 淡褐色 外: 黑褐色	内: ナデ。 口唇: 伸縮文。 外: 山形押型文を地文とする 模様と横段の沈線文。漆幅 2.5mm。	やや厚唇。 中位で 6mm幅に達する。	複合
	N	A	3	136.637	口縁部	上位 7.0 中位 8.5 下位 6.0	長石・雲母	普通	淡褐色	内: ナデ。 口唇: 伸縮文。 外: 山形押型文を地文とする 模様の沈線文。漆幅 4mm。	やや厚唇。 口縁部は、指先を後から見 た様な形状を呈する。	
168	N	A	4	136.844	口縁部	口唇 5.0 中位 8.5 下位 6.5	長 石	普通	黑褐色	外: 山形押型文を地文とする 模様の沈線文。漆幅 2mm。	外唇しながら外側へ開く。 復元口径 18.6cm。	複合
	N	A	4	136.844	口縁部	上位 6.0 中位 7.0 下位 5.5	—	—	—	内: 暗淡の山形押型文。ナデ。 口唇: 伸縮文。	口唇部に黒土絞の跡付ける。	
169	N	A	5	136.815	腰 部	上位 7.0 下位 6.0	長石・雲母	やや不良	内: 淡褐色 外: 黑褐色	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 模様の沈線文 (2.5mm幅)。	—	
170	N	A	3	137.125	腰 部	7.0	長石・雲母	やや不良	灰褐色	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 沈線文 (3mm幅)。	—	
171	N	—	—	—	腰 部	6.0	長石・雲母	やや不良	内: 淡褐色 外: 白褐色	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 沈線文 (1mm幅)。	—	
172	N	A	3	136.966	腰 部	上位 8.0 中位 8.5 下位 8.5	長石・雲母	普通	黑褐色	内: 淡褐色 外: 黑褐色	—	
173	N	A	4	137.058	腰 部	7.0	長 石	やや不良	褐褐色	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 沈線文 (1.5mm幅)。	—	
174	N	A	6	135.857	腰 部	上位 9.5 下位 8.0	長 石	普通	淡褐色 外: 黑褐色	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 模様の沈線文 (3mm幅)。	—	
175	N	A	3	136.558	腰 部	上位 5.5 中位 7.0 下位 7.0	長石・雲母	やや不良	内: 黑褐色 外: 黄白色	内: ナデ。 外: 山形押型文を地文とする 模様の沈線文 (1.5mm幅)。	—	

第24表 出土遺物観察表 織文土器⑩

〔Ⅰ類〕撲糸文を地文とする沈線文

1片のみの出土で、IV層からの出土であるが遺物取り上げの番号を有しない。

176は脇部の細片で、外器面に撲糸文を地文とした、やや斜行の沈線文がある。



第34図 出土遺物実測図 織文土器⑩

(注) 外: 外器面・内: 内器面

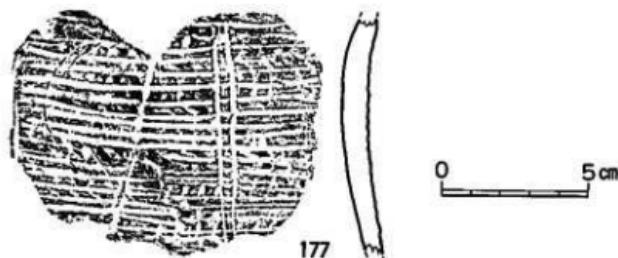
NO	層	区	レベル	部	高さcm	地 土	成 分	色 調	文様及び質量	形態の特徴	備考
176	N	—	—	腰 部	7.0	長石・雲母	普通	内: 淡褐色 外: 黄白色	内: 沈線文を地文とする 模様 (3mm幅)。	—	

第25表 出土遺物観察表 織文土器⑪

〔j 類〕 縄文を地文とする沈線文

A-5区から1片のみの出土である。

177は胴部で、外器面に縄文を地文とする沈線文がある。沈線文は横位の平行沈線が主で、これに縦位の沈線が加わっている。



第35図 出土遺物実測図 縄文土器②

(B) 外: 外器面・内: 内器面

NO	器 区	レベル	断 面	器 厚mm	胎 土	焼 成	色 調	文様及び特徴	形 番 の 特 徴	備 考
177	V A S	130.524	横 断	上段 4.0 中段 9.0 下段 6.5	長石・雲母	やや良好	黒褐色	内:ナメ。 外:横位の沈線 (2~2.5 mm) 縦位の沈線 (2条) が施わる。	—	—

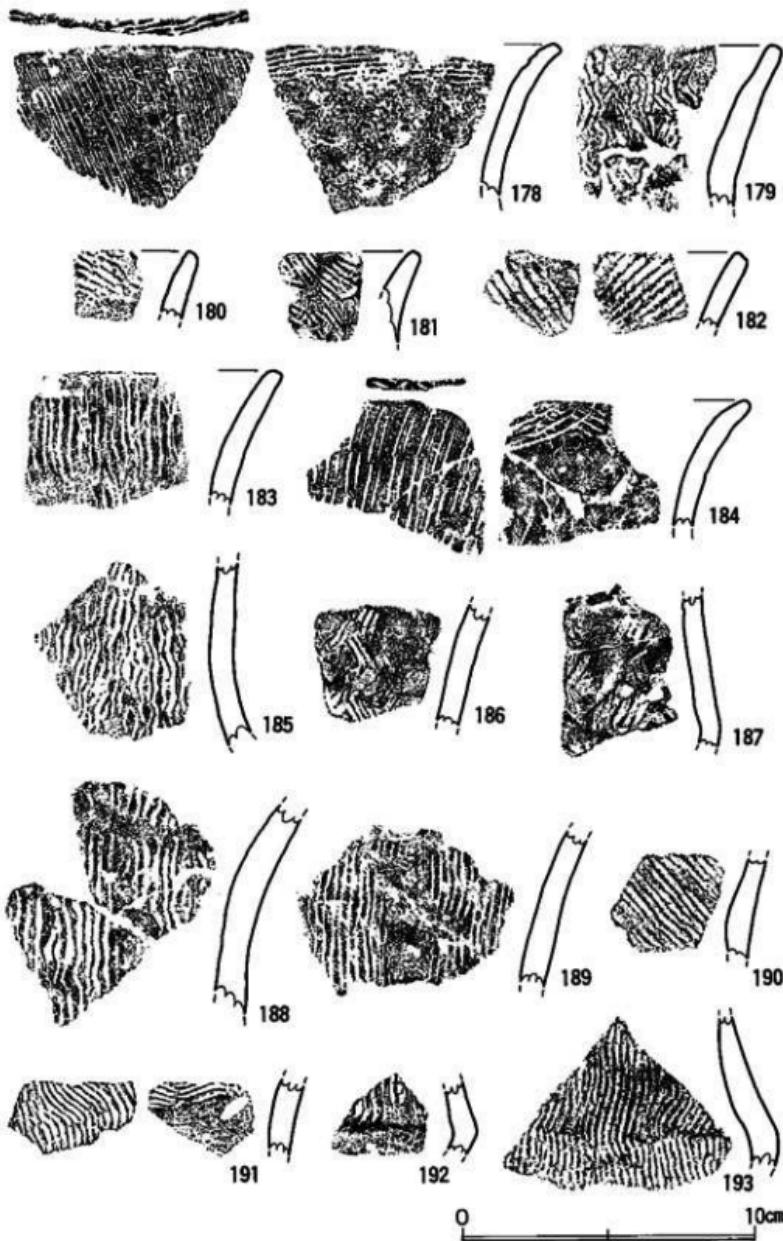
第26表 出土遺物観察表 縄文土器①

〔k 類〕 摶糸文

A-1~6区とB-4区から18片が出土した。この内、A-3~6区からの出土は15片を数え、3区画で83%を占める。

178~184は口縁部で、185~193は胴部である。口縁部は外器面のみに摶糸文を有するもの (179~181・183) 、内外器面に摶糸文を有するもの (178・182) 、外器面に摶糸文と内器面の上位に沈線文を有するもの (184) とがある。摶糸文の形状については、縦位と斜行・横位に細分され、178は外器面が非常に細目の斜行摶糸文で、内器面の上位は横位の摶糸文となる。182の場合は内外器面とも斜行の摶糸文である。口唇部には178・184に文様があり、178は摶糸文、184は山形押型文の施文が見える。

器形は外弯気味に外側へ開いており、タイプとして口縁部の断面形が指先を横から見た様な形状に近いもの (178・184) 、口唇部が平坦面を有するもの (182) 、やや肉太な口縁直口のもの (181) などがある。この場合、179は内器面の下部が凸面状を呈し、182の口唇部は幅6mmを測る。185~193の胴部は、外器面に縦位もしくは、斜行の摶糸文を有するものであるが、191は、内器面にも横位の摶糸文がある。外器面は縦位で、摶糸文が器面に余す所なく密に施文されている。188は縦位で、やや太目の摶糸文となる。器壁は187が薄壁 (最大器厚7mm) で、188が肉太 (最大器厚11mm) である。



第36図 出土遺物実測図 繩文土器②

NO	場	区	レベル	部	面	厚mm	胎	土	地	色	文	文様及び測量	形態の特徴	備考
176	N	A 5	136.066	口縁部		6.0	長石・雲母		灰	内:灰褐色 外:灰褐色	内:上位は横線の波点文、下位はナガ。 口唇:波点文。 外:斜行の波点文。	外等。器底は均一。		
179	V	A 5	136.036	口縁部		上位 5.5 中位 5.5 下位 5.5	長石	普通	灰褐色	内:ナガ。 外:複数の波点文様。ナガ。	やや外等。 内器面は、やや凸面状を呈する。			
180	W	A 3	136.154	口縁部		上位 5.0 中位 7.0 下位 7.5	長石	普通	灰褐色	外:斜行の波点文。		——		
181	N	A 4	136.913	口縁部		上位 3.0 中位 2.0 下位 2.5	長石・雲母	普通	内:灰褐色 外:灰褐色	内:ナガ。 外:斜行の波点文。		——		
182	—	A 6	——	口縁部		6.5	長石・雲母	普通	内:茶褐色 外:茶褐色 黒褐色	内:外:斜行の波点文。 口唇部は平滑(5mm間)。	器底は均一。 口唇部は平滑(5mm間)。	(SK1)		
183	N	A 1	137.204	口縁部		上位 5.5 中位 8.0 下位 7.5	長石・雲母	普通	内:灰褐色 外:黒褐色	内:ローリング波し。 外:複数の波点文。	やや外等。			
194	V	A 6	136.851	口縁部		上位 4.0 中位 7.0 下位 6.5	長石	普通	灰褐色	内:上位は横線の波点文、下位はナガ。 口唇:山形斜波文。 外:斜行の波点文。	——			
185	W	A 6	136.146	腹	部	上位 7.0 中位 8.0 下位 8.0	長石・雲母	普通	灰褐色	内:ナガ。 外:複数の波点文。	——			
186	N	A 2	136.927	腹	部	上位 8.0 中位 8.0 下位 7.0	長石	良好	灰褐色	外:波点文。	——			
187	N	—	—	腹	部	上位 6.5 中位 7.0 下位 6.5	長石・雲母	やや不良	内:灰褐色 外:暗褐色	内:ナガ。 外:斜行の波点文。	——			
188	N	—	—	腹	部	上位 8.0 中位 8.0 下位 11.0	長石・雲母	普通	内:暗灰色 外:灰褐色	内:ナガ。 外:複数の波点文。	——			
189	N	A 3	136.101	腹	部	上位 7.0 中位 8.0 下位 9.0	長石・雲母	やや不良	内:灰褐色 外:暗褐色	内:斜行のナガ。 外:複数の波点文。	——			
190	A 6	—	—	腹	部	上位 7.0 中位 8.5 下位 7.0	長石・雲母	普通	灰褐色	内:ナガ。 外:斜行の波点文。	——			
191	A 6	—	—	腹	部	上位 8.0 下位 7.0	長石・雲母	普通	内:茶褐色 外:黒褐色	内:波段の波点文。 外:波段の波点文。	——	(SK1)		
192	V	—	—	腹	部	上位 6.0 中位 8.5	長石・雲母	普通	暗褐色	内:ナガ。 外:斜行の波点文。	——			
193	A 6	—	—	腹	部	上位 6.5 中位 8.5 下位 8.0	長石・雲母	良好	内:暗褐色 外:灰褐色	外:波段の波点文。	——			

第27表 出土遺物観察表 織文土器⑩

〔I 類〕変形燃糸文

A-5区とA-6区から1片ずつ出土した。

194と195は口縁部で、内外器面に変形燃糸文がある。両器面の文様は類似しており、ほぼ同一の曲線、幾何学文様が施されている。器形は、両方とも内太の口縁直口で、194の内器面は凸面状を呈し、195は口縁部の中途が、やや肥厚する。



第37図 出土遺物実測図 繩文土器②

(注) 外:外器面、内:内器面

NO	層	区	レベル	断面	厚さmm	胎 土	成 形	色 調	文様及び調査	形態の特徴	備考
194	柱 六 五	A	137.050	口縁部	上段 9.0 中段 11.0 下段 7.0	長石・雲母	普通	黒い褐色	内:外:安那形文。 内:丁寧なナデ。	やや外寄。 内器面は凸面状を呈する。 口唇部は、やや丸味を帯びる。	
195	V	A 6	136.074	口縁部	上段 10.5 中段 7.5 下段 8.5	長石・雲母	やや甘い	褐色	内・外:安那形文。 内:ナデ。	内太の口縁底口で、口縁部 の下段は 7.5mm 厚に削られる。	

第28表 出土遺物観察表 繩文土器②

[m 類] 綱目の撲糸文

A-5区とA-6区から1片ずつ出土した。

196と197は口縁部で、外器面に網目の撲糸文がある。196の場合は口唇部にも押捺文が施されており、組み合わせによって形造られた横向きのV字形文様が見られる。

器形について、196の内器面は凸面状を呈し、197の断面形は指先を横から見た形状に近い。器壁はいずれも肉太で、最大器厚は196が11mm、197が10mmを測る。



第38図 出土遺物実測図 繩文土器②

(注) 外:外器面、内:内器面

NO	層	区	レベル	断面	厚さmm	胎 土	成 形	色 調	文様及び調査	形態の特徴	備考
196	N	A 6	136.129	口縁部	口縁 8.0 下段 11.0	長石	直	黒い褐色	内:丁寧な押ナデ。 口唇:押捺文。 外:網目の撲糸文。	やや外寄。 内器面は凸面状を呈する。	
197	V	A 5	136.077	口縁部	口縁 8.0 下段 10.0	長石	直	黒褐色	内:丁寧な押ナデ。 口唇:押捺文。 外:網目の撲糸文。	口縁部は、指先を横から見 た頭の形狀を呈する。	

第29表 出土遺物観察表 繩文土器②

[n 類] 植書き文

A-1~6区から15片が出土した。この内、A-5区からの出土は5片を数えた。

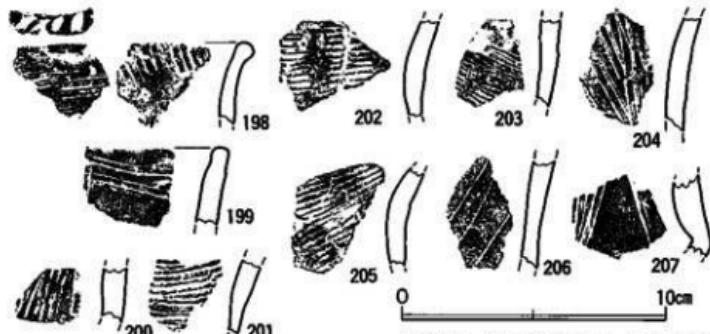
198・199は口縁部で、200~207は胴部である。198・199は口縁の上位部分が残存しており、外器面に植書き文がある。198・199の外器面は横位の植書き文で、198の内器面は斜行の植書き文である。

き文となっており、口唇部に押捺文を見る。

器形について、198はやや外寄り、口唇部は丸味を帯びて肥厚する。199は直線的に伸びて、口縁部の上位で内外両器面から括れている。口唇部は平坦に近い形状を呈する。

200~207は胴部で、外器面に横位もしくは斜行の構描き文がある。大方のものは密に搔かれているが、206の場合、非常に疎で、構描き文間に大きな空間が生じている。207は一単位の構描き文は密に搔かれているものの、これ又、グループ間には空間が生じている。

器形は200・207が肉太の器壁で（最大器厚9~10mm）あるのに対し、201は胴部の下位が極端に括れて4mm幅の薄壁となっている。



第39図 出土遺物実測図 繩文土器②

(注) 外: 外器面、内: 内器面

NO.	層	区	レベル	底	高	器厚mm	胎 土	施 成	色 調	文 様 及び 施 作	形 型 の 特 徴	備 考
198	N	A	136.745	口縁部	上段 7.0 中段 5.0 下段 4.0	灰 石	良好	無い・暗色	内: 斜行の構描き文。 口唇: 押捺文。 外: 疎度の構描き文。	口唇部は、丸味を帯びて肥厚する。		
199	N	A	137.272	口縁部	上段 7.0 中段 5.0 下段 4.5	灰 石・青 磁	良好	内: 深褐色 外: 黄褐色	外: 密度の構描き文。	口縁部は、上位で内外両器面から括れる。		
200	V	—	脚 部	上段 5.0 中段 4.0 下段 4.0	灰 石・青 磁	良好	内: 深褐色 外: 黄褐色	外: 構描き文。	—			
201	V	—	脚 部	上段 5.0 中段 4.0 下段 4.0	灰 石	良好	内: 深褐色 外: 深褐色	外: 構描き文。	—			
202	V	A	136.771	脚 部	上段 6.5 中段 8.0 下段 5.5	灰 石	普通	内: 暗灰色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 密度の構描き文化、ナデが強めている。	—		
203	H	—	脚 部	上段 7.5 中段 8.0 下段 5.0	灰 石・青 磁	普通	内: 暗灰色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 構描き文。	—			
204	H	—	脚 部	上段 6.0 中段 7.5 下段 7.0	灰 石・青 磁	やや良	灰褐色	内: ナデ。 外: 斜行の構描き文。	—			
205	H	A	137.429	脚 部	上段 6.0 中段 8.0 下段 6.0	灰 石・青 磁	普通	内: 深褐色 外: 深褐色	内: ナデ。 外: 斜行の構描き文。	—		
206	H	—	脚 部	上段 8.0 中段 6.0 下段 6.5	灰 石	良好	内: 深褐色 外: 黄褐色	内: ナデ。 外: 斜行の構描き文。	—			
207	H	A	137.259	脚 部	上段 10.0 中段 7.0 下段 7.5	灰 石	良好	内: 深褐色 外: 黄褐色 —深褐色	内: ナデ。 外: 構描き文。	内器面は凸凹状を呈する。		

第30表 出土遺物観察表 繩文土器②

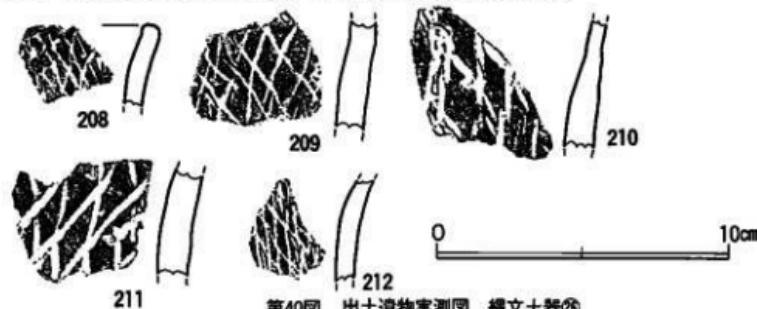
〔○類〕 網目文

A-3~6区から13片が出土した。この内、A-5・6区からの出土は9片を数え、2区画で69%を占める。

208は口縁部、209~212は胴部の残存で、外器面に網目文様がある。網目の形状はやや粗いものの、力強い沈線で大きく搔かれたもの（210・211）と、細目の沈線で細かく搔かれたもの（208・209・212）とに分けられる。

器形は208が口縁部で、他は胴部である。208は器厚が均一で、僅かに外彎している。口唇部は平坦に近い形状である。

209~212の胴部は212が薄壁（最大器厚7.0mm）で、211・209が肉太の器壁（最大器厚10~11mm）である。210は、器壁の上位が下位に比べて極端に薄壁となる。



第40図 出土遺物実測図 繩文土器②

(注) 外: 外器面 内: 内器面

NO	層	区	レベル	底 高	器 壁	厚 度 mm	胎 土	焼 成	色 調	文 様 及び 図 畫	形 狀 の 特 徴	備 考
208	H	A	136.077	口縁部	上位 4.0 中位 7.0 下位 6.0	長 石	良好	内:灰褐色 外:灰褐色	外:網目(深1mm) 一定 5×5mm	—	—	—
209	H	A	136.470	胴 部	上位 9.0 中位 10.0 下位 10.0	長石・黒母	良好	灰白色	外:網目(深1mm) 一定 12×10mm	—	—	—
210	H	A	136.940	胴 部	上位 5.0 中位 8.0 下位 10.0	長 石	中や不良	内:灰褐色 外:灰褐色	外:網目(深2.5mm) —	—	—	—
211	H	A	136.953	胴 部	上位10.0 中位11.0 下位10.0	長石・黒母	良好	灰白色	外:網目(深2mm) 一定 11~15mm	—	—	—
212	H	A	—	胴 部	上位 5.0 中位 7.0 下位 6.0	長 石	良好	灰褐色	外:網目(深1mm) 一定 4×11mm	—	—	—

第31表 出土遺物観察表 繩文土器②

〔P類〕 繩 文

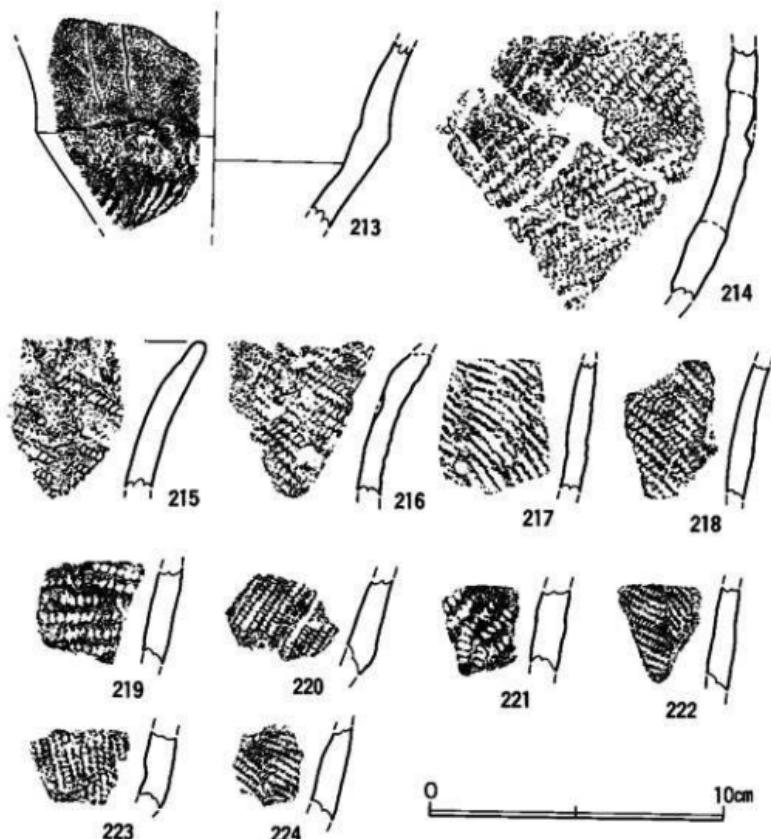
A-1~3~5区から9片が出土した。この内、A-3~4区からの出土は7片を数え、2区画で78%弱を占める。

213~224は外器面に網文がある。215は口縁部で、213~214・216~224は胴部である。

網文の形状は小型の網目で、密に施文されたもの（216・217・218・220・222~224）と、太

目の縄目で、やや疎に施文されたもの（214・219・221）とに分けられる。215は器面のローリングが激しい。大方のものは、残存の器面一杯に施文されているが、213に限り胴部下位の施文に留まっている。

器形は215が口縁部で、213・214・216～224は胴部である。215はやや外弯気味に外側へ開いている。口縁部の器厚は下位から中途にかけて均一であるが、上位はやや先ほそりとなる。214の胴部は内弯し、器厚の下位部分で肥厚（最大器厚9.0mm）する。これに対し213は胴部の中途が、やや角張った状態で屈曲する。216は胴部が外弯している所から、口縁部に近い所の破片と思われる。222は器壁が肉太で、最大器厚8.0mmを測る。



第41図 出土遺物実測図 繩文土器②

(注) 外: 外器面、内: 内器面

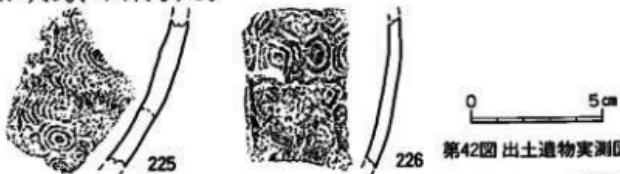
NO	層	区	レベル	部	種	厚	地	土	成	色	調	文様及び調査	形態の特徴	備考
213	N	A	4	136.053	縄	部	上段 8.5 中段 8.0 下段 9.0	長石・雲母	良好	内: 黑褐色 外: 黑褐色	文文。		——	
214	N	A	3	136.701	縄	部	上段 8.5 中段 8.0 下段 9.0	長石	良好	内: 黑褐色 外: 黑褐色	文文。	——		
215	N		—	—	縄	部	上段 7.5 中段 7.5 下段 8.0	長石	中や不良	内: 黑褐色 外: 黑褐色	文文。	——		
216	N	A	4	136.054	縄	部	上段 7.0 中段 12.0 下段 9.0	長石	普通	灰黃褐色	文文。	——		
217	N	A	4	136.052	縄	部	上段 5.5 中段 8.5 下段 9.0	長石・雲母	良好	内: 灰白色 外: 黑褐色	文文。	——		
218	N		—	—	縄	部	上段 5.5 中段 8.0 下段 6.0	長石・雲母	やや不良	灰褐色	文文。	——		
219	N	A	3	136.050	縄	部	上段 8.0 中段 8.5 下段 8.0	長石	普通	内: 黑褐色 外: 黑褐色	文文。	——		
220	V	A	3	136.742	縄	部	上段 7.0 下段 10.0	長石	普通	内: 黑褐色 外: 灰白褐色	文文。	——		
221	N	A	3	136.724	縄	部	上段 9.5 下段 10.0	長石・雲母	普通	内: 黑褐色 外: 黑褐色	文文。	——		
222	N	A	6	—	縄	部	上段 6.0 中段 8.0 下段 8.0	長石	普通	内: 黑褐色 外: 黑褐色	文文。	——	ISK 11	
223	N	A	3	127.066	縄	部	上段 9.0 下段 9.0	長石	普通	褐灰色	文文。	——		
224	N	A	6	—	縄	部	上段 6.5 中段 9.0 下段 9.0	長石・雲母	普通	褐灰色	文文。	——	ISK 11	

第32表 出土遺物観察表 繩文土器④

〔9類〕山形押型文を地文とする同心縫円文

A-4区とA-6区から1片ずつ出土した。

225・226は胴部の外器面に、山形押型文を地文とする同心縫円文がある。225・226は4重の同心縫円文で、一単位の大きさは225が長径17×短径12mm、226が長径18×短径16mmを測る。器形はいずれも、やや内寄する。



第42図 出土遺物実測図 繩文土器④

(注) 外: 外器面、内: 内器面

NO	層	区	レベル	部	種	厚	地	土	成	色	調	文様及び調査	形態の特徴	備考
225	N	A	6	135.056	縄	部	上段 6.5 中段 8.0 下段 8.0	長石	普通	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: ナゲ、微細压痕調。 外: 山形押型文を地文とする 4重の同心縫円文。 (長径17×短径12mm)。	——		
226	V	A	6	136.701	縄	部	上段 5.5 中段 5.0 下段 4.5	長石・雲母	普通	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: ナゲ。 外: 山形押型文を地文とする 4重の同心縫円文。(長径18 ×短径16mm)。	——		

第33表 出土遺物観察表 繩文土器⑤

〔r 類〕山形押型文を地文とする同心円文

A-1区とA-4区、A-6区から1片ずつ出土した。

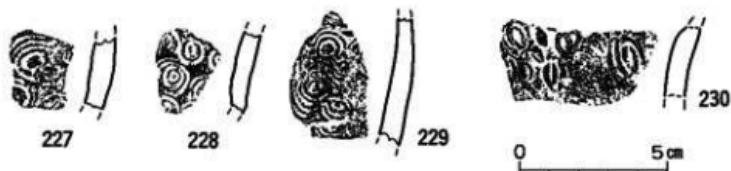
227~229は胴部の外器面に山形押型文を地文とする同心円文がある。227と228は4重の同心円文で、228の場合、一単位の大きさは直径12mmである。229は3重の同心円文で、一単位の大きさは直径10mmを測る。

器形は227・229が、やや内弯し、228は外弯の傾向にある。

〔s 類〕楕円状文十同心円文

A-2区から1片のみの出土である。

230は胴部の外器面に楕円状文と同心円文の文様がある。器形は、やや外弯し、内器面が凸面状を呈する。



第43図 出土遺物実測図 繩文土器②

(B) 外:外器面・内:内器面

NO.	層	区	レベル	深	幅	厚	材	土	性	成	色	調	文	様	及び	圖案	形	態	の	特	徴	備
227	W	A-1	137.680	胴	部	7.0	長石・雲母	普通	内:灰褐色 外:黒褐色	外:山形押型文を地文とする 4重の同心円文。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
228		A-6	—	胴	部	上:7.0 下:5.0	長石	良好	灰褐色	外:山形押型文を地文とする 4重の同心円文。 (直径12mm)。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(S.K.I.)	
229	N	A-4	136.361	胴	部	上:6.5 中:7.5 下:8.0	長石	やや不具	灰褐色	外:山形押型文を地文とする 3重の同心円文。 (直径10mm)。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
230	B	A-2	137.252	胴	部	7.0	長石・雲母	普通	良い灰褐色	内:ナガ。 外:楕円状文+同心円文。	内器面は凸面状を呈する。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第34表 出土遺物観察表 繩文土器②

〔t 類〕山形押型文十刺突文

A-5区から1片のみの出土である。

231は胴部の屈曲部で、外器面の上位に継位の山形押型文があり、屈曲面に直径5mmの一つ文が施されている。

〔u 類〕微隆起突帯文十刺突文

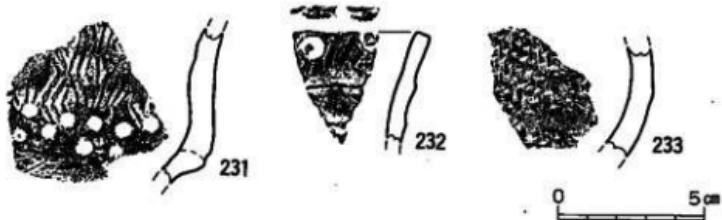
A-4区から1片のみの出土である。

232は口縁部の外器面に刺突文と微隆起突帯文がある。刺突文は口唇部の直下に施されており、直径8mmを測る。横位の微隆起突帯文は、その下部に施されている。口唇部には押捺文が施されている。

〔V類〕 刺突連続文

1片のみの出土で、IV層からの出土であるが遺物取り上げの番号を有しない。

233の外器面に極めて細目の刺突連続文が施されている。器形は大きく内弯する。



第44図 出土遺物実測図 繩文土器②

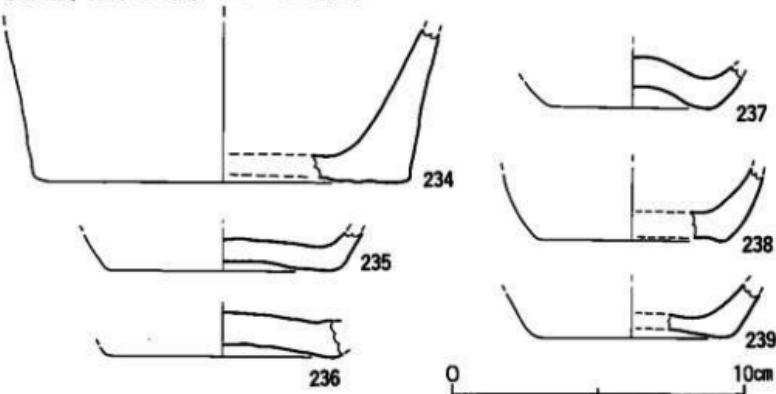
(注) 外: 外器面・内: 内器面

NO	層	区	レベル	底 様	基 底	上底 7.5 中底 8.0 下底 10.0	胎 土	燒 成	色 調	文様 及び 調査	形 型 の 特 徴	備考
231	W	A	5	136.680	脚 部	上底 7.5 中底 8.0 下底 10.0	長 石	真	内:灰褐色 外:褐褐色	内:ナデ。 外:山形神文。環曲部に直 接付の刺突文。	——	——
232	日	A	4	137.187	口縁部	5.0	長石・雲母	やや青い	内:灰白色 外:灰褐色	口唇:押捺文。 外:縫合縁内突文。底径8cm の斜削文。	口唇部は平底(5mm幅)。	——
233	W		—	脚 部	上底 7.5 中底 7.5 下底 8.5	長石・雲母	青透	青い紫色	外:刺突連続文。	——	——	

第35表 出土遺物観察表 繩文土器②

〔その他〕 底 部

234~239は底部である。いずれも上部底で、外底端はやや丸味を帯びるが、234のみがやや角張る。236を除いて底径が復元可能である。復元底径の値から、小型のもの237・238と大型のもの234に分けられる。235・236はその中间に位置するものである。復元底径は237が5.4cm、234が12.8cm、235が8.0cmを測る。



第45図 出土遺物実測図 繩文土器③

N O	場	区	レベル	形	種	厚	深	土	性	色	調	文様及び調査	形	質	備考
234	V	B	4	135.795	底	基	底部 7.5 外端部 2.1 全体 6.0	灰石	普通	内: 灰褐色 外: 鹿灰白色	内: ナゲと斑状の押印。 外: 外端部: ナゲ。	外端部は、やや角張る。 外端部は、やや上げ延。 復元直径 12.8cm。			
235	V	A	6	136.338	底	基	底部 9.0 外端部 9.0 全体 5.0	灰石・基母	普通	内: 灰褐色 外: 青い褐色	内: ナゲと斑状による調査。 外端部: 丁寧なナゲと斑状によ る調査。	外端部は上げ延。 直径 8.0cm。			
236	N	A	5	135.907	底	基	底部 11.0	灰石・基母	普通	内: 灰褐色 外: 鹿灰白色	内: ナゲ: やや丁寧なナゲ。 外端部: ローリングが残しい。	外端部は上げ延。 直径 8.0cm。			
237	V		—	底	基	底部 10.0 外端部 11.0 全体 5.0	灰石・基母	良好	灰褐色	内: ナゲ。	外端部は大きな上げ延で、中 心部の高さ 7cm。 直径 5.4cm。				
238	V	A	6	136.776	底	基	底部 9.0 外端部 12.0 全体 5.0	灰石	良好	灰褐色	内: ナゲと斑状による調査。 外: ナゲで、一部に擦り付。	外端部は、やや上げ延。 復元直径 8.3cm。	背面に壓縮 を施す。		
239	N	A	5	136.705	底	基	底部 5.0 外端部 10.0 全体 4.0	灰石・基母	普通	青褐色	外: ナゲと斑状による調査。 外: 比較的丁寧なナゲ と斑状による調査。	外端部は、やや上げ延。 復元直径 6.8cm。			

第36表 出土遺物観察表 繩文土器②

〔2〕繩文石器

(1) 叩き石・磨石

① 叩き石 (240~245)

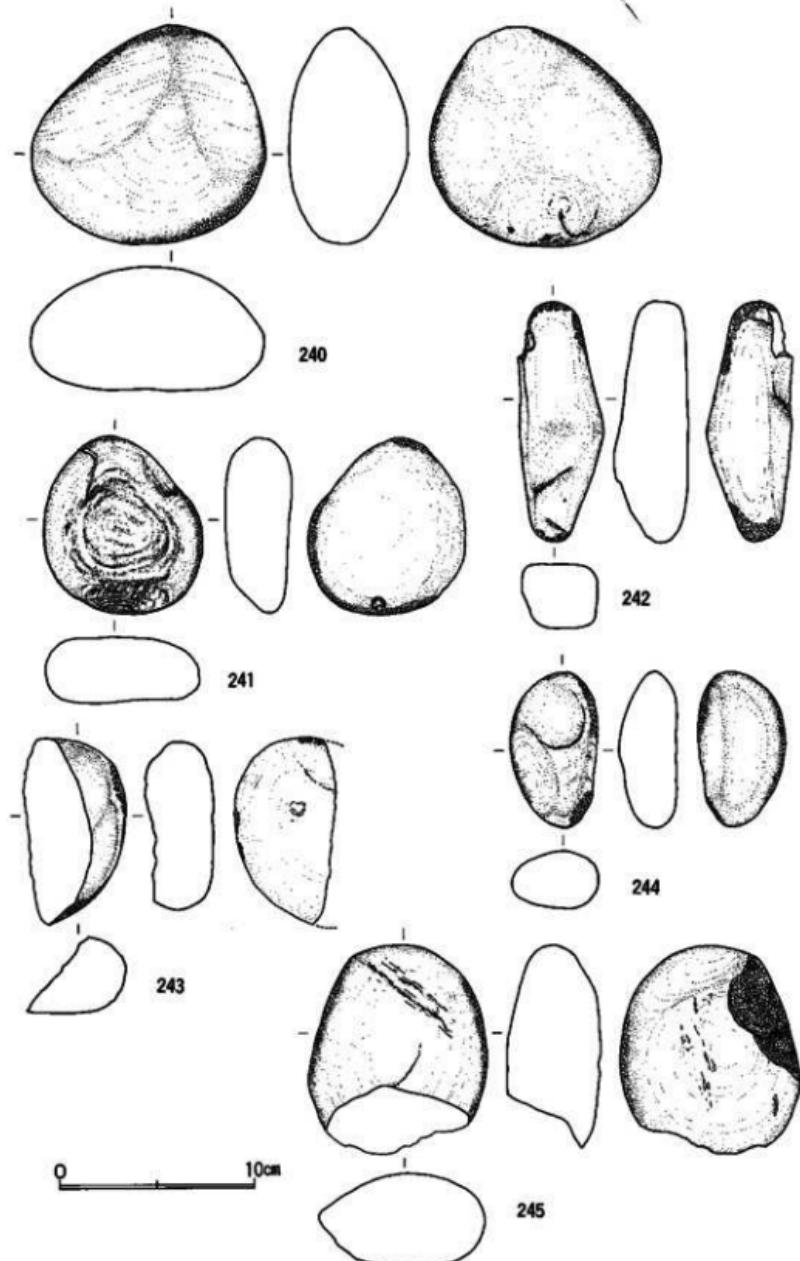
自然石をそのまま使用したもので、石器の先端部や側面部に叩打痕が残る。

② 磨石 (246~255)

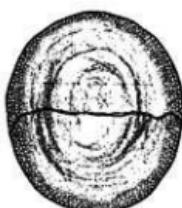
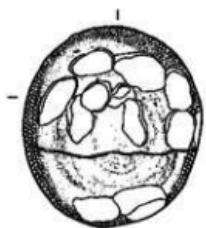
やや扁平で、丸味を帯びた自然礫を用いている。扁平部の石面は磨りのために、滑らかな肌触りである。他方、側面は叩き石としても利用されており、併用石器の一つである。石材は246のみが凝灰岩で、他は砂岩である。

N O.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
240	叩き石	砂岩	10.98	10.97	6.05	1,001.53	A-4 区
241	+	+	8.93	8.23	3.39	378.82	A-3 区
242	+	+	7.22	4.38	3.23	267.88	A-6 区
243	+	+	8.75	(5.02)	3.47	219.25	A-5 区
244	+	+	7.87	4.43	2.87	148.52	A-2 区
245	+	+	(10.22)	8.55	4.75	635.22	
246	磨石	凝灰岩	10.16	9.17	4.16	608.83	A-6 区
247	+	砂岩	11.57	8.05	3.18	438.30	A-1 区
248	+	+	10.00	6.92	5.24	715.90	A-6 区
249	+	+	(8.89)	7.83	6.08	632.78	
250	+	+	6.25	6.04	4.72	254.32	A-1 区
251	+	+	4.73	4.03	2.45	75.75	A-5 区
252	+	+	(5.25)	(4.75)	3.93	143.18	A-3 区
253	+	+	(4.00)	(5.92)	4.05	137.19	
254	+	+	9.28	(3.14)	5.42	378.41	A-4 区
255	+	+	9.85	(6.12)	5.56	470.15	A-2 区

第37表 叩き石・磨石計測表



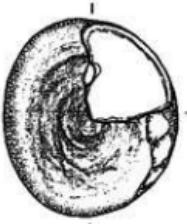
第46図 出土遺物実測図 繩文石器①



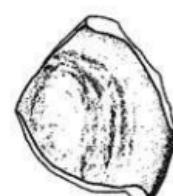
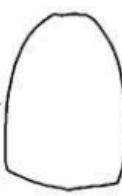
246



247



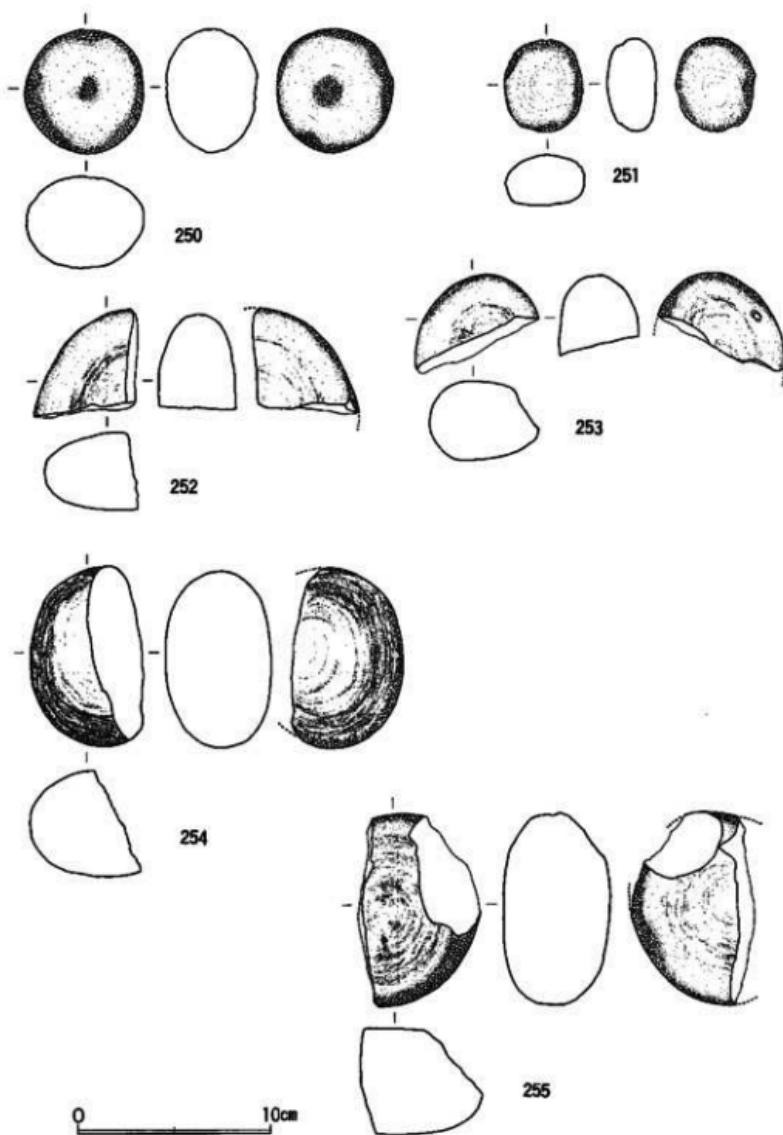
248



249

0 10cm

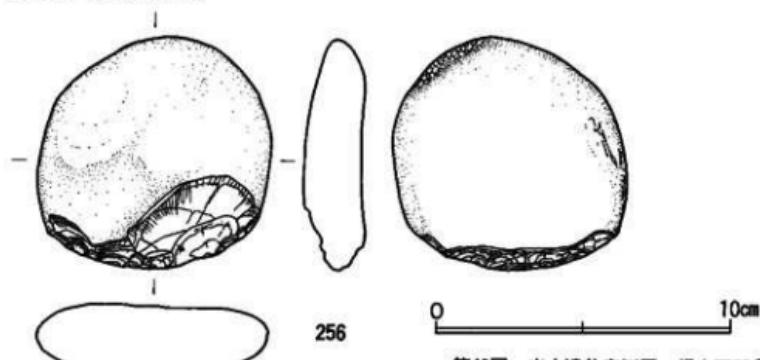
第47図 出土遺物実測図 繩文石器②



第48図 出土遺物実測図 繩文石器③

(2) 砥 器 (256)

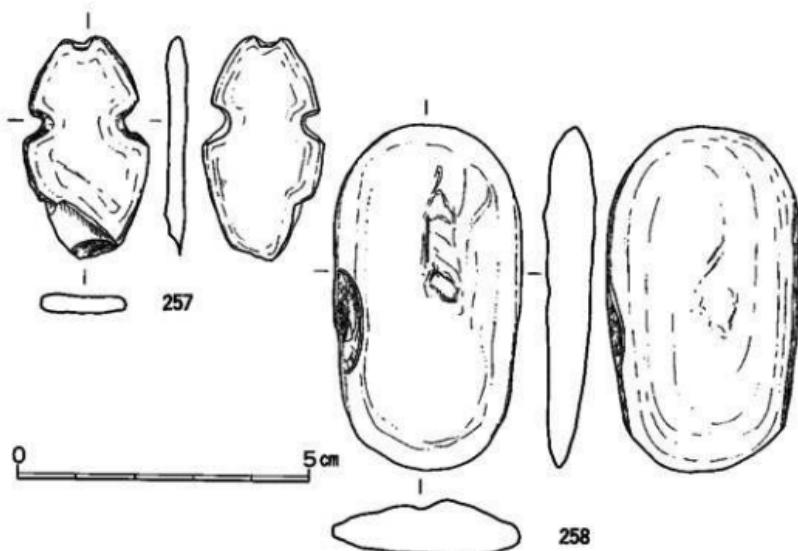
扁平で丸味を持った砂岩砾の一側辺に、両面より剥離が行われ、刃部を造り出している。刃部には、潰れが見える。



第49図 出土遺物実測図 繩文石器④

(3) 垂飾品 (257・258)

欠損品のため先端部の確認が出来ないが、側面部を摩り減らし、少なくとも三個所に摩り込みを施したもの (257) と、両側辺部にのみに長軸方向への摩り込みが見られ、未製品と思われる (258) がある。石材はいずれも赤色項岩製である。



第50図 出土遺物実測図 繩文石器⑤

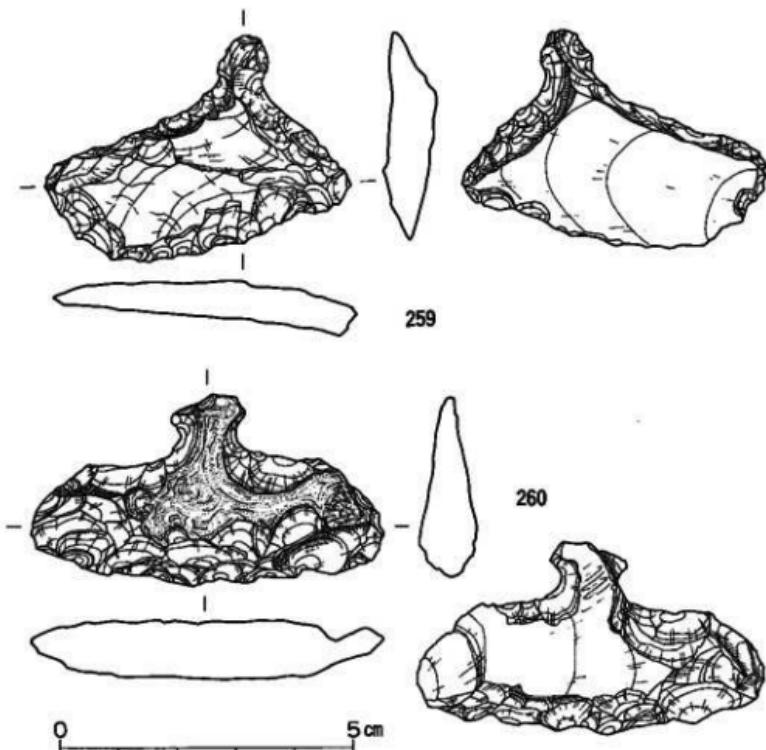
No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
256	環器	砂岩	(7.82)	7.91	1.96	181.72	A-6区
257	垂飾品	赤色須岩	3.66	2.13	0.32	4.78	—
258	+	+	5.82	3.18	0.91	26.95	A-4区

第38表 環器・垂飾品計測表

(4) 石器

① 横形(259・260)

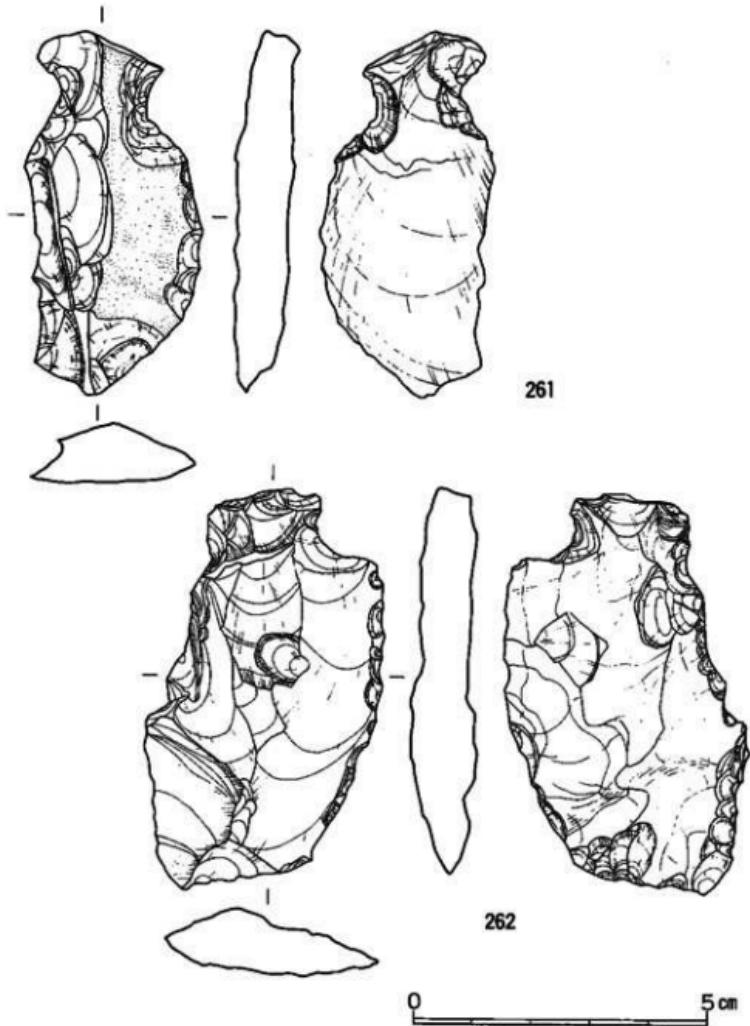
259はチャート製で、つまみ部分は小さく、左右対象ではない。裏面は剥離面がそのまま利用され、表面のみに刃部加工が見られる。260は安山岩製で、259と同様につまみ部分が小さく、刃部は両面からの平坦剥離が施され、ほぼ左右対象である。



第51図 出土遺物実測図 繩文石器⑥

② 縦形 (261・262)

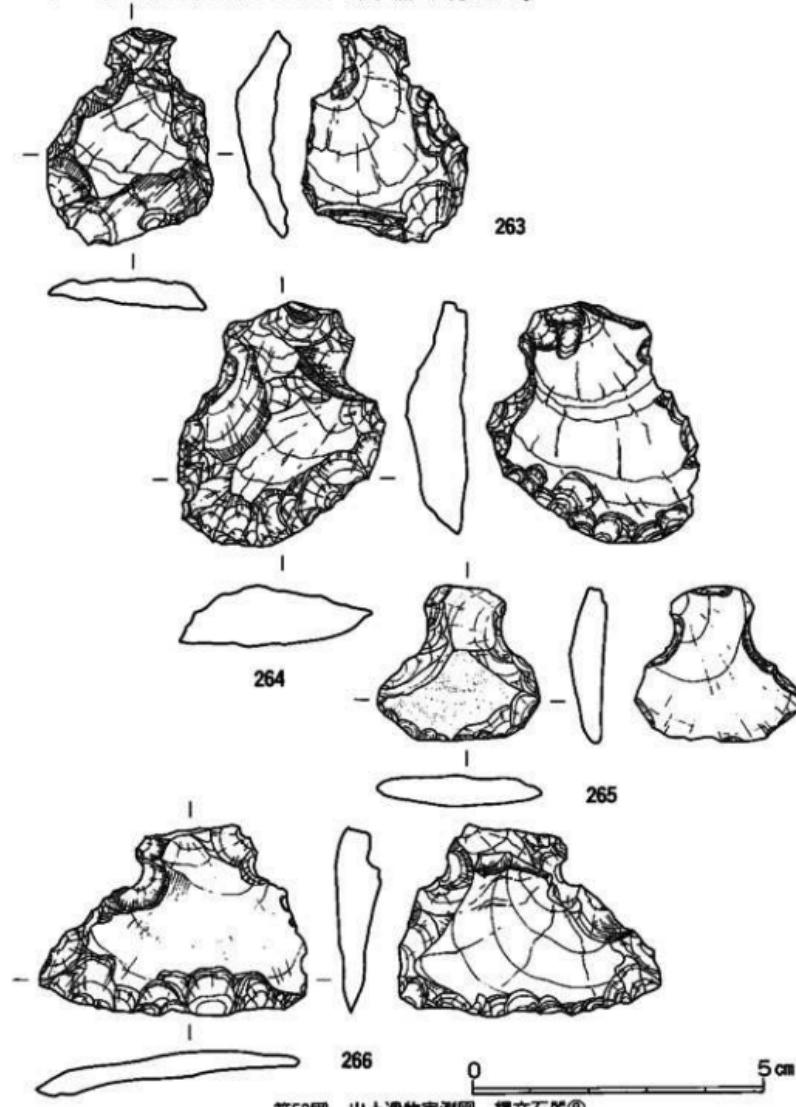
縦長剥片を素材とし、打点部の側面に粗い快入つまみ部分を作っている。裏面は剥離面がそのまま使用されており、安山岩製で、僅かに一側刃の表面部に刃部を造り出したもの（261）や、チャート製で、縦長剥片を素材として粗い快入の部を造り、両側刃部に刃部加工が見られるもの（262）とがある。いずれも片面からの加工である。



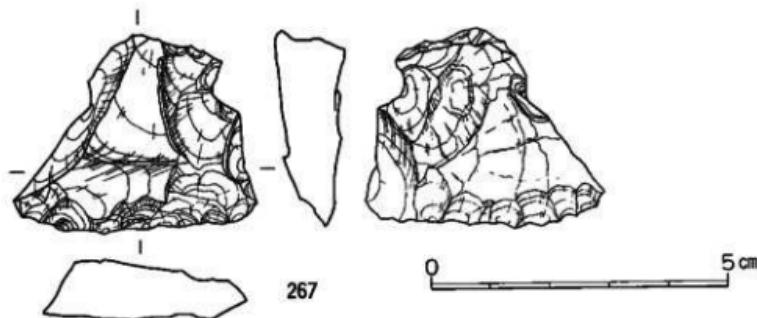
第52図 出土遺物実測図 縄文石器⑦

③ 不定形型 (263~267)

いずれも不定形な剥片から作られたもので、それぞれの打点部の側面に粗い快入によるつまみ部が形成されており、裏面は剥離面を残す。264~267は両面加工の刃部を持ち、263は剥離によってできた側辺を、刃部とした僅かな調整加工が見られる。



第53図 出土遺物実測図 縄文石器⑧



第54図 出土遺物実測図 繩文石器⑨

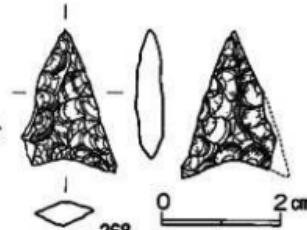
No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
259	石匙 横型	チャート	3.45	5.18	0.72	12.30	A-5区
260	*	安山岩	3.16	5.85	0.95	15.12	A-6区
261	石匙 縦型	安山岩	6.13	2.75	1.00	17.31	表土
262	*	チャート	6.45	3.93	1.18	17.43	表土
263	石匙 不定期	チャート	3.57	2.68	0.65	6.24	—
264	*	チャート	4.11	3.46	1.01	14.18	—
265	*	安山岩	2.52	2.75	0.65	3.67	A-1区
266	*	チャート	3.65	4.45	0.74	8.63	A-6区
267	*	チャート	3.26	4.05	1.18	13.33	A-5区

第39表 石匙(横・縦・不定型) 計測表

(5) 石鎌 (268)

一点のみの出土である。チャート製の二等辺三角鎌で、基部に浅い凹みを造り出している。

長さ2.34cm、残存幅1.57cm、厚さ0.39cm、重さ1.21gを測り、A-4区IV層からの出土である。

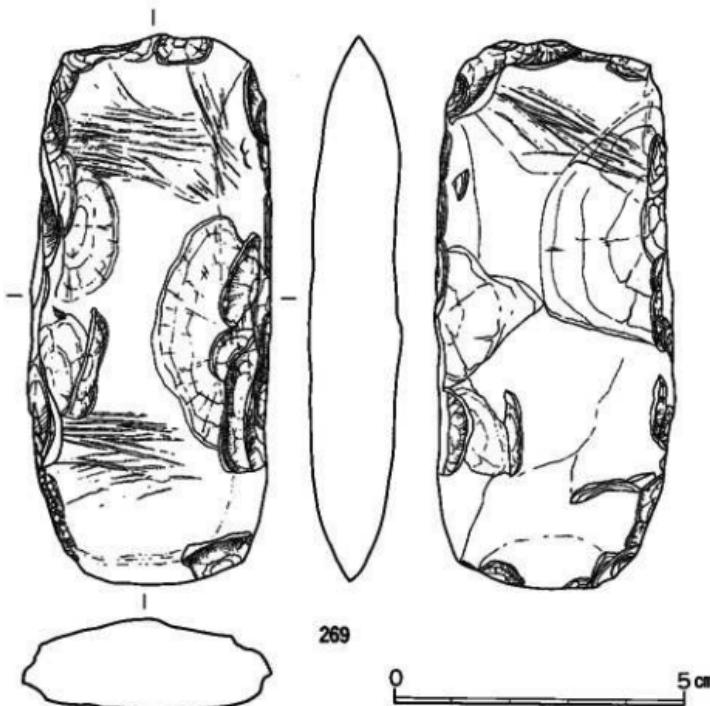


第55図 出土遺物実測図 繩文石器⑩

(6) 磨製石斧 (269)

安山岩製の両刃石斧が一点、出土している。側面の研磨は棱線部をなくす程度に留まっており、両側面に剥離痕が残る。平坦部にも両面に側面からの剥離面が残る。正面部の研磨は長軸方向に対して斜め方向の削痕で、その後、横方向への粗い削痕が加えられている。裏面はほぼ長軸方向の削痕で、その後、横方向の粗い削痕が加えられている。

長さ9.32cm、幅4.11cm、厚さ1.56cm、重さ106.04gを測り、A-6区IV層からの出土である。



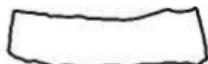
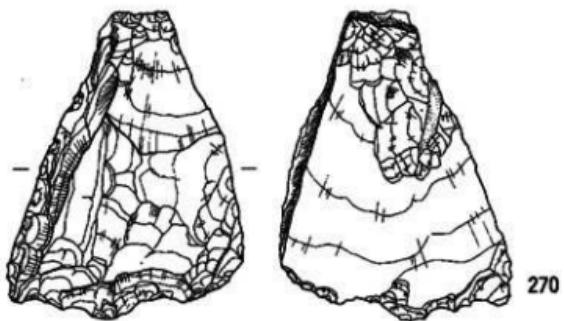
第56図 出土遺物実測図 紋文石器⑪

(7) スクレー/バー(270~277)

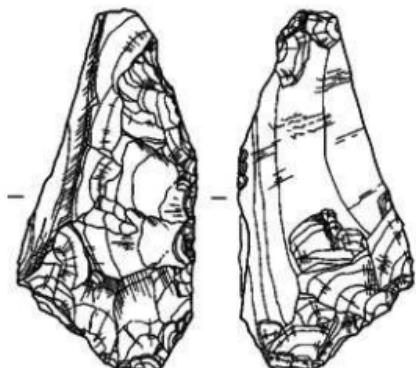
8点の出土で、いずれもチャート製である。273は両側辺とも表裏面からの刃部調整加工で、270~272・274~277は片面からの刃部調整加工である。

No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
270	スクレー/バー	チャート	5.15	3.90	1.08	20.93	_____
271	+	+	4.27	3.78	0.75	17.99	A-5区
272	+	+	6.00	2.94	1.31	25.95	_____
273	+	+	4.36	1.96	0.43	5.47	A-3区
274	+	+	4.55	4.10	0.77	18.86	_____
275	+	+	2.52	4.23	0.79	9.17	A-6区
276	+	+	1.88	2.87	0.75	4.19	A-6区
277	+	+	2.34	3.43	0.72	8.08	_____

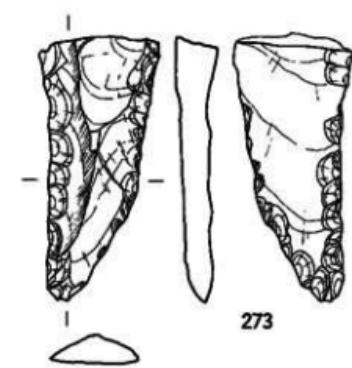
第40表 スクレー/バー計測表



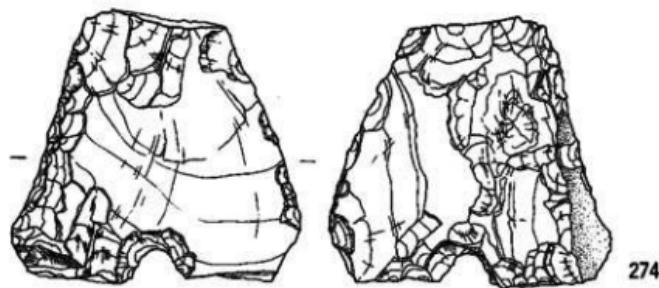
271



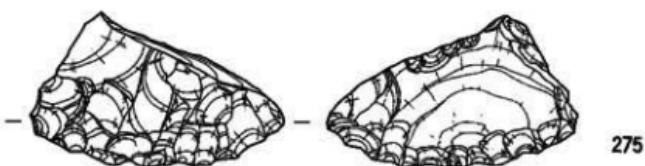
272



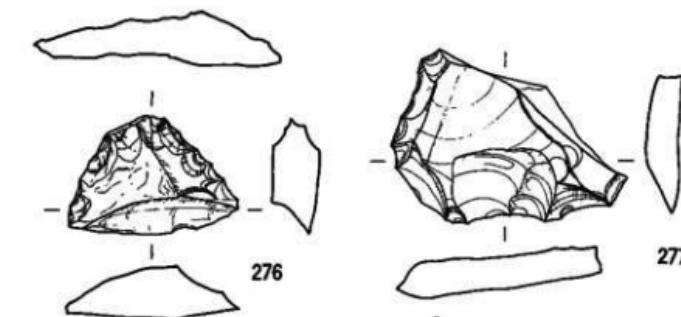
第57図 出土遺物実測図 繩文石器②



274



275



276

277

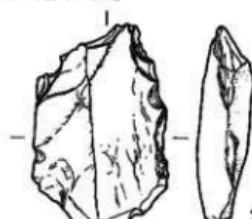
0 5cm

第58図 出土遺物実測図 繩文石器①

(8) ドリル (278)

安山岩製で、1点のみの出土である。剥片素材から尖り部を作り出している。

長さ3.32cm、幅2.19cm、厚さ0.87cm、重さ6.89g
を測り、IV層からの出土である。



278

0 2cm

第59図 出土遺物実測図 繩文石器②

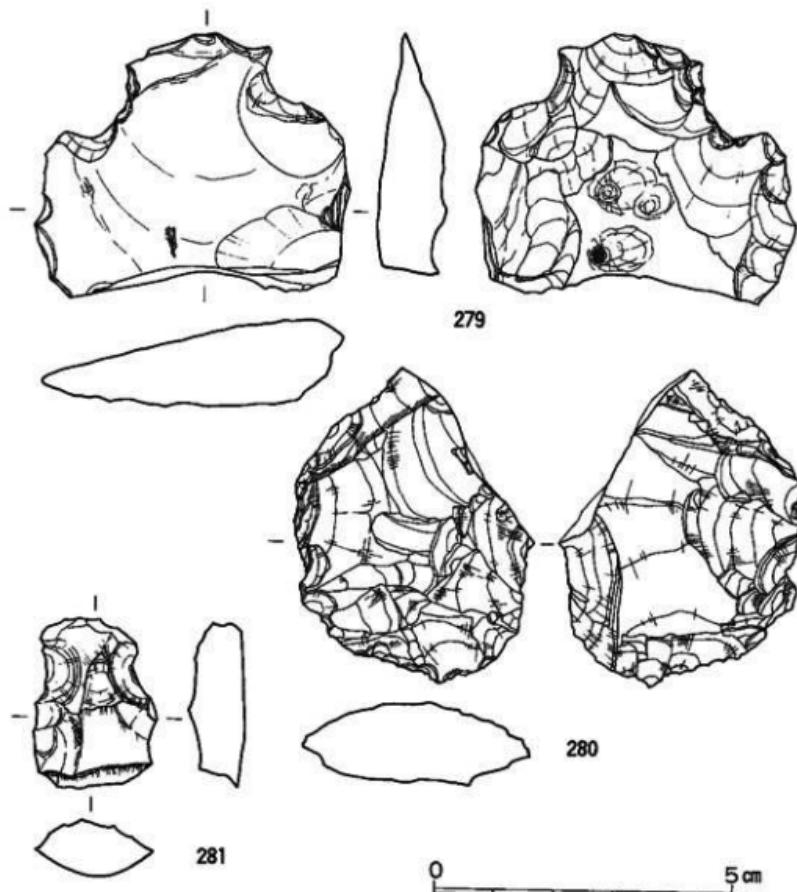
(9) 不明石器 (279~283)

279・281は、安山岩製で、粗い快入部が見られるが欠損品である事から不明石器とした。

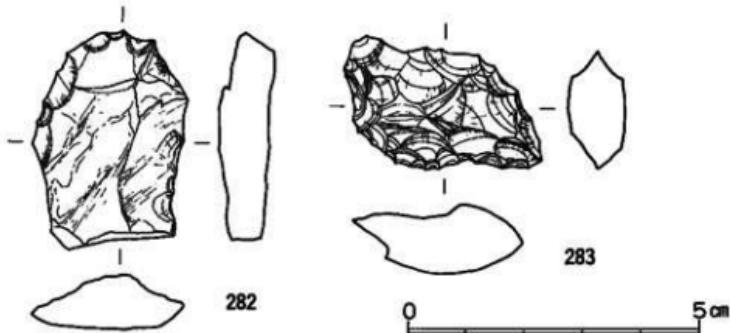
280・282・283はチャート製である。

N o.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
279	不明石器	安山岩	3.93	4.93	1.27	27.71	A-6区
280	+	チャート	4.92	3.98	1.32	33.36	B-4区
281	+	安山岩	2.81	1.92	0.67	5.99	
282	+	チャート	3.27	2.35	0.68	10.48	A-2区
283	+	チャート	1.93	2.71	1.15	7.38	A-3区

第41表 不明石器計測表



第60図 出土遺物実測図 繩文石器⑮



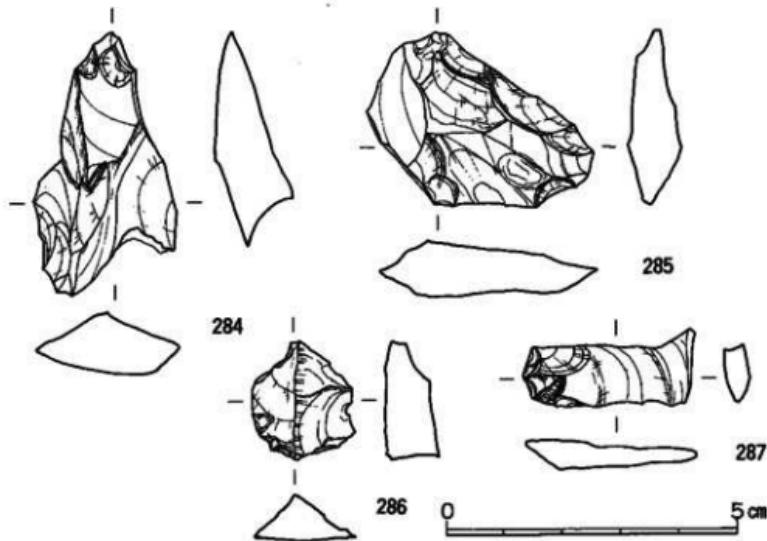
第61図 出土遺物実測図 縄文石器⑩

(10) 剣 片 (284~287)

出土遺物の中から、チャート 3 点と黒曜石 1 点を図化した。

No.	器種	石 材	計 測 値				出土点
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
284	剣 片	チャート	3.79	2.45	1.15	9.45	A-3区
285	+	チャート	2.79	3.65	0.93	8.07	
286	+	黒曜石	1.92	1.62	0.81	2.21	A-3区
287	+	チャート	0.95	2.83	0.41	1.49	

第42表 剣片計測表



第62図 出土遺物実測図 縄文石器⑪

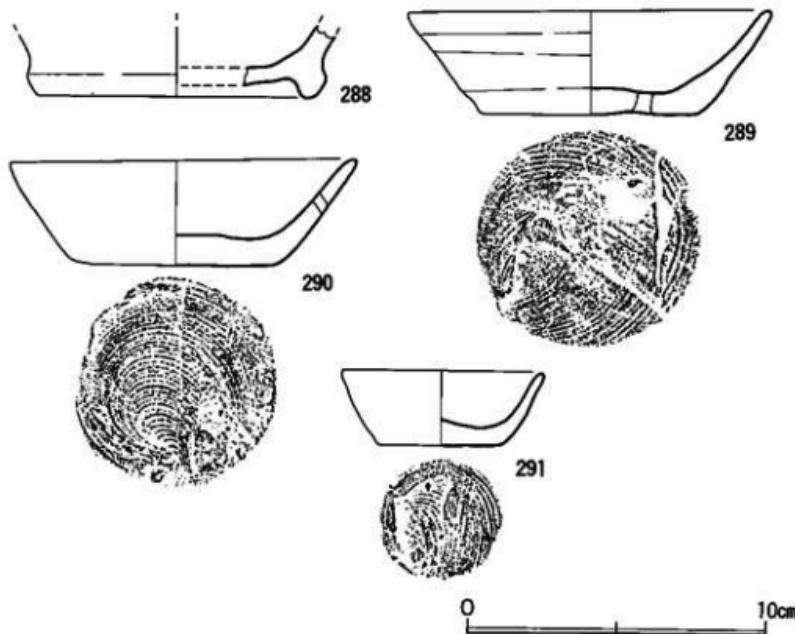
[3] 中世遺物

288は青磁で、復元底径9.3cm・高台高3.5~6.0cmを測る。釉色は緑灰色で、外器面に薄く施釉されている。内器面と高台の疊付きは無釉である。

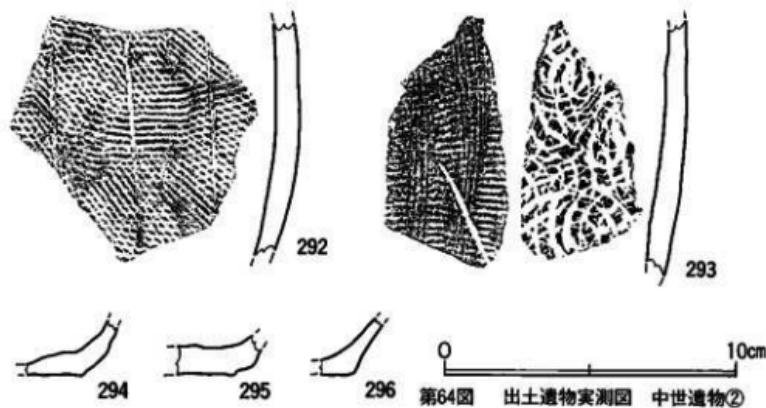
289~291は墓塚から出土した糸切り離しの土師器（完形品）で、埋納品と思われる。器形的には289・290が大型坏で、291は小型である。289は口径12.1cm・器高3.4cm・底径7.2cmを測る。体部は直線的に伸びているが、器形は多少、歪で、底部の中央に5×7mm幅の円孔が穿ってある。290は口径11.6cm・器高3.5cm・底径6.8cmを測る。体部は289と同様に直線的に伸びており、口縁直口である。これ又、体部の中途中に4mm幅の円孔が穿っている。291は口径6.8cm・器高2.4cm・底径4.1cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外湾する。内底面の中央部は凸面状を呈している。

292・293は須恵器で、292は外器面に横位と縦位の平行叩き後、縦位の弱いナデが加えられている。293は外器面に弱い平行叩き後、292と同じく縦位の極く弱いナデが加わる。

294~296は糸切り離しの土師器の細片である。



第63図 出土遺物実測図 中世遺物①



第64図 出土遺物実測図 中世遺物②

(左)外:外表面・内:内部面

NO	器種	寸法mm	施 土	焼 成	色 調	文様及び調査	形 狀 の 特徴	備 考
292	青磁	底部5-6 体部 8	白灰色 (暗 灰)	良好	褐灰色	外・外底:ロクロ開窓底。 内底:丁寧なナギ。	側面径 9.3cm。 高さ高 3.5-6.0 cm。	内部面と高台の接合部は、 無地。 外表面の施釉は薄い。
293	土師器	底部 6.5-9 外底高 11 体部 4-9	良 好	良 好	褐褐色	内・外:ロクロ開窓底。 内:ナギが加わる。 外底:み切り離し後、ナギ。	側面は直線的に伸びる。 断面は多少、異 口径 7.5x1.2 cm。 底部の中央に丸く切ってあ る。幅は上部で 5 cm、下部で 7 cm。 口径 12.1cm。 最高 3.4cm。 底径 7.3cm。	規約品・完形品 外底面に、微かに腹足压痕 が付く。
294	土師器	底部 9-10 外底高 10 体部 5	暗 灰	良 好	褐褐色	内・外:丁寧なナギ。 外底:み切り離し後、一箇で ナギ。	側面は、直線的に伸びて口 縁近くに、中途に 1 cm 間の孔が 寄つてある。 外底面は、やや丸味を帯び る。 口径 11.6cm。 最高 3.5cm。 底径 6.8cm。	規約品・完形品
295	土師器	底部 6-8 外底高 7 体部 3-4	暗 灰 (上 実)	良 好	褐褐色	内・外:施して丁寧なナギ。 内底:ロクロ開窓底。 外底:み切り離し後、ナギ。	側面は、内面気泡に立ち上 がり、口縁部で僅かに外側。 内底面の中央部は凸。 口径 6.5cm。 最高 2.4cm。 底径 4.1cm。	規約品
296	灰瓦	脊部 上位 7 中位 8 下位 6.5	高石の投入 が目立つ	良 好 (暗 灰)	灰黑色	内:ナギ。 外:穂先と瓶口の平行叩きの 跡、瓶底のぬいナギ(2 cm 幅のものが生じている。)	——	——
297	楕円器	体部 上位 8 中位 7 下位 7	やや長石の 盛入が目立 つ	良 好 (暗 灰)	灰白色	外:弱い平行叩き後、瓶底の 弱くぬいナギ。	——	——
298	土師器	底部 3.5-8 外底高 8 体部 4	暗 灰	普 通	褐 色	内・外・内底:丁寧なナギ。 外底:み切り離し後、ナギ。	内底面は中央部で、やや復 む。	——
299	土師器	底部 9-10 外底高 10	良	良 好	褐 色	外底:立ち上がりの調整は確 い。 外底:み切り離し後、ナギ。	——	——
300	土師器	底部 4.5 外底高 3 体部 3.5	良	普 通	褐 色	内・外:丁寧なナギ。 外底:み切り離し後、ナギ。	側面の立ち上がりは、やや 外側。	——

第43表 出土遺物観察表 中世遺物

第5節 まとめ

〔縄文時代の調査〕

縄文時代早期の遺物包含層（VI層の褐色土層V層の黒褐色土層）から出土した縄文土器片は、文様や形態からして、ほとんど手向山式土器と見なされる。

（1）器形について

今回の調査における最大の成果は、外器面に手向山式土器特有の菱形押型文の文様を有し、完形に近い壺形土器が出土した事である。

この事は、鹿児島県教育委員会の新東晃一氏が『中尾田遺跡』の報告書（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書15）で、手向山式土器における壺形土器の存在を指摘された事を裏付けた事になる。

さらに、新東氏が同報告書で、壺形土器と併に存在の可能性を示されている円筒土器についても、今回の調査で、底部を欠くだけの完形に近いものが出土した。

ただ、この場合、文様は縦位と横位の組み合わせた直線状の沈線文で、ここでいう手向山式土器の沈線文様とは大きな差異がある。さらに、この文様は、この円筒土器のみに限られ、他に類例をまったく見ない事や、従来の手向山式土器にも出土例が無い事から、この円筒土器を手向山式土器と見なす事は早急であろう。ここでは一応、参考資料に留めておきたい。

（2）文様について

これも、新東氏の上記報告書による分類を基準に、本報告書では計22種類の分類を試みた。新東氏の分類との対比は第44・45表の通りである。

なお、今回の調査では、貝殻刻目文様の土器は出土せず、さらに、凹線文土器と沈線文土器については一括して沈線文土器として扱い、さらに、この文様を6種類に細分した。

〔中世遺構の調査〕

中世遺物の包含層が無く、出土遺物は表土及び搅乱層と中世墓塚に限られたため、僅か9点のみで、時代を特定し得るものはなかった。

したがって、検出された柱穴や墓塚の年代推定が不可能であるが、柱穴の埋土色は、高城跡のII～IV郭のものとまったく同一である所から、城跡と同時代の遺構と見なしてよい。

高城跡については、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査で、15世紀末から16世紀前半の中世城跡であるとの推論がなされている。

今回、検出された柱穴群は馬場道に関連したもので、土手の肩部に打ち込まれた杭や樋の類と思われる。

新東氏による文様分類（中尾田遺跡）

分類	文 様	対比	分類	文 様	対比
a	撚糸文	△	h	円形押型文（指円）	△
b	網目撚糸文	△	i	みみずばれ文	△
c	変形撚糸文	△	j	凹線文)△
d	押圧繩文	△	k	沈線文	
e	山形押型文	△	l	連点文	△
f	菱形押型文	△	m	貝殻刻目文	
g	円形押型文（円）	△			

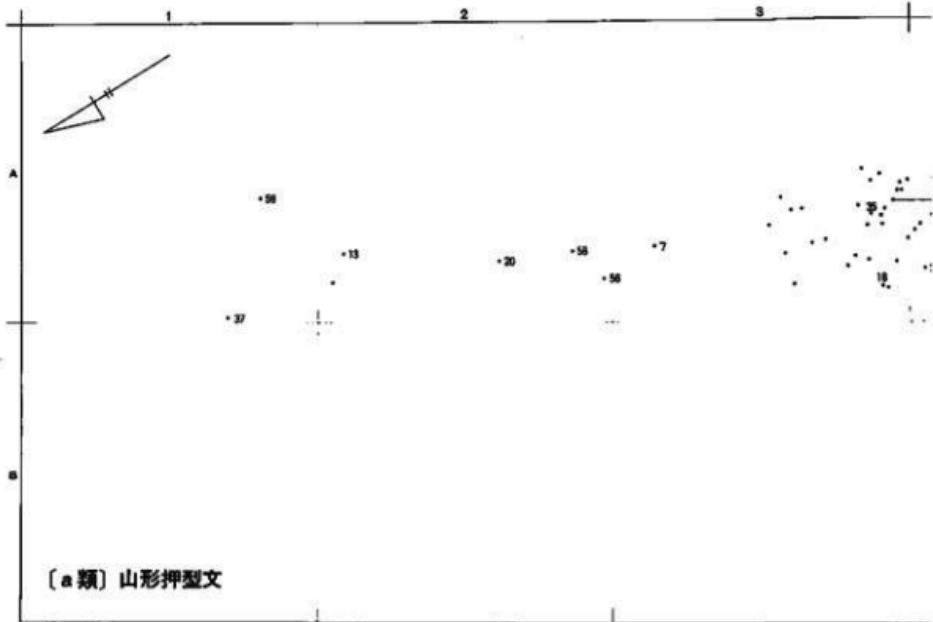
(△印は城・馬場遺跡に對比するものである。)
第44表 手向山式土器文様一覧表 ①

城・馬場遺跡 文様分類

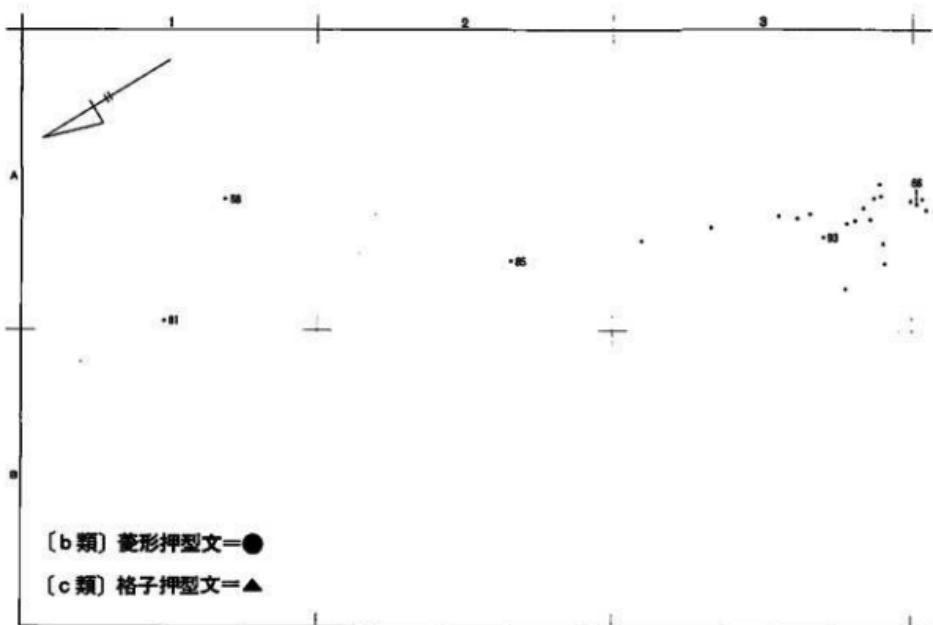
分類	文 様	対比	分類	文 様	対比
a	山形押型文	○	l	変形撚糸文	○
b	菱形押型文	○	m	網目の撚糸文	○
c	格子押型文		n	繩描き文	
d	微隆起突帯文	○	o	網 目 文	
e	沈 線 文	○	p	繩 文	○
f	突帯沈線文		q	同心指円文	○
g	特殊沈線文		r	同心円文	○
h	山形押型文を地文とする沈線文		s	指円状文+同心円文	
i	撚糸文を地文とする沈線文		t	山形押型文+刺突文	
j	繩文を地文とする沈線文		u	微隆起突帯文+刺突文	
k	撚 糸 文	○	v	刺突連続文	○

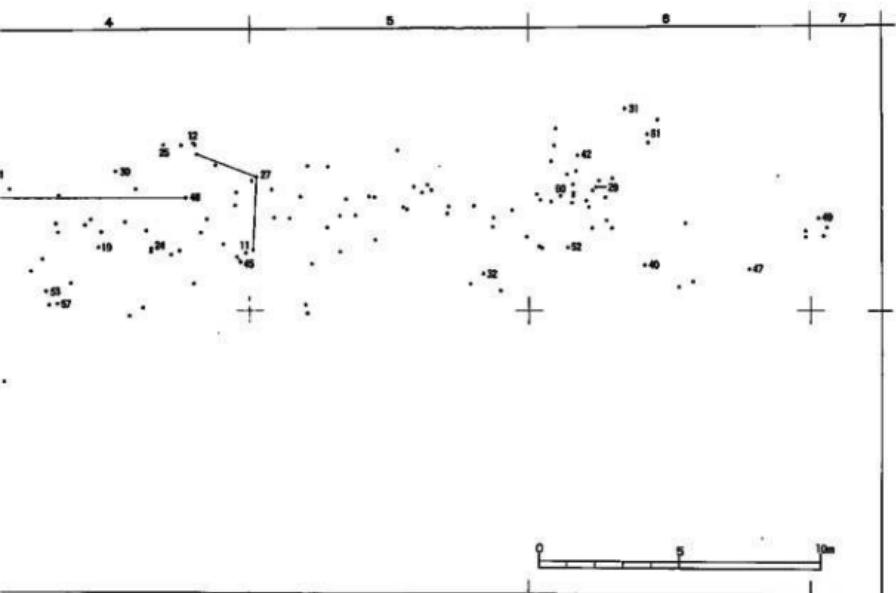
○印は新東氏の分類に該当するものである。なお、城・馬場遺跡では文様の表現に際し、円形押型文（円）=同心円文、円形押型文（指円）=同心指円文、みみずばれ文=微隆起突帯文、連点文=刺突連続文としている。

第45表 手向山式土器文様一覧表 ②

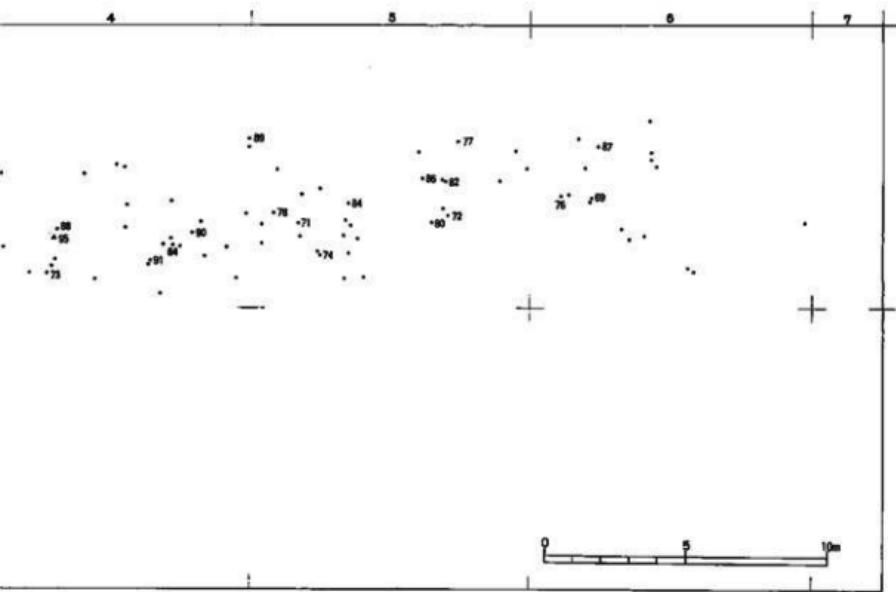


第65図 文様

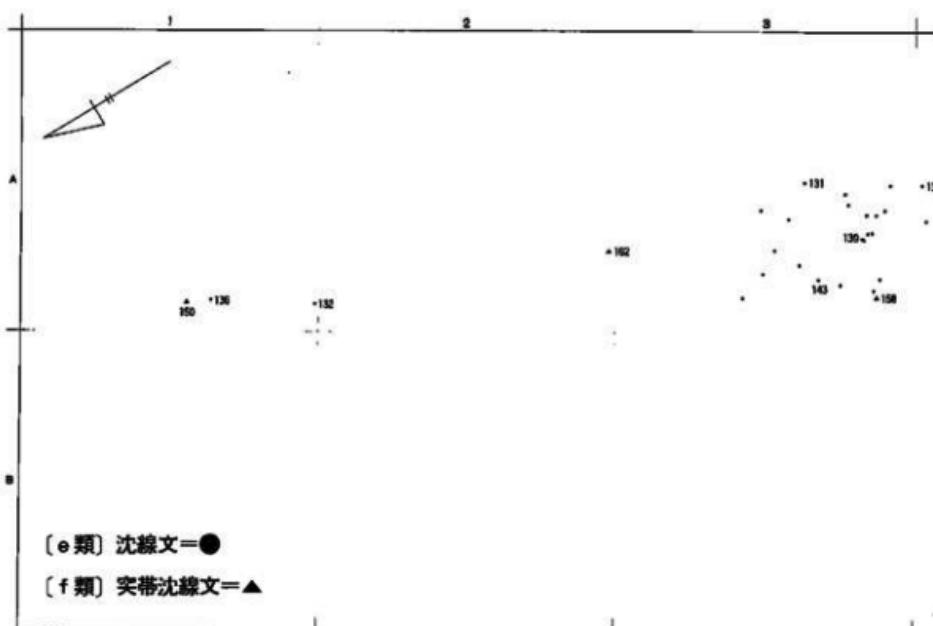
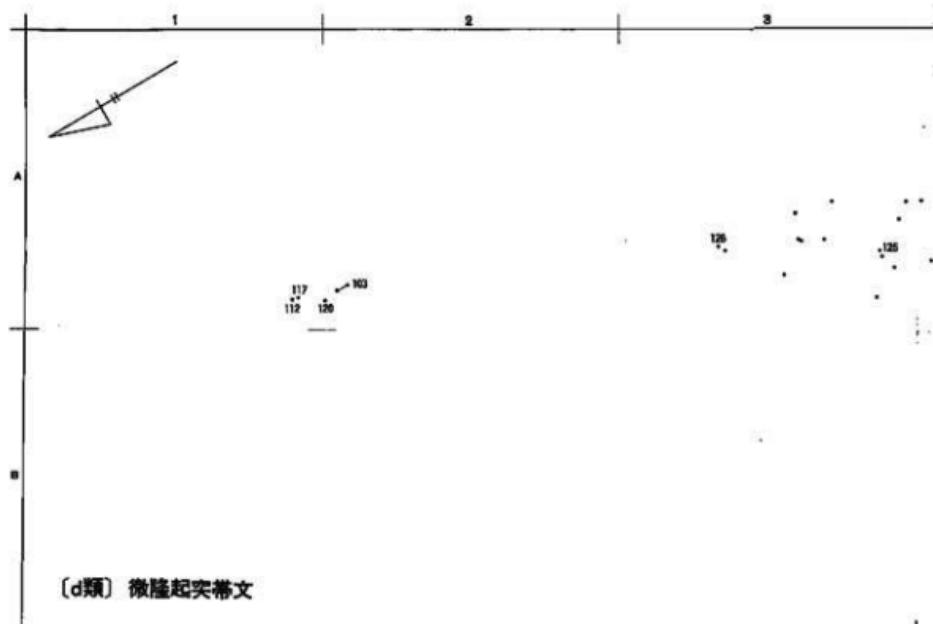


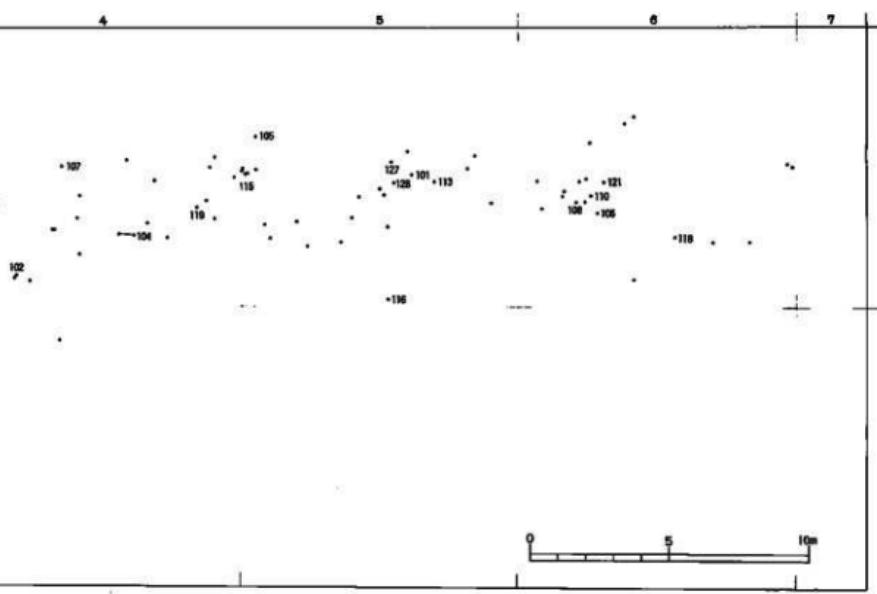


Ⅳ 遺物分布図 ①

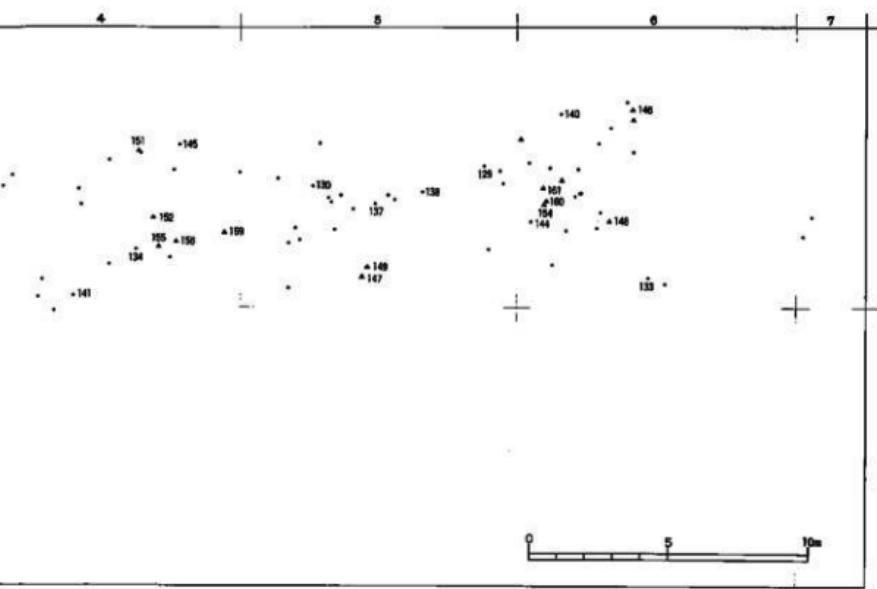


別 遺物分布図 ②

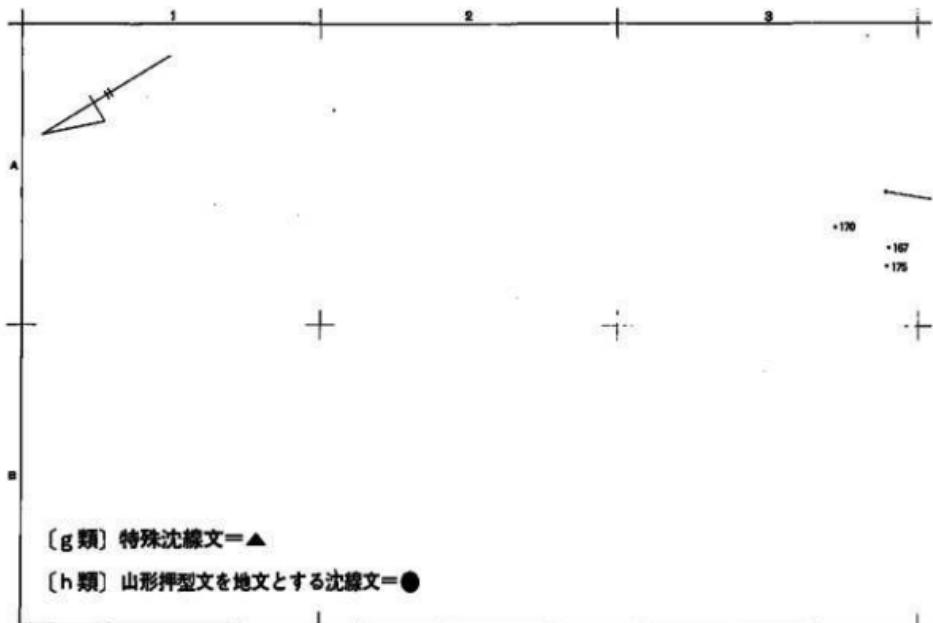




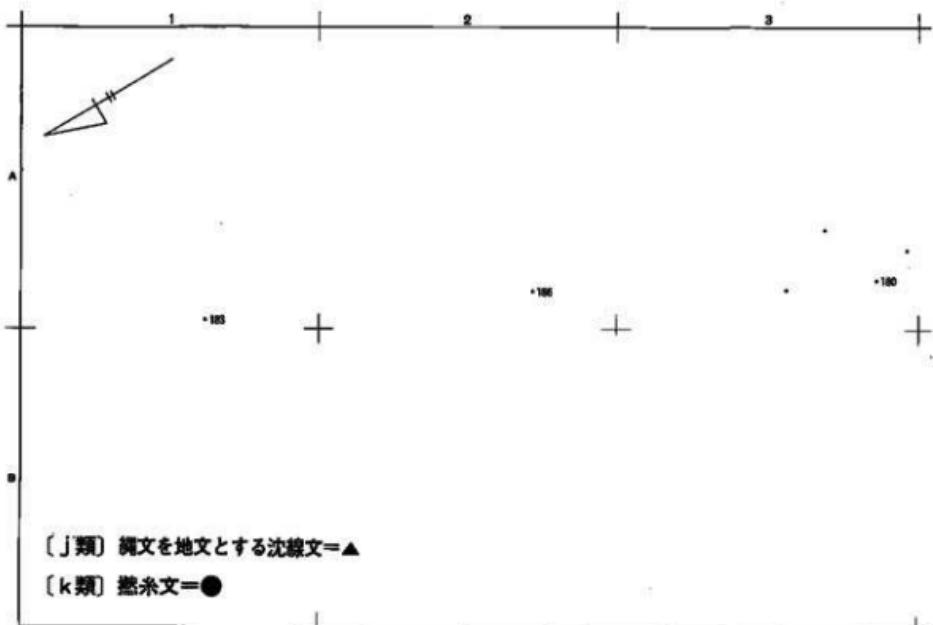
遺物分布図 ③

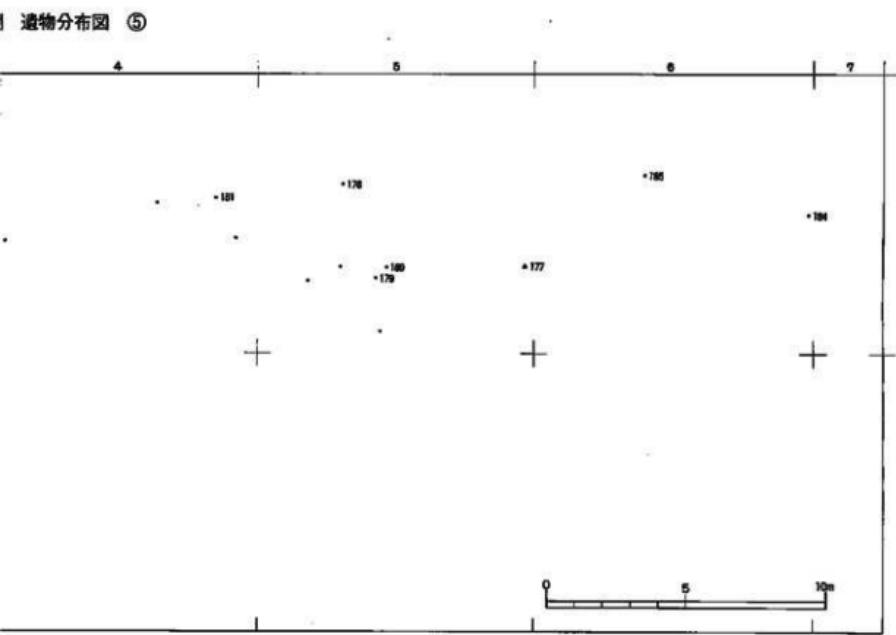
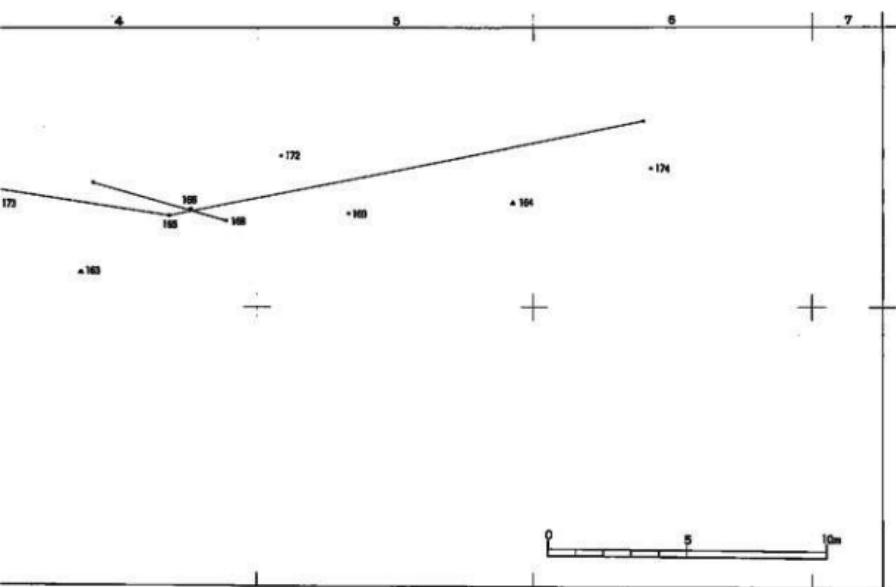


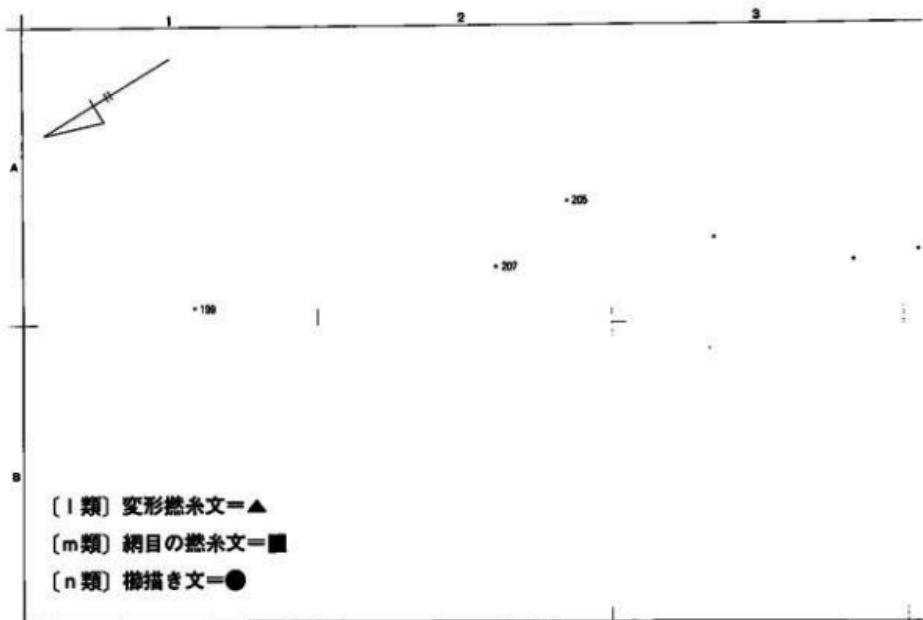
遺物分布図 ④



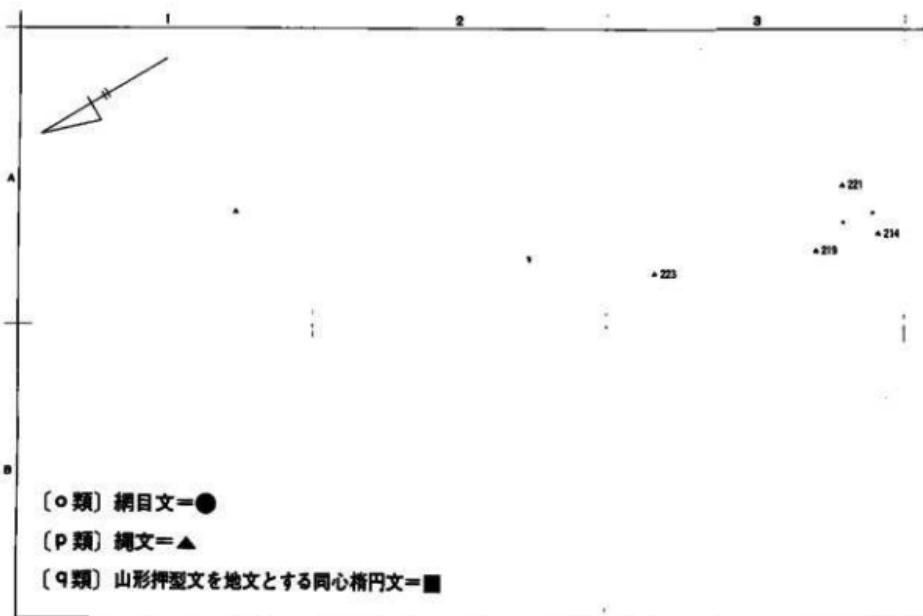
第69図 文様別

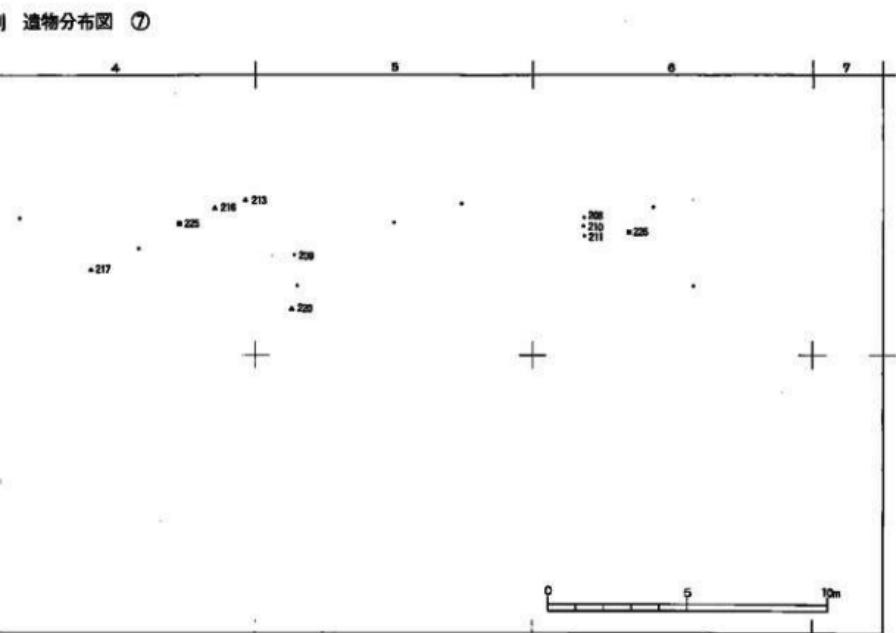
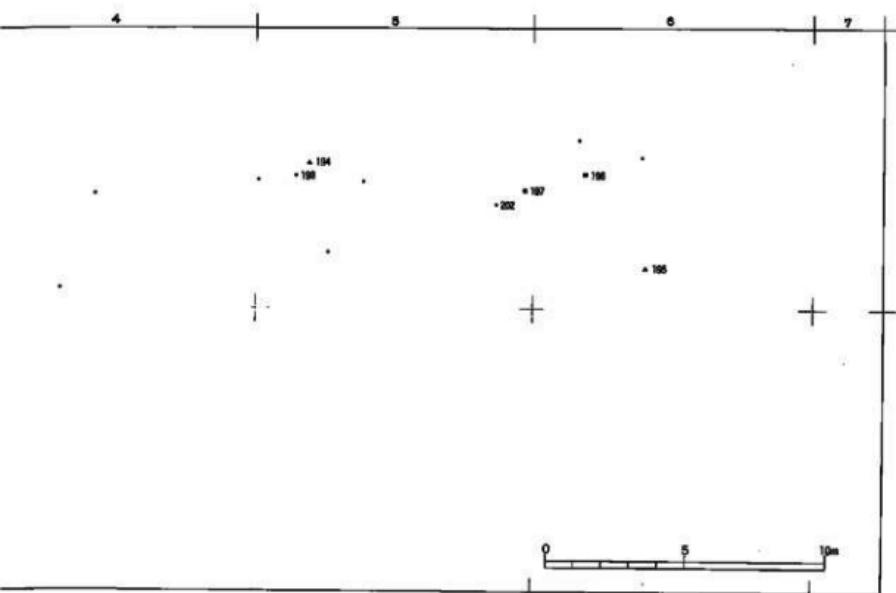


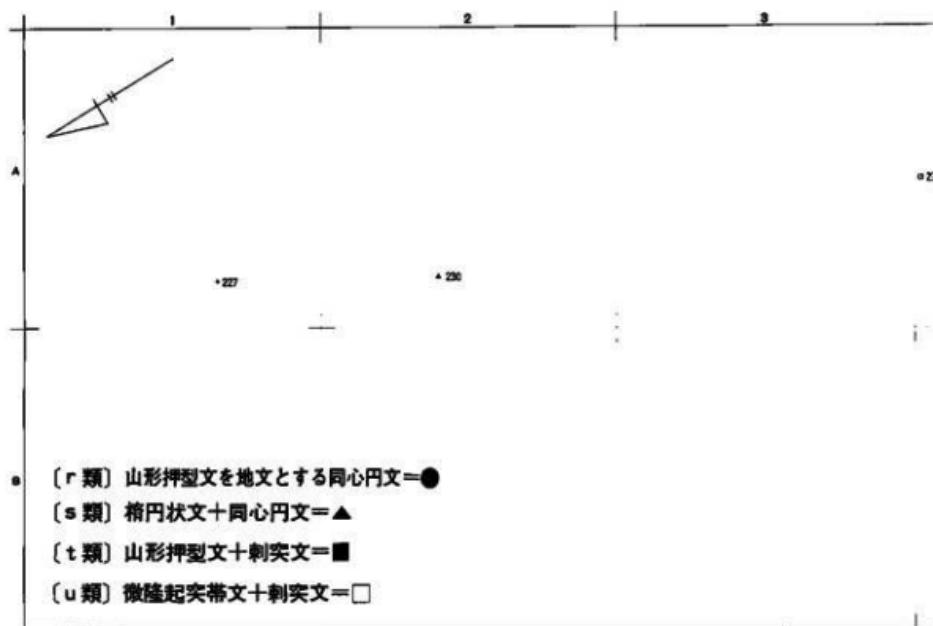




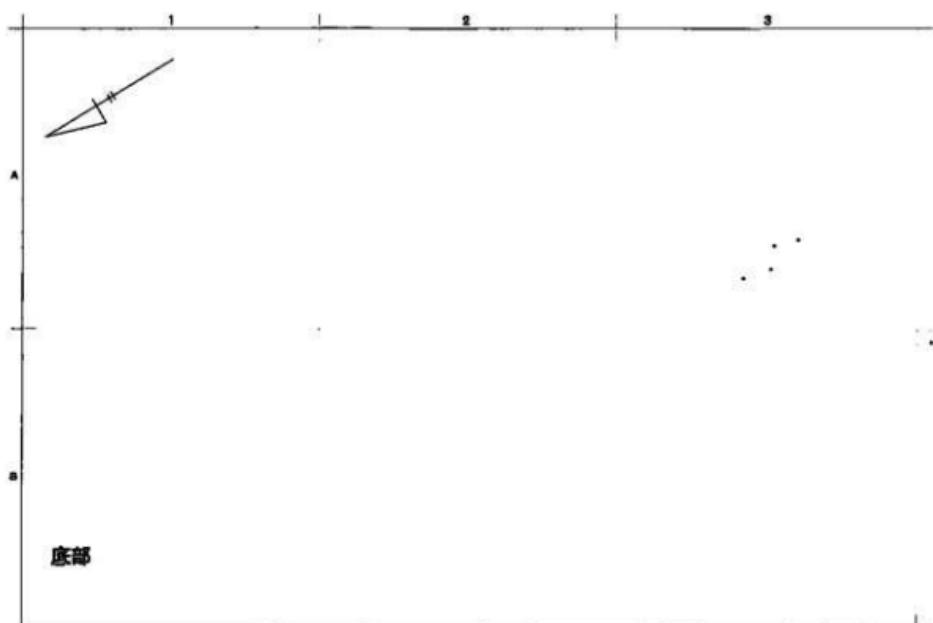
第71図 文様別

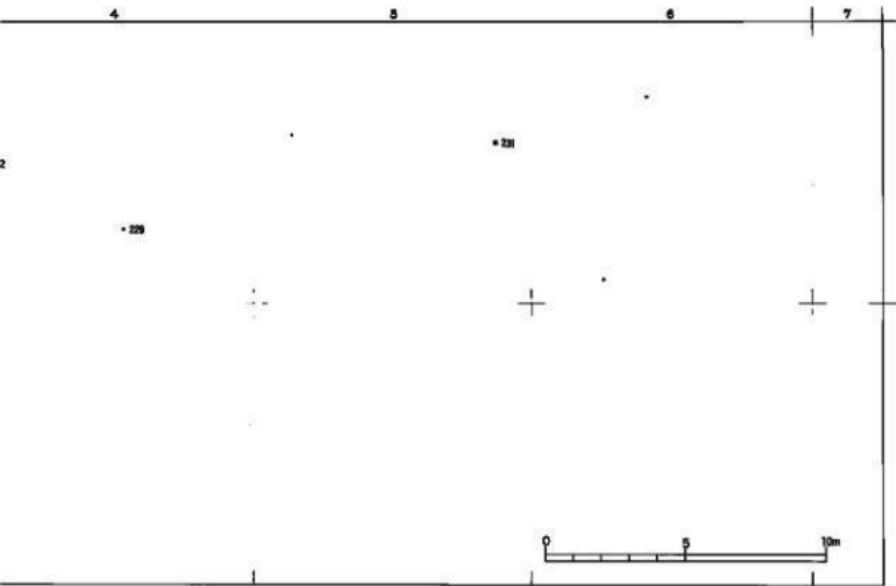




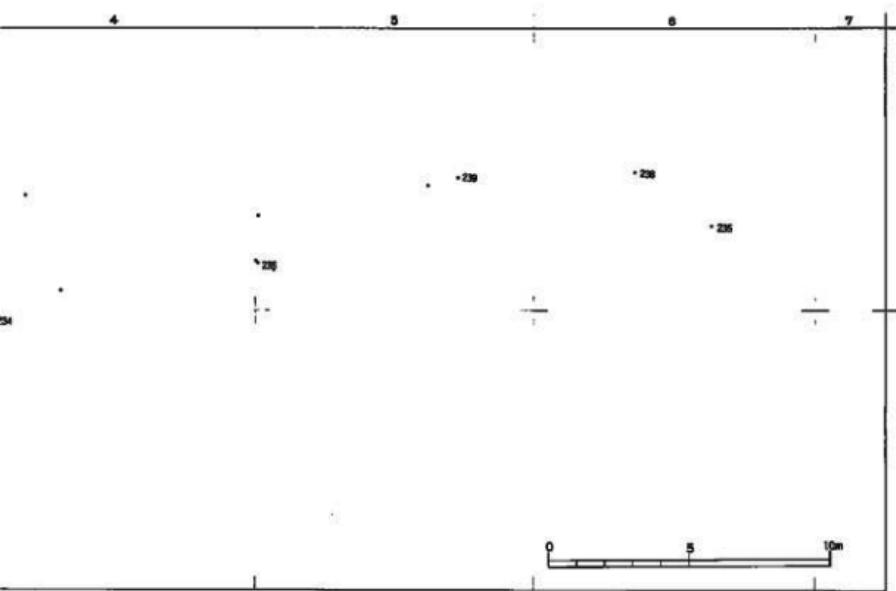


第73図 文様別

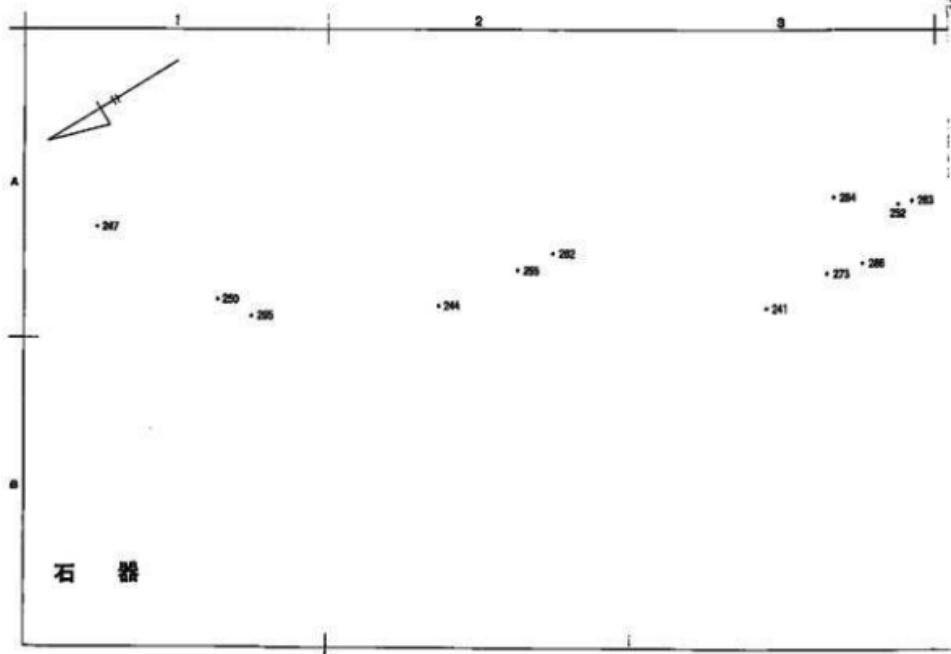




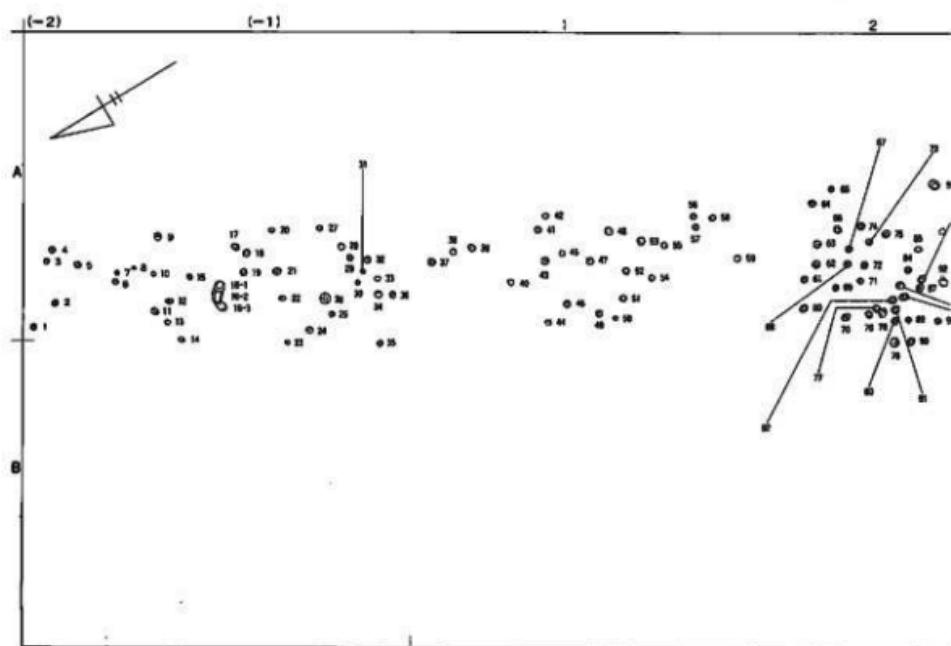
遺物分布図 ⑨



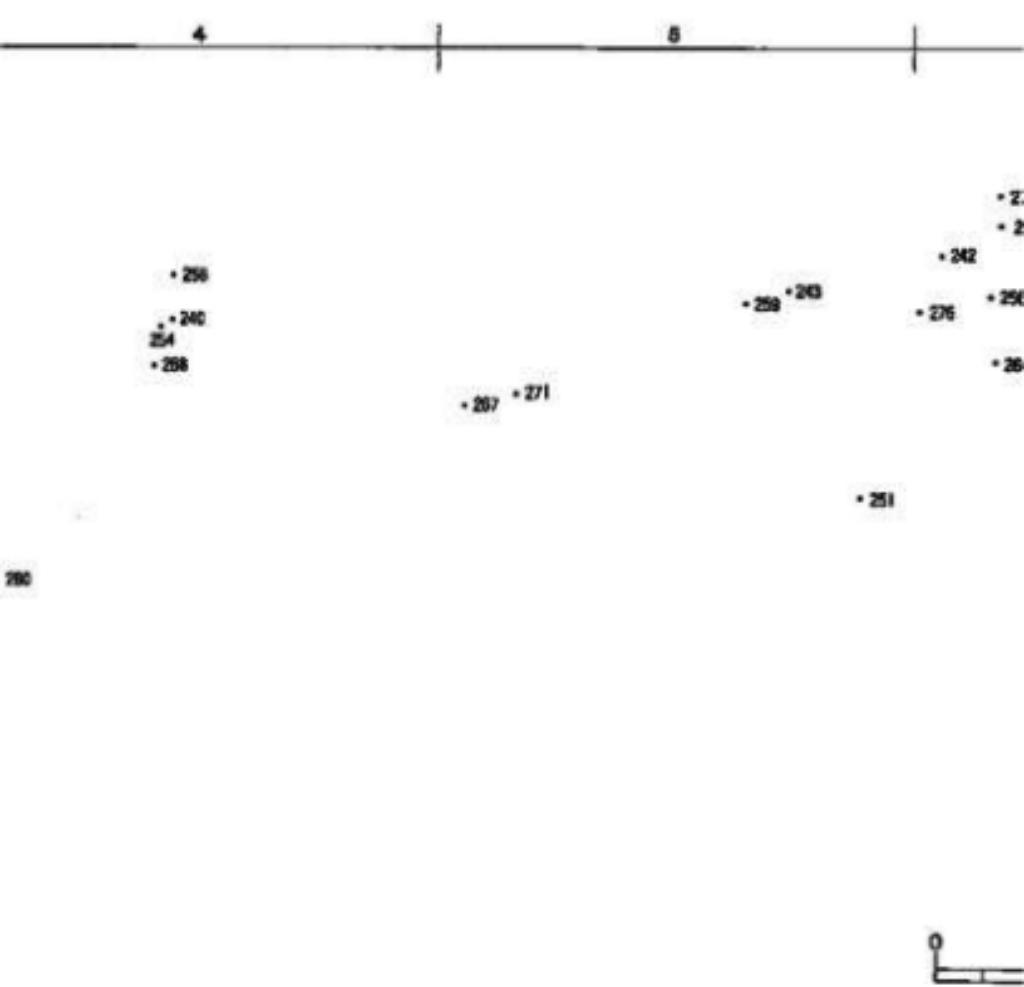
遺物分布図 ⑩



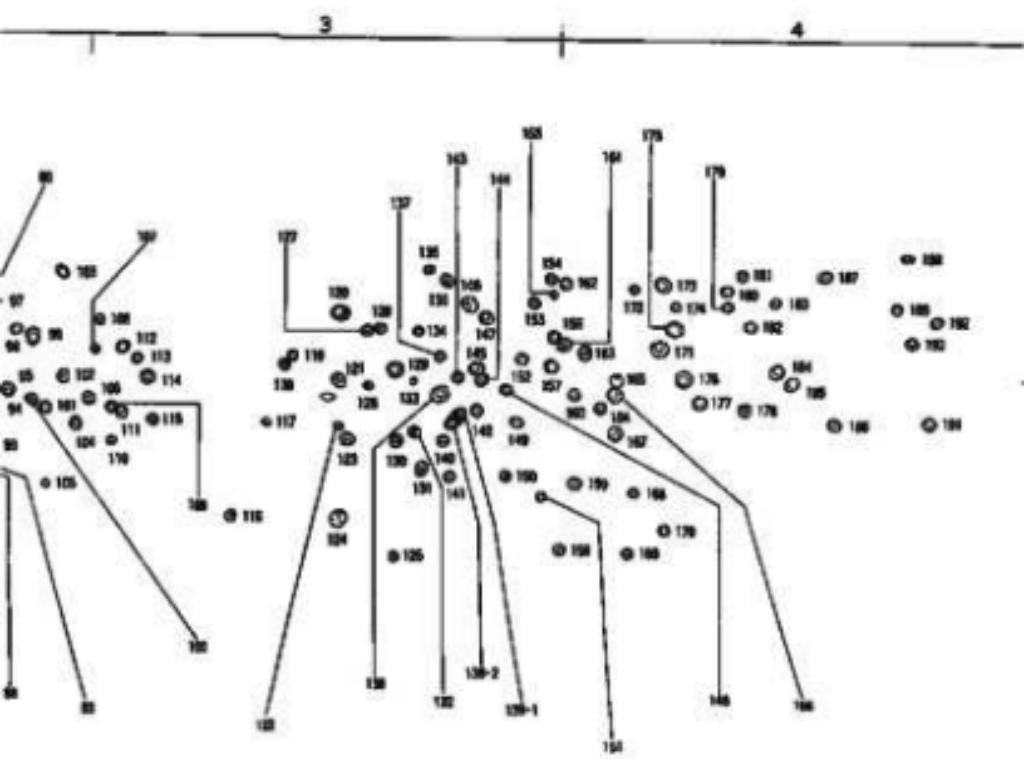
第75図 石器



第76図 柱穴

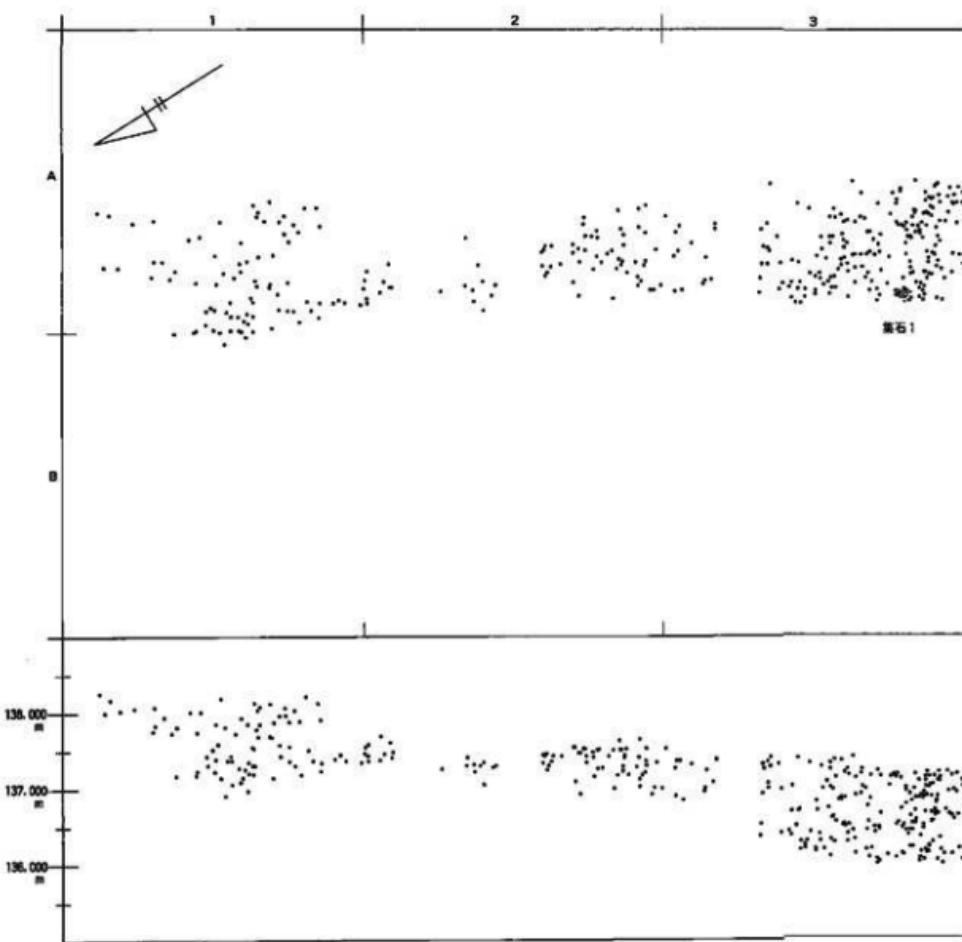


布図 ⑪

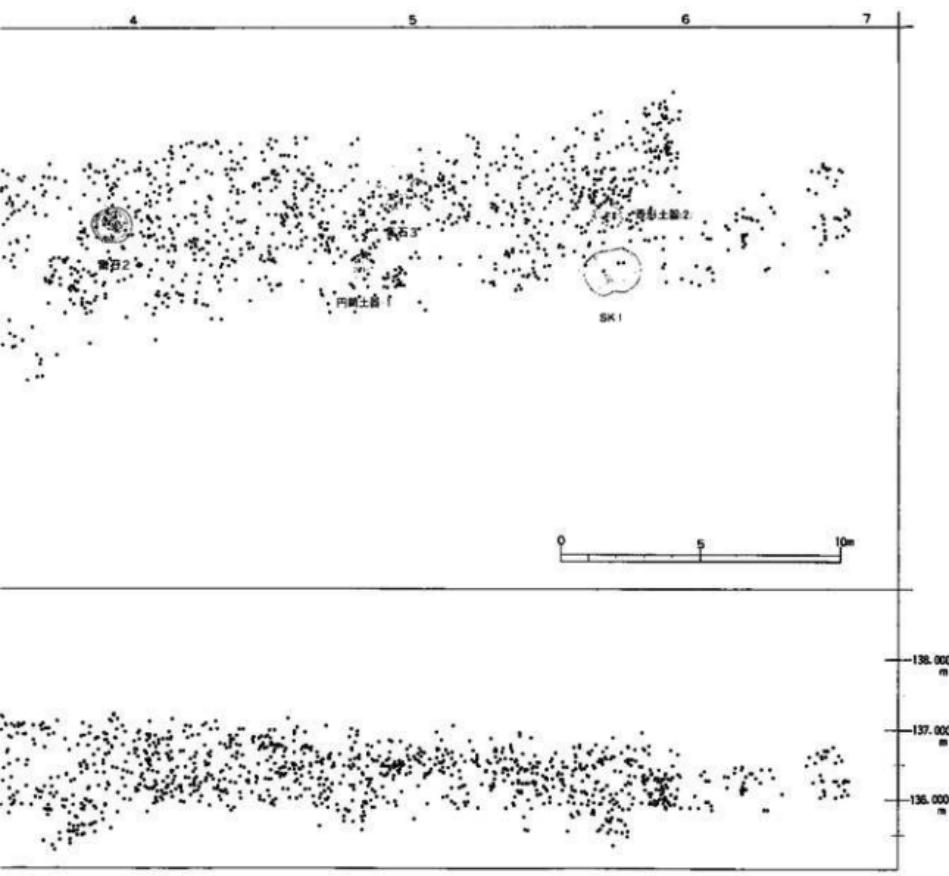


実測図





第77図 出土



遺物分布図（全体）

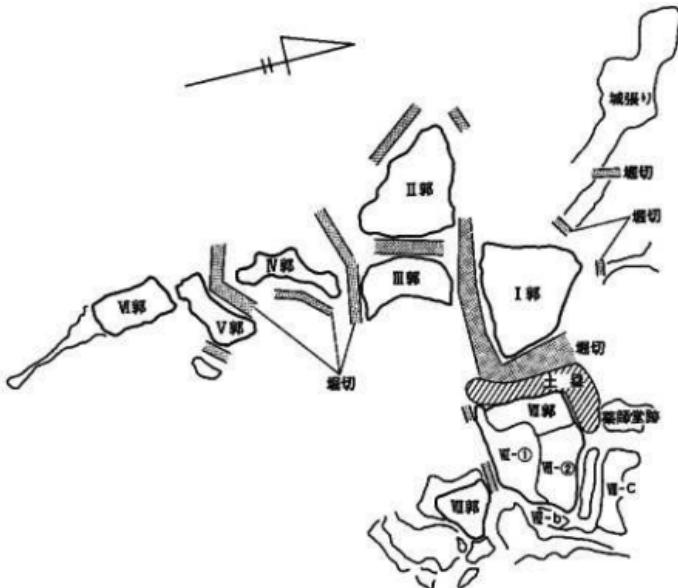
高城跡Ⅵ郭

第1節 遺跡の概要

高城跡内における新規の道路は、Ⅶ郭の東縁から北縁沿いに建設されるため、ルート沿いに、Ⅶ郭の平坦部分を中心に調査を行った。さらに、Ⅶ郭とⅧ郭の堀切についても道路敷きとなるため、一定区間の調査を実施した。

調査区域は総延長130mで、幅は2~8mを測った。調査に際しては、調査区が帯状形を呈するため大土塁を第1調査区とし、以下、Ⅶ郭の南縁を第2-1・2-2調査区、南東縁を第3-1(平坦地部分)・3-2(堀切部分)調査区、東縁を第4調査区~第5調査区とし、Ⅷ郭の裾部に位置するⅧ-b郭を第6調査区、Ⅷ-c郭を第7調査区とした。

本調査開始時に人力で5ヶ所にテスト・ピットをあけ、表土の下層は殆ど粘土層やシラス土である事を確認した。従って、調査の主眼を粘土層やシラス土に残る中世の遺構検出と堀切の調査に絞った。表土は、深い所で1.5mに及んだ。昭和59年度から60年度にかけて県文化課が実施した、高城跡の発掘調査(九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査)の経験から、表土に数多くの中世遺物が含まれている事が予想されたため、重機による表土剥ぎは、時間をかけて慎重に行った。堀切については、調査期間の関係から近世の埋土は重機で一気に剥ぎ、下層の埋土のみを人力で排除した。調査は昭和63年9月1日 начиная с, 同月26日に終了した。

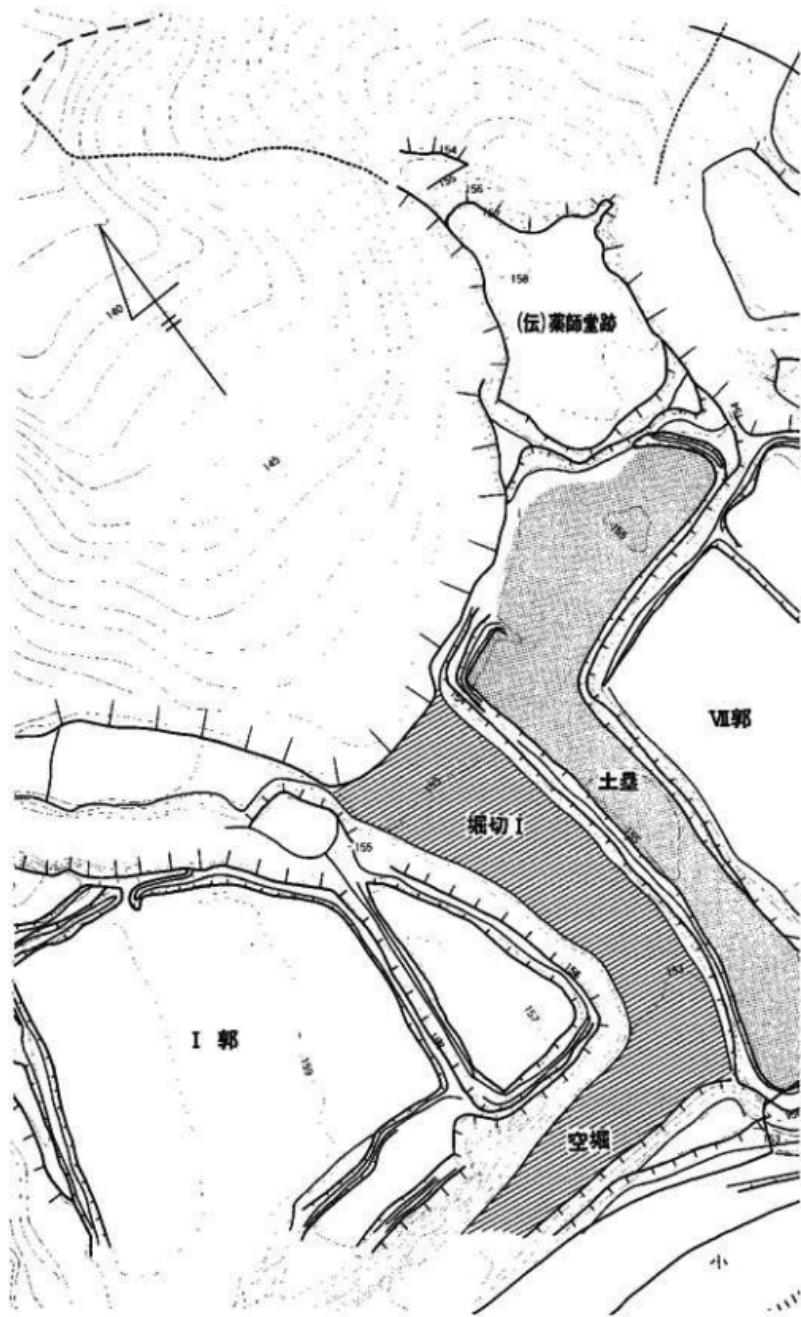


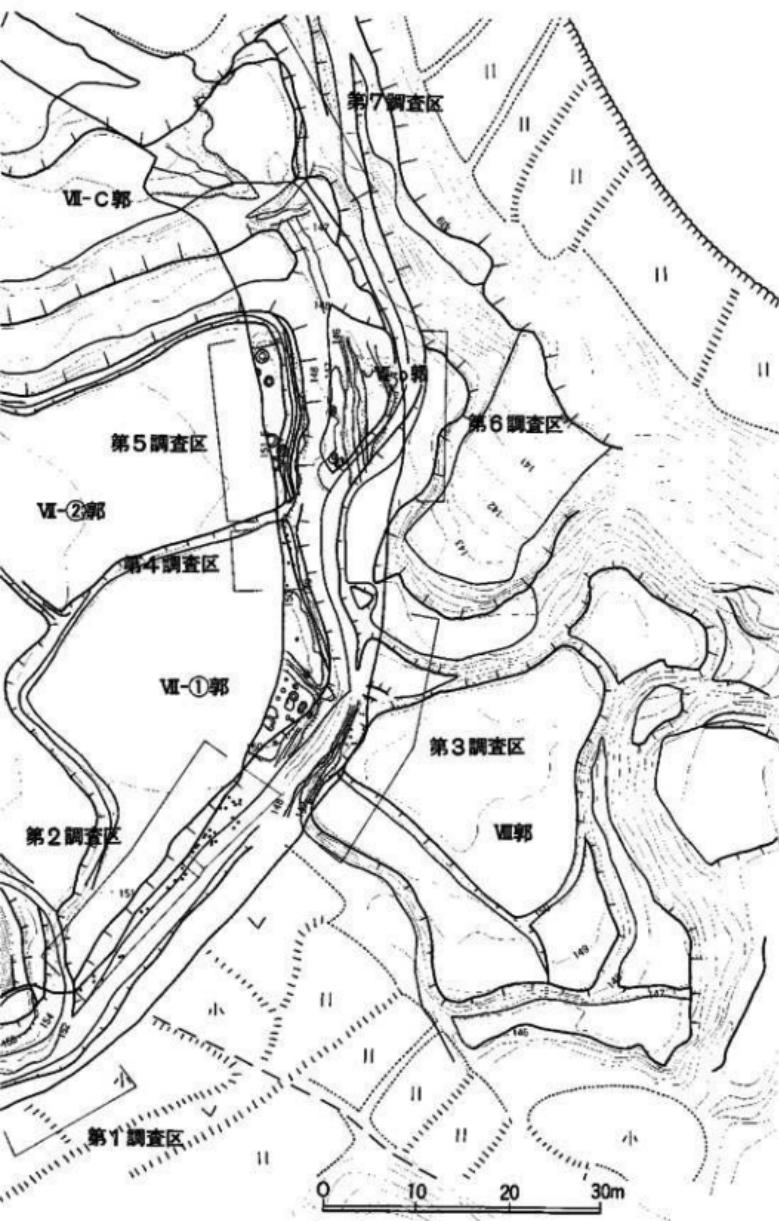
第78図 高城跡縄張り図





予定地と高城跡地形図



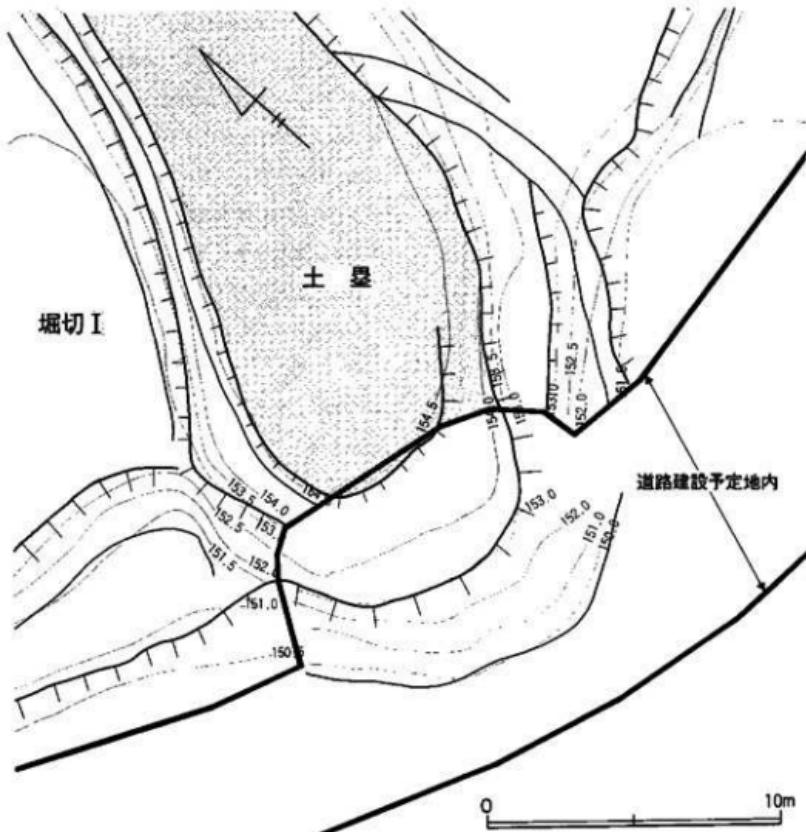


第2節 検出遺構

〔1〕第1調査区

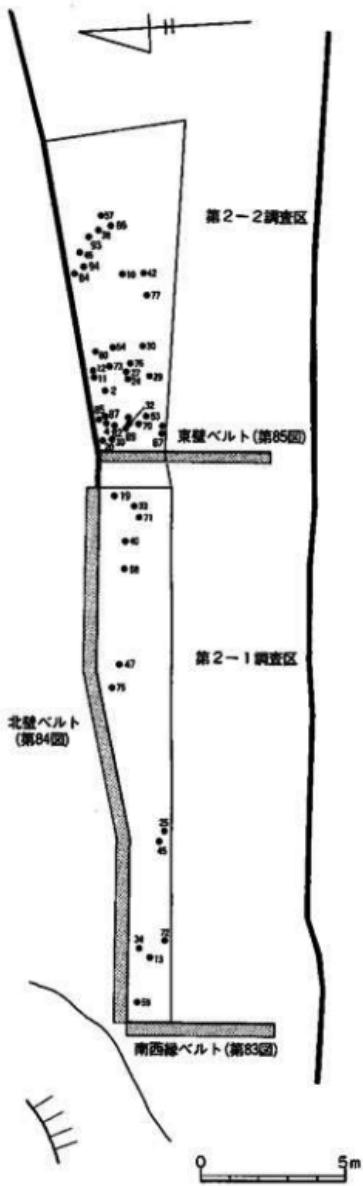
〔Ⅶ郭西縁の大土壘〕

大土壘の南端部を第1調査区とした。表土は15~20cmの層厚で、これを除去した所、土壘は地山を削り残したものである事が判明した。この事により、Ⅰ郭とⅦ郭は從来、一つの丘陵地であった事が証明された。この箇所を南北方向に大きく断切ったのが堀切Ⅰである。さらに、Ⅶ郭についても、旧地形は西側から東側への傾斜地であったのを整地して、土壘の東縁輪郭を形成している事が判った。もちろん地山利用の土壘の上には、堀切Ⅰの掘削時における堆土が積き上げられたものと思われるが、今回の調査では積み土部分の検出は出来なかった。これは風水による浸食作用に加えて、後世の畠地開墾時に押し廻らされた事が考えられる。



第81図 Ⅶ郭西縁の大土壘実測図

[2] 第2調査区



第82図 第2調査区と遺物出土状況図

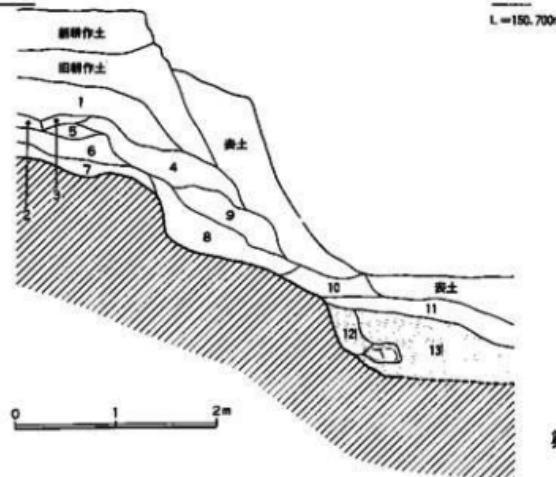
墜郭の南西縁に設定した長さ約30m・幅1.3~2.4mの調査区である。調査の過程で、地形的に大きな差異が生じたので土層観察のベルトを残し、2-1区と2-2区とに分けた。

(2-1区) 長さ18m分であるが、平坦な地表土を剥いでいくと、シラス(地山)の傾斜地が現れた。これにより、2-1区の地表面での平坦地は、後世、北側から南側へ大幅に押し廻したものである事が判明した。

一方、墜郭の南側据部には、墜郭に付随する周溝的な空堀の埋没が考えられたので、空堀の検出を主たる目的として、調査区の南側部分を中心に掘削を続けた所、空堀の肩部らしきものを検出できた。しかし、調査もそこまでで湧水が激しくなり、シラスの土壁にも亀裂が生じて作業が危険となったので、調査期間と調査費の事を考えて掘削を中止した。

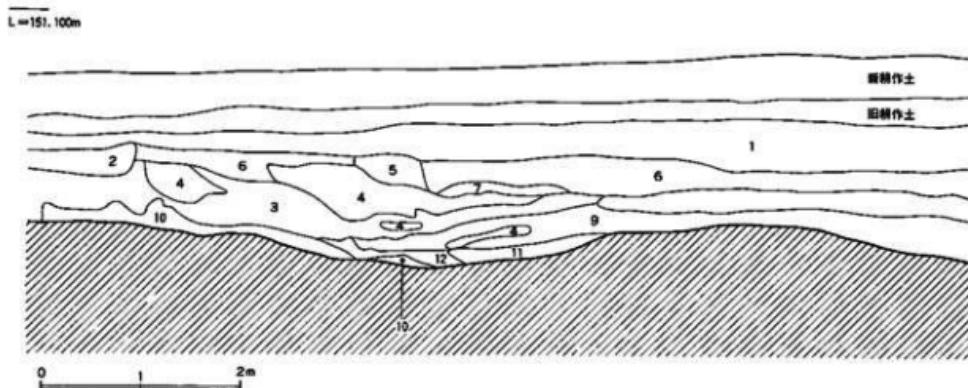
図示した出土遺物は、シラス直上の10層と12層からのものである。

(2-2区) 2区の北側12m分については、墜郭の東壁土層セクションが空堀の様な形状を示したので、墜郭に埋没する堀切2(後述)の延長部分の可能性ありとして調査を行った。結果として、空堀ではなく丘陵線に見られる小規模な浸食地形である事が判ったが、堆積土中に多量の中世遺物が混じっており注目された。今回の調査で総数206点の遺物が出土しているが(そのうち193点が中世遺物)、この調査区だけで全体の75%にあたる154点が出土した。いずれも流れ込みによるものであるが、高城跡墜郭の時代性を知る上で重要な資料となった。

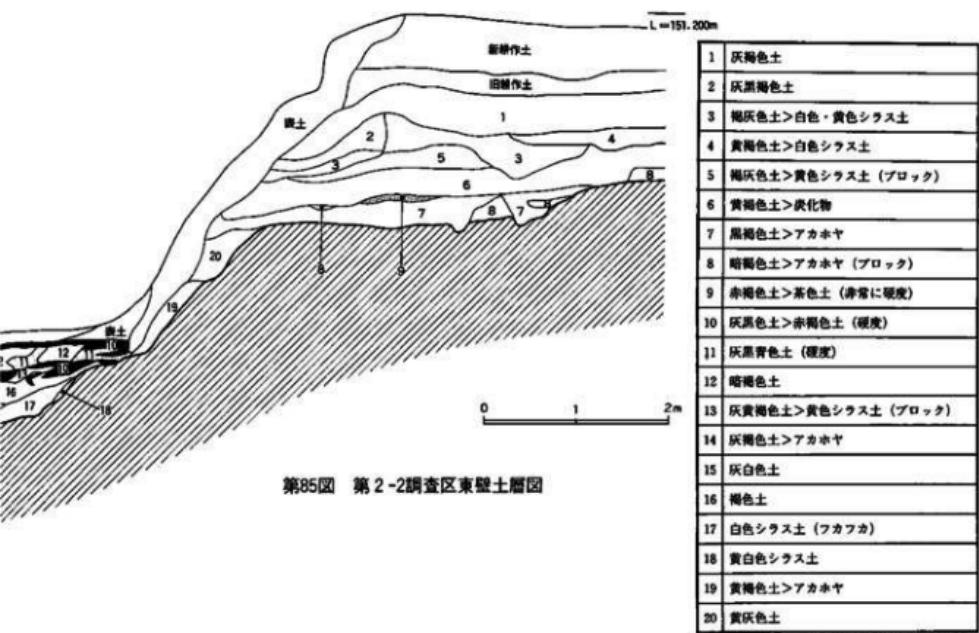


第46表 第2-1調査区南西縁土層観察表

第83図 第2-1調査区南西縁土層図

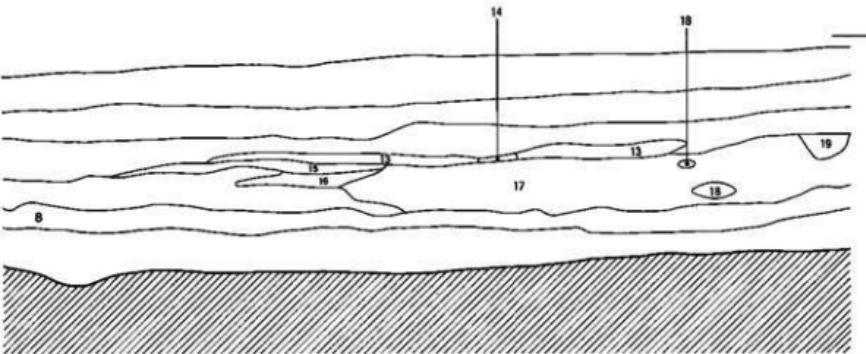


第84図 第2-1調査区北壁土層図



第85図 第2-2調査区東壁土層図

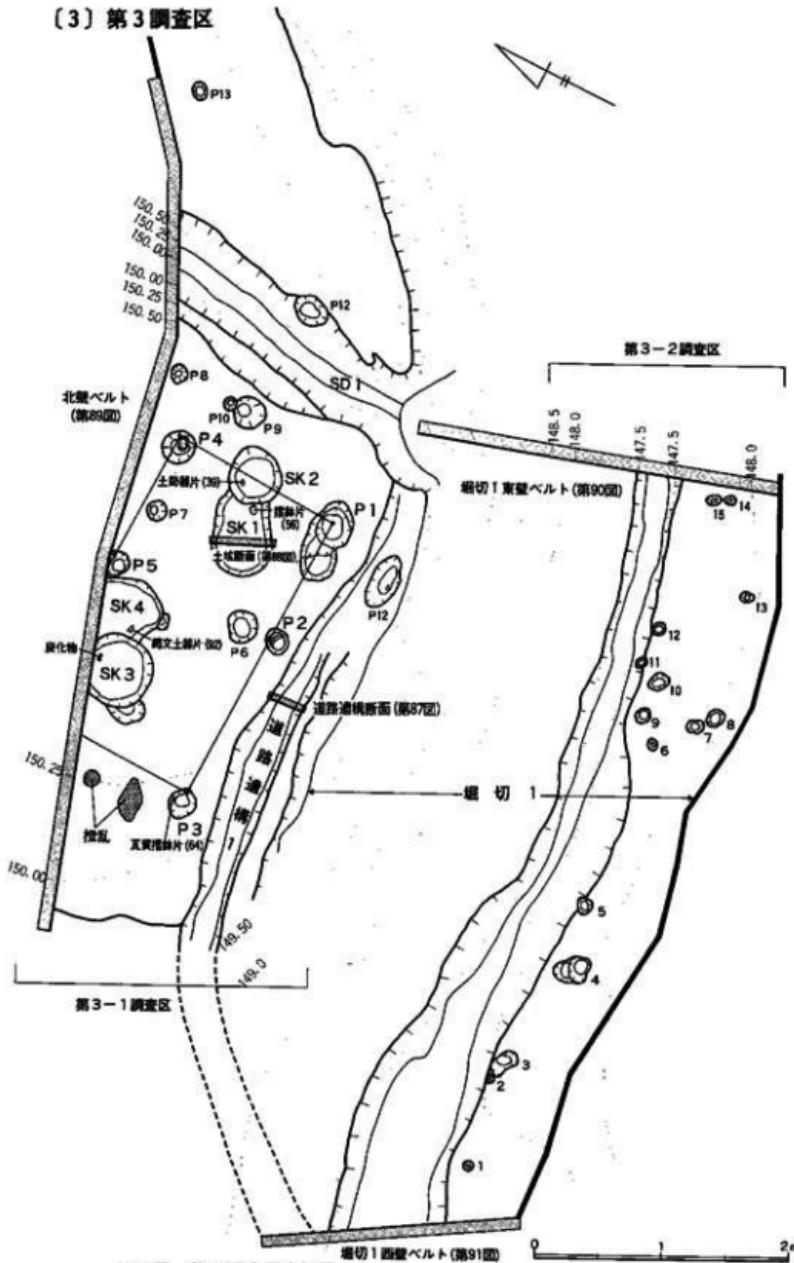
第48表 第2-2調査区東壁土層観察表



1 灰褐色土	6 暗褐色土>灰色シラス土	11 白色シラス土	16 灰黄色土
2 灰褐色土	7 明褐色土	12 灰白色シラス土	17 灰黒褐色シラス土
3 暗灰色土	8 暗褐色土>灰黑色シラス土	13 灰黑色シラス土>アカホヤ	18 暗褐色土
4 灰色シラス土	9 暗灰色土>灰白色シラス土	14 アカホヤ	19 灰黒黄色土
5 黄褐色土	10 灰黑色シラス土	15 灰色シラス土>アカホヤ	

第47表 第2-1調査区北壁土層観察表

(3) 第3調査区



第86図 第3調査区実測図

[SB 1]

第3-1調査区からSB 1が検出された。据立て柱の建築址で、調査の状況により次の通りの見方が出来る。

一つは、北西隅の一部を除き建築址を、ほぼ全掘したとする見方で、この場合は、南側の柱列が桁行となる。一方、建築址の北側部分が未発掘とする見方もある。このケースでは、南側の柱列P 1～P 2～P 3が桁行となる。

P 3からは瓦質の擂鉢片(64)が出土している。さらに、P 4からは根固め石と見られる川原石が出土した。

(建築址をほぼ全掘したとする見方)

桁行4.8m(16尺)、梁行妻2.8m(9尺)の2間×1間の建物で、長軸の方位はN 82° Eである。柱間寸法は、南側で桁行P 1～P 2～P 3で2.1m(7尺)+2.7m(9尺)となり、全長4.8m(16尺)を測る。北側はP 4～P 5で2.1m(7尺)であるが、北西隅の柱穴が路線外で、未掘である。

梁行妻は、東側のP 1～P 4で2.8mを測るが、西側は北西隅の柱穴が未掘である。

(建築址の北側部分を未発掘とする見方)

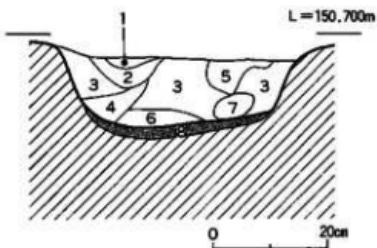
梁行妻4.8m(16尺)の建物で、長軸方位はN 15° Wである。梁行妻は南側のP 1～P 2～P 3が2.1m(7尺)+2.7m(9尺)で、全長4.8m(16尺)を測る。桁行は東側のP 1～P 4が2.8m(9尺)を測るが、P 4より北側の柱穴が路線外で未掘である。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)			備考
			最深	中深	浅	
1	68	63	75.4	78.3	褐色	南側に最も62cm、幅50cm、深さ9.5cmの抜き取り穴あり。
2	38	30	40.8	45.0	褐色	——
3	47	39	59.0	54.0	褐色	底部より22.5cm上位の埋土から瓦質擂鉢片(64)が出土。
4	52	47	45.0	36.5	褐色	底部より9.6cmの上位で、根固め石とみられる川原石が出土。石の大きさは22×14cm、厚さ5.2cm
5	37	(31)	42.4	38.5	褐色	北側の一部は路線外で未掘。
6	48	45	26.0	21.8	灰褐色	——
7	30	28	33.7	30.1	灰褐色	——
8	28	23	32.0	30.8	灰色	——
9	51	48	24.8	21.5	褐色	——
10	18	16	38.5	34.7	灰褐色	——
11	42	35	82.2	80.1	褐色	——
12	87	44	10.4	6.3	灰褐色	——
13	36	22	60.5	59.0	褐色	——

第49表 第3-1調査区柱穴計測表 数値の()は検出値

〔道路遺構1〕

第3-1調査区の南縁から道路遺構が検出された。長さ5m分が残存しており、N74°Eの走行である。地山を逆台形状に掘り込む凹道の小道で、規模は上場で幅40cm、下場で30cm、深さ12cmを測る。



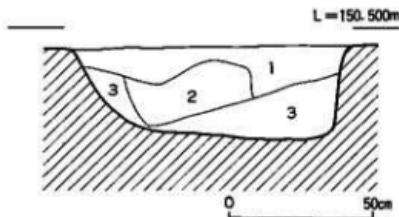
第87図 道路遺構1東壁土層図

1	アカホヤ
2	乳褐色土
3	灰褐色土>白色シラス土+炭化物
4	白灰色土
5	灰黄褐色土
6	乳褐色土>白灰色シラス土
7	灰白褐色土
8	赤褐色土>茶色土(非常に程度)

第50表 道路遺構1東壁土層観察表

〔小土塚(SK1～SK4)〕

第3-1調査区から、4基の小土塚が検出されたが、SK3はSK4を、SK2はSK1を切っている。SK1からは擂鉢片(56)、SK2からは土師器片(39)、SK3からは炭化物、SK4からは縄文土器片(92)が出土している。



第88図 SK1の土層図

1	灰黒黄色土
2	灰黒褐色土
3	灰黃褐色土

第51表 SK1 土層観察表

土塚 No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		埋土色	備考
			最深	最浅		
SK 1	130	83~96	33.2	28.8	青褐色 褐灰色	炭化物が混入。 擂鉢片(56)が出土。
SK 2	90	84	47.5	43.0	灰褐色	東側に長さ80cm、幅52cm、深さ8~10cmの浅い掘り込みがある。土師器片(39)が出土。
SK 3	112	93	19.3	13.8	灰褐色	南西側に長さ32cm、幅45cm、深さ8cmの浅い掘り込みがある。炭化物が混入。
SK 4	(100)	(95)	10.4	6.5	灰褐色	南側に長さ15cm、幅22cm、深さ9cmの浅い掘り込みがある。縄文土器片(92)が出土。

第52表 第3-1調査区土塚計測表 数値()は検出値

[SD1]

第3-1調査区の中央部寄りで検出された溝で、地山のシラス土を切り込んでいる。検出部分の長さは4.5mで、主軸の向きはN 7° Wである。規模については、上場幅1.0~1.6m、下場幅0.3m、深さ0.7mを測り、断面形はやや幅広なU字形を呈する。

[第3-2調査区と堀切1]

Ⅲ郭とⅣ郭間の堀切1を、第3-2調査区とした。

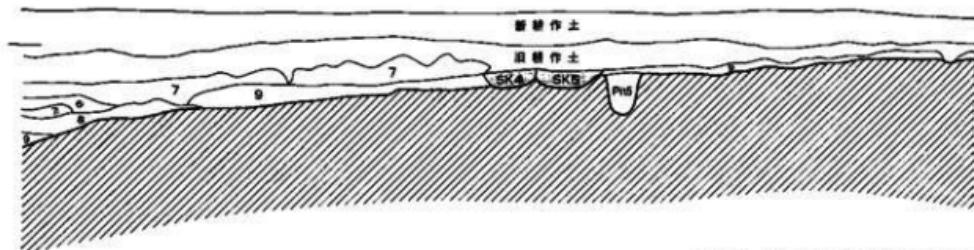
堀切1は、地山のローム層土とシラス土を掘り込んでおり、主軸の向きはN 70° Eで、検出部分の長さは14mを測った。断面形は幅広のU字形で、上場幅6.5m、下場幅1.0mの大きさである。堀切中央部の表層からの深さは1.4mにすぎないが、表土を剥いだⅣ郭地山面との北高差は3.2mに及ぶ。

堀底については、西端から東端へ約4mの所から、堀切の東端までの長さ10m分に堀底を刻む小溝が検出された。この小溝は、高城跡のⅢ郭とⅣ郭間の堀切に刻まれたものと同一で、流水によって生じた浸食地形である（第90図に浸食地形である事が示されている）。小溝は堀底面で幅0.4m、深さ0.8mであるが、幅は中途で0.3mに括れ、底部で0.5m幅にオーバーハングする。

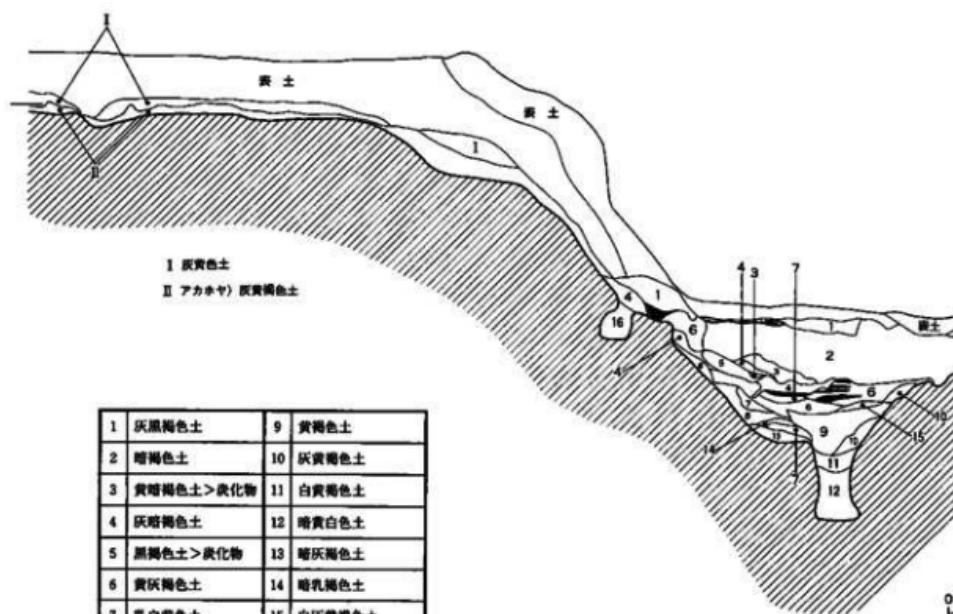
なお、南側の堀壁からは15個の柱穴状の落ち込みが検出されている。遺構の大きさや形状などについては、第53表の通りである。

Pr. No	長 桁 (cm)	短 桁 (cm)	深さ(cm)		形 状	埋土色	検出ライン・備考
			最 深	最 浅			
1	16	15	20.7	16.7	円 形	褐色	146.75m
2	14	14	18.6	15.2	円 形	褐色	147.0 m
3	48	25	79.6	48.3	長円形の変形	褐色黑色	147.0~147.25m
4	60	35	51.5	47.5	長円形の変形	褐色黑色	147.50~147.75m (北側に抜き取り穴らしきものあり)
5	25	20	13.2	9.3	隅丸の三角形	褐色	147.75m
6	17	13	15.0	10.4	円 形	褐色	147.75m
7	29	20	27.1	20.1	長円形	褐色黑色	147.75~148.0 m
8	28	22	32.7	10.6	円 形	褐色	148.0 m
9	24	18	54.0	19.2	円 形	褐色	147.50m
10	32	22	19.3	11.3	隅丸方形	褐色	147.50m
11	20	12	17.6	14.4	長円形	褐色	147.25~147.50m
12	20	18	20.6	18.5	円 形	褐色	147.50~147.75m
13	27	14	18.4	10.4	長円形	褐色	148.0 m
14	16	10	24.0	13.7	長円形	褐色	147.75m
15	22	20	38.0	21.9	長円形	褐色	147.75~147.50m

第53表 第3-2調査区堀切1柱穴計測表



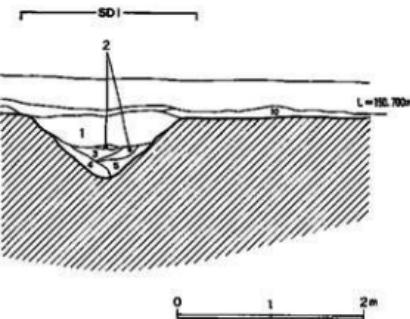
第89図 第3-1調査区北壁土層図



第90図 第3-2調査区壁土層図

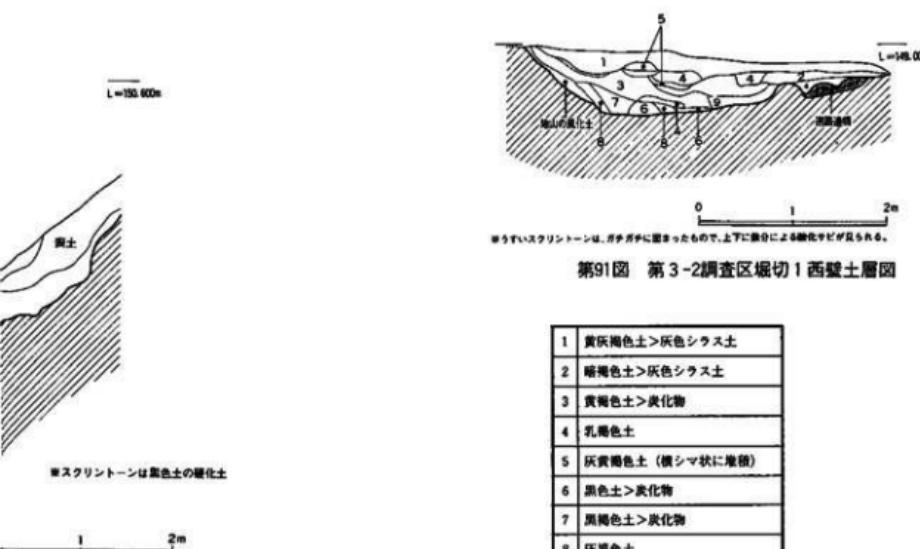
1	灰黑色土	9	黄褐色土
2	暗褐色土	10	灰黄褐色土
3	黄暗褐色土>炭化物	11	白黄褐色土
4	灰暗褐色土>炭化物	12	暗黄色土
5	黑褐色土>炭化物	13	暗灰褐色土
6	黄灰褐色土	14	暗褐色土
7	乳白色土	15	白灰黄褐色土
8	暗乳白色土	16	褐灰色土>炭化物

第55表 第3-2区堀切1東壁土層観察表



1	暗褐色土 > アカホヤ + 炭化物 (カワカ)
2	アカホヤ > 赤褐色土
3	暗褐色土 > 炭化物 + アカホヤ
4	暗褐色土 > 黄色シラス土
5	黄褐色土
6	灰褐色土
7	黄褐色土 > 白色シラス土
8	黑褐色土 > アカホヤ
9	暗褐色土 > アカホヤ (ブロック)
10	灰褐色土 > アカホヤ

第54表 第3-1調査区北壁土層観察表



第91図 第3-2調査区堀切1西壁土層図

1	黄灰褐色土 > 灰色シラス土
2	暗褐色土 > 灰色シラス土
3	黄褐色土 > 炭化物
4	孔褐色土
5	灰黄褐色土 (横シマ状に堆積)
6	黑色土 > 炭化物
7	黑褐色土 > 炭化物
8	灰褐色土
9	赤褐色土 (非常に硬度) > 茶色土

第56表 第3-2区堀切1西壁土層観察表

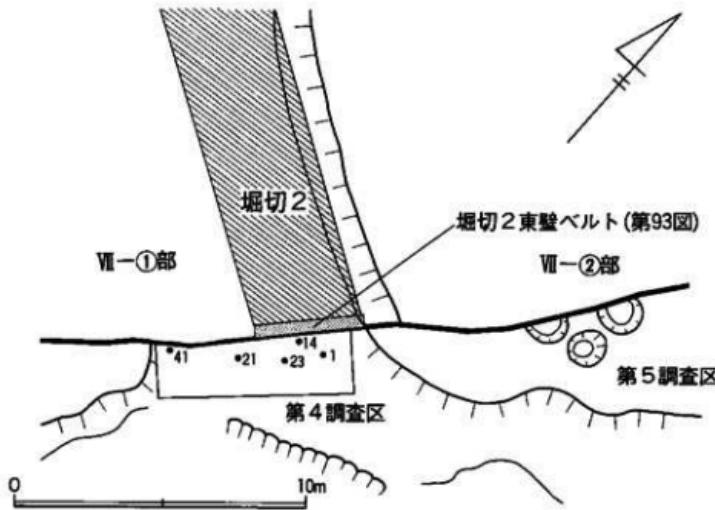
(4) 第4調査区

[堀切2]

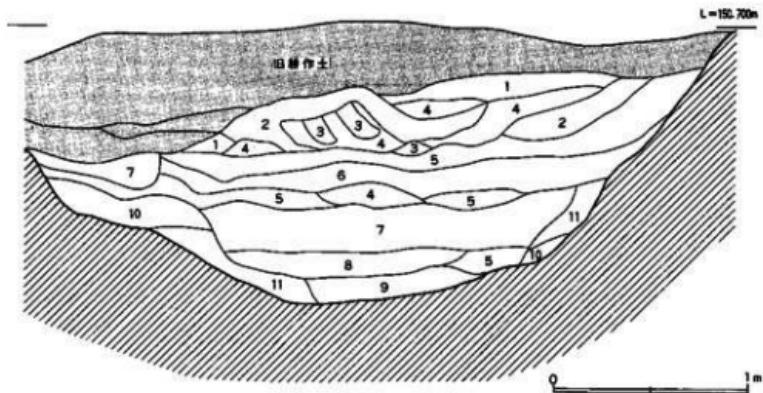
第4調査区の西壁土層セクションに堀切2の掘り方が現れた。シラスを切り込んでおり、堀切の断面形状は、幅広で底部は緩やかな弧状を描くものであった。規模は上場で3.65m（南北幅）を測り、下場については、全体が弧状の状態にあるため限定された幅を有しない。あえて計測値を示せば、0.6m程度である。堀壁の傾斜角度は、北側で中途まで（底部の中央より1.2mの幅）約15°の緩傾斜であるが、中途から上位にかけて（幅1.05m）は、約50°の急傾斜となる。一方、南側は中途まで（底部の中央より1.2m幅）約20°の緩傾斜で、上位の僅かな部分（0.2m幅）が約55°の急傾斜となる。

肩部は南側部分が大きく削平されており、底部からの深さは0.7mに留まっているが、北側は残存状態がやや良好で、深さ1.4mを測る。これは地山のシラスが全体的に北側から南側にかけての傾斜地である所（堀切の切り込み面で南北両端は0.6mの比高差がある。）を、後世、畠地にするために馴らしている事によるものと思われる、低い方の南側の肩部には、搔き上げの土が積まれて、土壘となっていた事が確実で、造成の際に、この土壘が押し馴らされたために、堀切の南側に大きな削平箇所が見られるのであろう。

堀切2は、検出地点から推察するにⅦ-①郭とⅦ-②郭に小さく分けるためのものであって、高さ1m程の小段差面に沿って走行していると考えられる。土層センクションでとらえた、堀切の埋土に遺物の混入は無かった。



第92図 第4調査区実測図



第93図 第4調査区堀切2東壁土層図

1	褐色土>アカホヤ(フカフカ)
2	明褐色土>黄色土(ブロック)
3	黒褐色土(やや硬)
4	黒褐色土(フカフカ)
5	灰褐色土>アカホヤ(フカフカ)
6	灰黃褐色土>青色シラス土
7	褐灰色土>青色シラス土(フカフカ)
8	暗褐色土>青色シラス土
9	黄色シラス土>暗褐色土
10	赤褐色土>黄色シラス土(ブロック)
11	黄白色土>白色シラス土

第57表 第4調査区堀切2東壁土層観察表

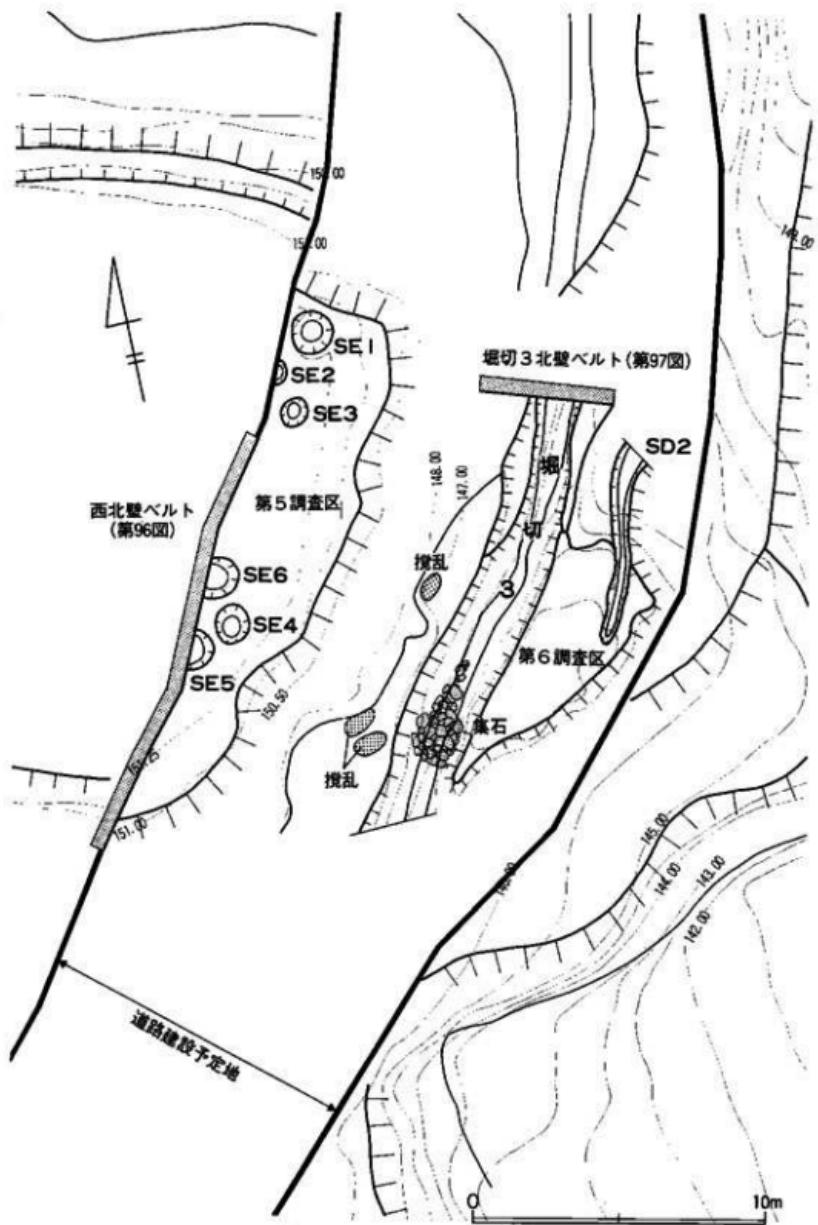
(5) 第5調査区

墳郭の東縁に設定した長さ20m・最大幅5mの調査区である。表土の層厚は0.3~0.4mで、下層は部分的にアカホヤの僅かな堆積が見られるが、大方は地山のローム層土である。この調査区から、アカホヤもしくはローム層土を掘り込む6基の土塙が検出された。これらの埋土に遺物の混入は無かったが、埋土は中世の褐色土で、同様な遺構が隣接の城・馬場遺跡から中世墓塙として検出されている事から、これらの土塙も墓塙の可能性が高い。

[土塙(墓塙)]

調査区の北東側と南西側から3基づつ検出された。完掘できたのは3基(S E 1・3・4)で、残り3基(S E 2・5・6)については路線外にかかり、半裁に終わっている。

土塙はすべて上位部分を削り取られており、中途から底部にかけての残存であった。



第94図 第5・6調査区実測図

土壟 No	平面プラン	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
S E 1	ほぼ円形	146	—	83	埋土にシラス土の混入が目立つ
S E 2	—	(74)	(33)	(24)	半乾
S E 3	やや長円形	89	78	(26)	底部の立ち上がり状態が、両端で異なる。
S E 4	僅かに長円形	136	127	35	半乾
S E 5	—	(144)	(83)	74	埋土にアカホヤの混入が目立つ
S E 6	—	(127)	(103)	36	半乾

第58表 第5調査区土壠(墓塚)計測表 敷地の()は検出値

[6] 第6調査区

[Ⅵ-b郭と堀切3]

Ⅵ郭の東下にある腰曲輪状のⅥ-b郭(Ⅵ郭との比高差は約4.5m)を調査した。

その結果、表土から地山までの堆積土は、すべて擾乱層で、全体の層厚は70cmに及ぶ事がわかった。最終的に、Ⅵ-b郭は白色シラス土を地山とした、高さ1m、長さ9m、幅3.5mを測る三角形状の小高台となった。主軸の向きはN28°Eで、上面は削平されて平坦地となっていたが、柱穴等の遺構は皆無であった。

一方、Ⅵ郭の東側据部とⅥ-b郭の接点からはⅥ-b郭の長軸方向に沿う形で、シラス土を切り込んだ堀切3が検出された。検出分の長さは16mで、上場幅2.6m、下場幅0.3~0.7mを測り断面形状は幅広のU字形であった。

[S D 2]

第6調査区の東縁寄りで検出された小規模な溝で、地山のシラスを切り込むものであった。

検出部分の長さは約6.5mで、南側より北側へ開口する状況にあった。溝の断面形はU字形で0.4~0.5m幅を測ったが、北側は、やや末広がりで0.8m幅であった。

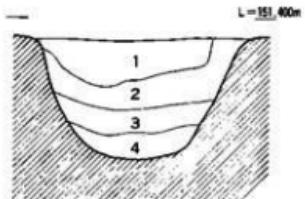
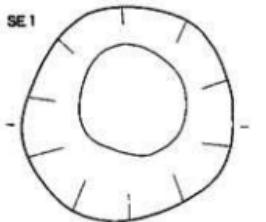
埋土は、褐色に灰黒色シラス土が横シマ状に混じっており、水が流れた事を示していた。深さは約20cmで、底部は硬化していない所から、通路として使用された事は無いと考えられる。

[集石]

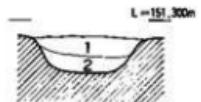
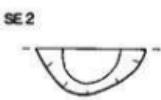
堀切3の南側寄りに集石が検出された。砂岩と凝灰岩の自然石で、大きなものは長さ45cm・幅35cm・厚さ20cmを測り、大人が一人でやっと抱きかかえられる程の重さであった。

分布範囲は南北の長さ約3mで、幅は上場で1.3m程であった。集石の最深部は堀底に接しており、堀切の一部を埋める状態にあった。

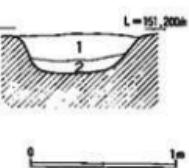
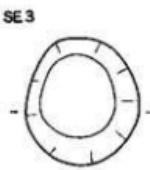
一方で、堀壁との間に15~20cmの隙間(堆積土)がある所から、堀切が廃棄されて一定期間を経た後に、これらの石が持ち込まれたものと思われる。しかし、これ程の大きな石が、単に堀切を埋めるためだけに持ち込まれたとは到底考えられず、この点に関して大きな疑問が残る。



SE 1



SE 2



SE 3

SE 4

SE 5

1	褐色色土 > 乳白色シラス土
2	乳白色シラス土 > 褐灰色土
3	乳白色シラス土
4	褐色色土 - 乳白色シラス土

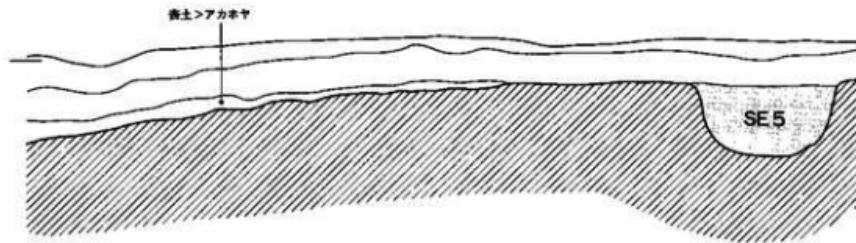
SE 2

SE 3

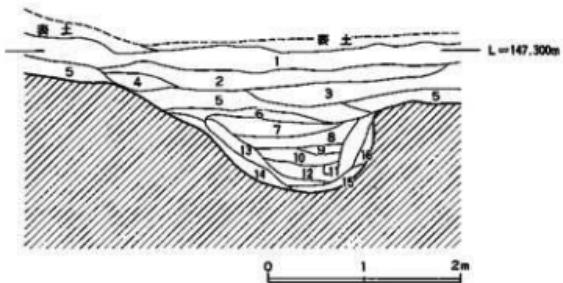
SE 4

1	褐色色土 > アカホヤ
2	アカホヤ > 褐色土
3	褐色色土
4	アカホヤ

第59表 SE 1 ~ 6 土層観察表



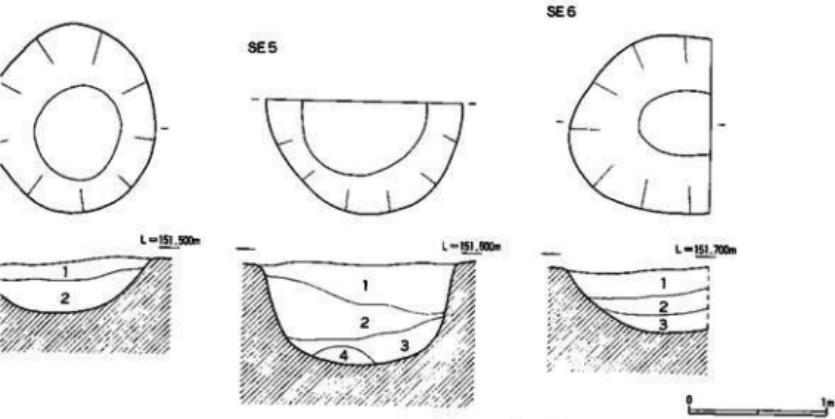
第96図 第5調査区



1	暗黃褐色土
2	黃灰褐色土 > (少)
3	灰黃褐色土 > 褐色シ
4	暗灰褐色土
5	灰褐色土 > 白色シラ
6	暗褐色土 > (多)炭化
7	黃褐色土 > 炭化物
8	白褐色土
9	白黃灰色土

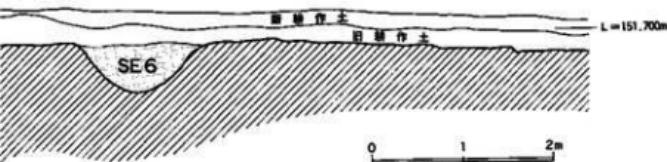
第97図 第6調査区堀切3北壁土層図

第60表



第95図 S E 1 ~ 6 の実測図

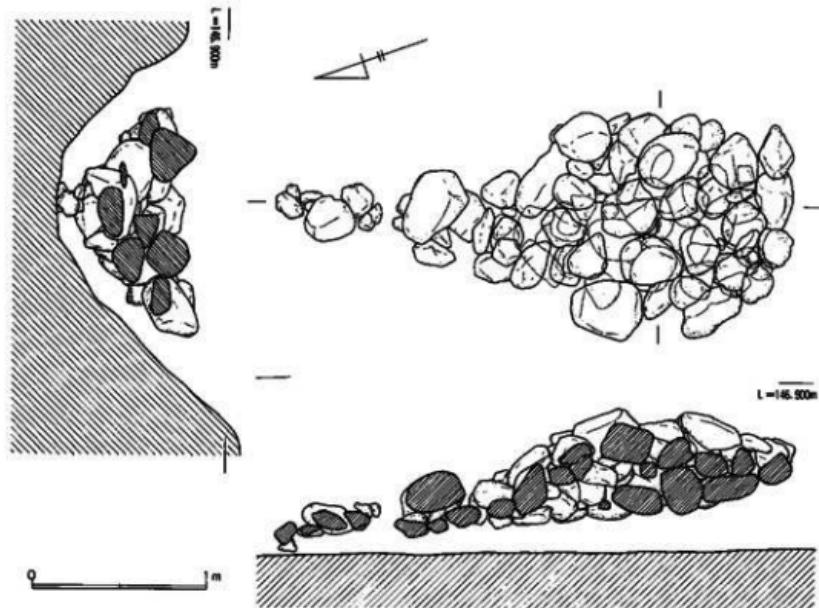
ヤ	S E 6
土 (ブロック)	1 アカホヤ > 濡灰色土 (ブロック)
	2 濡灰色土 > アカホヤ
	3 濡灰色土 > アカホヤ



西北盤土層図

炭化物	10 白灰色土
	11 灰色土
ラス土	12 黒灰色土 (板状の堆積)
	13 黒色土 > (多) 炭化物
ス+ (少) 炭化物	14 白黒灰色土
化物	15 白灰褐色土
	16 白シラス土

第6調査区堀切3北壁土層観察表



第96図 堀切 3 検出の集石実測図

[7] 第7調査区

[堀切 4]

Ⅶ郭の北側裾部に帯曲輪状のⅧ-c郭があり、(Ⅶ郭との比高差約6m)その東側寄りを長さ21m(東西幅)に渡って調査した。

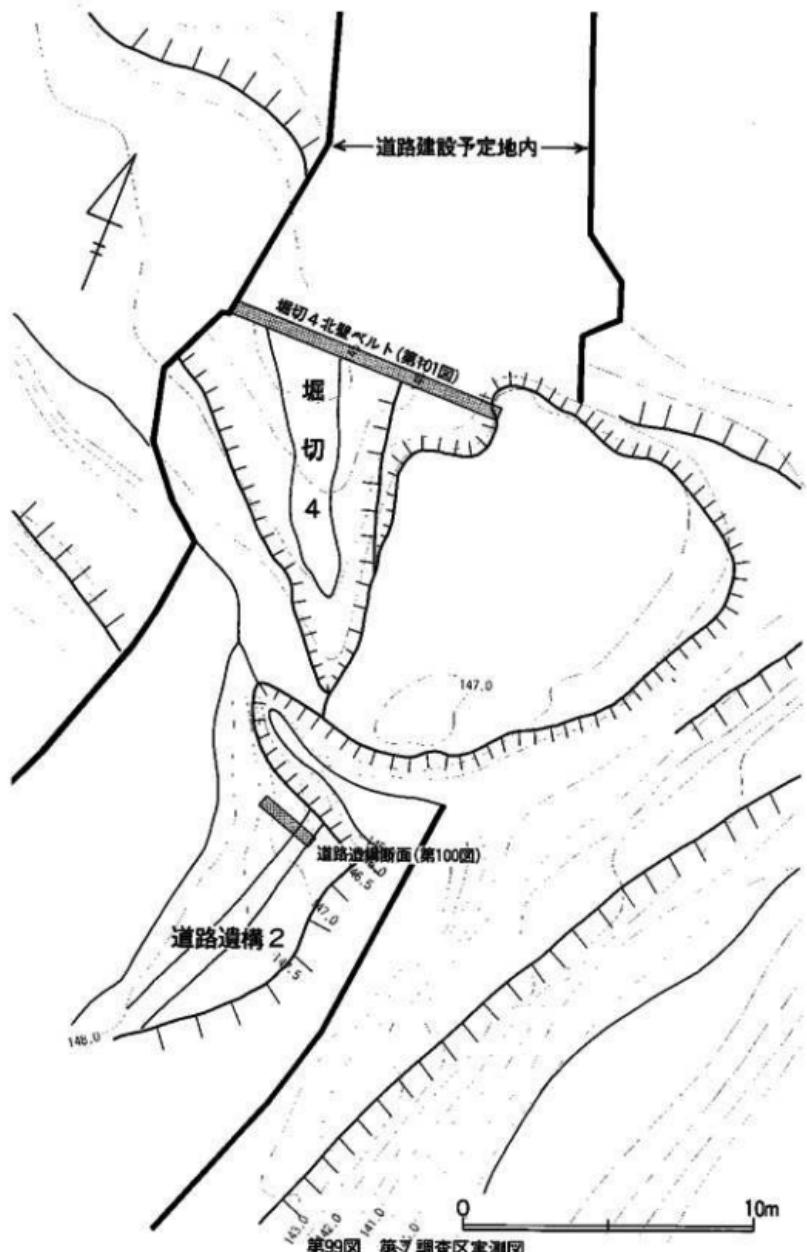
このⅧ-c郭については、東西の長さ約42m、南北幅8~16mを測る帯曲輪状の不整形地形であったが、調査の結果、東端より西側へ長さ12m分については単なる削平地である事が判明し、地山のシラスを切り込む造構は皆無であった。しかし、西側の9m分については、Ⅷ-c郭を南北に小さく区分する堅掘状の堀切4が検出された。

堀切4の走行はN32°Wで、南側から北側へ緩やかに下っており、底部は皿状を呈するものであった。検出地点での南北両端の比高差は、平面距離の長さ14mに対し3.5mを測った。

堀切の上幅は3.2m分が確認出来るが、西側肩部は搅乱により、中途から計測不能である。

一方、東壁は良好な状態を保っており、造構の切り込み箇所が確認出来る。

堀切は底部で疊層を堀り込んでいる。平時は通路を兼ねていたものと思われ、床面より10cmの上位に長さ90cm、最大層厚5cmを測るレンズ状の灰色硬化土がある。

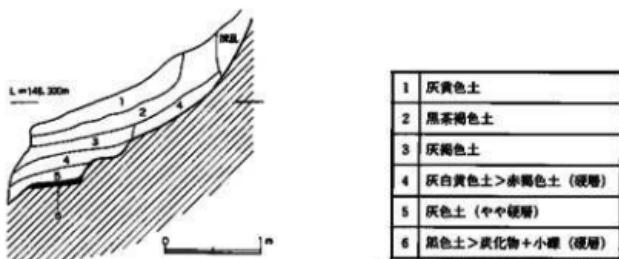


第99図 第7調査区実測図

〔道路遺構2〕

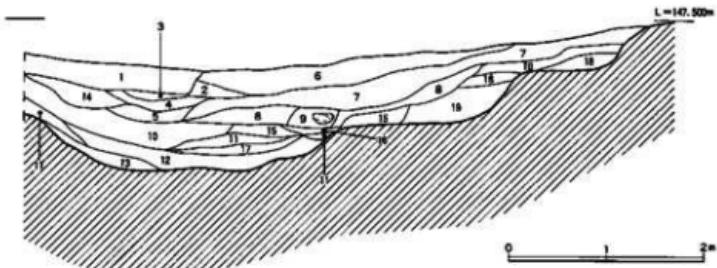
墻郭の南側から大走りに該当する道路遺構が検出された。墻郭の東縁に沿ってN13°Eの方位に走行しており、第6層の黒色土はガチガチに硬化していた。

検出部分の長さは11mで、幅1.5~0.9mを測るものであったが、北端でV字形の浸食地形に吸収され、南端は崩壊の状態にあった。



第61表 道路遺構2土層観察表

第100図 道路遺構2南壁土層図



第101図 第7調査区堀切4北壁土層図

1	灰褐色土	7	黄白シラス土	13	褐灰白色土（硬層）
2	濃灰褐色土	8	灰色シラス土	14	黄褐色土
3	灰黑褐色土	9	白色シラス土	15	黄灰白色土>灰色砂土
4	灰黑黃色土	10	褐灰色土	16	白灰シラス土
5	灰白褐色土	11	褐灰白色土（硬層）	17	灰黑色土（硬層）
6	灰白色シラス土	12	褐灰黑色土（硬層）	18	黄色土
				19	黄白色土

第62表 第7調査区堀切4北壁土層観察表

第3節 出土遺物

1~14は青磁である。この内1~4は碗の一部で、口縁部の残存である。いずれも外器面に簡略化された繊蓮弁文様がある。文様はヘラ描きによるものであるが、3のみは、ヘラ描き溝が釉溜まり状態になっている。

釉色は1が発色不良の青緑灰白色で、2は青緑灰色、3は緑白色、4は緑青灰色である。

5~7は無文の青磁である。5・6は碗で、7は皿の一部である。釉色は5が白灰青色、6は緑灰白色、7は青灰白色である。5は口縁部がやや外弯する。6は体部が下位より上位にかけて漸次肥厚し、やや内弯の傾向にある。口縁部は肥厚し、丸味を帯びている。7は外器面が外弯し、内器面は中途で大きく腰折れ状態となって、上位でやや内弯する。

8は稜花皿で、内器面にモチーフ不明の薄い文様がある。釉色は灰緑色で、体部は外弯し、口唇部は部分的にヘラ削りされている。

9は同安窯青磁で、内外器面に継位の櫛描き状の文様がある。内器面には、これにV字形文様が加わっている。釉色は緑白灰色である。

10は碗の一部で、内器面にモチーフ不明の薄い文様がある。釉色は青白緑色で、体部は内弯する。

11・12は碗の一部で、外器面に簡略化された繊蓮弁文様の下位部分が残る。釉色は11が灰白緑色、12が灰緑色である。

13は大皿片で、外器面に薄い斜線に入る。釉色は緑白色で、胎土は精良である。

14は無文で、釉色はオリーブ灰色である。胎土は精良で、器面は光沢がある。内外器面に大きな貫入が走る。碗の一部と思われる。

15は青白磁である。体部はやや外弯し、外器面にロクロ調整痕が残る。

16~18は白磁である。16の器厚は均一で、体部は直線的に伸びて上位で外弯する。内器面上位は腰折れ気味に屈曲している。17は内器面が直線的に伸びて、外器面はやや外弯する。口唇部は強いナデにより、屈曲面は稜線状を呈する。18は外器面の下位が露胎を呈する。胎土は極めて精良である。

19は天目碗で、外器面の露胎部分に3条のロクロ調整痕がある。

20~55は土師器の壺や皿である。口縁部のみの32・51~54を除いて、外底の調整法はいずれも糸切り離しによるものと思われるが、大方のものにナデが加えられているのが特徴である。中には、強いナデにより糸切り痕が完全に消滅しているものもある。

20~48は法量によって大・中・小の3タイプに分類される。

20~27は中型タイプの皿で、平均口径8.2cm、平均器高2.7cm、平均底径4.8cmを測る。器形的には器壁がやや肉太で、直線的に大きく外側へ開くもの（20・22）と、器壁が薄壁で体部が

内弯し、船型を呈するもの（21）とがある。23は体部がやや、直に立ち上がる。

20・21・23・24・25・27は底平で、24には外底に強いナデが加えられている。27は極めて粗いナデにより、糸切り痕が完全に消滅している。

28～32は小型タイプの皿で、代表例の28は復元底径3.4cmを測る。体部の立ち上がりは、やや外弯する。32は口縁部の残存で、器厚も3.5mmと極めて薄壁である。対して31の外底端は肥厚し、厚さ11mmを測る。29の外底には糸切り離し後、強いナデが加えられている。

33～45は大型タイプの壺で、このタイプの代表例である33は復元口径12.3cm、器高3.8cm、復元底径7.8cmを測る。体部は直線に外側へ開いているが中途に限り、やや外弯する。口縁は直口気味である。35～41は平均底径6.8cmを測る。底部は34～37が肉太で、特に35は器厚12mmを測る。対して38・39の底部は、やや薄壁である。40・41は内底面の中央が凸面状を呈する。36の外底は糸切り離し後、強いナデが加えられている。同じく39のナデは非常に丁寧である。

46～48は底部で、器形的には大型タイプに属するものと思われる。外底は、いずれも糸切り離しによる。42の外底には非常に強いナデが加えられている。44・47の外底に加えられたナデは粗い。

49は、体部の立ち上がりが大きく窪むため、外底端は外側へ大きく張り出している。

50は外底面の端部寄りに、非常に強い指頭圧痕があり、外底端はあたかも高台の様な形状を呈する。

49・50は器形において、他のものと比較した場合、やや異質である。

51～54は体部より口縁部にかけての残存である。51は器厚がほぼ均一で、やや体部は内弯する。口唇部は平坦に近く、幅2.5mmを測る。52～54の体部は直線的に伸びるが、上位で僅かに内弯する。いずれも極端な口縁直口となる。

55は香炉の高台部分である。高台は貼り付けによるもので、器面には丁寧なナデが施されている。

56～63は擂鉢である。56～58は瓦質土器、59・61は土師系土器、60・63は中世雜器の類、62は備前である。

56の条線は6本を一単位とする可能性がある。57は内底面の全面に条線が搔かれている。58は11本単位の条線がある。溝は非常に浅いが、これはローリングの影響によるものであろう。

60は斜行の刷け目後に条線を搔いている。

64は瓦質土器で、内器面に斜行と横位の刷け目がある。65は須恵系土器で、内器面にはヘラによる粗く強いナデが施されている。

66は瓦質土器の口縁部で、口唇部は平坦（7.5mm幅）である。67・68は須恵器で、67は内器面に横位の刷け目と、外器面に格子状の叩きがある。68は体部が直線的に急な傾度で立ち上がる。

69は瓦質の火舍片と思われ、外器面に突帯と押印の痕が残る。70は常滑で、薄壁である。外

器面に刷け目が見える。

71は雑器の類で、二次焼成の可能性がある。外器面は灰黒色で、内器面は桃白色を呈する。内器面はザラザラしている。72~75は土師系土器である。72は外器面にススがまだらに付着する。74の口縁部には、内外器面に粗い横ナデが施され、沈線が生じている。口縁部は中途で大きく肥厚する。73は外器面にナデ後、ヘラ搔きによる薄い斜行の沈線がある。75は外器面に横位と斜行の沈線が重なっている。76は瓦質土器で、復元底径14.4cmを測る。外底は平底の可能性がある。77は滑石製石鍋片で、外底面にススが付着する。78は砥石で、上下両面と両端部に使用痕が残る。79は扁平な小石のオハジキで、重さ2.74gを測る。80は鉄鉋で、81は寛永通宝である。

82~93は繩文土器である。82・83は口縁部で、82は器厚7mmであるが、上位で大きく外側へ張り出し（器厚14mm）、平坦な口唇部は幅10mmを測る。口唇部の外端には押捺文がある。

83は直線的に伸びて、器厚は下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。但し、口縁直口とはならず、口唇部は、やや丸味を帯びる。外器面に構造文を有する。

84は脚部である。器厚7.5mmで、端部は丸味を帯びている。外器面に鮮明な縦位のナデがあり、一部には指頭圧痕も認められる。

85~88は晩期の粗製土器である。85・86は胴部で、87・88は口縁部が残存する。85・86は肉太で、最大器厚は85が12.5mm、86は13mmを測る。いずれも内外器面に粗いナデ（85は横位、86は斜行）が施されている。85の外器面には指頭圧痕が目立つ。

87・88は直線的に伸びている。87は肉太で器厚は11mmの最大器厚を測る。器壁は下位より上位にかけて漸次、肥厚し、口唇部は丸味を帯びた状態となる。内外器面に横ナデが施されている。88は薄壁で、最大器厚は6.5mmに留まる。ほぼ均一な器厚で、口唇部は、やや丸味を帯びている。

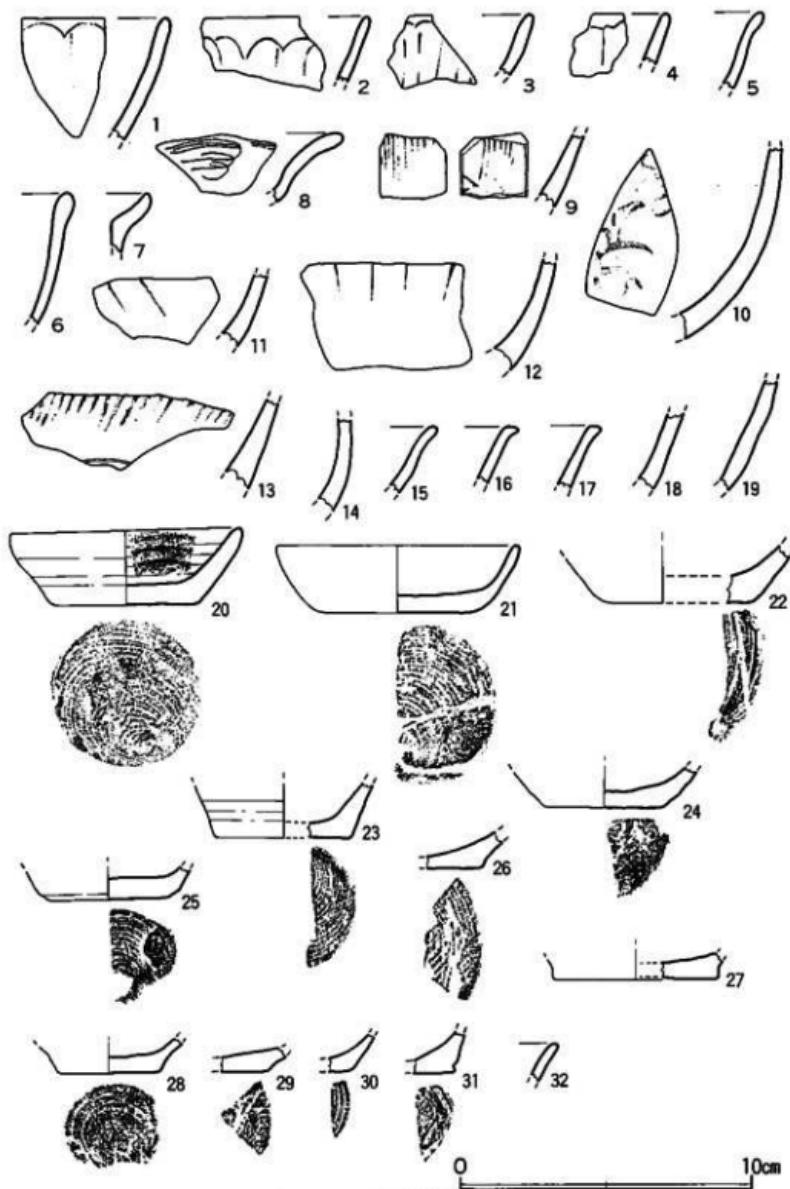
89は突帯付きの胴部で、外器面に縦位と斜行の沈線があり、突帯との境には横位の沈線が巡る。突帯面には押捺文が見られる。

90は肉太の口縁部で、中途で肥厚し、11.5mm幅を測る。口唇部の外端に押捺文があり、直下に2条の沈線が巡る。さらに、中位部分には半月状の刻み目が施されており、下端部については、やや深目の横位の沈線がある。

91は体部で、器厚は均一である。外器面にはナデ後、三角形に近い刺突文が施されている。

92・93は口縁部である。92は内寄し、やや肉太である。内外器面にナデが施されている。93は肉太であるが、下位より上位にかけて漸次、先細りの状態となる。外器面には上位に横位の沈線と、中位から下位にかけて斜行の沈線が見える。

94は免田式の弥生土器である。体部は「く」の字に屈曲する。外器面に横位の沈線が巡り、上位は斜行の刻み目が加えられている。



第 102 図 出土遺物実測図 ①

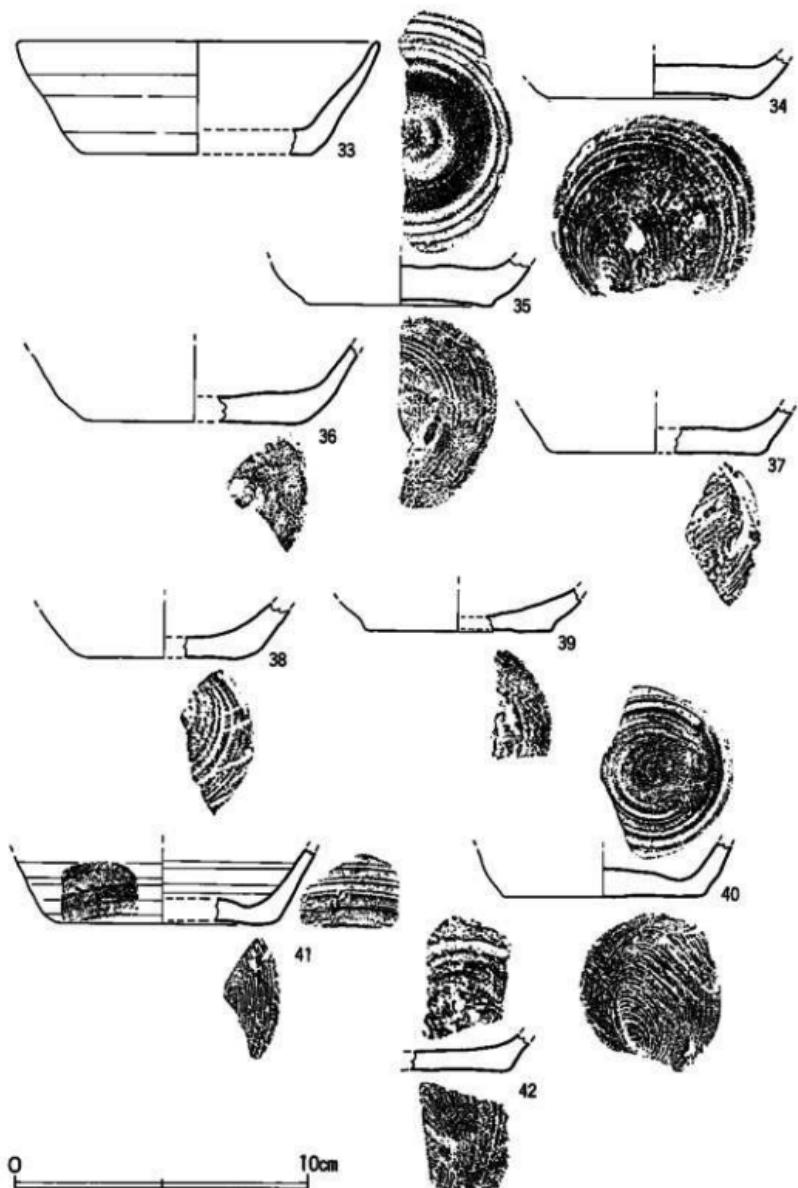
(注) 外:外器面・内:内器面

器種	器耳 no.	胎土	焼成	色 因	文様及び調整	形態の特徴	備考
1 青 瓶 (鉢)	体部 上位 4.5 中位 3 下位 4	陶白色	やや不良	青緑灰白色	外:簡略化された網羅文文様。 器耳は均一。	体部はやや内凹。 器耳は均一。 口部は、やや丸味を帯びる。	釉色は褐色不規則。 器面に質素な不規則が付着。特に外器面に著しい。(4区)
2 青 瓶	口縁部 上位 3.5 中位 3 下位 4	陶白色	やや不良	青緑灰灰色	外:簡めて簡略化された網羅文文様。側面のみ、やや明確。	口縁部は、直線的に伸びるが、中途で内器面が若干、括られる。 口部は、やや丸味を帯びる。	内外器面に、ややさきの仄入がある。(2-2区)
3 青 瓶	口縁部 上位 4 中位 4.5 下位 4	白 色	良好	綠白色	外:簡略化された網羅文文様。文様は輪廻まり状を呈する。	口縁部は僅かに内凹し、中途で、やや肥厚。	器面は光沢を帯びる。(3-2区縦切1)
4 青 瓶	口縁部 上位 3.5 下位 4.5	陶灰色	やや不良	綠青灰白色	外:簡略化された網羅文文様の一型。	口縁部は直線的に伸びる。	内外器面に質入がある。(2-2区)
5 青 瓶	口縁部 上位 4 中位 3 下位 4	白褐色	良	白灰青色	外:屈曲部分より下部へ9cmの所に、ロクロ凹痕によつて生じた、僅く張り感が現る。	口縁部はやや外凸。 1付に深ほや丸味を帯びる。 器耳は、屈曲部分を抜いて均一。	内外器面に細かな質入が走る。(3-2区縦切1)
6 青 瓶 (鉢)	体部 上位 6.5 中位 4 下位 3	陶灰白色	良	綠灰白色	—	体部は、下部より上部にかけて漸次肥厚し、やや内凹。 口縁部は肥厚し、丸味を帯びる。	施釉は薄い。 外器面に細かな質入がある。(3-1区)
7 青 瓶 (鉢)	口縁部 上位 4.5 屈曲 中位 7 下位 3	灰褐色	良好	青灰白色	—	内器面は、中途で大きく屈曲れ状態となる。さらに、これより上部はやや内凹する。 外器面は外凸。	内外器面に大きな質入が走る。(3-1区)
8 青 瓶 模花皿	体部 上位 5 中位 4 下位 4	灰白色	やや不良	灰绿色	内:モチーフ不明の渋い文様。	体部は外凸。 1付に深ほや丸味を帯びる。	内外器面に大きな質入が走る。(6区縦切3)
9 青 瓶	体部 上位 4 下位 6.5	白灰白色	良	綠白灰白色	内:外:複数の渋き状の文様。 内:V字形文様が複数ある。	—	同安窯。 外器面に質入が走る。(3-1区縦切1)
10 青 瓶	体部 上位 4.5 中位 6.5 下位 8	白灰白色	良好	青白綠色	内:モチーフ不明の渋い文様。	体部は内凹。	内外器面に質入が走る。(2-2区)
11 青 瓶	体部 上位 4 下位 7	灰褐色	やや不良	灰白綠色	外:簡略化された網羅文文様の下部部分が現る。	—	(2-2区)
12 青 瓶	体部 上位 4.5 下位 9	灰褐色	やや不良	灰绿色	外:簡略化された網羅文文様の下部部分が現る。	—	施釉や不良。(2-2区)
13 青 瓶 大 三	体部 上位 4.5 下位 9.5	白灰白色 (綠色)	良好	綠白色	外:薄い肉瘤が入る。	内底面の縁は後縫状を呈する。	(2-1区)
14 青 瓶	体部 上位 4.5 下位 6	灰 色 (綠色)	良好	オリーブ灰白色	—	体部は内凹。	器面は光沢あり。 内外器面に大きな質入が走る。 外器面は、やや黄褐色を帯びる。(4区)
15 青白瓶	体部 上位 3 中位 3.5 下位 4	白黄色	良好	—	外:ロクロ凹痕が残る。	体部はやや外凸。	(2-2区)
16 白 瓶	口縁部 上位 5 下位 3.5	白黄色	良好	—	外:薄いロクロ渋底。	器耳は均一で、体部は直線的に伸びて上位で外凹する。 (内底面の上位は腰抜け気味に退屈する。)	外器面の口縁下には色が染めている。(2-2区)

第63表 出土遺物観察表 ①

番号	器種	厚さ mm	胎土	焼成	色調	文様及び調整	形態の特徴	備考
17	白磁	口縁部 上位 5 中位 3.5 下位 4.5	灰白色	良好	——	口部:強いナテにより、裏面 面は幾微状を呈する。	内部面は底面的に伸びてい るが、外部面はやや外窓。 (2-2区)	外部面に貢入がある。
18	白磁	各部 上位 5 下位 6	白灰色 (極めて精 良)	良好	——	内:表面に丁寧なナテ。 下位に底面唇部の沈線。 外:2条のロクロ調整痕。	外部面の下位は底面。	外部面に貢入がある。 (3-1区)
19	天目	各部 上位 4 中位 6 下位 4.5	白黄色	良	内:黑色 外:黑色一茶色	内:薄いロクロ調整痕。 外:底面部分に3条のロクロ 調整痕。	外部面の下位は底面。	(2-1区)
20	土師器	底部 7 外底端 9 全体 7	褐 良	良好	無い褐色	内・外:ロクロ調整痕。 内:底面。 内底:丁寧なナテ。 外底:赤切り廻し後、ナテ。	体部は、僅かに内寄気味に 伸びる。 外底は平底。 外底端は角張る。 口径 8.0cm。 最高 2.6cm。 底径 5.0cm。	質感のある土器。 堅硬な焼成。
21	土師器	底部 6~7 外底端 7 全体 3.0~3.5	良	良好	無い褐色	内:外:無ナテ。 内底:ナテ。 外底:赤切り廻し後、ナテ。	体部は、内寄気味に伸びる 外底は平底。 仰盤の中央は、やや延れて 口縁部で肥厚する。 内底面の中央は指捺圧痕に より、やや度合。 復元口径 8.4cm。 最高 2.8cm。 底径 5.2cm。	(4区)
22	土師器	底部 9 外底端 10.5 全体 5.5	良	良好	褐色	内:ナテ。 外底:赤切り廻し。周縁は粗 い。一部に、横状のもの によって作られたと思われる 2mm幅の沈線。	復元底径 8.9cm。	堅硬な焼成。
23	土師器	底部 5.5 外底端 9 全体 4	良	良好	無い褐色	内:丁寧なナテ。 外:ロクロ調整痕。 外底:赤切り廻し後、一括ナ テ。 外底端:指捺圧痕。	外底は平底。 復元底径 4.7cm。	堅硬な焼成。
24	土師器	底部 5.5 外底端 8 全体 4	良	良好	灰黑色	外:ロクロ調整痕。 内底:無ナテ。 外底:赤切り廻し、無いナテ。	体部の立ち上がりは、やや 佳む。 復元底径 4.1cm。	二次焼成の可能性 あり。 (2-2区)
25	土師器	底部 7.5 外底端 3.5 全体 3.5	褐 良	良好	褐灰色	内底:丁寧なナテ。内底面と の間にロクロ調整痕。 外底:赤切り廻し後、ナテ。	表面の器厚は均一。 外底は平底。	非常に堅硬な焼成。
26	土師器	底部 4 外底端 9 全体 4	良	良好	内:灰黑色 外:無い褐色	内底:ロクロ調整痕。 外底:赤切り廻し後、ナテ。	内底面は、直線的に立ち上 がる。 外底面の一基に板目压痕。 体部は、外寄気味に立ち上 がる。	(3-2区類別1)
27	土師器	底部 4.5 外底端 9	良	やや不良	灰白色	内底:極めて無いナテ。 外底:極めて丁寧なナテ。	外底端はやや角張っている 外底は平底。 復元底径 5.5cm。	(2-2区)
28	土師器	底部 6~7 外底端 7 全体 3	良	良好	無い褐色	内底:極めて無いナテ。 外底:赤切り廻し後、丁寧な ナテ。	体部の立ち上がりは、やや 佳く。 外底:平底。 復元底径 3.4cm。	(4区)
29	土師器	底部 5 外底端 8 全体 4	良 好	良好	乳白色	内:丁寧なナテ。 外底:赤切り廻し後、無いナ テ。板目压痕が付く。	——	(2-2区)
30	土師器	底部 4.5 外底端 6.5 全体 2.5	良 好	普通	褐灰色	内・外:ロクロ調整痕。 外底:赤切り廻し。	——	(2-2区)
31	土師器	底部 4 外底端 11 全体 3.5	良	良好	無い褐色	内:丁寧なナテ。 外:無ナテ。 外底:赤切り廻し後、ナテ。	外底端は張り出す。 外底は平底。	(3-1区)

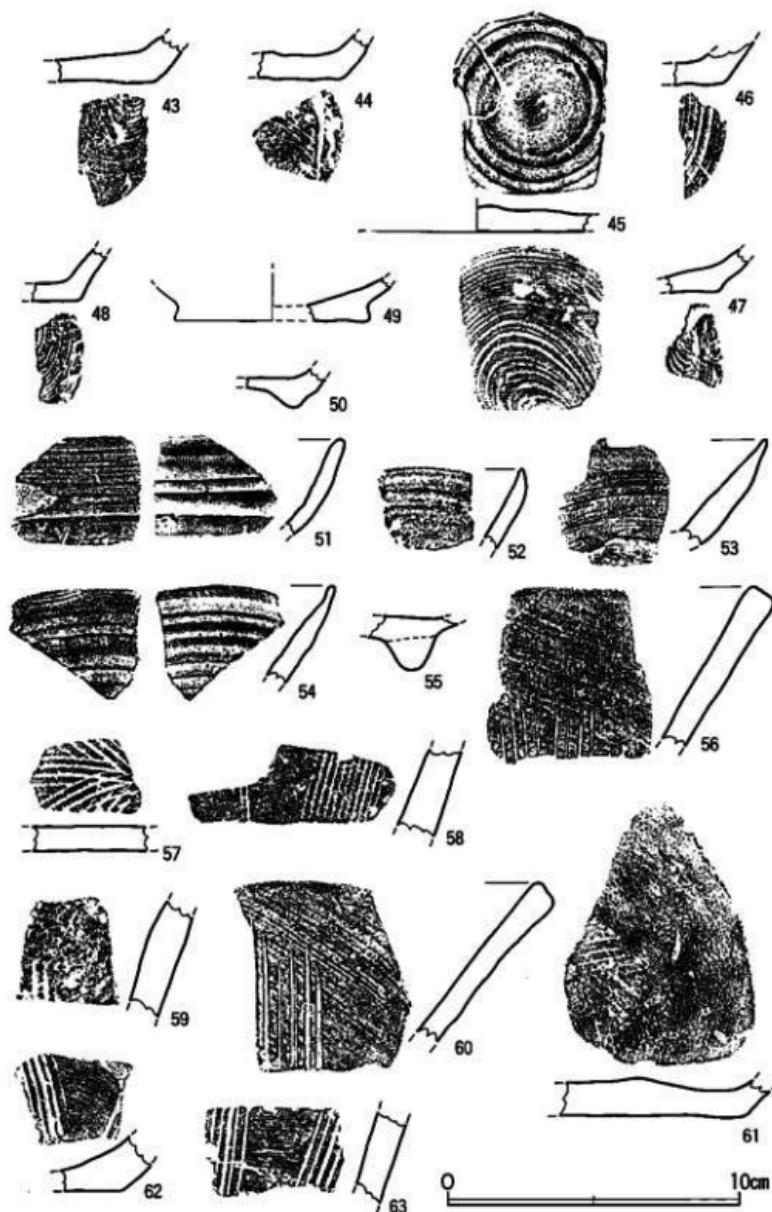
第64表 出土遺物観察表 ②



第 103 図 出土遺物実測図 ②

器種	器 年 =	胎 土	後 成	色 調	文様及び調整	形 種 の 特 徴	備 考
32 土器器	外部 3.5	良	普通	褐灰白色	内・外：模ナゲ。	口部はやや外向。	(2-2区)
33 土器器	底部 8.5 外底端 9 全体 3-8	稍 良	普通	内：薄い褐色 外：灰白黑色 -薄い褐色	内：薄い模ナゲ(表面はザラザラ)。 外：クロコ調底(表面は滑らか)。	底部は中途に張り、やや外弓。口端は直口気味。 復元口径 12.3cm。 底高 3.8cm。 復元底径 7.8cm。	(2-1区)
34 土器器	底部 9 外底端 11 全体 5	良	普通	内：灰黑色 -褐灰黄色 外：褐灰黄色	内：模ナゲ。 底内：ナゲ。 外底：未切り離し。	外底は若干、上行底。 底径 7.0cm。	(2-1区)
35 土器器	底部 12 外底端 13 全体 8	稍 良	良好	薄い褐色	外器面：ナゲ。 内底：クロコ調底。 外底：未切り離し後、一部に鉛錆斑。	外底端は、やや張り出す。 外底は、やや上行底。 底径 6.5cm。	堅硬な焼成。
36 土器器	底部 9-11 外底端 11 全体 4	良	良好	薄い褐色	外：模ナゲ。 内底：ナゲ。 外底：未切り離し後、薄いナゲ。	外底は平底。 体部の立ち上がりは、やや丸味を帯びる。 復元底径 7.5cm。	(3-2区類似1)
37 土器器	底部 9 外底端 9.5 全体 5	稍 良	良好	薄い褐色	外：やや薄いナゲ。 内底：丁寧なナゲ。 外底：未切り離し後、ナゲ。	底部は内丸。 復元底径 7.3cm。	堅硬な焼成。
38 土器器	底部 7 外底端 11 全体 7	稍 良	良好	褐褐色	外：ナゲ。 内底：模ナゲ。 外底：未切り離し。	外底端は、やや丸味を帯びる。 復元底径 5.4cm。	非常に堅硬な焼成。
39 土器器	底部 4-10 外底端 10 全体 5	良	良好	内：褐灰白色 外：灰褐色	内・外・底：初めて丁寧なナゲ。	内底端は中央部より道端にかけて、ほほ直線的に立ち上がる。 体部の立ち上がりは、やや盛り。 外底は平底。 復元底径 6.4cm。	内面との接続は、直線状に窪む。 やや堅硬な焼成。
40 土器器	底部 5-9 外底端 8	稍 良	良好	薄い褐色	内底：ナゲられているが、クロコ調底が明る。	外底は、やや上行底。 内底面は、全体的に凸の状態を呈する。 復元底径 6.7cm。	非常に堅硬な焼成。
41 土器器	底部 6-8 外底端 8 全体 3.5	稍 良	良好	薄い褐色	内・外：堅硬なクロコ調底。 外底：未切り離し後、ナゲ。 一部で指紋による調整。	外底は上行底。 復元底径 7.4cm。	堅硬な焼成。
42 土器器	底部 6-9 外底端 9 全体 5	良	良好	薄い褐色 くすんだ感じ	内底：ローリングが激しい。 外底：未切り離し後、非常に強いナゲ。	外底は平底。 外底端はやや角張る。	堅硬な焼成。
43 土器器	底部 7-10 外底端 11 全体 9	良	良好	薄い褐色	内・内底：クロコ調底。 外底：ナゲ。 外底：未切り離し後、ナゲ。	外底は平底。 外底端はやや角張る。	(7区)
44 土器器	底部 8-10 外底端 10 全体 6	良	良好	内：薄い褐色 灰褐色 外：灰褐色	外：模ナゲ。 内底：丁寧なナゲ。 外底：未切り離しで薄い調整。	底部の中央で、やや肥厚。	(7区)
45 土器器	底部 6-9	稍 良	良好	褐灰色	内底：堅硬なクロコ調底。	内底面は中央部寄りで凸。	堅硬な焼成。
46 土器器	底部 7.5	稍 良	良好	褐灰黄色	外：丁寧な模ナゲ。 内底：ナゲ。 外底：未切り離し。	外底端は、やや角張る。	堅硬な焼成。
47 土器器	底部 5 外底端 9 全体 5	良	良好	褐褐色	内・外：模ナゲ。 外底：未切り離しで薄い調整。	体部の立ち上がりは、やや盛り。	(2-1区)
48 土器器	底部 6 外底端 8.5 全体 5	良	良好	薄い褐色	内・外：クロコ調底。 外底：未切り離し。	外底は平底(?)。	(3-1区類似1)

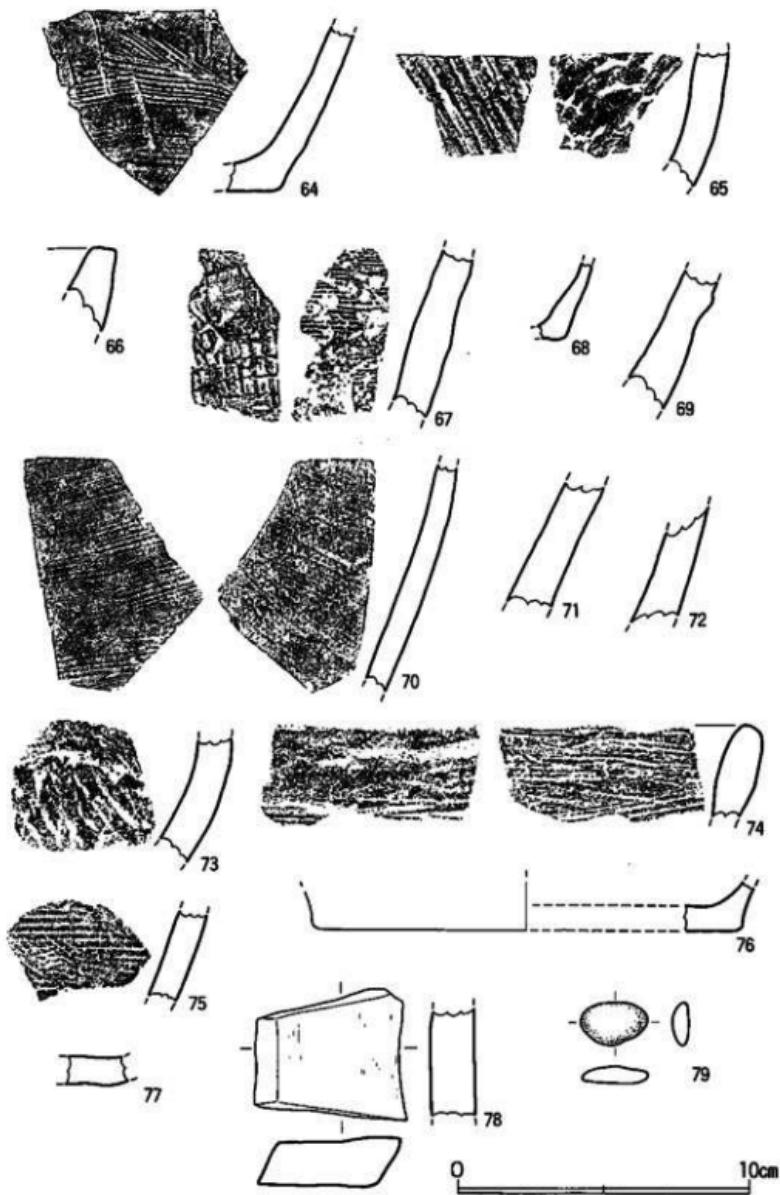
第65表 出土遺物観察表 (3)



第 104図 出土遺物実測図 ③

部 像	器 箕 m	胎 土	施 成	色 调	文 種 及 び 図 量	形 異 の 特 徴	備 考
49 土器器	底部 5 外底端 12 体部 4	良	良好	内: 黄褐色 外: 黄白色	外: 外底: 黄褐色 内: 非常に良いナデ。 内底: 非常に良いナデ。	内底面は中央部寄り。周縁にかけて、ほぼ直線的に立ち上がり。 各部の立ち上がりは大きく違うため、外底面は外部へ張り出している。あたかも高台の様子を呈する。	(5 区)
50 土器器	底部 3 外底端 10 体部 6	良	普通	黄褐色	内底: ロクロ調整痕。 外底: 非常に良い指捺痕。 但し、ローリング痕。	外底面は、あたかも高台の様な形状。	(2~2 区)
51 土器器	体部 上位 5 中位 5.5 下位 5	稍 良	良好	黄褐色	内・外: 非常に堅硬なロクロ調整痕。	体部は内底。 口唇部はやや平坦、2.5mm 程。	(3~1 区)
52 土器器	体部 上位 1.5 中位 5.5 下位 5	やや粗い 普通	黄褐色	内: ロクロ調整痕。 外: 植ナデ。	体部は外器面側が半身状を呈し、内部面は上位で、やや内側。 口縁部。	内外器面に針穴状の孔があがみえる。	(7 区)
53 土器器	体部 上位 2 中位 8 下位 8.5	良	良好	黄褐色	内: 植ナデ。 外: ロクロ調整痕。	口縁部。	堅硬な構成。 (2~2 区)
54 土器器	体部 上位 2.5 中位 7 下位 6	良	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内・外: 坚硬なロクロ調整痕	口縁部は、やや内凹。 口縁は直口式。	二大統成の可能性あり。 内器面の上位にススキが付着する。 (2~2 区)
55 土器器 番号	底部 9 体部 4.5 高台高 10	稍 良	良好	黄褐色	内・外: 丁寧なナデ。	高台は取り付け。	高台付き。 (6 区)
56 瓦 質 砂	体部 上位 11 中位 9.5 下位 8	稍 良	良好	灰白色	内: T字型斜行のナデ後、垂直が下位から上位へ張り上げられている。 表面の一帯ははる本の可塑性あり。 外: ナデ後、指捺による調整。	体部は下位より上位にかけて膨らみ、肥厚。 口縁部は、中央部が推動に傾む。	(3~1 区 SK 1)
57 瓦 質 砂	底部 8	良	良好	内: 灰色 外: 黄褐色	内底: 条幅は 1mm 程。間に張かれている。 外底: ナデ。	——	(2~2 区)
58 瓦 質 砂	体部 上位 11 下位 13	稍 良	やや不良	内: 灰白青色 外: 黄白色	内: 1 本草鞋の指捺き比較。 底は非常に高い。(ローリングの為か?) 外: ナデと指捺による調整。	——	内器面の胎土は手に付着。(2~1 区)
59 土器系 器	上位 10.5 中位 11.5 下位 11.5	良	普通	灰白色	内: 2 本の条幅が残る。 器物のローリング痕。	——	(2~1 区)
60 油器類 器	上位 9 中位 8 下位 7 灰石を多く含む	良	普通	灰白色	内: 斜行の剥け目痕、条縫を張いている。 外: 上位は植ナデ。中位に沈殿が混入。下位は植ナデと指捺による調整。	口唇部はやや痩む。	(2~2 区)
61 土器系 器	底部 9~13 体部 7	やや不良	内: 灰白褐色 外: 黑褐色 ~灰白色	内: カサカサな条縫が残る。 (かなりのローリングを受けている) 外: ナデ後、指捺による調整。	内底面は、中位で最大部厚を示す。	(2~2 区)	
62 瓦 質 砂	底部 7 外底端 14 体部 12	良	良好	小豆色	内: T字ナデ後、条縫が張かれている。条縫は 1.5mm 程で、5mm まで認められる。 外: 植ナデ。	底部は厚壁。 体部は肥厚。	非常に堅硬な構成。
63 瓦器類 器	底部 上位 11 下位 9.5	長石の混入 がやや目立つ。	良好	内: 灰色 外: 灰小豆色	内: 植ナデ後、条縫が張かれている。 条縫は 0.5~1mm 程で 5mm まで認められている。 外: 植ナデ。	——	堅硬な構成。 (4 区)

第66表 出土遺物観察表 (4)

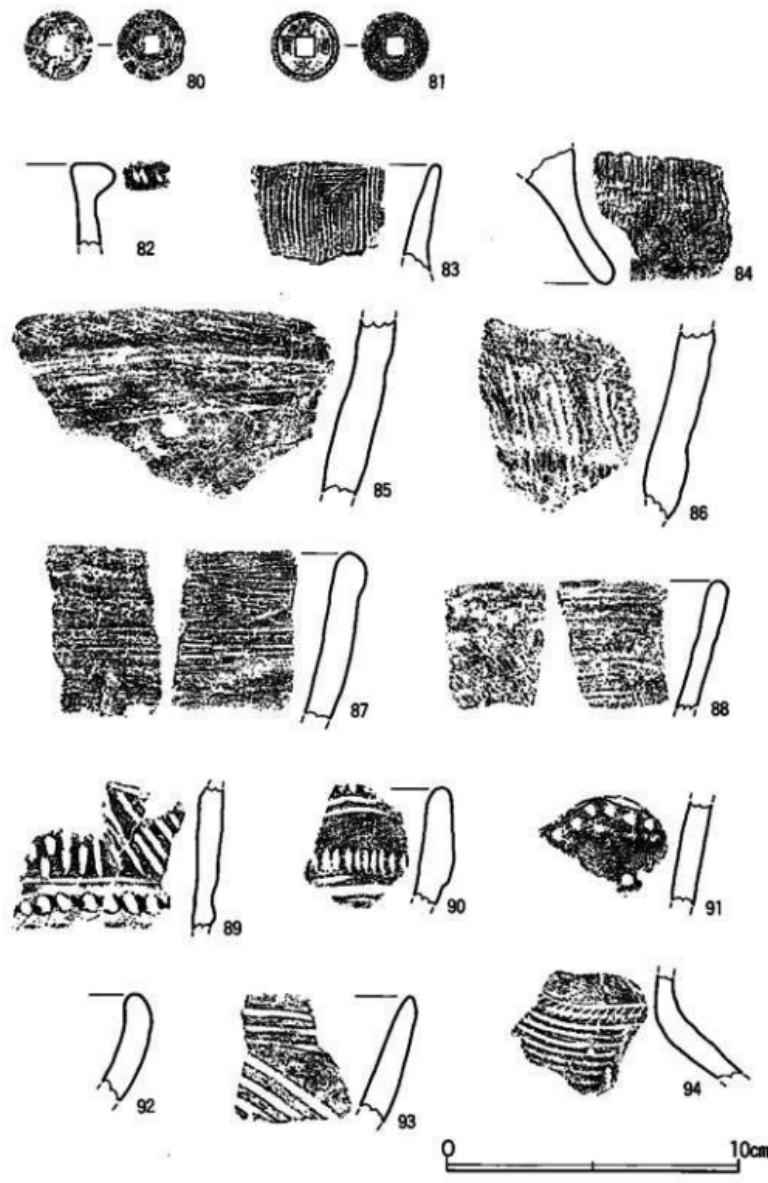


第 105図 出土遺物実測図 ④

(出) 外:外器面 内:内器面

器種	器 平 m	胎 土	成 形	色 调	文様及び圖案	形 異 の 特徴	備考
瓦 束 付 ?	底部 9 外底端 14 体部 8.5	良	良好	灰色	内:斜行の剥け目後、段位の剥け目。 外:ナメと指觸による調整。	——	非常に堅硬な焼成。 (3-1区柱穴3)
瓦 束 土 器	体部 上位 11 中位 11	良	良好	灰白色	内:ハラによる、無いが強い ナメ。 外:ロクロ調整痕。	——	非常に堅硬な焼成。 (5区)
瓦 束 土 器	口縁部 口径 7.5 体部 15	良	良好	灰褐色	内・外:ロクロ調整痕。 口径:両端は 1.5mm程で、ナ メられている。	口唇部は平坦。	(2-2区)
瓦 束 土 器	体部 上位 11.5 中位 14 下位 12.5	良	普通	灰色	内:焼成の都合。 外:帽子状のナメキに、一部 でナメが附着。さらに強 い指觸痕痕も残る。	——	(2-2区)
瓦 束 器	底部 4 外底端 9 体部 4	良	良好	灰色	内:横線状を見る2つのロ クロ調整痕。 外:比較的のロクロ調整痕。	体部は、直線的に立ち上が る。	(4区)
瓦 束 器 火付?	体部 上位 12 下位 15	良	良好	灰白色	内:丁寧な横ナメ。 外:押印痕。	体部の上位に突起が付く。	(4区)
瓦 束 器	体部 上位 7 中位 9 下位 8	良	良好	灰小豆色	内:横ナメ後、斜行のナメが 加わる。 外:剥け目。	——	(2-2区)
中 束 器	体部 上位 12.5 下位 14.5	良	やや不良	内:純白色 外:灰黑色	内・外:横ナメ。	内部面はザラザラ。	三次焼成の可能性。 (2-1区)
土師系 土 器	体部 上位 12 下位 15	良	良	純い褐色	内:横ナメ後、斜行による弱 い調整。 外:ナメ。	外表面の全面にスジが、E だら状に付着。	(2-1区)
土 束 土 器	体部 上位 11.5 中位 12 下位 11.5	良	良好	内:純い褐色 外:灰褐色	内:ナメ。 外:ナメ後、ハラ焼きによる 弱い斜行の化粧。	——	(2-2区)
土 束 土 器	口縁部 上位 6 中位 12 下位 9	墨書きの混 入が目立つ	良好	純い褐色	内:焼めて弱い横ナメ。 外:横ナメ後、斜行による調 整。	口縁部は中途で肥厚。	非常に堅硬な焼成。 (2-1区)
土 束 土 器	体部 上位 9.5 下位 9	良	普通	純い褐色	内:ナメ後、指觸による調整 外:横位の沈縮(横ナメによる) に斜行の沈縮(斜行のナ メによる)が重なる。	——	(2-1区)
瓦 束 土 器	底部 8.5 外底端 11 体部 4	良	やや不良	内:褐灰褐色 外:灰褐色	内:やや粗いナメ。 外:外底:赤茶に丁寧なナメ	体部は外底気泡に立ち上が る。 復元底径 14.4cm。	(2-2区)
滑石製 石 器	底部 9	——	——	——	内:丁寧な削り。	——	外表面にスス付着。 (2-2区)
砾 石	——	(石材) 天然砾石	——	黄褐色	上下両面と両側面に使用痕 が残る。	幅 4.2cm, 厚さ 1.55 cm, 重さ 53.8 kg.	(2-2区)
オハシ キ	——	(石材) 貝 磯	——	灰褐色	扁平。	長 さ 2.15cm, 厚 さ 2.5 cm, 最 大 幅 1.4 cm, 重 さ 2.74 kg.	表面は磨かれて いる。 (2-2区)
鉢	直径23×26	——	——	——	——	中心部の穴は、やや歪な長 方形 (6mm×4~5mm) × 厚さ 2 mm, 直径 3.03 mm.	サビの付着が無し い。
家 水 甕	直径 23	——	——	——	——	中心部の穴は正方形。 (1mm×6mm) × 厚さ 0.5mm, 直径 2.95 mm.	

第67表 出土遺物観察表 (5)



第 106図 出土遺物実測図 ⑤

(注) 外: 外器面・内: 内器面

	部種	器草 m	胎土	焼成	色調	文様及び調整	形態の特徴	備考
82	縄文	口縁部 上位 14 中位 6 下位 7	長石の混入 が目立つ	普通	内: 黒い褐色 外: 黑褐色 →灰褐色	口縁: 外器面に押捺文。 	口縁部は大きく肥厚し、最 大14mm幅を示す。 口唇部は平坦で、10mm幅。	(2-2区)
83	縄文	口縁部 上位 3 中位 4 下位 8.5	長石の混入 が目立つ	不良	乳褐色 外: 灰褐色が混入	内: ナデ。 外: 縱位の押捺文。	口唇部は平坦。	(2-2区)
84	縄文	全体 7.5	雲母・長石	良好	黒い褐色	内: ナデ、一部に横位の押捺 痕成。 外: 横位のナデ、一部に押捺 痕成。	両脇の輪郭は丸味を帯びる。	平底の土器。
85	縄文	全体 上位 11 中位 12.5 下位 11	雲母・長石	不良	灰褐色 (一部、灰色)	内・外: 黒い褐色ナデ。 外: 押捺痕成が目立つ。	——	晚期の粗粒土器。
86	縄文	全体 上位 12 下位 13	雲母・長石	普通	乳褐色	内: 黒ナデ。 外: 削行の黒いナデ。	外器面の下位に粗筋。	(2-2区)
87	縄文	口縁部 上位 11 中位 10.5 下位 9	雲母・長石	良	褐褐色 一部で灰黑色	内: 黒い褐色ナデ。 外: 黒ナデ、上位に横位の押 捺痕成。	全体はやや内窓。口唇部は 丸味を帯びて肥厚。	晚期の粗粒土器。
88	縄文	口縁部 上位 6.5 中位 6 下位 6	雲母・長石	普通	灰黒褐色	内: 黒ナデ。 外: ナデで、押捺痕成が目立 つ。	口唇部は、やや丸味を帯び る。	晚期の粗粒土器。
89	縄文	全体 上位 8 中位 7 下位 6.5	雲母・長石	普通	灰白黄褐色	外: 縱位と斜行の沈線 (2- 2.5mm幅)。 突堤面に押捺文。突堤の 上位に横位の沈線 (1mm幅)	突堤が特く。	(2-2区)
90	縄文	口縁部 上位 8 中位 11.5 下位 8	雲母・長石	良好	内: 灰黑色 外: 黑褐色 一部、明褐色	内: 非常に丁寧なナデ。 口唇: 外器面に押捺文、直下に 2条の沈線 (1mm幅)。 外器面の下位に半月状の 筋み目 (横位で長さ6mm 幅1-2mm)。下位に3 mm幅のやや、深い沈線。	——	(3-1区 SD 1)
91	縄文	全体 上位 8 下位 8.5	雲母	良好	茶褐色	内: 丁寧なナデ。 外: ナデ後、削行文 (三角形 に近く、大きさは底辺4mm 高さ4mm)。	——	(3-1区)
92	縄文	口縁部 上位 8 中位 9 下位 9	長石の混入 が目立つ	普通	内: 灰茶色土 外: 灰茶褐色土	内・外: ナデ。口縁下に強く 浅い横位の沈線。	——	(3-1区 SK 4)
93	土器系 土器	口縁部 上位 6 中位 9 下位 10	雲母の混入 が目立つ	普通	灰小豆色	口縁: 上位に横位の沈線 (2.5 mm幅)、中位から下位に 斜行の沈線 (3mm幅)。	口唇部は、やや丸味を帯び る。	非常に堅硬な構成。
94	漆生	全体 上位 5.5 中位 8 下位 7	長石	普通	内: 灰白褐色 外: 黒い褐色	外: 縱位の沈線 (1.5-2mm 幅)、上位には横位の筋み 目が入る。	全体は上位で「く」の字に 彫曲する。	先田式土器。
								(2-2区)

第68表 出土遺物観察表 (6)

第4節 まとめ

高城跡Ⅳ郭における調査の範囲は帯状形（幅2～8m）で、総延長130mを測るものであつたため、調査の過程で細分した調査区ごとの部分的な解明に留まった。

しかし、高城跡そのものが、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設を契機に、路線にかかるⅡ～Ⅳ郭（高城跡の中心域）が大規模に発掘調査されている（県文化課が昭和59年中旬から60年中旬にかけて実施した。）所から、今回のⅣ郭調査は、はからずも当時の調査を補充する結果となった。

（1）第1調査区

調査箇所は大土壘の南端部で、この土壘は高城跡Ⅰ郭の東側裾部に掘られた堀切に付随するものである。

掻き上げの土壘と思われるが、今回の調査では、まったく積み土が観察されず、検出部分はすべて地山であった。

したがって、この事により、土壘はかなりの部分が地山を削り残したものであり、積み土部分は土壘の上位部分に限られるものであった事が考えられる。

すなわち、築城前の地形は、Ⅰ郭と大土壘を含めた一帯が一連の小山状の丘陵地で、この斜面部の端部寄りを深く掘り下げたものが現在の堀切で、端部の掘り残し部分が、大土壘の基底部をなすものであった事がわかる。

（2）第2調査区

（第2－1調査区） 調査前はⅣ郭の平坦地であったが、調査の結果、後世、シラスの傾斜地に造成された平場である事が判明した。この調査区の南西縁土層断面より、Ⅳ郭の南側裾部を走行すると思われる空堀の肩部が検出された。

（第2－2調査区） 第2－1調査区の西縁で検出された空堀の延長部分を想定したが、空堀は南側へ振れているらしく、肩部そのものは検出できなかった。ここもシラスの傾斜地であった。

しかし、Ⅳ郭の斜面部に刻まれた浸食地形の堆積土から、総数154点の中世遺物が出土した。これらは、必然的にⅣ郭における生活遺物の流れ込みと考えられる。

（3）第3調査区

（第3－1調査区） 掘立柱建築址1棟分と小土壙4基、小溝1本が検出された。建築址については、Ⅱ～Ⅳ郭検出のものと、ほぼ同じ大きさで似かよったものである。小溝は建築址に付随するものと考えられるが、水の流れた形跡はない。

小土壙は建築址や小溝と、多少、時期的な差異があると思われるが、前後関係は不明である。

（第3－2調査区） Ⅳ郭とⅢ郭を仕切る堀切で、長さ14m分を検出した（堀切1）。上場

幅6.5~7m、下場幅1mを測り、断面形状は箱堀に近い。堀底の南側寄りに浸食地形の小溝が形成されている。さらに、堀切の南壁から柱穴群が検出された。これについては、堀壁に打ちこまれた並茂木状の杭列と思われる。

(4) 第4調査区

調査区の西壁土層から、地表面観察ではまったく存在のわからなかったⅤ郭-①とⅥ郭-②を仕切る堀切2が検出された。上場幅7.5m、下場幅1.5mの大規模なもので、東から西へ走行するものと思われるが、今回、西端部は検出できなかった。

(5) 第5調査区

Ⅴ郭-②の東縁から6基の土塙が検出された。この内、SE2・3を除く4基については、出土遺物等はないものの、形状が、城・馬場遺跡から検出された中世墓塙と極めて似かよっており、これも又、中世墓塙にまちがいないものと思われる。

検出箇所は、高城跡Ⅰ郭の東北東方向にあたり、Ⅴ郭の北側に位置する(伝)薬師堂跡とは約45mの距離を有している。これらに関連して、Ⅴ郭-②の一部に小規模な墓塙が存在するのであろうか。

(6) 第6調査区

Ⅴ郭の東側裾部にある腰曲輪状の平坦地(Ⅴ-b郭)で、調査の結果、Ⅴ郭との接合部から堀切3が検出された。長さ16m分で、上場幅2.6m、下場幅0.3~0.7mを測り、水の流れた形跡があったが、検出状況からして通路として利用されていたと思われ、北端部は第7調査区の道路遺構2に繋がるものと思われる。

なお、堀底の一部に積まれた大石の用途は、中世城跡での投げ石の事例を含めて、今後の研究課題である。さらに、平場の東縁寄りで検出された小溝は浸食地形の可能性も考えられる。

(7) 第7調査区

Ⅴ郭の北東下にある帯状形の平坦地(Ⅴ-c郭)で、調査の結果、東端より西側へ長さ12m分については、単なる削平地である事が判明した。遺構も存在しなかったが、調査区の残り9m分については堀切4が検出された。この堀切は検出状況からして、平時は通路としての役割が強く、道路遺構2と一連のものと考えられる。

道路遺構2については長さ11m分を検出したが、平道で道路遺構1のような凹道ではなかった。

〔出土遺物による高城跡Ⅴ郭の年代〕

出土遺物の中で年代を推定出来るものは青磁で、この中には同安窯(9)や青磁大皿(13)などの古い時代のものがあったが、細蓮弁文碗(1~4)と梭花皿(8)がこの調査区での標準的なもので、時代的には15世紀後半から16世紀前半頃のものである。したがって、高城跡Ⅴ郭の年代はこの頃に比定されよう。この調査結果は、高城跡Ⅱ~Ⅳ郭の調査結果と同一である。

総 括

高城跡は九州縦貫自動車道（八代一人吉間）の建設に伴う事前の分布調査によって、新たに見つかった中世城跡である。試掘及び実測調査の結果Ⅱ郭からなることが分かり、そのうちのⅡ郭・Ⅲ郭とⅣ郭については自動車道建設に伴い、昭和59年度に発掘調査を実施したところである（熊本県文化財調査報告第95集「高城跡」1988）。

本書で報告する地区は、高城跡の北東域と南域にあたるⅣ郭と馬場道周辺の一郭である。以下、各調査の成果と問題点について整理してみたい。

1. 城・馬場遺跡（馬場道）

中世城跡に間連する遺構としては、柱穴と墓が検出されている。前者は219個の柱穴が確認できており、そのいずれもが打ち込まれた状況で、配列から推定して馬場道の肩部に設けられた櫓や杭跡であろうと思われる。

墓は上部が削られているが、直径約1.2m、深さ0.25mで、床面から人骨片（下顎骨の一部と前歯3本）と共に、糸切皿3枚と保存の悪い銅鏡が見つかった。

今回の調査で、的確な時期を判断できる遺物はなかったが、昭和59年度に調査した高城跡と同時期の15世紀末～16世紀前半に比定できよう。

中世以外の遺構・遺物として、縄文時代早期の集石3基と不正形の土塙1基及び土器・石器が検出された。集石3基のうち2基は長円形・円形の土塙を伴い、その上部や周囲に石を並べた状態であったが、残る1基は土塙を伴っていない。

不正形土塙（SK1）からは、横たえられ押し潰された状態の円筒土器が見つかった。この土器は、ほぼ一個体分で底部を欠くが、ヘラ状工具による沈線が、口縁部と胴部は横線で、その中間は縱線で施されている。

その他、調査区域から押型文・微隆起突帯文・沈線文・撲糸文・網目文・縄文・刺突文などの文様をもつ手向山式土器が検出されている。

この中で特に注目するのは、頸部が著しくくびれた壺形土器5点である。内2点は一部欠損しているが、ほぼ完形品で、共に押型文が施されている。1点（第16図）は頸部の上半分を欠くが、均整のとれた卵形の胴部であり、底部は、やや上げ底を呈している。他の1点は胴部の下半分を欠き、口唇部には押型文が施されており、外反した頸部にアクセントのある肩部が続いている。

この種の器形の存在については、すでに新東見一氏の指摘がなされていたが（P.81参照）、今後、新資料の追加によって、手向山式系土器についてはより明確になっていくものであろう。

2. 高城跡Ⅴ郭

調査地区が高城跡Ⅴ郭の東縁から北縁沿いであったため、Ⅴ郭の全容を把握することはできなかったが、59年度の発掘調査で検出された他郭との関連を補充する成果をあげることができた。

まず、Ⅴ郭の西側にある土壘の南端部の調査で（第1調査区）、築城前の地形がもともとⅠ郭から土壘まで続く丘陵であり、Ⅰ郭との間を掘り凹めて堀切とし、残った部分を土壘状に利用したものであることが分かり、この時期の造成方法を知る手がかりとなるものである。

Ⅴ郭の平場の一部の第3-1調査区からは、59年度調査のⅡ～Ⅳ郭と類似した掘立て柱の建築址1棟分を検出し、Ⅴ郭とⅣ郭の間の堀切は箱型に近い断面形をとることが分かった。なお、堀切の南壁からは壁面に打ち込まれたと見られる杭列が検出された。その他、Ⅴ郭の東縁の第5調査区では6基の土塙が検出された。形状や埋土が城・馬場遺跡の中世墓塙と類似することから、それらも墓塙と推察される。

各調査区から検出した遺物から、高城跡Ⅴ郭の年代は15世紀後半から16世紀前半頃であり、過去に調査したⅡ～Ⅳ郭と同一時期である。

付 論

「合戦峯墓碑群」について

前川清一

一. はじめに

合戦峯墓地は、竹林のなかに窪地を設け造成されている。墓地は、竹林の緩やかな斜面を利用し、二段に形成されている。下段は、東西に向かって広がり、上段は、南北の窪地と東西の窪地が逆L字型に造られている。あたかも、墓地全体がこの窪地のなかに隠されたような印象を受けるものである。この点から主査大田幸博は、一向宗（浄土真宗）禁制と何等かの関連がありはしないかと推測した。本稿は、かかる点から二日間にわたり、墓碑群の調査を行い、分析した結果の報告である。（P.145 第一図 合戦峯墓碑群配置図 参照）

二. 墓碑について

調査の結果は、第一表（P.144）として「合戦峯墓碑一覧表（大正年間まで）」のようになる。

総数47基で、総てに紀年銘を刻んでいる。47基の内訳は、宝暦2年10月7日（1752）を初出しして江戸期の紀年銘を持つものが30基、明治年間のものが12基、大正年間のものが4基、不明が1基（「午ノ年」とあるのも、後述するように明治15年以前の建立であると認められる）となる。また、昭和年間のものが30基ある。このほかには、木造墓碑が4基見られる他、時代が不明な無銘の石造墓碑や川石を積んだものなど、およそ34箇所が確認できた。これらを合わせた全体の総数は、115基となる。なお、江戸時代の木造墓碑もあったであろうが、朽ちて失われたとみて差し支えないであろうし、石造墓碑もまだ埋もれているものもある。

ところで、集成された墓碑については、項目別に型態・法名（戒名）・銘文・紀年銘等により下記のような分析を行った。

① 型態について

墓碑の型態を大別すれば、第二図（P.145）のような四型態が見られる。第二図は、特に墓碑の碑身（ほときいし）を中心に分類したものである。

A型は、墓碑の頂部を山型に形成するもので、一般に江戸初期頃から見られる。第一表では、19基が確認される。

B型は、墓碑の頂部を丸く造るもので、A型と同様に江戸初期頃から一般化していく。

C型は、角柱で頂部を角錐型とし、近代以降に流行する墓碑のはしりである。江戸中期頃から見られ、明治以降に一般化していく。

D型は、角柱で多くの場合、基壇が二ないし三段となる。近代以降で、特に大正以降から見

られてくる。現在最も多く見られるもので、個人の墓碑の他に、家族や一族の合同墓として建立されることが多い。

以上、簡単に説明してみたが、A・B型は、江戸時代の主流を占めるもので、共に併存した型態である。頂部の相違は、何に由来するものか現在のところ断定できないが、少なくともA型は中世に流行した板碑からの変化とみてよいであろう。

ところで、A型とB型の相違は被葬者の男女別に因るものである。第一表で見れば、A型19基のうち、女性の墓は2基、B型22基のうち男性の墓が2基である。このことから型態的にみて9割以上の確率で、A型は男性の墓、B型は女性の墓として使用されたと推測できよう。しかし、他の地域や江戸初期ではどうであるのかは、今後の調査が必要である。

当墓地には江戸初期の墓碑は見られないが、多くの場合、時期が古いほど相対的にみて大きくなると見て差し支えない。一般的に江戸中期頃から碑身の高さが50センチ前後となってくる。また、A・B型とともに碑身を支える基礎石があり、多くは碑身を支えるほぞ穴を持つ。

(2) 法名(戒名)について

法名あるいは戒名とした場合、厳密にいえば次のような違いがある。法名とは、出家するときに俗名を改めて授けられる名前のことであり、さらに授戒したのちに授かる名前が、戒名と呼ばれるものである。比丘・比丘尼と呼ばれるものがこれである。本来は生前に付けてもらうべきものであるが、江戸初期の寺詣制度の普及とともに、しだいに死者に授けられるものとなつた。なお、生前に法名を頂くことを、逆修(ぎゃくしゅう)あるいは預修(よしゅう)という。このようにして授かった法名が墓碑に刻まれる場合は、法名の下に寿位などと記されたり、朱色で法名を塗ったりした。夫の死後、残った妻も法名を授かり夫婦合同の墓を建立することもある。このときは、死者の法名は墨書きされ、生者の法名には朱をいれて区別されるのである。このために、江戸期の川柳に「石塔の赤い信女が子をはらみ」などと詠まれたりした。

僧が死者に対して付ける名前のことを宗派を越えていう場合には、一般的に法名という。特に浄土真宗では、授戒の作法がないので戒名とは言わないのである。これに対し、浄土宗・禅宗等では、戒名と呼ばれることが多い。

さて、隠れ念佛の門徒(浄土真宗の門徒)が死んだとすれば、浄土真宗による法名が付けられた可能性もあるとの仮設をたて、第一表の戒名(法名)について、検討してみた。

当墓地で明らかな変化が見られてくるのは、明治16年以降の墓碑である。その初出は、「明治十六年十一月十三日」の紀年銘で「法名 粢順尊(蓮座)」とある。典型的な浄土真宗による墓碑の建立がなされた事が判明する。以後、この墓地ではすべて浄土真宗による法名が付けられていることが確認できた。

では、明治以前の墓碑はどのようなものであったのか。また、どのような宗派によつたもの

であろうか。特徴のある戒名として、誓号が用いられたものが3基存在している。他は、戒名のみで判断することは難しい。ところで、誓号の戒名をもつものは、元治2年の「根誉淨善信女（蓮座）」と慶応2年正月の「觀誉消現信士（蓮座）」と年号不明な「開譽祇園信士（蓮座）」の3基である。これは、浄土宗によるものといえる。

なお、すぐ南の合戦峯の観音堂の墓地には、同じく浄土宗による墓碑がみられるが、人吉市の大信寺の門徒であったと考えられることから、当合戦峯墓地の門徒も同様であったと推測される。大信寺は、人吉市南泉田町に現存しているお寺である。にもかかわらず、明治16年以降の墓碑にみられるような浄土真宗へのあからさまな改宗は何を物語るのであろうか。人吉・球磨地方で浄土真宗が解禁となったのは明治9年のことである。また浄土真宗が、人吉市に公式に進出してきたのは明治11年のことで、説教所の開設によるものであった。寺院は人吉別院で、明治13年のことである。

現在、合戦峯墓地は5ないし6軒で使用されている。人吉別院の門徒だが、周辺の墓地でも共通するものであるのか、今後の調査が必要である。

③ 紀年銘について

紀年銘は、時代の流行を反映するので、真贋の判断等にも役立つ。ここでは、江戸中期以降を対象とするが、紀年銘の表現方法について、その移り変わりを見てみたい。

当墓地で最古銘の「宝曆二壬申／十月七日」は、一般に中世以降出現する手法であり、年号の次に干支を記す。この種のものは、江戸時代で9例、明治年間で1例の10例にすぎない。これに対して、次の「安永六酉年／四月二十四日」の墓碑では、十干は省略されたもので、この傾向は幕末になるにつれて例を増していく。江戸時代で20例、明治年間で4例が確認される。しかし、これらの手法も、西暦の使用がはじまる明治初期を過ぎると全く見られなくなってしまう。代わって登場するのが、旧暦の表示である。明治20年、明治24年、明治39年の墓碑に見られてくる。これは、明らかに当地へも太陽暦の使用が浸透したことを裏づけるものであろう。しかし、これとて明治42年以降になるとこの区別さえ見られなくなるのである。ここに時代を反映した紀年銘の手法が、はからずも示呈されていることに気付かされるのである。

なお、陰暦を使用したものなかには、「寛政元年閏六月七日」の墓碑のような表現をもつものも見られる。

ところで、第一表の末尾に記された紀年が明らかでない「午ノ年」が、何年であるのかは、上述したことから既に明治15年以前であることが明らかであろう。明治15年(1882)は午の年であるが、これを基点として12年毎にさか上った年であることが知られる程度である。敢えていえば、誓号の出現した元治2年(1865)および慶応2年(1866)に最も近い明治3年(1870)、あるいは安政5年(1858)の可能性が最も高いものであろう。

さて、墓碑銘からは、浄土宗から浄土真宗へと改宗した時期が、ほぼ明治12年から明治16年頃であることが知られるのである。しかし、改宗することについては、余程のことがない限り有り得ないことと思われるのであるが、いかがであろう。一方、旦那寺と見られる大信寺が廃絶したとの記録や改宗にかかる資料もみつからない。合戦峯の人々の改宗に対する顛末については、推測の域を出るものではないが、禁制であった時代に隠れ門徒として暮らしてこられた可能性は高い。

④ 上文字について

上文字は頭文字ともいい、一般に位牌や墓碑に見ることが出来る。上文字は、死を意味する置き字とされるもので、位牌や墓碑では、上文字・院号・法名・位号・下文字の順に記されるものだ。

47基のうち、17基には上文字がみられないが、明治16年以降の浄土真宗の墓碑において頭著である。上文字の多くは、梵字（種字）で記されているが、26基のうち「ア」の梵字が23基を占めている。これは、一般の人に多く用いられたものである。あとの3基は「キリーグ」であり、阿弥陀如来を意味するものだ。浄土宗であれば当然な使用であることから、浄土真宗の墓碑と見なすことは出来ない。なお、梵字以外の上文字の墓碑も4基あるが、いずれも浄土真宗の墓碑に「法名」と記されている。

また、上文字のないものが17基あるが、浄土真宗による墓碑以前の明治10年以前では10基がみられる。比率としては、浄土真宗の墓碑のそれより低いものとなっている。当墓地における上文字の有無による違いは、奈辺にあるのか見いだすことが出来ない。

三、さいごに

山田・合戦峯といえば、すぐに山田伝助の殉教の墓碑が思い起こされる。合戦峯の観音堂にある伝助の墓は、当初、人吉別院（浄土真宗本願寺派）に建立されたものを後に移設したものである。なお、人吉別院は、初め人吉の出町などの仮説教所を経て、現在の七日町に明治10年に御堂を建立、同13年に大谷光尊により開基されたものだ。

相良藩御禁制の一向宗（浄土真宗）は、明治9年（1876）まで続くこととなるが、先ずは解禁前後の文書や、この周辺の墓地等の基礎調査が必要であろう。

※ 一向宗を真宗に改めたのは、明治4年3月12日のことである。また、宗門人別、寺籍制度の廢止は、同年、4月4日のことだ。戸籍法の改正は、同年、4月5日である。

第一表 合戦墓碑一覧表（大正年間まで）

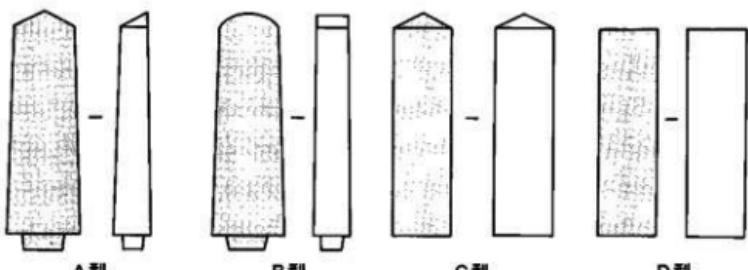
*銘文は、多くが異体字を使用しているものである。

墓石配置 No.	上文字	成名(法名)	紀年銘	本体高	地上高	形態	西暦
4	フ	季屋伴御飯女(蓮座)	宝治二壬申/十月七日	565	720	B型	1752
5	フ	清林道本尼士	安永六酉年/四月廿四日	585	695	A型	1777
□		秋雲道寛信女(蓮座)	天明二寅年/八月五日	623		A型	1782
2 9	フ	秀山寿坐能男(蓮座)	天明五乙巳/六月廿三日	580	760	C型	1782
6	フ	妙幻童女 位	寛政元年酉/閏六月七日	435	555	B型	1789
7	フ	継月童女 位	寛政元己酉/七月十一日	425	495	A型	1789
3 0	フ	寛顯僧士(蓮座)	寛政乙卯年/七月十四日	595	685	A型	1795
1 3	フ	冬空僧士(蓮座)	寛政丙辰年/十月廿一日/寺右エ門	610	770	A型	1796
2 1	キリーグ	軒吉丁喜僧士(蓮座)	事和三癸亥天/十二月廿八日	580	700	A型	1803
1 8	キリーグ	誠心童子(蓮座)	文化元年子/八月十七日/影名氏吉	425	545	B II型	1804
□		秋月法伝僧士(蓮座)	文化十一戊午/八月三日	570	813	A型	1814
8	フ	金西妙空信女(蓮座)	文化十二亥二月廿九日	415	555	B型	1815
□		播磨真光信女 位	文政五年六月五日	443	553	B型	1822
1	フ	牛聖空源僧士(蓮座)	文政五年十月二日/浮舟エ門	525	705	A型	1822
2	フ	春源道山僧士(蓮座)	文政十一子二月十二日	565	735	A型	1828
1 4	フ	心厚淨光信士(蓮座)	天保二卯年十一月十七日/寺左エ門	720	1750	A II型	1831
□		名庭貞智信女	天保六年二月二日	485		B型	1835
		花蓮童女(蓮座)	天保八年二月廿三日	450		B型	1835
1 6	フ	順清僧士(蓮座)	天保七年十月廿六日	545	785	B II型	1836
□		自徳童女(蓮座)	天保十子ノ年/八月廿八日	410		B型	1840
1 0	フ	哲光童士(蓮座)	天保十二丑年/六月廿九日	365	515	B型	1841
2 6		知室淨圓信女(蓮座)	弘化乙巳九月十八日	546	716	B型	1845
3 1	フ	真相了開僧士(蓮座)	嘉永庚寅九月十一日	560	580	A型	1851
3	フ	藏屋妙慈信女(蓮座)	嘉永六丑年十二月廿三日	590	765	B型	1853
3 2	フ	鶴山創士(蓮座)	嘉永七甲寅年/十二月七日	700	780	A II型	1854
1 5		夏苗了泉信男(蓮座)	安政三年/辰六月廿八日	480	775	A型	1856
9	フ	西岸真信士	文久三亥年八月十七日	490	580	A型	1863
□	フ	根管淨善信女(蓮座)	元治二丑年正月廿一日	530		B型	1865
1 3		觀音消現居士(蓮座)	嘉応丙午年正月廿六日	560	700	A型	1866
2 4	フ	貞喜信士(蓮座)	嘉応丙午年七月十六日/行年四十六才	700	750	A型	1866
□	フ	豊多童女(蓮座)	明治乙巳/三月十四日	455	565	B型	1869
2 2	キリーグ	真室妙音信女(蓮座)	明治西辛未/十月五日	530	680	B型	1871
1 7		曾月童女(蓮座)	明治丸子/十二月十二日	395		B型	1876
□	フ	見夢童子俊士(蓮座)	明治十五丑年七月十八日	470		C型	1877
3 4	フ	岸嶺童女(蓮座)	明治十五丑/九月八日	390	490	B型	1877
2 7	法名	鶴順尊(蓮座)	明治十六年十一月十三日/年四十才五平	600	750	A型	1883
1 1		觀尼羅靜(蓮座)	明治十七年一月三日	440	550	B型	1884
1 9	法名	鶴法海(蓮座)	明治二十年旧十月五日/行年五十四才 上村伝作	580	910	A II型	1887
3 3		觀尼妙現(蓮座)	明治廿二年/九月十三日キクエ三才	370	440	B型	1889
2 8		觀光征信士	明治廿四年旧十月廿五日/行年十七才 長男 上村泰蔵	505	855	C II型	1891
1 2		觀尼道尊位(蓮座)	明治三十九年旧八月十二日 行年六十九才/松川セキ	590	980	B II型	1906
□		觀尼妙理位(蓮座)	明治四十二年旧七月十日/松川マスエ 行年四才	420	590	B型	1909
2 3		觀尼智深(蓮座)	大正二年七月七日/行年七十四才 上村フイ	580	875	B II型	1913
□	法名	觀明信(蓮座)	大正五年十一月廿五日 上村覺/行年一才	455	575	D型	1916
2 5	法名	觀永不退(蓮座)	大正八年二月二日/上村五七 年七十二才	?	?	?	1919
2 6		觀妙慈童女	大正十三年五月三日/上村シズエ西才 午ノ二月十二日/年八十才	430	580	D型	1924
□	フ	開智御圓信士(蓮座)	午ノ二月十二日/年八十才	540	620	A型	?

(本体高・地上高的単位はmm)



第一図 合戦峯墓碑群配置図



A型

B型

C型

D型

* 墓碑の本体（ほとけいし）を支える基礎石は、通常1～3段を持つものが多い。後世になるとほど段数が増える傾向にある。なお、A・B型については、倒れるのを防ぐ「ほぞ」を設けるが、C・D型については、安定度が増すために、原則として「ほぞ」は設けない。

第二図 墓碑本体区分図



① 合戦峯墓地風景
竹林の中に設けられた墓地。



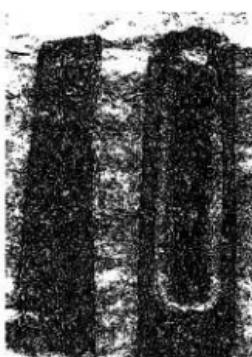
② 合戦峯墓地風景
最も奥に当たる場所。



③ この墓地で最も古い墓碑
「宝曆二壬申／十月七日」 (1752)



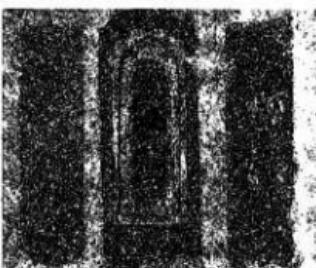
④ ③の拓本図



⑤ 「午ノ年二月十二日」の
銘を刻む墓碑拓本図



⑥ 享和三年銘(1803)の墓碑



⑦ 文化九年銘(1812)の墓碑拓本図

写 真 図 版

図版 1

(城・馬場遺跡)



(1) 調査風景

人物の左手が馬場道。

上位、正面の杉山が高城跡Ⅰ郭。



(2) 中世の柱穴群検出状況



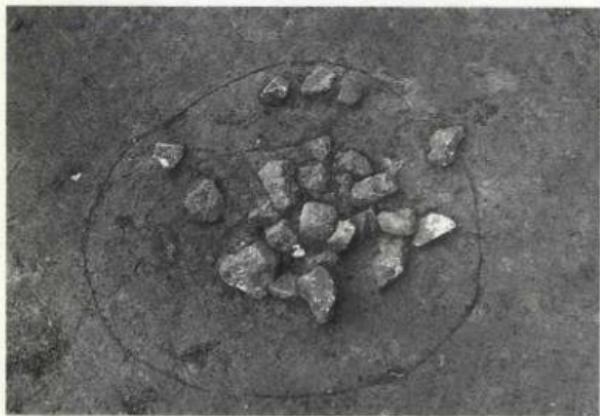
(3) 繩文包含層の調査状況

図版 2

(城・馬場遺跡)



(1) 縄文土器の検出状況



(2) 縄文・集石の検出状況



(3) 中世墓塚の検出状況

図版 3

(高城跡Ⅶ郭)

(1) 第1調査区
大土壘の調査状況



(2) 第2-2調査区
中世遺物出土状況



(3) 第3-1・2調査区
遺構検出状況



図版 4

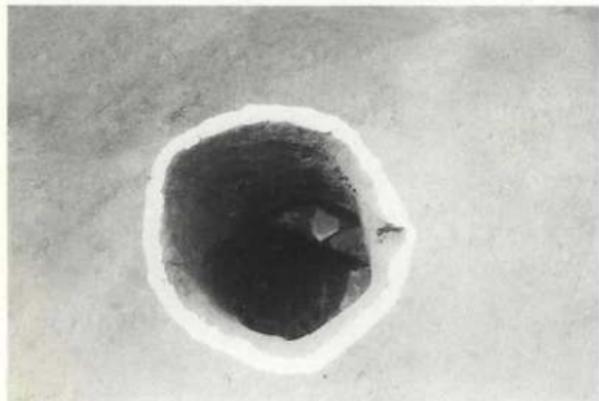
(高城跡Ⅶ郭)



(1) 第3-1調査区
土塹及び柱穴検出状況



(2) 柱穴出土の根固め石

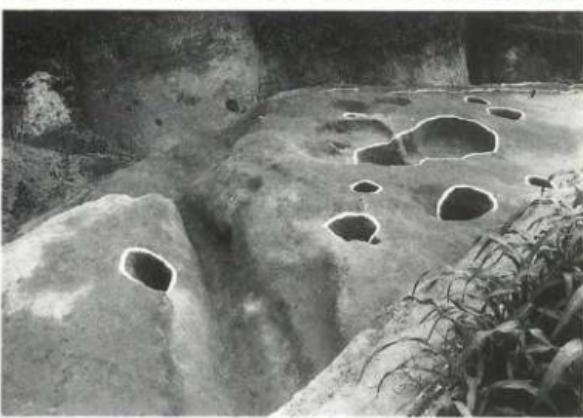


(3) 柱穴出土の攢鉢片

(1) 第3-1調査区
SK1とSK2の検出状況



(2) 第3-1調査区
SD1検出状況



(3) 第3-2調査区
堀切1検出状況(遠景)



図版 6

(高城跡Ⅶ郭)



(1) 第3—2調査区

堀切1の検出状況

(主に堀底について。)



(2) 第3—2調査区

堀切1の検出状況

(主に南側堀壁の柱穴について。)



(3) 第3—2調査区

堀切1の検出状況

(主に人物との対比による
堀切1の規模について。)

図版 7

(高城跡 Ⅳ 部)

(1) 第5調査区

土塁(S E 4・5・6) 検出状況



(2) 第5調査区

土塁(S E 1) 検出状況



(3) 第6調査区

堀切 3 と SD 2 検出状況



図版 8

(高城跡Ⅶ郭)



(1) 第6調査区

堀切3と集石の検出状況



(2) 第7調査区

道路遺構2の検出状況

(主に道路の南側部分について。)



(3) 第7調査区

堀切4検出状況



1



2



3

(円筒土器)

(2～6：壺形土器)



4



5



6



18



16



8



17



15



48



26



14



49



10



51



48



57



42



50



54



47



59



58

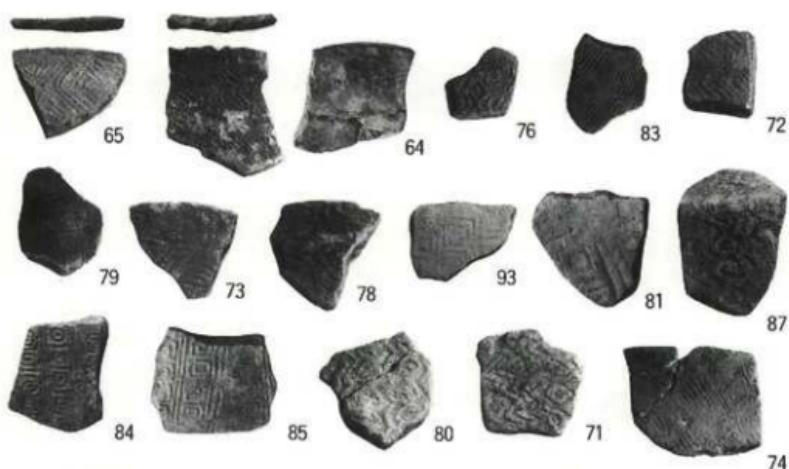
(山形押型文)

城・馬場遺跡出土遺物

圖版10



(山形押型文)



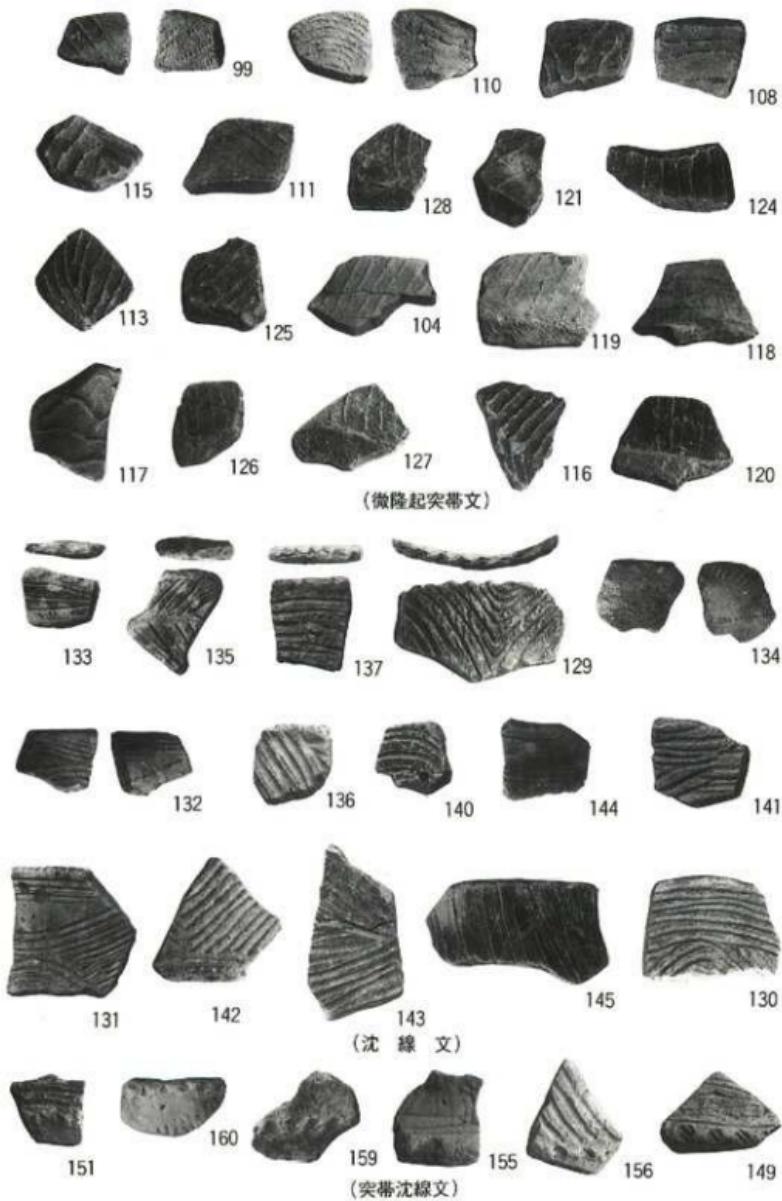
(菱形押型文)



(格子押型文)



(微隆起突带文)



城・馬場遺跡出土遺物

図版12



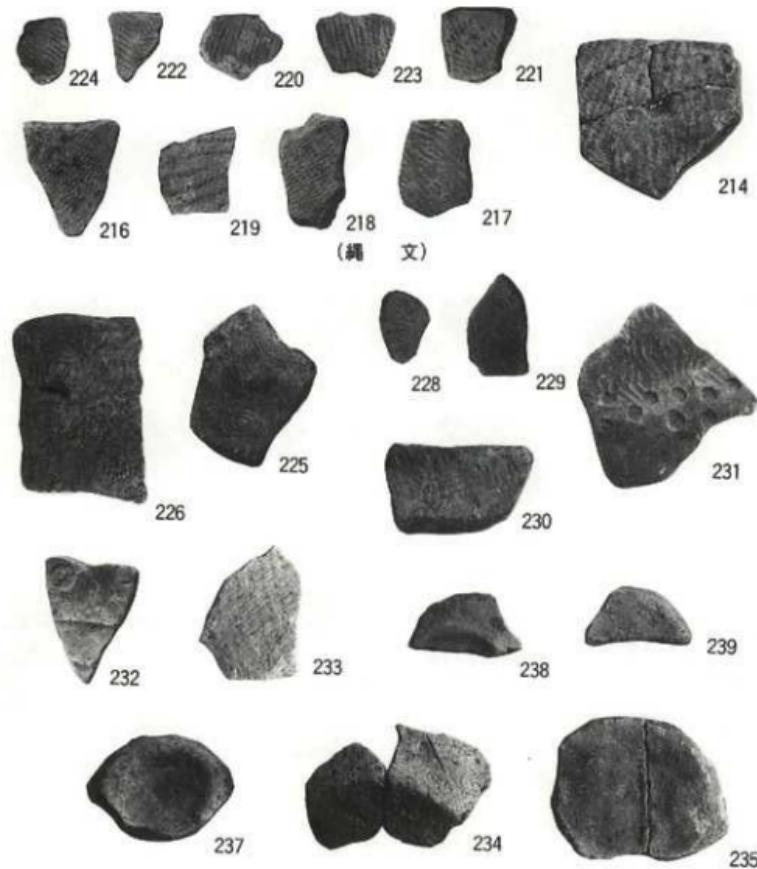
(163・164：特殊沈線文)

(165～175：山形押型文を地文とする沈線文)

(176：撚糸文を地文とする沈線文)



図版14



(225・226：山形押型文を地文とする同心縫円文)

(228・229：山形押型文を地文とする同心円文)

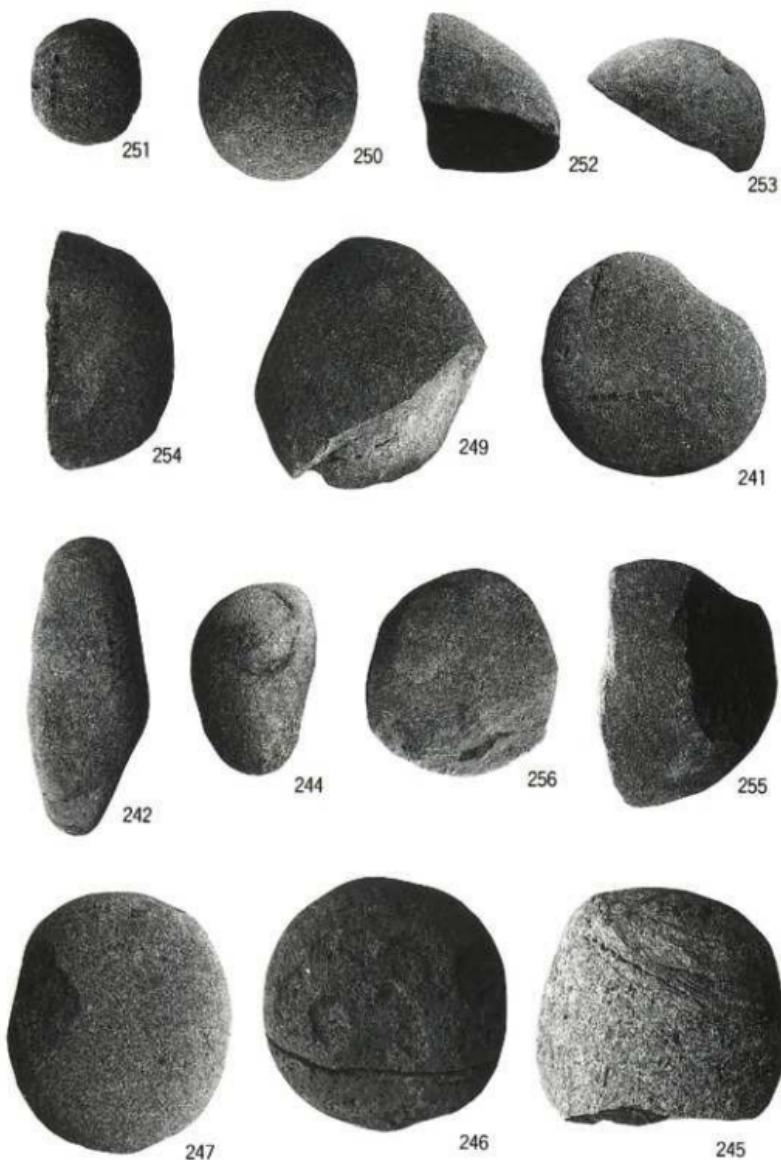
(230：縫円状文十同心円文)

(231：山形押型文十刺突文)

(232：微隆起突帯文十刺突文)

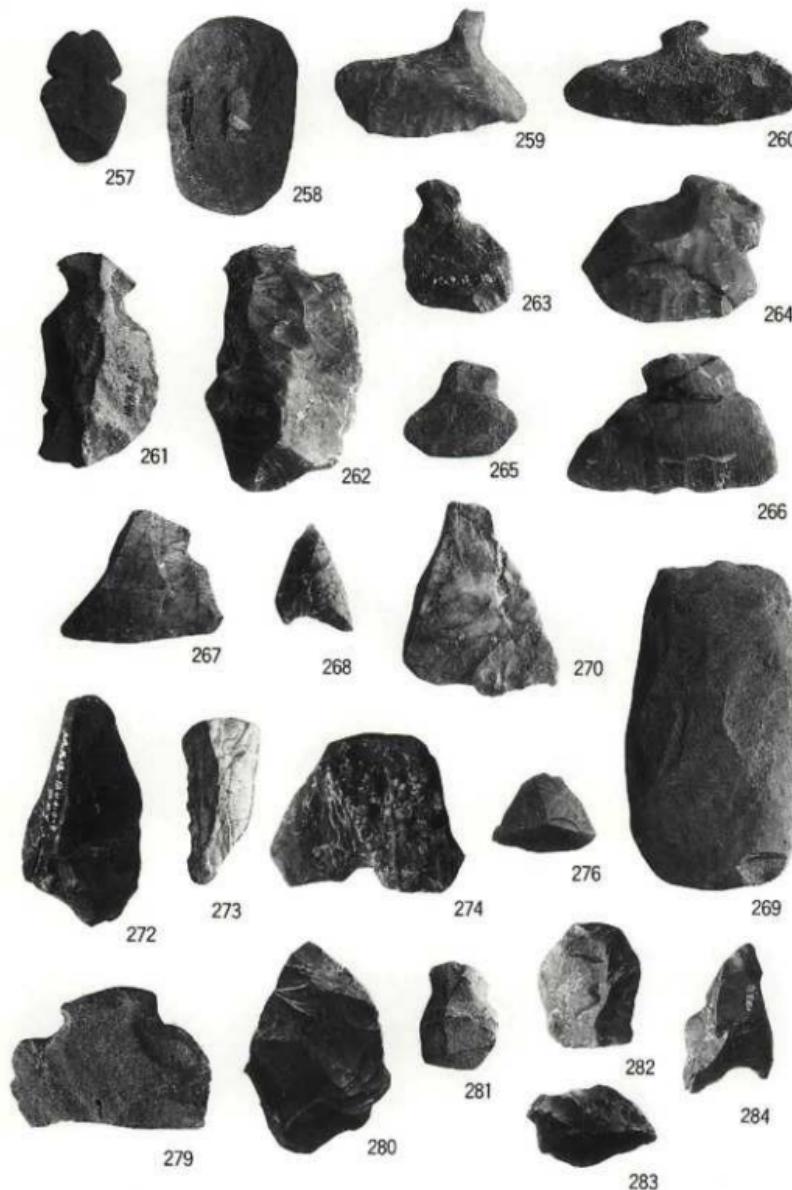
(233：刺突連続文)

(235・239：底部)



城・馬場遺跡出土遺物（縄文石器）

図版16



城・馬場遺跡出土遺物（縄文石器）



288



291



290



292



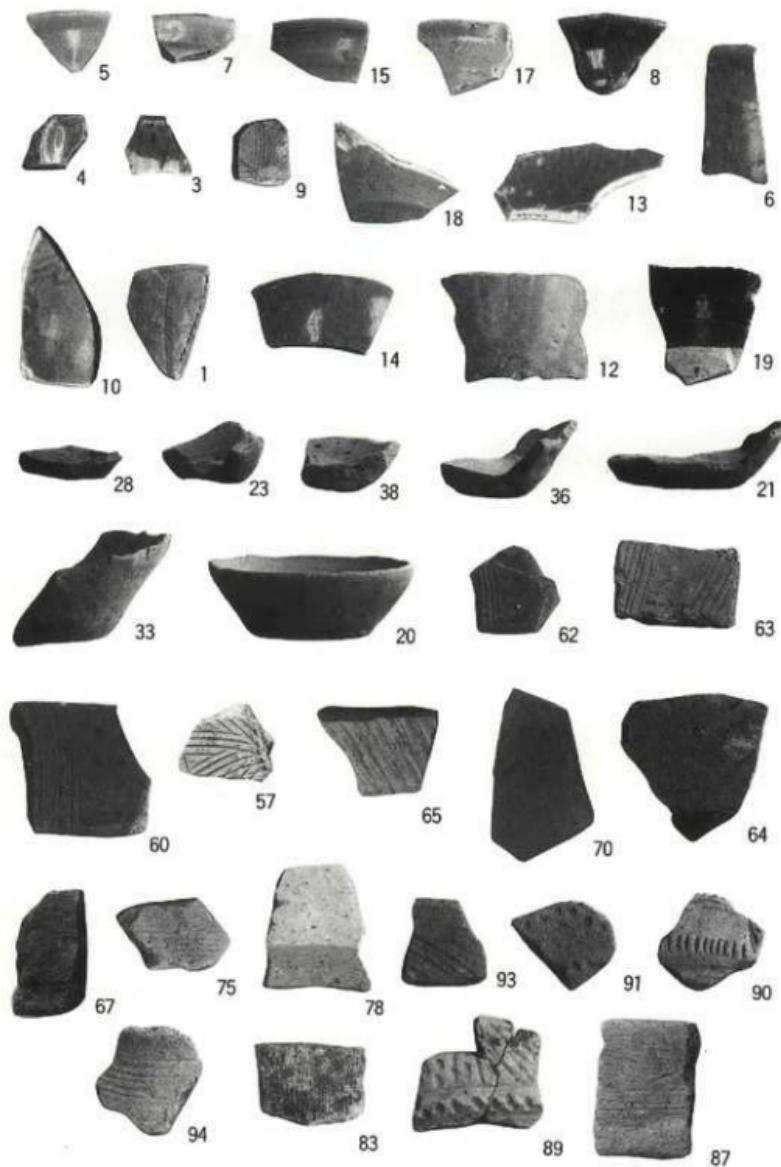
293



289

城・馬場遺跡出土遺物（中世）

図版18



高城跡柵郭出土遺物

熊本県文化財調査報告 第110集

城・馬場遺跡、高城跡VII郭

平成2年1月31日

編集発行 熊本県教育委員会

■860 熊本市水前寺6丁目18-1

T E L (096)383-1111(代)

文化財調査第2係(内)6715

印刷 中央印刷紙工株式会社

■860 熊本市田崎2丁目5-38

T E L (096)354-4191

F A X (096)354-4165

01 教委 教文

(2) 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 110 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：城・馬場遺跡 高城跡VII郭

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日